

太平樂新聞發刊紀念

現代加佐郡人物史 完

發行所 太平樂新聞社



特



始



835



修練之下
無庸凡

為藤本君

博道



大正
6. 9. 17
内交

沙流のくもり
や花と水

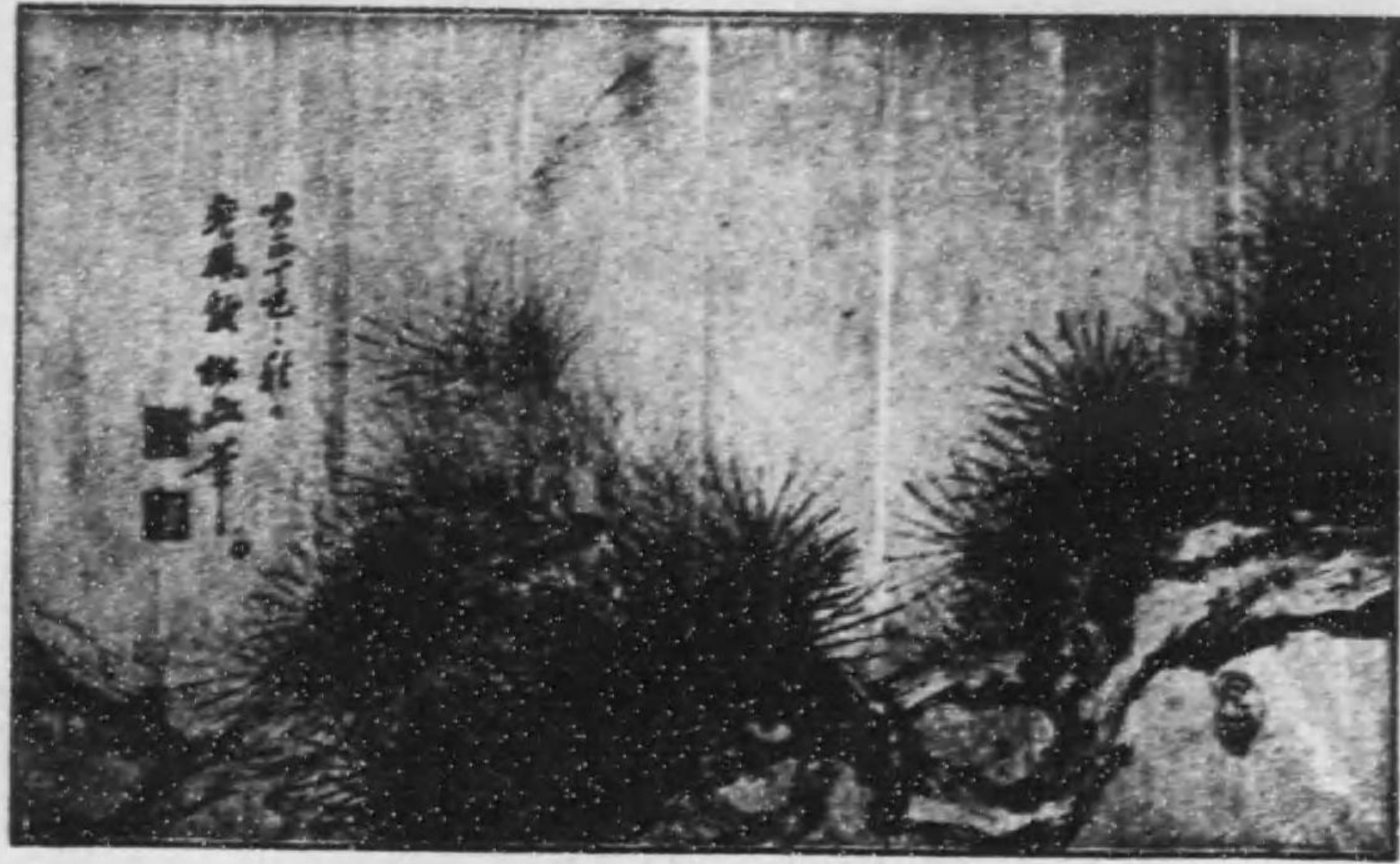
州尾

名月やあまの
さくらの川

平野竹翁



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including a rectangular stamp impression at the top.



新舞鶴町畫家矢野松玉君題畫



畫家内八橋 吉田城原

永正二年牧野成時畫景二保八明七十年步第六十八群隊設置

牧野子爵家ヨリ特寄贈セラル

序

藤本薫君は當代稀有の士なり、その清廉に處して富貴に阿らず、所信を貫徹し弊風を刷新せんとし、夙に新紙を經營し、傍ら各郷土の人物史傳を評論す、今又本郡人物史傳を著はす、載する處は是れ皆當代本郡各郷土に於ける俊彦奇傑の士のみ、その成功の経路發達の順序、一瞥して瞭々、讀むものとして時に血湧き肉躍るの感あらしめ、時に悲惨醒悽の痕あらしむるものあり、皆以て后昆青衿の子弟として、奮勵努力、自省修琢の資たらざるはなし、余や一讀して趣味、再讀して自省、三讀して向上の發奮を促進せしめたりき、請に應じ所感を披瀝して序となす。

大正六年九月

舞鶴 松泉仙史

本史編纂の趣旨

余、時代進運に鑑みる處あり、曩に天田、何鹿、船井各郡人物史を編纂して好評を博す、偶々太平樂發刊に當り之れが紀念事業として本史編纂に着手し、半歳の苦勞を賭して漸く茲に上梓を告ぐ、名けて現代加佐郡人物史と云ふ、要するに人物月旦冊子に外ならず、

維新の昭代傳へて後世に遺すべきもの多しと雖も、時代進展の原動力たる人物の事績は、後世人士の最も知らんと欲する所なるに共にも亦逸散し易く、之を知るに最も困難を感じる所なり、是れ余が現代の加佐郡人物を羅致し其事績経歴を輯み併せて人物の一斑を評論し、且つ寫眞を挿入して之れを後世に傳へんか好個の紀念物たるべしと、茲に本史を刊行するに至れるなり、而して又一面には現時青年子弟を目的とする立志傳、成功談等に關する刊行物を見るに、其多くは熱血氣鋭の青年を煽動して一身を誤らしむるものならざるは莫く、

之れらは害多くして益少きを慨し、後進者をして自己の出所、境遇、志望に應じて執るべき徑路を示さん、其最も印象の深くして且つ感化力の強かるべき、郡内各方面の人物を傳評して後進子弟の訓育に資する處あらんと欲す、幸にして其幾分にては達することを得ば余の望みや足る、終りに臨み、本史の編纂に對して多大の便益を與へられたる諸士の厚情を深謝し、登載諸名士の健康を祈る。

大正六年九月

編者識

附言 郡内出身者中尙登載すべき名士少しとせざるも、各地に散在せる爲り短時日に於ては到底材料を蒐集する能はず、其完成を期し得ざりしは深く憾とする處なれども、後日聞を得て續編を綴り其責を補ふ事とせり、讀者諒せよ。

加佐郡人物史目次

牧野一成君	一	本下仁藏君	三六	水島義信君	六五
伊藤龜吉君	三	小谷甚藏君	三七	勝井善助君	六六
野村彌三郎君	四	西垣天民君	三八	山本源一君	六七
五藤兵司君	六	吉田連太郎君	三九	橋垣荒太郎君	六八
渡邊彌藏君	七	上野修吉君	四〇	柴田清吾君	六九
井野博道君	九	村田彌惣兵衛君	四一	楠靈瑞師	七〇
平野吉左衛門君	一一	森田久次君	四二	土井市兵衛君	七一
林大作君	一三	村田太郎左衛門君	四三	坂寄義雄君	七三
山崎喜十郎君	一四	和田勝治君	四四	岩坪猶藏君	七四
由里儀兵衛君	一五	濱田彦治郎君	四五	儀間治太郎君	七五
上野彌一郎君	一七	福西八左衛門君	四六	中島隆善師	七六
池田麗五郎君	一八	河田新藏君	四七	今安直藏君	七七
高田時安君	二〇	平野忠治君	四八	高橋要太郎君	七八
田中覺藏君	二一	一ノ瀬慶太郎君	五〇	内海靜君	七九
林田彌壽夫君	二三	平野謙二郎君	五一	増澤淑君	八〇
時岡達太郎君	二四	森本太良太夫君	五三	武内勇太郎君	八一
大田久兵衛君	二五	羽賀治君	五四	辻本猪之助君	八二
佐谷省一君	二六	仲田徳太郎君	五五	小室文吉君	八三
池田彌三藏君	二七	木村半四郎君	五六	荒木武雄君	八四
有本準藏君	二九	東長太郎君	五七	奥田純君	八五
河崎常藏君	三〇	岩田正雄君	五八	藤野貞藏君	八六
西村幸平君	三一	南藤健次郎君	六〇	中西孫兵衛君	八七
水島彦一郎君	三三	由里清左衛門君	六一	梅垣常藏君	八八
近藤久兵衛君	三四	仲田新太郎君	六三	岸田大治郎君	八九
近藤久兵衛君	三五	荒木義美君	六四	高山勇藏君	九〇

中西一雄	杉本義一	木戸貞一	神田直治	柴田熊藏	山本文藏	内藤菊藏	大森清四郎	荒才信次郎	志榮幸太郎	佐谷有吉	瀬野有藏	園野久吉	西村安治	柳田厚二	荒木彌太郎	山中長左衛門	坪内泰吉	長久保得平	井口重次	高橋彌市郎	堀江忠兵衛	有本辰藏	梅原米藏	梅垣品藏	村尾義太郎		
九一	九二	九三	九四	九五	九六	九七	九八	一〇〇	一〇一	一〇二	一〇三	一〇四	一〇五	一〇六	一〇七	一〇八	一〇九	一一〇	一一一	一一二	一一三	一一四	一一五	一一六	一一七	一一八	
高橋龍平	瀬野藤右衛門	時井森藏	關根周吉	池田邦藏	林田親藏	金村仁兵衛	矢野松玉	新宮健太郎	室寺實高	故新宮義武	田中良平	有本國藏	寺嶋忠藏	福井高五郎	龜井市左衛門	木下治平	太田正兵衛	泉秀次郎	龜井藤太郎	安久兵左衛門	森谷徳太郎	故澤井市藏	和氣安次	安原宇太郎	有本嘉兵衛	上野尾助	
一一九	一二〇	一二一	一二二	一二三	一二四	一二六	一二七	一二八	一二九	一三〇	一三二	一三三	一三四	一三五	一三六	一三七	一三八	一三九	一四〇	一四一	一四二	一四三	一四五	一四六	一四七	一四八	
森羊三郎	龜井駒太郎	佐藤留太郎	赤井千代太郎	梅垣孫右衛門	西垣橋左衛門	岡山八百藏	小和田藤兵衛	嵯峨根孫兵衛	岸本仙次	志榮益太郎	故新宮涼庭	村田千代藏	布川徳藏	上仲茂之	土井喜七	宇留盛藏	西村勝平	故藤村伊兵衛	眞下彌吉	眞下兵次	河波龜吉	森本嘉右衛門	池田藤藏				
一四九	一五〇	一五一	一五二	一五三	一五四	一五五	一五六	一五七	一五八	一五九	一六〇	一六一	一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三			

加佐郡人物史



子爵 舊舞鶴藩主 牧野一成君

東京市小石川區同心町

牧野家系譜は加佐郡誌を始め各種書籍に掲載せるもの紛々からされども誤謬の点多き由にて、今回本史を編するに當り舊藩士故牧野兵藏氏の撰ばれたるもの最も正確なりとて牧野家より特に贈與せられたれば其全文を左に掲ぐ、
謹んで按ずるに、先公の世系は遠く武内大臣に出づ姓は紀なり大臣七世の孫田口臣之の裔阿波民部成能の後、田口左衛門尉諱は成富、君初めて参河國に入り牧野邑に住む因て氏とす、嫡子諱は成時、君城を今橋(現今の豊橋)に築き東參の庵長と爲り今川氏に屬し八千貫を領す、晩年入道して古白と云ふ孫諱は定成、君の代に至り初めて徳川氏に隨ひ從五位下に叙せられ山城守に任せらる、嫡子諱は康成

君從五位の下に叙し讃岐守に任せられ軍功あり武州石戸を領す、嫡子諱は信成君從四位の下に叙し内匠頭に任せらる大阪の役に功を立て下徳園宿に封ず、家綱公を養育して世嗣とす、嫡子親成公從四位の下侍從に叙し佐渡守に任せられ板倉重宗に代りて京兆の尹と爲る、而して幕府公として翼戴の誠を貫徹せしむ故に公は専ら方を公武の間に盡すこと十有五年、後西院靈元阿帝深く其意を嘉納せられ、寵遇を厚くす恩賜を拜受する事枚擧すべからず、寛文八年職を辭するに及び田邊に封せられ三万五千石を領し舞鶴城に主たり、城中に園あり私に心種と稱し敬慕愛珍す、之を藩祖とす、二世富成公從五位の下に叙し因幡守に任せらる、公

は先公の弟あり先公子無きを以て嗣と爲す公少壯學を好み
林道春の門に入り、切磋十數年業既に成り施政に至りては
古訓を稽へ事理を察し則ち理正情を盡し自ら節儉を奉じ善
く士を養ふ、又民の疾苦を問ひ、租を貴免し役毛に救助す
、三世諱は英成公は先公の弟村越直成君の長子なり入て
嗣と爲る、從四位の下侍從に叙し河内守に任せらる、京兆
の尹となること十年其政舊に依る故に朝廷恩遇亦た渥し、
四世諱明成公從五位の下に叙し因幡守に任せらる、享保乙
卯の年伊沙津潰決し城市氾濫し太だ慘狀を極む爾後汝々水
を治すること十數年功を竣す、五世諱惟成公從五位の下に
叙し豊前守に任せらる公は入船の制を寛み通商を便す
、六世諱宣成公從五位の下に叙し佐渡守に任せらる、初め
先公の長子諱成守則成君疾に罹り退隱す因て弟公を以て嗣
となす、而して君政を賛く四十餘年公の初めて政をとるや
威遠りに凶なり故に力を賑恤に盡し、民をして飢寒の憂ひ
無からしむ公亦た學を好み、臣、内海邦佐の議を納れ久米
順利の高弟御牧敬明を聘して賓師と爲し、自ら爾み業を修
む新たに學を建て明倫と名く、士を教ふる施ひて民に及ぶ終
りを愼しみ遠を追ふの禮を定む、其影響の封内に及ぶ孝
子横出せしは世の稱する所なり、七世諱は以成公從五位の
下に叙し豊前守に任せらる、御牧篤行を聘して賓師と爲す
、自ら學び士を教ゆるに常に憂に先つて憂へ、亭に名づく
るに借業を以てす、社倉を設け不虞に充つ、池を各所に築
き、大旱に備ふ、春秋心學を以て運數運話せしむ故に封

あり、夫人は島津忠欽男の令嬢時子にして既に三男あり、守
成、業成、道成君と名す何れも目下學習院小學校にあり、尙
東京本邸には家令兼川左平次氏家扶阿比小幡氏あり、舞鶴町
の別邸には佐々木太郎氏あり、何れも舊藩士中の秀才にして
鹽川氏は明治維新と同時に學校教員となり十餘年間黨の教
育に従事せし人、阿比氏は舞鶴及び京都の小學校に長として
久しく教鞭を執りし人、佐々氏亦舞鶴明倫學校教員より中筋校

海軍中將 從二位 功三級

園下は幼時舞鶴藩の俊才として將來を矚目せられ、東京の
藩邸に在りて文武兩道研鑽怠りまかりしが、偶々王政復古の
事ありて世は一變したれば將來身を立つるは軍人に如しと、
明治二年九月海軍操練所に出仕せり之れ身を軍籍に容る、の
第一歩にて、同三年五月兵部省より英艦と合併南海測量仰付
られたり、同年十月兵部中助に任せられ、四年三月再び英
艦と共に北海測量仰付られ同年九月大政官より海軍少佐に任
せられ、之れと同時に春日艦長に補し水路局分課仰付られ、
十一月正七位に叙せらる、五年三月春日艦長被免日進艦副長
仰付られ、同年八月海軍中佐に任せられ同月日進艦副長被免
、流渡艦長仰付られ同年十月從六位に叙せらる、六年六月
正六位に進み七年六月兵部省出動仰付られ流渡艦長被免の如し

男爵 伊藤 吉君

東京北豊島郡高田村

、此間兵學寮生徒の爲り實地練習として日本海臺灣航海等に
勤務せり、尙海軍生徒實地航海練習の爲り八年十一月米國
桑港に回航九年四月歸航せり、十一年四月本職並に兼職被免
、金剛艦長仰付られ同年十一月海軍大佐に任せらる、十五年
六月海軍少將に任せられ同時に海軍兵學校校長に補せられ同年
八月正五位に叙せられたるが十月依願海軍兵學校校長被免、同
月農商務省より共同運轉會社長申付られ同年十一月勳三等に
叙し旭日中綬章を賜ふ、十六年一月農商務省より歐洲出張を
命せられ、十八年四月運轉會社長を免せらる同月海軍省より
橫須賀造船所所長兼橫須賀鎮守府次官に補せられたり、爾來累
進して明治二十三年五月海軍次官に任せられ同年九月海軍中
將に任せられたり十月從三位に叙せられたるが、翌年日清

内教化す、俚樂賭博の禁を嚴にす故に盡く耻を絶つ、又遊
狩鷹野して民情を察す、時に漂流船あり沿海を窺ふ幕府海
防策を講せしむ公封に有るを以て勉む、八世諱節成公從五
位の下に叙し河内守に任せらる、公は先公の庶兄允成君の
長子あり、養はれて嗣と爲り先公の志を繼ぐ、官に乞ひて
學田を企畫す、九世諱成公從五位の下に叙し豊前守に任せ
らる、公緒に就くや地を開き再び費を盡て、奥平定時の高
足三上景雄を聘して賓師と爲し自ら學びて士を誘ひ、購窮
院を置き産を授け人材を登げ、海防を嚴にす、兵を練り帝
都を警備す蓋し藩は北門の鎖鑰に當るを以てあり、故に防
禦の務、暇日無し、王政復古し廢藩に及びて止む、世を累
す九、年を経る二百、此の間訴へ關にして刑殆んど措く、
多士風を爲す、庶民の驕虞するは祖宗の業を創むるや、謀
を子孫に誥こし子孫舊章に率ひ由るの功あり、
廢藩と同時に第十世朝成公は華族に列せられ子爵を授けら
る爾來東京の本邸に於て専ら子弟の教養に努められたるが、
頗る馬術を好ませられ、文武の道と隔ませられたり、漢詩は
其最も得心とせらる、處にて書畫骨董亦嗜好の一たり、現王
一成公は第十一世にて頗る博識聰明に養はせられ學習院高等
科卒業後は専ら政事經濟學を研究し、只管機の來れると窺ひ
つ、ある如くあるが何分先輩多き事とて一頭角を顯はすは容
易の業にあらざるなり、されど一昨年御大禮に當り大禮使を
奉任せられ華族會其他私設團體にては常に役員とありて重き
を爲せり、貴族院子爵議員候補者に擬せらるゝなど頗る名望

長に轉じ二十餘年間其職に在りたる人にて三氏とも温厚篤實
、嚴格の士にて具に他の模範人物たるなり、年餘並に其就職
年月は皆異なるも子爵家の目録に叶ひ選拔せられたる三
氏とて其忠勤に於ては更に遜色なし、斯の如き人材を拉し來
りて家事を委す、牧野家の隆盛謳歌すべきあり、氏等幸に健
在に以て牧野家の爲に盡瘁の切をらんことを。

の役務發し國事多端、殊に海軍省の如きは戰艦の實地として頗る多忙を極む程に在りて閣下は毫も違算なく其任務を遂行し海軍次官たるの面目を盡せり爲に平和克復とあり其行實として廿八年八月廿日特旨を以て華族に列せられ男爵を授けられたるが之と同時に功三級金鵄勳章並に旭日重光章を下賜せられたり爾來正三位に叙せられ從二位に叙せられ勳二等に叙せられ勳一等に叙せられたる等、名聲は愈々大を加へたり、閣下は資性温厚の裡に頗る勇氣を有し、頭腦明晰にして進



西部鐵道管理局長

正四位勳二等 野村彌三郎君

加佐彌出身者中成功せる人物を數へ來れば決して少しとせず、多士濟々たる中に地方官を以て一顧角を顯はし傑出せる人物を野村彌三郎氏とす、氏は明治維新の波風立ち騒々元年正月十七日加佐彌舞鶴町に呱呱の聲を擧ぐ、嚴父佐市氏は但馬國美太郎の一農家より身を起し國事に貢獻し、王政復古の功臣として重く用ひられ男爵を授けられ貴族院議員、舞鶴關區候たる北垣國重氏と最も深く關係を有し、北垣氏が京都府知事たる際其執事として野村一家を擧げて京都に移住せり

爲に氏の原籍は今も京都市上京區下鴨通河原町にあり令兄鶴次郎氏は京都商工貯蓄銀行支配人として京都にあり、氏は幼にして博識聰明群童を抜き一を聞て十を知るの天才を有せりされば郷黨呼んで神童と稱せしが、果せる哉、年と共に學術大に進み明治二十三年七月優等の成績を以て帝國大學法科を卒業せり、其月法制局試験を命せられ年俸金五百圓を下賜せらる之れ氏が二十三歳の時に加佐彌出身者中其比を見ざる所たり、二十四年五月詳任九月鹿兒島高等中學邊士館教授兼

令監に任せられ十二月從七位に叙せられたり、二十六年三月年二十六歳の青年にて香川縣尋常中學校校長となり年俸千圓を給せられしも向上して歳みなき氏の手腕は旭日昇天の勢を以て年と共に進み廿七年九月第三高等中學校教授に任せられ、二十八年十二月高等官六等に陞叙と同時に第三高等學校令監兼任に命せられ二十九年一月正七位に叙せられ同年五月臨時北海道鐵道敷設部事務官を任せられたり、三十年十一月二日内務事務官に任せられ、同月十三日岡山縣書記官に轉じ三十二年二月高等官五等に陞叙四月從六位に叙せらる、卅二年四月林野整理局事務官となり、同時に整理局主計課長、同局主任收入官吏、同局物品會計官吏に命せられたり、三十三年五月林野下戻審査委員を命せられ七月高等官四等に叙せらる十月二日林野整理局出入外現金出納官吏並に保管物取扱主任を命せられたり、同月十日山林局書記官兼農商務書記官に任せられ、山林局主計課長、兼入敷出入外現金出納官吏、物品會計官吏、保管物取扱主任、林野下戻審査委員、山林局主任收入官吏を命せられ十一月正六位に叙せられたり、三十四年十一月農商務省所管事務政府委員仰付けられ、三十五年四月御用有之歐洲各國並に西比利亞へ差遣はされ臨時現金前渡を受くる官吏を命せられたり、同時に山林局保管物取扱主任を免せらる同年三月高等官三等十二月從五位に叙せられ卅六年一月歸朝、同月山林局調査課長並に保管物取扱主任、總務局會計課長心得、農商務省仕務命令官の兼任を命せられしが四月農商務省所管事務政府委員仰付られ卅七年二月依願本官並に兼

官を免せられたり、之れと同時に滿四ヶ年在官に付き金四百拾六圓六拾六錢六厘下賜せられ翌三月正五位に叙せらる、三十八年五月一等郵便局長に任せられ高等官三等に叙し廣島郵便局長を命せらる、同年十二月勳六等に叙し瑞寶章を授け、三十九年四月三十七八年事件の功に依り勳四等旭日小授章並に金五百圓を賜ふ、同年八月臨時鐵道國有準備書記官に任せられ第一課兼第三課勤務を九月鐵道事務官兼任を命せらる、札幌鐵道作業局出張所勤務を命せられ、十月北海道鐵道作業局出張所長と爲る、明治四十年四月官制改正に依り帝國鐵道廳理事に任せられ高等官二等（年俸參千圓）に叙せらる同時に北海道帝國鐵道管理局長を命せられたり四十二年八月計理關係倉庫所在物品調査委員九月臨時作業調査委員を命せられ、同年十二月官制改正鐵道廳理事に任せられ北海道鐵道管理局長を命せられ四十二年四月正四位に叙せられ、十二月勳三等瑞寶章を賜ひ大正二年四月年俸五百圓加賜五月東京鐵道管理局長を命せられ、同年十二月大禮に關する委員を命せられしも御大禮延期の爲翌年四月委員を免せられ其月御大禮に關する委員を命せらる、大正四年四月更に大禮に關する委員を命せられ、同年六月現職西部鐵道管理局長を命せられたり、其月官制改正高等官一等に陞叙し年俸四千貳百圓を賜ふ同年六月正四位に叙せられ十一月大正四年勅令第五十四號に依り大禮紀念章を授與せらる、大正五年一月旭日中授章を賜ひ同年四月大正三四年事件の功に依り勳二等瑞寶章及び金千百圓を授け賜ひたり、

實性濃厚沈着、態度寛容として高雅、頗る深遠遠慮に富み
 明晰なる頭腦を有す、其手前の卓絶あるは過去の歴史に徴
 して推知せらる、然して氏は功を誇らず自分の成功は部下の
 賜ものありと常に部下を勞はり、之れが慰勞の方法を設け且
 つ下給勞働者の生活状態を調査して層々の道を講ずる等、す

新舞鶴町長

豫備海軍主計大監

從四位
 功五級

五藤兵司君

加佐郡新舞鶴町

氏は文久元年生、原籍を東京市麻布區狸文町十五番地に有
 せり、幼にして穎悟頗る伶俐にして郷黨呼んで神童と稱せり
 長するに及び博識強氣其丁年に達するや海軍に奉職し明治十
 九年海軍少尉任官七等に叙せられ、爾來各地の鎮守府に或
 は軍艦に勤務して日清日露の兩戰役に従軍、累進して主計長
 となり、主計大監となり、明治三十五年には舞鶴經理部第二
 課長に補せられ同四十年には工廠會計長に轉補せられたるが
 明治四十四年七月待命仰付けられ、四十五年休職、大正二年
 三月復職役に編入せられたり、此間戰役の功に依り從四位勳
 三等功五級に叙せられ赫々たる名聲と博せり、されど休職後
 は爲す事もなく新舞鶴町の光景に熱心自適遊樂中ありし
 が大正三年偶々新舞鶴町長小幡氏遊り其後任者登壇願る行儀
 み可制實施の際町長代理たりし町の功勞者越田五郎氏に對

時も部下の安否は念頭を去りたる事なく、將亦部下の養成と
 其修養を重する等、眞に血あり涙ある氏の行動は部下の欣歡
 措く能はざる所にて名聲の噴々として大を加ふるも之れが所
 以たるなり、年齒尙春秋に富む幸に其美約の念々益々大なら
 んことを。

する報聞問題より町論沸騰し町民大會は屢々開催せられ町政
 は紛擾の甚どあり拾枚困難なるの時に當り推されて町長とな
 り先ず當面の問題たる池田氏報聞問題を解決し尋て新舞鶴町
 交通の難關たる軍港内の交通を鎮守府に交渉して之れが認容
 を受け、新舞鶴港海陸立を町會に計りて之れが實行を期し
 今亦進んで新舞鶴警察署長に警視を以てせんことを其筋に陳
 情して近く之れが實行を見んとするが如き就職以來其敏腕は
 遺憾なく發揮せられ、最功侯補者たるの時、軍人出の町長は
 粗暴なるの輩ありと一籌非難の聲ありたれども應と實地は正
 反對にて性相剛毅なれども頗る圓滑にして敵を作らず、事績
 若々として顯はれ今や町民齊しく良吏長を謳歌するに至れり
 、されば来るべき改選期再び氏を傾はすに至るや必せり、君
 亦現在に甘んぜず益々其職に忠ならんことを。



加佐郡會議員

渡邊彌藏君

加佐郡舞鶴町字竹屋

渡邊家は同地に於ける素封家にして石炭商と業とせり、氏
 は明治六年七月一日現住地に孤々の聲を擧ぐ、明治二十年四
 月舞鶴高等小學校全科卒業以來漢學教學英語等を専門教師に
 就て修學し二十一年三月舞鶴高等學校に入り同年四月更に廣
 立商業學校に入學、二十四年卒業舞鶴第二十五年三月字竹屋町
 人民總代に擧げられ、二十七年二月舞鶴十字街支那社委員兼
 員と擧托せられ二十八年十月伊佐津川水害豫防組合總代人に
 擧げられ二十九年十月舞鶴代神社氏子總代に擧げられ、三十
 二年四月加佐水産協會委員兼總委員となり、三十三年三月
 舞鶴海産會社相談役となり、三十四年四月舞鶴町會議員
 に擧げられ三十五年四月伊佐津川水害豫防組合議員に擧げら
 れ、爾來諸期毎に再選して現在に至れり、三十六年十月舞鶴
 町實業協會評議員となり、三十七年六月舞鶴町第五ヶ村組合
 會議員となり七月舞鶴町形及養會評議員となり九月舞鶴町土
 水委員となり十月舞鶴實業協會評議員となり、三十八年六月同
 法若より舞鶴區裁判所破産管財人と命せられ、四十年十月加

佐郡會議員となり同年十一月加佐郡教育會常議員に擧げら
 れ四十二年三月加佐郡臨時委員となり十一月實業協會評議員
 とあり四十四年二月一總會加佐郡支那創立委員に擧げられ、
 同年三月大連省より舞鶴稅務署管轄内營業稅審查委員を命ぜ
 られ、同年十月郡會議員再選尋て郡會議長に擧げられたり、
 四十五年一月舞鶴海産會資會社委員兼總委員となり爾來諸期
 毎に再選今日に至れり同年五月舞鶴新舞鶴第三ヶ町區區
 合會議員に擧げられ大正元年十二月實業協會評議員再選と同
 時に幹事に擧げらる、大正二年一月舞鶴町大會協賛會名譽
 會員に擧げられ同年二月舞鶴海産紀念物展覽會委員、三月
 京都市水産品評會相談役並に委員、同月京都市下學事共進會
 相談役を各會長大森鐵一氏より擧托せられたり、同年四月町
 會議員再選六月舞鶴町田園臨時檢査立會人當選、三年二月大
 日本實業協會支那委員に擧げられ同年四月再び營業稅審查委
 員と命せられ同年六月實業協會評議員再選、同年七月舞鶴町
 學務委員に擧げられ、大正四年十月加佐郡會議員再選、大正五

年四月舞鶴町臨時土木委員に擧げられ、本年五月舞鶴港灣利
用調査委員に擧げられ六月舞鶴實業協會長に擧げられ爾來今
日に至れり

資性廉直、恰も竹を割りたるが如し、已れの欲する處は之
れを言ひ毫も人を憚らず、直言直行の人にて明敏なる頭腦を
有し進取的氣象に富む機を見ること實に敏捷にして選送業を
始め地方有益の業には必ず關係して采配を執り毫も失敗を招
かず、議論は正確を以て衆を首肯せしむるの雅量あり真に口
八丁、手八丁の才子にして、今や加佐郡に於ける賣出しの人
氣男たるあり、殊に氏は義侠心に富み人より頼まれた事には
未だ曾て頭を振りたることなく他に率先して範を示すを常と
せり、されば廿三年一月車道開通費を献金し二十四年四月尋
常校修築費を献金し、同年八月舞鶴郵便局創設費を寄附し二
十五年十二月和歌山縣熊野沖遭難漁民救助金を寄附し二十九
年十二月又も小學校修築費を寄附し、三十年六月二十七八年
戦役の際報國の旨趣を以て軍資を献金し三十三年十二月風水
害罹災救助として献金し尙梅干一樽を寄附し、三十六年十二
月餘部町消防費に寄附し四十二年三月郡立高等女學校備品費
を寄附し、四年八月帝國義勇隊建設義金を献出し四十四年
八月武徳會支部基本金を寄附し、四十五年三月舞鶴小學校舎
建築費を寄附し大正二年十二月舞鶴町公園敷地を寄附し何れ
も其都度銀盃又は木杯を下賜せられたるが以上は重なるもの
にして私設團體其他神社佛閣に對して寄附亦は惠與したるも
のは實に枚擧に遑あらざるあり、斯の如き血あり涙ある行爲

は愈々氏の人格を向上せしむるものにて、實に叙上したる外
舞鶴町公債募集委員となり衆議員議員選舉立會人となり所得
税調査委員選舉人となり同補欠員となりたる等公務に參與し
たる閱歴は頗る多きものあれども其細目は全部之れを省略せ
るなり、又其事績中最も特筆すべきは大正三年三月熊本縣水
産組合と交渉の上へ全縣天草郡漁夫二百四十名を丹後海に收
容し舞鶴港を根據地として大羽鯉刺網の試漁を企畫せし結果
其成績大に見るべきものありたるが之れ丹後海大羽鯉漁獲の
嚆矢にして爾來毎年丹後海岸漁村に經營するもの多きを加ふ
るに至れり是れ全く氏の賜ものたるあり、のみならず氏は公
共事業と聞けば如何なる家業をも顧みず飛出して東奔西走盡
瘁するの美的を有せり、されば明治四十三年八月年三十八歳
にして既に舞鶴町會は氏と舞鶴町有功者と定め名簿に登録す
ることを決議せるなり、人は棺を覆ふて始めて其徳を知るべ
きなるに氏は未だ其中年にも達せずして此名譽ある町會の決
議を受くるに至る、此一事以て手腕の凡からざるを知るに足
れり、爾來茲に入星霜事績亦夥しとせず其名聲は恰も順風に
帆を揚げたる小舟の如く隆々たるものありて郡會議長に擧げ
られ、町長に擬せらるゝ等頗る大なるものあり、今や舞鶴町
のみか加佐郡に於ける柱石として政治界にも實業界にも重視
せらるゝに至れり、然れども實際政界に覇を争ふは今後の事
に屬せるなり、氏に野心あしとするも今日の地位、今日の名
望、今日の手腕を以てせば郡民擧て代表者たらしめざれば止
まざるに至るべし、氏尙春秋に富む自重以て衆望に背く勿れ



新舞鶴及餘部郵便局長

正七位 井 上 博 道 君

氏は明治十八年二月六日東丹、西大浦の地に産聲をあげた
り幼にして群童の中に獨り異彩を放ちたる氏は長ずると共に
青雲の志遂に抑ふることを得ず十六歳の時單身獨出で父
を東郷に負ふに至れり君の生家は近郷屈指の資産家ありし
も君は頗る獨立の氣魂に富み學費を父兄より受くることを用
しとせず所謂苦學の人とあり自活の途を購じつゝ、勉學に餘念
あかりしが幾何もなく中學四年の編入試験を受けて之に合格
し其急速なる學業の進歩に學友と驚嘆せしめたり入學後、常
に級中の首席を占め校長として教師の信頼と學友の尊敬とを
一身に集めたり中學を出でて直に官立東京郵便電信學校行政
科に入り明治三十八年優等の成績を以て同校を卒業し通信本
省に奉職すること、なり稍々餘裕ある自活の途と迎ふことを
得るに及び茲に君の宿志ある法律學政治經濟學を専攻すべく
日本大學に入り憲法史の繁蕪に耽し夜は大學教授の研鑽に
心を砕きしより漸くすること二年有餘、此間君の苦學力行は
到底筆舌の及ぶ所にあらずしが健闘の功遂に空しからず明

治四十一年登龍の門戸として最高至難の稱ある文官高等試験
に合格するに至れり當時年齒僅に二十三、當年合格者中の
最年少者として一時帝都の學生間に羨望の的となり其名を轟
はれたるものとあり
越へて明治四十三年四月高等官八等に任し仙臺鐵道船船郵
便局長に補せられ同年六月正八位に叙し四十五年七月高等官
七等に陞叙、大正元年九月從七位に進み二年六月福井郵便局
長に補せらるゝ其就職する所何れも尤大なる一等郵便局にして
創設の任にあらざれば難治の局なりしが君は巧に之を統制し
到る處令聞あり多士濟々の通信圈内に於て特に出色の人材と
して廣く事業界に、雷名を馳するに至れり、時に青島に於け
る日獨戰争は一段隆を告げ日支交渉の益々紛糾を極め形勢甚
危重大なるに至るや君は選まれて郵政上の要件を帯び濟南府
に駐在するに至れり濟南の地は人も知る如く青嶋攻略の結果
新に生じたる日支折衝の地点にして日獨英米佛露其他世界列
強の勢力が競合して揉み合ふ所の活舞臺たり當時東亞の諸國

恩は常に此種を中心として生起し、此に既在する諸官の一舉一動は直に帝國利權の消長に影響し其の重要なる點に於て又其國際問題に當りては北京を凌ぐべき無事なりしが君は若年ながらも此受ある土儀に上り郵政を以て速早く列強に優越せる歩歩を占據し、中獨逸多年の勢力を根柢より影滅し帝國の覇權を兩拓の上に確然樹立し列強をして窺ふことを得ざらしめたり此他君はまた諸般の機務に參預し傍ら在留邦人、治政の上にも大に助力する所あり經歴隆々たるものありき斯くて君は赴任以來半ば外交官として辭職不測の才を揮ひ此所離舞臺の花形として濟南三十万の人士と數千の在留邦人に敬仰せらるゝに至れり大正四年十月十六日高等官六等に陞叙し正七位に列す當時在留内外人の最大希望は占領地外に涉り文明國の機務による通信配達の一事なりしあり支那人自ら自國郵政に疑虞の念を抱き我が郵政の德澤に浴せんことを欲すること早天に雲霧を望むが如かりしが君は軍幹部と協定し旅蕩として占領地外に我通信を延長大し幾千の我同胞を初め支那人及歐米各國人をして均しく我文明的施設の惠澤に浴せしむるに至れり之れより先、支那郵政に於ては各國居留地に認められる郵政權回復の聲高く此風潮は延いて山東省の各地に於ける占領地外郵政の撤廢を迫り來るに至りしが會々第三次革命が濟南に波及するに際し袁世凱は日本郵政局を以て革命黨を威嚇送の威ありとし名と之に藉りて數多の密偵を派し我郵政に郵便の行動を阻害せんと企てたり茲に於てか君は部下に令して其巡警兵士の密偵を召し取らしめ悉く之

を拘引し支那當路の大官が反省の實を表す迄は之を我軍憲の下に拘留すべきことを聲明せり此峻嚴ある處置は支那官場の上下を震駭せしめ忽ち將軍府及巡按使廳の要路として我郵政の門前に拜跪して深く謝罪せしむるに至れり仍て其密偵を總て解免すべき事府來我郵政局所屬員の行動に對し精神上及身体上の阻害を及ぼすべからざること等の條件の下に拘引せる支那巡警兵士を放逐し我優勝なる地位を認めしめ同胞の亂歌と列強人士の拍手とは若き日本の郵政局長の一身に集るに至れり斯くて占領地外の郵政に關し北京の交渉容易に纏らざるに拘はらず我郵政上の權威が早く既に山東全省を掩ひたる其結果、事實に於ては此亂旋的結末に因り我が通信の安全なる施行を占領地外に確認せしめ我が國力の發展をして搖ぎなき基礎の上に置くことを得て帝國の郵政局に其人あるを知らしめたり其他内地と山東省との郵便關門と青島の外亦濟南に探り大に其速達を期したる又は山東鐵道に依る支那郵便權の附與を有益の交換條件願はるゝ迄留保したる或は一大同舍の新築を計劃して盡力移りからざる將た又軍民兩者の視索ともりて我同胞の共助發展を圖爾からしめたる等君が在任中に達したる効績は彼の地の官民が等しく認むる所なり然るに異域瘴癘の氣は絶へず君の健康を憂ひ家族と共に數次病魔に冒かされ瘡々身體の衰弱を來すに至りたるを以て五年十月内地に轉地療養の爲め休職を請願し歸朝後、郷里なる西大浦の地に療養中ありしが十二月一日新郵政局局長に補せられ又他郵政局局長と兼ね不相變得意の快興を揮へり君は別にま

此種機務の中心として生起し、此に既在する諸官の一舉一動は直に帝國利權の消長に影響し其の重要なる點に於て又其國際問題に當りては北京を凌ぐべき無事なりしが君は若年ながらも此受ある土儀に上り郵政を以て速早く列強に優越せる歩歩を占據し、中獨逸多年の勢力を根柢より影滅し帝國の覇權を兩拓の上に確然樹立し列強をして窺ふことを得ざらしめたり此他君はまた諸般の機務に參預し傍ら在留邦人、治政の上にも大に助力する所あり經歴隆々たるものありき斯くて君は赴任以來半ば外交官として辭職不測の才を揮ひ此所離舞臺の花形として濟南三十万の人士と數千の在留邦人に敬仰せらるゝに至れり大正四年十月十六日高等官六等に陞叙し正七位に列す當時在留内外人の最大希望は占領地外に涉り文明國の機務による通信配達の一事なりしあり支那人自ら自國郵政に疑虞の念を抱き我が郵政の德澤に浴せんことを欲すること早天に雲霧を望むが如かりしが君は軍幹部と協定し旅蕩として占領地外に我通信を延長大し幾千の我同胞を初め支那人及歐米各國人をして均しく我文明的施設の惠澤に浴せしむるに至れり之れより先、支那郵政に於ては各國居留地に認められる郵政權回復の聲高く此風潮は延いて山東省の各地に於ける占領地外郵政の撤廢を迫り來るに至りしが會々第三次革命が濟南に波及するに際し袁世凱は日本郵政局を以て革命黨を威嚇送の威ありとし名と之に藉りて數多の密偵を派し我郵政に郵便の行動を阻害せんと企てたり茲に於てか君は部下に令して其巡警兵士の密偵を召し取らしめ悉く之

因り君は中央の大官に個人稱りて多く閣員中君の才學と受て、中央官場に通達し任するに要職を以てせんとする者あり、君は果敢生輝に機務の機軸を執り中央官場を任するの資格ありて其機務に應ずるなり。

平野銀行主

平野吉左衛門君

加佐勇有路上村



平野家祖先は植正成泰の臣植原氏にして植原の遺命を奉じて丹波に入り、身を盡して農に勤む、爾來皇朝三百余年を經て徳徳休多大居士有路の莊に移る之れ財家の初代にして後裔姓を平野と改む、現主吉左衛門氏は實に其十三代なり、平野家は某代吉左衛門を襲名し其傳授王侯府及に仕へて御用達と勤り名字書切を許され御禮格として二十三人扶持を食ひ、前代吉左衛門氏は明治維新後久美濱縣設置の際南法係申る位に左衛門とあるや第十四代大區區區長に任せられ、明治十一年府縣制實施せらるゝや舉げられて府會議員となりたを等公職に參與し地方の先覺者として赫々たる名譽を博した、明治十六年家督を嗣子に譲り隱居して慶應義塾に習業風月

友とて親類として親睦、路邊、俸給に就みたるが中にも俸給は京華花の本庁舎の門人にて俸名を山有園芝と云ひ、先陣ある時年を以て毎年一月二十七日逝去せられたり、平野家は從古より代々役人たるを厭棄せられ若し家業となりあるは海王より代官又は大庄屋等の任命をあるも一俸給辭して受けず、まねき御用達は一箇の商賈なりとて勤政せしも亦にて俸代の時僅かに三年區長とありたる外實て盛職に在りたるの歴史を語らず、現主の傳も其神長に推されること展もるも評して固せず、之れ其家業たるが故なり、現主吉左衛門氏は先代の嗣子にして幼時は母々の腹白者、兩親も殆ど持て餘まじ程はて小學徒は勿論京華第一中學校

在學中代り尙其氣質改まらざりしに中學校卒業後復を東郷に負ひ法學院に學ぶこと數年此間如何なる物に感したるか恰も生れ變りたるや如く柔和とあり其本業復舊者せる際之の如き之れが元の勇藏(幼名)かど、兩親も驚かれし位にて其温厚たるのみか當時の法學院は現時の中央大學にて其頃大學を卒業せしものは殆ど師内に指を屈する能はき、爲に時の多田部長は氏を講師として舞鶴町の青年を誘導し學友會を組織し青年智識の啓蒙に努めたる事さるあり、爾來氏の手腕は着々發揮せられ名聲噴々たるものありて村長又は郡會議員に推薦せられたれども家憲を守りて一切公職に參與せず、専ら家事に留意せしも時勢は變遷して従来の營業を繼續するの不利あるより酒造並に生糸業をも廢止して明治三十一年資本金三萬圓を以て平野銀行を創立するに至れり以來自ら營業の任に當



先代廣泰翁

り之れが發展に努力し爲に殆ど三萬圓の積立金を計上するの隆盛を見るに至り加佐郡西部の金銀界を左右するの數院家と稱せられ其名聲郡内に著し明治三十六年衆望は大多數を以て府會議員に當選し爾て其任に就かしめたり、越へて明治四十年滿洲の際實も再選して其去るを許さず遂に府參事會員に擧げら

れたる等其手腕は益々向上して重視されるに至りたれども、長く職に留まるは本意にあらざりて家事都合を以て四十三年府會議員を辭退したる以來如何なる名譽職にも出でず汝々として行務の爲に盡瘁せり、されど之れより幾も明治四十年地方稀有大水害は銀行倉庫に充溢せる担保の満全部を流失し爲に實に莫大なる損害を蒙りたれば、之れが整理の爲には直に其職を辭せんとせざるも川筋に於ける各地の慘害見るに忍びざるものあれば身府參事會の一員たるを幸ひ由良川改修を提出し地方永遠の災害を除去せざるべからずと、遂に身を賭して府會に争ふべく先ず知事を動かして四十年冬通常府會に提案せしめ、自ら演壇に立ち涙を流して之れが説明に努め滿場の賛成を求めたる結果翌四十一府會にて知事の實行豫算たる五ヶ年繼續工事を承認する事となり爾來改修工事は豫定通り完成して今や川筋町村民は其業に安するに至れり、之れ全く氏の事績と稱すべきあり、されば其義務亦完了せりと評任以來銀行の爲に奮勵し河守町に支店を設けて實弟たる政藏氏を其支配人に擧げ今日に至れるが水害の爲に失ひたる三萬圓の積立金も今や挽回を見るに至り、平野家は益々益々盛大を見るに至れり、

重視せられ現に本年五月府の勅托に依り滿韓に於ける國業視察の爲に出張し約五十日を費して歸朝したるが如し、其半面を知るべきなり、殊に氏は近時北海道に於ける殖拓事業に趣味を有し數年前深川に於て二十余町歩の既開墾の田地を購入したるが、續て北見回嶺別に於て原野五百町歩の拂下を受け目下開墾中に屬するが田畑とあるべきもの百五十町歩にて平野農場と稱せるが今は流車も開通して平野驛と稱せり、氏が

實弟に石藏氏と稱し一年志願兵にて日露戰役に從軍し從七位勳六等功五級に叙せられ歸省後米國に渡航し農業に従事し昨年嚴父廣泰氏逝去の爲歸國せしも昨年六月深川に移住して専ら其業を監督しつゝ、あるが該開墾事業は最も有望にして大に同地方開發の爲に貢獻すべしとは國家の爲り慶賀に堪へざるも、年尙尙四十七歳にて春秋高し、自重以て地方の爲にも其敏腕の吝ならざんことを望むのみなり、

岡田郵便局長

林 大作 君

加佐郡岡田上村



林家祖先は甲州武田家々臣林藤五郎政村にして田邊城内に所縁あり爲に由良村に引越したるに偶享保元年岡田上村の招待あり宇谷に分家す、家は代々醫と業とし殊に流麻質斯は家傳として特効顯著ある妙藥を發賣し其名遠近に聞へ注文引も切らざる有様なり、氏も亦累代の業を繼承せん爲り少壯復を負ひ東都に發せんとするに當り會々嚴父の病起り爲に其志を得ず、後ち鐵道作業局出張所及加佐郡役所等に職を奉じ明治四十二年十二月三等郵便局長岡田郵便局長を命せられ爾來今

日に至れり、此間即ち明治四十一年四月同村學務委員に擧げられ、四十三年四月同村々會議員に擧げられたる等、局務の余暇あれば公共事業に盡瘁し殊に兒童教育には深き趣味を有し斡旋克く努め村教育の發達に裨益せるもの尠からず、爲に名聲は年々向上して明治四十五年四月學務委員滿期とあるも再選し、大正二年四月村會議員滿期とあるも再選し今や同村に於ける屈指の人物として重きを爲すに至れり、氏は資性剛毅熱烈なる氣象を有し、人に負ける事謙ひにて

進んで退くを知らずと云ふ概ありて真に大和魂を發揮せるの
人と稱すべし、人に接する磊落にして克く語り克く談じ隔壁
を設けず然して機智世才に長ずる等八方援目なく口八丁腕八
丁の人にて精力絶倫、果斷決行、快刀乱麻を斷つとは氏の如



加佐郡會議員

山崎喜十郎君

加佐郡西大浦村字三濱

山崎家は三濱に於ける舊家中の舊家にして累代藤左衛門と
號名し、庄屋を勤めて公共の爲に貢賦せり、されば田邊侯よ
り數回の下賜品ありて現に同家の重寶として秘藏せらる、前
代藤左衛門氏は明治維新後野原小橋三濱三ヶ村の受理戸長に
任せられ郡制實施の際郡會議員となる等地方の先覺者として
政事界にも實業界にも重く用ひられたり、氏は同郡餘部町宇
和田堀口庄左衛門博貞氏の三男にて幼にして博識強記群書を
援けり、殊に名僧智藏と其名を慕はしたる松尾寺住職應空僧
正は氏の實兄なりと以て、幼少より師に就て漢學を修り素養
亦嚴格、然るに氏は農を好み殊に園藝熱心にして如何なる關
事も避けず、果敢運糧に至るまで俣俣と共にし實踐躬行と軌
道として終始一貫を期せり、實に稀有の青年として前代藤左

を云はんか兎に角同村に於ける人氣役者たるあり、飲めば
歌よ踊る田舎者者が洗足で過げると云ふ真に稀有の快男子な
り、年尚尙春秋に富む其長を以て短を補ひ須らく修養を積ま
んか其大成易々たり幸に自重を祈る。

の功績を叙せる感謝状に紀念品を贈りたり、
氏は資性温順、確實にして態度沈着なる裡に剛氣を有せり
人に接する至極圓滿に、肺腑を披きて陰險ならず、交際又巧
みなり、其欲する所諒々と論じて止まず正確を以て見地とせ



河守町の元老

由里儀兵衛君

加佐郡河守町字關

氏の先考由里儀兵衛氏は由里平兵衛清房の四男にして安政
元年分家し織及び蠟燭製造並に質屋を營み、大智藏天龍寺派
管長滴水禪師の姻戚たり、幼名遠藏、諱は尙徳東雲と號す明
治十九年嚴父逝去に依り家督相続、先代の名を承襲して儀兵
衛と改名す、性敏捷裕達にして人を容るゝの量あり、嘗て地
方丹州時報、大阪朝日新聞等は氏の性行を頌表せしことあり
、明治二十一年七月河守町外四ヶ村戸長役爲用掛となり二十
四年三月同町有給助役、同年十二月同町農會長二十五年十
一月赤十字社河守委員、廿六年六月より廿五年六月迄司法省
破産管財人、廿七年二月關區長、同年十一月加佐郡農會幹事
、廿八年四月河守町長、三十年一月河守銀行取締役、三十一

り其手腕の卓絶なるは是れ村民が柱石として信頼し且つ崇拜
せる所以たるなり、氏は殊に酒を好み飲先は限ひ舞ひ氣焰を
吐く無邪氣ある所あり、今や四男四女を挙げ家庭殊に圓滿な
るは衆人羨む所なり、君年齒尙春秋あり幸に自愛を祈る、

年四月加佐郡水産協會區長、同年七月より三十八年迄加佐郡
教育郡會議員、三十二年五月河守銀行頭取、同年十月加佐
郡會議員爾來三度再選して四十四年十月滿期退職、三十二年
十一月加佐郡會議員、同月加佐郡參事會會員爾來滿期毎に再
選四十四年十月退職、卅五年二月第三回日本海方面府縣聯合
水産大會評議員並に第三回京都府水産品評會委員、三十六年
三月河守町實業青年會長、三十七年四月町會議員、同月河守
町外五ヶ村組合會議員、同年十月河守町尙義會評議員、卅九
年一月河守郵便局長、四十年三月學務委員、四十一年九月丹
後三等郵便局長加佐郡幹事、同年十一月同町在郷軍人會名譽
會員四十二年三月同町青年自強會名譽會員、四十四年七月丹

後第一通信事務研究會長、大正三年三月河守町農會評議員、同年二月河守町實業協會名譽會員に擧げられたる等政事界にも實業界にも重視せられ、此間地方自治の爲に貢献せられたる事績は枚舉に遑ならず其内重要なものを擧げれば、明治二十三年福知山治安裁判所出張所設置は極力地方の結束を効爲に考へて無益に煩瑣を省かれり、同廿八年町長就任に際し種々の大火あり廿九年三十年の大火水、日清の大戰に際して熱誠奮闘に當りて志氣を鼓舞し勇往者をして幾多の功績を著せしめ其後の北清事件日露戰役に於ても前任軍人の懸念家族の慰安等功に盡せしこと衆人の悉知する處たるあり、大正、洪水に付ても其善後策に努力せる衆皆知る處にて、大正、杯等を擧げせり、郡會議員在職中明治四十年に高等女學校、四十一年に職業學校を創立し四十四年に職業學校監室を建築せし事氏の最も方に依れり、三十七年八月河守町會は氏の功等と多し氏に町長資格の優遇者たることを決議せり、斯の有難にて氏の功績は赫々として町史に刻まれ、明治二十年警察會館建築費寄附に依り知事より賞状を受領し以來義勇會、義民家族救恤、區裁判所設立、神苑會設立、赤十字社員募集、武備會員募集其他の功勞各々事業に寄附の度に依り褒狀本杯等を受けたるもの三十九回の多きに達せり尙且つ二十七八年事件の野に依りて實動局より本杯一紙を下賜せられ赤十字社よりは贈狀は本杯を贈られたり、又三十六年四月加佐郡向文會よりは金野整理の功に依り贈狀に褒狀を又通信者よ

り大正五年七月河守町郵便局長職に當り多年勤勞の慰勞金を賞與せられたるなど事績の語るもの頗る多し
氏は事に當りて熱心努力を惜まず、其欲する處は徹頭徹尾成功を期せざれば己まず意志極めて鞏固にして、其の目的を達する爲には幾多の私財を犠牲に供して惜まざる義侠に富み且高橋什んか頼みますと謂を下れば見捨る事が出来ず、是が非でも及女親り世話を爲すと云ふ有難なれば町民の信賴し崇拝すること真に神の如く、一時河守町の柱石として名望赫々たるものありしなり、公職に在ること三十有余年、其間一点の非難なく、其職を全ふし郡制實施以來郡議の任にありしも四十四年後輩の進出を妨ぐる虞ありとて、町民再選を希望するに拘らず辭して出でや尙其年町會議員補欠職に當りて推されたるも固辭して立たず、爾來同地にあり町の元老として後進者の誘導に努め、之れが保護の任にあり現に此の後任町會議員は仲田氏の出るや尙も職業學校監上問題出でたれば氏は必死仲田氏を擁護して大勢を挽回し更に寄附會を新築せしめ彼の基礎を強固にするに至れり而かも此運動費の如き密に私財を致して且つ其勞を惜まざりや、是れ其一例にて名利に淡白なる氏は今や家政稍煩きたる如くあるも一言の怨を洩らさず、其態度の大なること到底凡人の及ぶ所にあらずるあり然り其名譽は財を以て求むべからず、由里家跡の歴史を飾るものにて、氏亦斯するに足るべし、幸に自愛と事とし編考を祈る

前代議士

上野彌一郎君

加佐郡岡田中村字西方寺

上野家は忍壁親王の直系にして其三十一代宗室に至り故ありて文明十二年より現住地に居を移し小島若狹の長婿となり後更に上野家を興す、即ち初代は宗信氏にして爾來庄司又は庄屋等の職に在りしが三代に至り不幸水火災等の難に因り漸次零落し七代宗室に至り稍回復し以て宗室大盛昌を見るに至れり、家は累世を以て本業とし農業を全營せり、氏は其十三代と相續せしものにて、嘉永三年八月五日生、幼名を彌海次良、諱を宗愛、字子尹、舟院と號す、年甫めて七歳海越秀知の門に入り習字、讀書、算術等を修得し後ら岸玄甫、山口道一諸氏に就き漢書を學修す、爾番の頃弱冠にして大庄屋を勤め登壇置懸後副區長となり、尋て區長となり、學區取締を兼任せり、明治十五年三十四歳にして京都府會議員に擧げられ爾來滿期再選せらる、こと四回此間實に二十年あり、常設委員となり、府參事會員となり、郡會議員となり、府會議長に擧げらる、等、屢選して令名を博す、尙此他種々の名譽職を愛擧せり、明治三十五年衆議院議員に當選以來再選せられたること二回に及べり、今や一切の公職を辭し農工銀行重役として屢々京都に往復せる外自邸にありて新に郊外を散

歩し悠々自適樂事を事とせり、
實性剛直にして風采凛凛、氣品高尚にして習すべからざる權威を具へ而かも善於修飾として自然に備はる實目は俗も古武士の概あらしむ、之れ幼時より嚴格なる家庭に人となり年と共に其地位は向上して檢査に擢られたるの賜ものにして、其職務の正確にして秩序整然衆として首肯せしむるものあるも亦是れが爲りあり、されど此地位此名望を獲ら得るまでに拂ひたる犠牲は決して少しとせず、之れ政治家たるもの、苦痛とする處たるなり、爲に氏も一時祖先より相續く家督の幾分を失ひたりと傳へられたれども、機敏なる氏は政治家を以て大を爲すの至難あるを看破し、心機一轉、政界隱退後は専ら實業界に没頭せしもの、如くありたるが、近時著しく資産の隆興せるものありて先代當時とも凌駕するものありと傳へらるゝに至れり、氏が手院の一轉亦實に驚くものありと謂ふべし、斯くの如く家政は挽回して隆々たるにも拘らず、氏は早く夫人を失ひ亦一子なし之れ氏の憾とせる處なりしなるべきも勢難かる令弟林田彌壽太氏の三男泰氏を養ふて嗣子と爲し、既に京都第一中學校を卒業し今正に高等の學府に

學ばんとせり、前途尙遠なれども極めて秀才の聞へあり、殊に氏は府會に牛耳を執ること二十年、代議士たること三回にして今亦家政の日に大なるありて何れも上野家の系譜を飾



新舞鶴の功勞者

勳七等 池田 梶五郎君

加佐郡倉梯村字行永

氏は嘉永四年五月五日現住地に孤々の聲を擧ぐ、同家は祖父友七郎氏同村池田彌太夫氏より分家し其嗣子友七郎を襲名し明治八年老衰の故を以て隱退、氏其後を相續したるものにて氏を以て三代とあす、代々現地に住し農を業とせり、氏は明治九年五月豊岡縣より加佐郡行永小學校保護人申付られ、同十二年加佐郡第六組筆生となり十三年四月第六組用保となり同年六月行永小學校事務委員に擧げられ、十五年一月行永村用保となり、十六年一月行永村長兼部内事務委員申付られたり、同年二月準判任十七等官に補せられ十七年八月行永村外十一ヶ村組合用保に擧げられ、明治二十二年四月町村制實施に當り倉梯村會議員に當選同五月同村助役に擧げられ二十五年七月倉梯村外三ヶ村組合會議員に擧げられ、二十六年五月助役満期再選、二十七年五月倉梯村長に擧げられ同月倉梯

村外三ヶ村組合管理者となり、二十八年四月同村會議員となり、三十一年五月村長満期再選以來再選を重ねて三十九年五月満期まで勳績せり、此間明治三十二年九月與保呂村より選出せられて加佐郡會議員となり、三十六年六月舞鶴稅務署管内所得稅調査委員となりたり、然るに明治三十九年七月一日新舞鶴町制實施に當り町長臨時代理者を命せられたり、同年十二月七日小島郡氏町長就職により退職せり、同四十二年四月倉梯村會議員となり大正元年九月與保呂川水害豫防組合會議員となり、同二年四月村會議員満期再選同五年二月菅坂道路開整組合會議員に擧げられたり、氏は温厚にして風采態度沈着あれども思慮頗る鞏固にして滿々たる朝氣と氣骨と有せり、然して義侠心に富み愛國志望の稱すべきものあり爲に已れが是とせる處は水火も辭せず如

何なる艱難に到着するも其素志を貫徹せしめざれば止まず、爲に新舞鶴町新市街の如きも容易に成功せしなり、之れ氏が國家の事業として如何なる犠牲を拂ふも屈せず身を培して成功せしめざれば止まずと其義侠的襟度を發揮したるものにて、新舞鶴町は實に倉梯村の分身たるなり、新舞鶴町は明治二十二年勅令を以て舞鶴軍港設置を公布せられ三十年一月軍港設備に着手し三十四年十月竣工守府を遷座せり、是れと同時に國庫及び府の補助を得て新市街と計劃し三十五年十一月現今の基盤型市街と完成せるあり、是れ時期の然からしめたるものありと雖も此計劃を起し此大事業を完成せしめたる當事者は誰や、云ふまでもなく氏即ち池田梶五郎氏たるあり、明治三十九年七月氏は倉梯村にして其村長は即ち池田梶五郎氏あり、建設の計劃、建設の設備悉く氏に依りて畫策せられ氏に依りて進行せられたるなり、基盤型市街の秩序井然として壯觀あるを見れば氏の功績を偲はざるべからざるあり、のみならず明治三十七年日露開戦の起るや當時瀨知山まで開通せる鐵道は新舞鶴までの延長を最も急務中の急務とせり、氏之れが爲に東奔西走殆ど不眠不休の有様にて線路及停車場敷地の購入を始め材料の提供に至るまで百方努力して其年十一月開通を見るに至る之れ亦氏が事績の一編なり、尙且日清、日露の兩戰役とも村長の職にありて遺憾なきと期せしめたるが如きは其手腕の凡ならざるを證するものなり、爲に明治二十二年二月土地整理事務に従事し勉強の廉に依り京都府より金參円を下付せられ、三十年四月二十七八年事件

の勞に依り賞勳局より木杯一組を下賜せられ、三十九年四月には三十七八年戰役の功に依り勳七等に叙し青色桐葉章及金百圓と下賜せられたり、尙三十九年六月倉梯村よりは村長就職中の功勞に酬ゆる爲とて金五百圓に感謝狀を贈り又之れと同時に倉梯村外三ヶ村組合管理者たりし勞に依り組合より感謝狀に服料金貳百五十圓を贈りたり、のみならず明治四十年一月新舞鶴町長臨時代理者たりし勞に依り感謝狀並に服料百圓に銀盃一個を又大正五年五月新舞鶴町市街計畫及び事業に盡瘁せし功勞に依り感謝狀並金七百圓を贈られたるは新舞鶴町民の微意にして氏も諒とせる處たれども氏が此新市街を築きあげたる迄には多大の犠牲を拂ひ多大の勞力を堪えしめあり之れ元より覺悟せる處あれども開けて語るべからざる苦痛は氏の腦底に潜みしならん、然れども今や全く業成り名遂げて其事蹟は萬世に傳へて赫々たるものあり、氏慰するに足らん、政治家の目的は狭き意味に云へば立法府の議員なれども廣き意味に譯すれば國を改善することは總て政治家の任務あり、然るに人動もすれば府會議員代議士たらざれば政治家として國家を経倫する能はざるが如く思惟し甚しきは抱負なく才能なく虚榮の爲に政治家に列せんとするもの甚だ多し、然れども國家の根柢は自治體にあり、自治體にして健全なる發達をなさんか國家は期せずして興隆なるべし、自治體の制政盛なれば社會自から改善せらるべし、されば代議士となり或は大官たりとも一町村の主腦者となり、自治體の長所を發揮する事に努めたらんには直に以て世の模範となり、其人の功

は國務大臣にも譲らざるべし、思ひ此處に相到せむ池田桐五郎氏の功績は眞に國務大臣にも劣らざるなり、氏は府會議員候補者に擬せらるれども出でず那會議員僅に一期にして以後出でず専心以て村政に盡したる事滿十五年倉橋村より新舞鶴町を産み相共に今日の旺盛あるを見る洵に世の模範たるあり



東京東洋内科醫院

兼南 湖 病 院 長

醫學博士 **高田 畊安 君**

東京市麹町區三番町

氏は文久元年八月十九日被部藩士増山守正氏の二男に生れ幼名を復齋と稱せり、祖先是藤原鎌足の後裔にして丹後田邊藩の首席家老増山説道先生の子孫にて説道先生の墓所は天台寺に存せり母は高田竹子にて加佐郡中筋村字京田高田久兵衛氏の曾々代久兵衛氏の長子高田畊安氏の孫女にて畊安氏は醫志し家督を弟に譲りて自ら分家せり以來醫を業とせりこと四代氏は明治四年高田家の養子となり畊安を襲ひ醫業に従事する事となりたり、年十六歳即ち明治九年筑波を京都に負ひ京都府醫學堂備後に入り同十二年卒業、直に京都府醫學堂(當今醫學專門學校)に入り十七年卒業同年東京大學醫學部(當今第一高等學校)全科の試験に及第し同年東京大學醫學部

に入學二十三年東京帝國大學醫科大學卒業以來同大學内科教室に助手たりしこと六ヶ年此間看護學講師を兼ね、醫學堂在學中は書籍器械等と購置せられ明治二十七年には東京醫學會、國家醫學會、學士會と代表し慰問使として香港に青山博士等を慰問し、且亦明治二十五年より東京濟生學會内科講師を担當せり、明治二十九年大學助手辭任東京に東洋内科醫院と稱する病院を創立し越へて三十二年神奈川縣茅ヶ崎町の海濱に南湖院と稱する病院を創立し其に其長として現在に至れり、然るに日進月歩の醫術は尙氏をして満足せしむるに至らず、明治四十四年、五の兩年氏は伯林大學に入りて醫學諸科殊に肺結核病の診療法を研究し其れよりドレスダフ市英國衛

生醫博覽會を參觀し更に羅馬市萬國結核病學會に列し、瑞西マボースの肺病診療法を視察し、尙進んで歐洲大陸に於ける宗教上及び衛生衛生上の現狀を視察して歸朝せり、尙明治三十年以來私立看護學講習所を開き既に二百余名の卒業生を出せり、大正五年二月十四日第九百七十二號を以て醫學博士の學位を授與せられたり、責任濃厚にして氣品高雅、明晰なる頭腦を有す、其小學時代勿論大學時代の如きも常に優等なる成績を持續し學生の模範

範を稱せられたり、品行方正極めて嚴格にして博識強記、幼時賦性兒は彼の事かと將來を矚目せられたるが、實に然り、果せる哉、同業者頗る多き東部の地に於て一頭角を現はし赫々たる名聲を博せり、殊に氏は熱心ある基督教信者にして禁酒を堅守せるが意志極めて鞏固にして風采、態度悠揚として賢すべからざるものあり、今日の成功を贏ち得たる洵に故なきにあらざるなり、年齒尙春秋あり乃主界の爲めに益々貢獻を盡む。



舞鶴郵便局長

從七位勳七等 **田 中 覺 藏 君**

加佐郡舞鶴町字竹屋

氏は明治二年一月二十七日加佐郡舞鶴町字野屋百三十一番地木下家に孤々の聲を擧ぐ、年十六歳即ち、田中家の嗣子となる、田中家祖先は寛文八年丹後田邊藩支配下福來村より出で分家創立したるものにて現主覺藏氏を以て其七代とす、四代目嘉左衛門美啓氏は祖先崇拜の念厚く永く子孫に傳へて怠らざらしめんが爲め食谷村に田中覚神として祖先を祭り其維持基本として田畑を寄附し是れより生ずる利潤を以て祭費に充て毎年一回同族二十四五人集會を爲して祭祀を行ふを例

ともし現今に至れり、又四代目嘉左衛門美啓氏の令妹は當時孝子たるの故を以て田邊藩主より表彰せられ田邊孝子傳中の一人たり、田中家は現地に分家以來代々油及び燭燭製造と業として現在に至れるが氏は明治二十三年十二月舞鶴郵便局長に任せられ爾來引續き其職にありて現今に至れるが此兩名譽職にして愛慕せるものを擧ぐれば左の如し、明治三十年三月舞鶴町會議員當選就職、同四十一年四月舞鶴町會議員再選就職、同三十二年三月伊佐津川水害豫防組

合議員當選、同年四月鎮守府街道模範功上げ調査の爲め臨時土木委員當選、同年十月加佐郡會議員當選就職、同月舞鶴町學務委員に當選、三十三年九月舞鶴實業協會幹事當選、三十五年二月舞鶴町調査委員、同月事務長從三位勳二等大森鍾一氏より第三回日本海方面府縣聯合水産業大會評議員を委嘱せらる、同年五月鐵道案可決確定に付き舞鶴町調査委員を解かれ同月舞鶴町臨時土木委員となる、同年六月所得稅調査委員當選、三十七年四月舞鶴町會議員再選、三十八年四月伊佐津川水害豫防組合會議員當選、同年六月所得稅調査委員當選、

然るに明治三十九年四月以來兼務の悉皆を辭職して専心局務に従事するに至り、舞鶴町の地たる丹後に通ずる關門にして市街亦旺盛人口頗る多くして丹後に於ける中心地点たり福知山郵便局二等にして新舞鶴は一等局たり、四圍の状況に於て將た其取扱郵便物數に於て何等兩局と遜色あらざるあり、然るに今も尙三等局を以て足れりとせるもの、局務充實にして遺憾なきが爲めなり、之れ偏に氏が敏腕の賜ものと稱すべしあり爲に選信省其功績を認め明治三十七年十一月九日選信大臣大浦兼武氏名にて「明治二十三年十二月舞鶴郵便局長の職を奉じ拮据精勵殊に郵便貯金奨励に關し私財を投じ勸誘書を配付し或は貯金函を調製し其他各種の方法を講じ獎勵の結果其成績良好なりとす依て之を褒す」と表彰せられたり尙明治三十九年四月三十七八年事件の功に依り勳八等白色桐葉章を下賜せられ明治四十四年五月正八位に叙せられ、大正二

年六月勳七等に叙し瑞寶章を授與せられ大正三年九月從七位に叙せられたり、尙大正五年九月選信大臣より選信選獎規程に依り第一級勳功章を授與せらる其表彰文左の如し
二十五年間勤績し且つ品行方正格勳精勵にして一般の儀表と爲すに足る仍て茲に選信選獎規程により第一級勳功章を授與して其勳功を表彰す。

大正五年九月一日 選信大臣正四位勳一等美浦勝人
大正五年四月一日大禮記念章を授與せられたり

氏は温厚篤實の君子にして明晰なる頭腦を有し、態度沈着其肥滿なる體軀は自然に備はる貫目を現はし、威ありて高からず床しきものあり、其事務に精通せるは選信大臣の表彰に依りて明かあり、今や局務に餘義なくせられて一切の名譽職を去ると雖も舞鶴町の元老として町民の崇拜せるは昔も今も變りなく其徳望は赫々なるものあり、氏亦公共事業は其種類を問はず私費を投じて卒先他に施を示すを常とせり、現に明治三十五年十二月舞鶴町公園設置に當り其敷地として畑一反九畝二歩、田壹畝四歩、原野四畝十九歩を寄附せるが如きは其一例にして氏が此寄附に依りて舞鶴公園は速に完成せしなり、爲に大正二年十二月二十五日付にて賞勳局總裁從二位勳三等伯爵正親町實正氏より奇特に付き其賞として銀盃一個を下賜せられたり、之れ氏の性格を語るものにて多辯を要せず、自邸は父祖の業と繼承して今も盛大を極め一方局務亦年と共に激増して繁忙ある程に氏は亦書畫寸董に親み蕪村の軸を始めとし多くの珍品を愛藏せり、家庭には夫人との中に

二男一女を養ひ多くの店員を便役して人の羨む所なり、年齒一

尙春秋に富む、幸に自愛を事とし國家の爲め益々貢獻を祈る



加佐郡會議長

林田彌壽夫君

加佐郡舞鶴町字新町

氏は安政五年六月加佐郡岡田中村字西方寺に生る、前代議士上野彌一郎氏の令弟あり、明治十九年現住地林田家の養子となる、實家上野家は忍壁親王の末裔にして地方稀有の名家なり林田家亦舞鶴町に於ける舊家にして龜屋と稱し酒造と業とす、系譜の記すものあらざれば其詳細を知る能はざれども現主を以て十一代とせり、氏は幼時舞鶴藩士新開赴夫氏に就て學を修め、明治九年京都府立農學校に入學し同十一年卒業以來自邸に在りて酒造業に従事せり、明治二十二年町村制實施の際舞鶴町第十區長に擧げられ、同年七月火防常設委員となり二十五年四月町會議員に擧げられ二十六年六月破産管理人を命ぜられ、二十八年一月舞鶴町外五ヶ村組合會議員に擧げられ解散まで勤練せり、三十六年九月郡會議員に擧げられ爾來滿期毎に再選して今日に至る此間明治四十二年七月郡

參事會員となり、大正六年一月郡會議長に擧げられたり明治四十四年加佐郡酒造組合長となり爾來今日に至り、尙此外學務委員となり、土木委員となり、築港委員となり、時々起る各種事業の委員とある等舞鶴町に事あれば氏が委員たらざるはなく必ず出で盡瘁せり、之れ其名聲の大なるを證するものあり、
氏は温厚沈着にして質朴、其多くを語らざれど、剛氣に乏しし觀あれども事に當れば諄々と論して遺憾あらしめず、頭腦周密にして些微なる点にも注意を拂ひ再調査せざれど何事も輕率に發表せず、されば如何なる大事に遭遇するも泰然自若として動する色なく、其發する一言は金鐵として風雨を生ず事なく、志堅實にして意志鞏固其見地の的確にして抱負の深淵なるは、現時盛衰を基礎として角頭を争ふ青年輩と

は全く其趣きを異にし、徳を以て人を懐かしめ、徳を以て今日の地位を贏ち得たる氏、洵に謙政者中稀に見る處たるあり殊に氏は長者を敬し幼者を愛撫して誘掖に努め、人に接する實に篤實寛容、毫も隔壁を設けず親切を旨とす之れ舞鶴町に於ける柱石として將た加佐郡に於ける元老として重視せらる、所以たるなり、家庭殊に円満にして三男四女を擧げ嗣子は



與保呂村長

時岡達太郎君

加佐郡與保呂村字與保呂

氏は明治維新の波風立願ぐ元年八月五日現住地に颯々の聲を擧ぐ、時岡家は同村に於ける舊家にて素對家たり、代々農を業とし公職を勤め、村治の爲に貢献して重きを爲せり、氏も亦父祖の徳を繼ぎ明治二十九年四月同村役場書記となりし以來今日迄斷斷なく公職に在り、即ち明治三十年四月書記辭任と同時に同村収入役となり、三十四年四月滿期再選、同年七月二十二日辭任八月二日同村助役就職、三十八年七月滿期再選、三十九年二月辭任同月同村尋常高等小學校事務委員に擧げられ、四十一年四月辭任同月大字與保呂區長就職と同時に與保呂衛生組長を兼職せり四十二年三月辭任同年四月村長

會評議員に擧げられ四十三年十一月三度同村助役に擧げられたるも四十四年五月同村々長となるに及び農會評議員並に助役辭任五月廿日村長就職せり爾來滿期再選以て今日に至れり氏は資性温厚着實の裡に氣骨の稜々たるものあり、言多からざれども徐々に論じて誤たず敏密なる頭腦を有す、人に接して篤實慈愛更に城壁を設けず實に常識の円熟したる好紳士にて、公私共に公明正大、仁侠の心厚し然して其事務に精進し調査事項は勿論報告物等悉も期日を違へざるは他に其比を見ざるの事務家にして廿九年役場書記奉職以來複雑なる事務を執筆し運次其歩を邁りて村長となりしよりも既に六星耀此

開兎角波瀾多き自治体の主腦者として教育に衛生に將た勲業に時勢の遷運を伍して遺徳あらしめき郡内町村長中の敏腕家を以て稱せらる、是れ徳望村内に普く所以にて其名聲赫々たるは到底學力を以て大を争ふ青年輩の及ぶ所にあらざるなり

丸八江村の元老

勳七等 大田久兵衛君

加佐郡丸八江村字丸田



大田家は地方に於ける舊家にて代々久兵衛を襲名し農を業とせり、氏は安政五年九月二十二日現住地に颯々の聲を擧ぐ明治八年先代久兵衛氏の逝去に依りて家督を相續せり、明治十年十二月丸田村伍長に擧げられ、同十七年七月八田村分四ヶ村組合會議員となり同時に加佐郡全町村組合會議員に當選、十八年三月丸田村總代に擧げられ、二十年三月加佐郡八田村、三日市村、上東村、丸田村、八戸地村戸長准列任官七等に任せられ同村に浦役人兼務仰せ付られたり、二十二年五月町村制實施に當り廢官と同時に丸八江村助役に擧げられ、二十五年四月同村會議員となり、二十六年四月丸八江村長に擧げられ、三十年四月滿期三十二年十月同村會議員に擧げられ三十六年七月再び村長に擧げられたるが同年十月同村會議員滿期四十年七月村長滿期同年十月再び同村會議員に擧げられたるが

四十四年滿期以來村會議員として將た同村元老として村政に參與せるも村長、郡會議員等は後進者に譲りて出でず、氏は温厚篤實の君子にして、言多からざれども事に當れば諄々と發表して毫も遺憾あらしめず、態度沈着の中に剛氣を有し、氣品高尚にして一舉一動荷もせず思慮深淵にして其發する一言は恰も金鐵の如くにて墜跌を生ずる事なく其手腕の卓越せるは村民の欽慕措かざる處にて日清日露の兩大戰役に推れて村長の重職に就き出征軍人の慰問、遺家族の救護、國債の募集献金の勸誘等晝夜を分たず東奔西走以て戰時に於ける村長として克く任務を全ふしたる功績は實に顯著なるものあり、爲に廿七八年戰役には其勇に依り賞勳局總裁より木杯一組を下賜せられ卅七八年戰役には其功に依り勳七等青色桐葉章及び金五拾円を下賜せられ赤十字勳章授下より木杯を

下賜せられたるも其名聲は實に廣々たるものありしなり、
今や名遂げて國地に風月を友とすれども其願は太田家の歴

史に留りて朽ちざるべく氏の得意や傳ふべきあり、幸に編壽
を祈る

帝國在郷軍人會

加佐郡聯合分會長

豫備陸軍一等軍醫

正七位
勳五等

佐谷省一君

加佐郡舞鶴町

佐谷家は代々後野藩主に任へしが廣藩置縣となりし爲め、
先代正領氏は舞鶴水産會社を創立し水産業に従事せられたり
氏は將來最も有望なるものは醫學にありと、志を立て年十六
歳出て京都醫學校に入りしが天賦の才賦を有する氏は早くも
令名を博し年二十歳即ち明治十九年成績優等を以て卒業せり
爾來府立病院に助手となり研學すること約二年、技術大に進
み隨着するや、明治二十二年一年志願兵の法令發布せられた
るを以て其第一志願兵として姫路歩兵第十聯隊に入隊せり
滿期後三等軍醫に補せられ明治二十四年現任地に開業したる
が、當時の刀主家は未だ幼稚にして専門の智識を収めたる新
進醫院家の地方開業醫は實に稀有の事にして舞鶴の地亦他に
其比を見ざりしなり然るに其手腕亦卓越を以て稱せられたる
氏の開業せし後とて門前忽ち市を爲すの隆盛を見るに至れり
其評判は非常なるものにて市内は勿論三壘五里を遥しとせや
亦も診を乞ふもの引も絶えず、名聲は日に月に加はり手腕は
愈々發揮せられたり、斯くして名聲の大なると同時に衆望亦

加はり明治二十六年舞鶴軍人會を組織し自ら其會長となりて
在郷軍人の修養に努めたるが二十七年日清戦役の起るに當り
召されて従軍中二等軍醫に昇進舞鶴は失張醫業に従事し以
前以修する樂昌にて、學校醫となり町醫となり公共の事に盡
瘁せしが三十七八年戦役は再び氏を召集するに至りたり爾來
各地に轉戦中一等軍醫に昇進、奉天戦後は朝鮮に勤務したる
が平和克復と共に凱旋其功に依り正七位、勳五等に叙せられ
帝國在郷軍人會の創立と共に以舊の舞鶴在郷軍人會を改め
て帝國在郷軍人會舞鶴町分會となし引續き之に會長たり、
尙之れと同時に加佐郡聯合分會長に擧げられ郡内各村分會を
統率するの大責任を荷ふに至りたるが、爾來秩序整然舞鶴知山
聯隊區管内十五聯合分會中模範を以て稱せらるゝに至れり、
曩に舞鶴特命檢閱使團院官殿下御來臨に際し分會員奉迎の如
き會長たる氏は舞鶴知山練兵場に於ける殿下の御親臨式に參列
せる事とて其式の了れるが午前十一時、殿下舞鶴驛に御安着
せられたるは午後二時過ぎよりされば郡内各町村分會員の奉迎

は如何あらんと當事者の氣遣ひ居たる處にて舞鶴知山聯隊區副
官の如き特に同地に急行したるに既に氏は先頭に在りて分會
を指揮し隊列前として姿勢乱れず其整頓せるは道が模範を以
て稱せらるゝ聯合分會なりと稱はしめたりとは翌日副官が記
書に語られたる處なり、此一事以て氏の人格を窺ふに足れり、
氏は資性温良、人に接する磊落にして毫も城壁を設けず一
見而知の如く酒々として語り、胸襟を披きて陰險ならず、洵
に其態度は平民的にして貴富貴戚に依り區別する體なる事
なく、されば見立てよき先生、心易き先生として衆望を博せし
も之れが所以たるあり、殊に氏は進取の氣象に富み餘暇あれ
ば醫書と繕きて研鑽怠らず、爲に氏が醫學校卒業當時と今日
の醫術は殆ど隔世の感ある進歩あれども之れと伍して毫も遺
憾あらしめず、今や新進開業醫の濟々たる程に在りて維前一
頭角を顯はし大をさせるあり、令弟良吉氏は近衛野砲兵聯隊
附砲兵中佐たり、同正吉氏は大石姓を繼ぎ同防備長海軍大佐

たり、同有吉氏は帝國大學醫科大學を卒業し京都醫科專門學
校教授たり、同有吉氏は日本セーラ會社員として印度に駐在
せり、同台二氏は東京大學法科を卒業し仙臺郵便局長たり、
令弟五名の内蔵吉氏を除く外四名は何れも高等官の榮職にあ
り、蔵吉氏亦官位なしと雖も實業界に勇躍して其收入は他の
兄弟を凌駕せるあり、殊に五名の内二名の學士を出せるなど
地方稀有の事なり之れ何人の力子や両親の教育當と得たるは
勿論あれども其學資は全く氏に依りて供給せられたるなり、
亦氏に子女八人ありて今尙小學に在るありと雖も其多くは中
等以上の學を修りて社會に立てり、斯くの如く次から次へ子
弟の教育を爲し尙多くの蓄財を以て佐谷家今日の隆盛を致す
、到底凡人の成し及ばざる處たるあり、舞鶴の地たる數へ來
れを成功者決して誇しとせざるも氏の如く崇高なる志操の下
に成功せる人なし、洵に模範的人物と稱すべし、氏尙春秋
に富む其の美約を益々發揮して國家の爲り盡瘁を祈る。

京都府會議員

池田彌三藏君

加佐郡倉村字行水



氏は明治七年十二月現地に生る、先代彌藏氏の養子にして

農の傍ら酒造を業とせるが先代は頗る書獃家にして隆々産を

あしたる成功者たりしなり、氏は高等小學校を卒業するや直に法學院法律科に入り明治三十三年七月同全科卒業歸省、三十四年四月村會議員に舉げられ爾來滿期毎に再選せられて現在に至れり、三十六年十月學務委員に舉げられ三十七年倉梯村外三ヶ村組合會議員となり、廿九年三月同村議系兼小組長並に加佐郡議系同業組合委員に舉げられ、同時に評議員に舉げられたり明治三十九年五月倉梯村長に舉げられ新舞鶴町分離第一回の村長として分離後に於る整理事務を遺憾なく完結せしめたり、されば四十三年五月滿期退職に當り後任村長の名義にて左の感謝状を贈れり其事績の一斑を窺ふに足らん

感謝状

池田彌三歳足下、足下は明治三十九年五月倉梯村長に就職せられ本月を以て滿期退職せらるゝに至る、抑足下就職當時は恰も分村區町の學あり之れが財産處分を始め其他諸般の措置に就きては公平以て村民を満足せしめ明治四十一年小學校令改正實施に當り校舎の狹隘と地位宜敷を得ざるを以て一大英斷の處置に出で地位を大字行末に卜し四十一年四十二年の兩年度を以て校舎の新築を完成せしめ之に要する經費は本村未嘗有の巨額を收せしと雖も能く財政を整理し村民をして一ツの不平を訴へしめざるは洵に特筆大書すべき効舉と謂ふべし、尙祖母谷道路開墾工事を起して一村の交通を計り其他諸般の事務に至るまで注意周到自治の本旨に適ひ其模範とすべき事跡からす、今や滿期に至り再選を切望する處と雖も家政上止むを得ざるを洩され茲に希望を斷つに至りしは誠に遺憾とする處あり、君尙年豐なり、希くば一層の自愛あつて再び村治を執掌せられんことを因て村會の決議を以て服料一封を呈し茲に感謝の意を表す

右感謝状に叙するが如く其敏腕は村民の欽慕する處にて村長は去ると雖も全く開地に就くを許さず、四十年六月同村農會長に推薦し強て其任に當らしむのみならず同年九月郡會議員に選出せり、郡會亦氏を舉げて郡參事委員とせり、四十四年三月加佐郡三休團（藤系、農會、産牛）委員となり同時に評議員に舉げられ以來再選を重ねて現今に至れり、同年九月郡會議員郡參事會員再選、大正四年九月三度郡會議員となり同時に郡會議員に舉げられたり、尙明治四十三年三月與保呂川水害豫防組合議長となり大正三年四月京都府議系聯合會代表者に舉げられ現今に至る、同年五月衆望は辭退せるにも拘らず亦も同村長に推薦し就職を餘儀なくせしめたれ共同年十二月辭任せり爲に村民は其勇を多とし再び感謝状を贈呈せり大正五年十二月京都府會議員に舉られ爾來今日に至れり資性温厚、態度沈着あれども頗る朝氣に富み、人に接する清白にして毫も隔壁と設けず言語明晰にして竹と割りたるが如く洵に毒氣のあり好紳士にて肺腑を披露して陰險あらず、人格崇高にして秘密ある頭腦を有せり、其執る處常に積極的なれども成功せざるはあし爲に事績亦決して少しとせざれども中に氏が最も力を盡したるは明治三十九年五月新舞鶴町を置き分村せし時と同四十年與保呂川水害豫防組合設立に當り

該工費約四萬圓を要せし改修事業にして其事績は赫々たるあれども其當時の事業としては實に偉大なるものにて其手腕の凡からざるを稱するに足れり今や府政界の一員たれども當選尙日遠く語るべきものあらざれど、氏をして數年間其椅子



岡田下村長

有本準藏君

加佐郡岡田下村字大川

有本家は地方に於ける舊家にして代々農を業とし六左衛門を襲名して七世に及べり。祖先は有本嘉右衛門より分家したるものにて後代相續きて庄屋を勤め或は組頭を勤め村民の崇敬する處たりしあり、先代六左衛門翁は資性温厚謹直、頗る明晰なる頭腦を有し亦克く人の言を容れて可否を決する腦力と自信力を有せり、されば大川部落に事あれば必ず出て采配を執り亦如何なる高難事件を惹起するも翁が出て鎮まらざるなく眞に臨の一聲とも稱せられたり、爲に大川部落惣代となり、區長となり、亦村會議員となり、前後二十有余年公職に在りて名聲を博せり、翁に二男あり長は即ち氏にして次男喜藏代氏は農學校を卒業し目下河守町農業技手として將來を曠目せらるゝものあり

氏は先代の長子にして明治十二年一月二十二日生、其高等小學校を卒業するや自邸にありて農に従事し傍ら字の事務を補助せり、明治四十一年十月舉げられて同村収入役となり、四十五年四月同村助役とあるに及び収入役辭任、其助役に就職するや克く村長を助けて事務に精勵し一事一物克く整頓して衆人其敏腕を稱讚せり、然るに大正三年三月家事都合に依り已むなく其職を辭せしは村民の等しく遺憾とせし處たりしあり、其月大川區長代理者に舉げられ大正五年一月同村々長に舉げられたり之れと同時に村農會長、藤系同業組合、畜産組合小組長に舉げられ亦十字社分區委員其他各種團體の役員を膺托せられ岡田下全村の盛衰を双肩に荷ふに至れり、資性温厚の中に霸氣を有し快活にして頗る奮闘心に富り

されば事に當りて熱心努力を惜まず、人に接する丁寧と親切を以てし何人にも隔壁を設けず向に付合ひ易き、心易き特長を有せり、然して議論は正確を以て見地とし實際に伴はざる虚名を厭ふこと蝸蛇の如し、爲に村民行末へ間違ひなき人、握手して別條なき人、堅い人として尊敬する所以にして今や



加佐郡参事會員

勤七等 河崎常藏君

加佐郡岡田下村字久田美

氏は文久三年八月二十一日現住地に孤々の聲を擧げ、幼にして穎悟博識伶俐を以て稱せられしも當時未だ秩序の學府の設けあられば僅に寺小屋に就て研學せしに止されども天資の秀麗は年と共に進歩なく發揮せられ學術亦右に出るものなきに至れり、明治二十五年九月擧げられて學務委員となり、二十六年三月字久田美區長代理となり、二十八年四月村會議員に擧げられ、三十年四月同村助役とされる等恰も階級を變るが如く其手腕は向上して人望亦年と共に加はり、三十二年農桑組合岡田下小組長に擧げられ三十四年同村々長に就職せり、三十五年三月同村農會長に擧げられ三十八年三月村長選擧選此間三十七八年戦役あり、氏は國家の爲に腹食を忘れ

て東奔西走、よく戦時に於ける村長たるの任務を全ふせり、のがみならず戦後の經營として農事の改良を唱導し自ら耕勸を執りて能く村民に示し奨励到らざるを其事蹟顯著なるものありて京都府知事より農事改良獎勵に關し指導誘掖宜しきを得其成績顯著なりとて表彰せられ、廿九年四月賞勳局より戦役の功に依り勳七等青色桐葉章及金五拾圓を下賜せられたり亦同月同一の主旨に依り京都府知事より木杯一個を下賜せられたり、翌廿九年十二月村長辭任四十年四月村會議員に擧げられ、同年再び京都府知事より農事改良獎勵に關し指導誘掖宜しきを得て成績顯著なりとて表彰せられ木杯一個を下賜せられたり、同年八月字久田美區長に擧げられ翌九月加佐郡會

議員に擧げられ同月久田美購買組合を組織し其組長に擧げられ四十二年三月又も同村々長に擧げられ大正三年滿期再選せられたるも後進者の進路を開く爲りとして翌三年二月村長辭任せり、されど村民は其徳を慕ひ村の柱石なりとて閉地に入るを許さず同年三月同村學務委員ともし翌大正四年九月又も村會議員に當選し強て其任に就かしめたり、同年十月郡會又氏を推して郡参事會員の重職に就かしめ何れも現在に至れり資性温厚沈着にして寡言なれども頗る朝氣を有し思慮深淵機智世才に長じ處世に巧みなるは氏に依りて著しく資産の向

上發展せるに徴して推知すべく、亦其事務に精通せるは明治二十五年學務委員に擧げられし以來茲に二十五年間内村長たりしこと十余年、郡會議員たりしこと六ヶ年、殊に明治四十四年第一回林野講習會に出席して農商務省より修了證書を受領せるに徴して知るべし、今や加佐郡に於ける元老として重視せらるゝのみか、氏亦老ひて益々旺盛なるの概あり、政事界に實業界に雄飛して鏗鏘壯者を凌ぎ、河崎家の萬歳を謳歌せしむ、氏實に多幸と謂ふべし、幸に龜鶴の壽を重ね國家の爲りに貢献を祈る。



新舞鶴町助役

西村 幸平君

加佐郡新舞鶴町字濱

西村家は新舞鶴町に於ける最も古き歴史を有する門閥家なれども貞享元祿の交、時の寺院回祿の災に罹り記録其他の徴すべきものあらざれば其詳細を知ること能はず、口碑の傳ふ處に依れば往時應仁文明の頃西を姓とせる豪族地方を領し今の片山に城を任じ其子孫繁殖し部落を形ち造り總て西村と稱するに至れりと言ふ、明治三十九年分村置町當時の戸數(字濱)は百八戸にして内西村を姓とせるもの約九十戸に及べり

而して西村以外の姓を用ゆるものは總て他より移住せるものなり、新市街となりて俄に戸數激増して今日を爲すに至りたるも以前は實に山間の一小部落たりしなり、叙上の如くあるも記録の現存するものあらざれば西村家中何れが宗家あるや本家なるや明かならず、元祿以後年を経ること二百余年、代を重ねること八代以て現主に至れり、全家は代々農を業とし副業として養蠶、漆器製造を爲し居りたるも新市街設置の爲

り耕地の大部分は宅地に變換せられたるを以て分村置町後は農並に副業を廢せり、

氏は明治十年八月十一日現住地に呱呱の聲を擧ぐ、幼にして聰明一を聞て十を知るの天才を有せり、爲に其手腕は年と共に向上して明治三十七年一月倉梯村字濱區長に擧げられ同時に倉梯村農會職員とあり、三十九年七月分村置町の際新舞鶴町書記就職翌年十一月擧げられて同町収入役並に新舞鶴町外四ヶ村高等小學校組合收入役兼書記となり、四十三年十二月新舞鶴町助役に就職大正三年十二月満期再選以來今日に至る、此間明治四十三年二月新舞鶴町農會長、同縣系同業小組長、同畜産組合小組長に擧げられ以來累選今日に至る又同年有限責任新舞鶴信用組合理事に當選以來累選大正五年七月同常務理事となり本年一月同組合長に擧げられ今日に至り、又大正元年九月與保呂川水害豫防組合職員に當選滿期再選今日に至り、尙明治四十三年以來町長欠員の爲り町長代理となりしこと二回、與保呂川水害豫防組合管理者並に屠畜組合管理者代理となりたること一回にして、明治四十五年二月町村事務視察の爲り東京、神奈川、静岡、大阪、兵庫、廣島の各府縣に出張、大正元年六月京都府主催地方改良講演會に出席、大正二年三月實業視察の爲り山陰各縣に出張、同年七月福知山歩兵第二十聯隊見學の爲り入隊、大正四年加佐郡長の嘱托に依り京都地方町村自治の状況及び衛生事務視察の爲出張、大正五年十月教育並に青年團視察の爲り神奈川、東京、長野地方に出張せり、斯くして年々町村自治の見學を爲

し乎腕の向上を圖り新智識の鼓吹に努力せり

氏は温厚着實の君子にして、物静かなれども事に臨めば徐に其意見を發表し正論を以て見地をせる處は云ふべからざる趣味あり、頭腦の明晰と手腕卓絶とは相俟ちて町民の信頼を博す、殊に明治三十九年書記就職以來歴代町長の信任を厚くし六代の町長を補佐して今日に至れるものにて其事務に精通し取扱ひ緻密且つ整理の嚴格なるは稀有の事務家たるなり明治四十四年六月十三日町長藤田孫平氏退職以來同年八月三日まで又益草三吉町長小幡忠藏氏死亡以來同年六月十二日まで町長代理を命ぜられ其職を執掌して遺憾あらしめざりしは其敏腕を立證するに足るものあり、現町長五藤兵司氏の非凡あるは勿論なれども、五藤町長就職當時喧騒を極めたる町政を解決し今日あるに至らしめたる功績は氏も與つて力ありと云ふべし然り過去に於ける経路に徴し今一段の修養を加へんか、新舞鶴町政に於ける柱石として信任を博するに至るべし、終に當り特記せんとするは氏が冷水浴にして明治四十年以來毎日起床後の必行事項として且つ一日も廢したることなしと之れが故にや頗る健康にして未だ曾て醫藥に親みたることなしと云ふ氏は亦讀書と旅行を好み餘暇あれば近郊野外を散策し、雨野其他外出に不便ある時は書齋に於て讀書するを常とせり旅行としては名所舊蹟を尋ね、地方の風光文物を観るものにて毎年美濃の候番中休暇を利用して大和天峯山又は富士登山を爲せり、此外書畫骨董に親み、園芸は荒れなれども嗜好の一あり、尚に多趣味と謂ふべし、年歳尚春秋高し實際の手腕

を發揮するは今後の事に屬するあり、須らく自重以て其大成

を期せ。



大阪黒崎電氣製作所主

水島彦一郎君

大阪市西區三條通一丁目

氏は明治十五年十一月一日加佐郡中筋村字伊佐津に呱呱の聲を擧ぐ、水島家は地方に於ける素封家にして代々農を業とせり、されど系譜の傳ふるものあらざれば其詳細を知る能はざれども數百年前より現地に住したる郷士にして中興の祖は現に同村氏神に祭祀せられ、代々名主庄屋を勤めて人民の名代となり公共の爲に盡瘁して明治維新に及べり厥父又一生を地方公職に捧げて名聲を博せり、氏は幼にして學を好み一を聞て十を知るの天才を有す爲に郷黨呼んで神童と稱せしが果せる哉、其小學校時代より何時も成績優等にして他の模範を以て稱せられたり、高等小學校を卒業するや笈を東都に負ひ早稻田大學大學部政治經濟科に入り明治三十九年全校卒業直に新聞記者となりて東京日日新聞、東京毎日新聞等に職を奉ずること年余にして富士製紙株式會社に轉し大に爲すあらんと日夜奮勵の折柄、偶々明治四十三年嚴父逝去の報に接し歸郷するの止むなきに至れり、爾來自應に在りて父祖の業を繼

ぎ村會議員に擧げられ、郡會議員に擧げられ少壯氣英の敏腕家として將來を自せられたれども、大志ある氏は田舎の農家に永住するを潔よしとせず、爲に大正二年家督は川北正太郎氏に監理を囑托して一切の公職を辭し現住地たる大阪市西區三條通一丁目六番地に轉じ松田製作所に入り會計課長となりたり、然るに東洋の大戦亂は事業界に好響を與へ日に月に發展して恰も停止する處を知らず、機を見るに敏なる氏亦此好機逸すべからずと黒崎電機製作所を經營するに至りたるが、爾來事業は益々進展愈々盛大を見るに至れり、氏は後々たる氣骨を有し性活潑にして頗る奮闘心に富む、奮氣滿滿として權門に媚びず、富者に諛らず飽まで自信の人たり、頭腦明晰にして世事に長せり之れ今日の幸運を贏ち得たる所以たるあり、されど年齒實に壯あり、前途は洋々として遼遠あるものあり決して現在に甘んずるなく、益々奮勵以て大成を期せ。

酒造業

近藤久兵衛君

加佐郡舞鶴町



祖先は名ある勇士にして近江國金堂村に住せしが關ヶ原の戦に敗れて民間に下り、元禄年間現地に住す之れ初代久兵衛氏にして爾來久兵衛を襲名し近藤を姓とす、五代目久兵衛氏は何鹿郡上林村小山の旗本領主藤掛伊織守代官平田仁兵衛の次男にて養子入籍せしものなるが非常なる勤儉家にして奮勵努力大に産を爲したる成功者たりしあり、爾來酒造業を營み年と共に發展して今日の大を成すに至れり、先代久兵衛氏は即ち其八代目にして福知山一井保右衛門氏の二男たり、博識英敏にして周密なる頭腦を有せり又非常なる人望家にして明治二十二年町制實施の際推されて町會議員となり全町助役となり尋て學務委員となり、所得税調査委員となり、郡會議員となり、實業協會幹事となり、評議員となりたる等舞鶴町に於ける名譽職は悉く歴任して將た二三種は常に兼務して全町振興の爲めに盡瘁せり、其事蹟としては別に特筆すべきものあらざれども公共事業の爲には幾多の犠牲を拂ふも厭はずよく世話をあしたり、明治四十四年九月六日逝去せられた



前代久兵衛翁
之死氏九代目久兵衛を襲名せり、之れ即ち現主久兵衛氏あり、三男辰之亮氏は京都の富豪有本嘉兵衛氏の養嗣子となり四男保之亮は大坂商業學

校を卒業して京都に住せり、現主久兵衛氏は明治四十四年先代の逝去に依り年廿五歳にして家督を相続せり、資性温厚篤實先代に譲らず其年直に擧げられて竹屋町終代となり昨年擧げられて町會議員となりた



加佐郡會議員

高田久兵衛君

加佐郡中筋村字京田

等、手腕は漸く衆人の認むる處となりたれども年齒尙少壯にして先輩多きに壓せられ容易に其頭角を現はす能はず、今や漸く岸邊を離れて大海に航せんとせる小舟の如し實に前途は遼遠にして咫尺を辨せず、雨か風か洋々たるあり、されど其奮奮せる學識は今一段の修養を積まんか先輩を凌駕し其後

岸に達する亦難きにあらざるあり、殊に氏は夫人京子との中に三男を擧げ頗る円満なる家庭に在りて父祖の遺産たる酒造業に努み銘酒和歌、仁和の改良に盡瘁し赫々たる名聲を得ず、資産亦隆々たるものありて人の羨む處たり、幸に自重以て其大なるを期せ。

祖先は加佐郡吉田村高田治兵衛氏より出で高田新右衛門を名乗り中筋村由井新兵衛氏の女を娶りて一家を起せり、延寶四丙辰年此高田新右衛門氏より分家して高田久兵衛氏を名乗り農を業とし代々久兵衛を襲名せり連綿相繼ぎて六世庄屋役を勤め七世久兵衛に至り十九ヶ村大庄屋仰付けられ木屐帯刀を許されたり、八世は即ち先代久兵衛氏にして庄屋と勤めしも備々王政維新の爲り廢藩置縣となりたれば全時に庄屋と戸長に改められ引續き公務に盡力せり、明治廿二年町制實施に當りては、村長に擧げられ全時に村會議員となり、自治政たる繁榮ある事務を執掌せり、尙加佐郡徴兵參事員、所得税調査委員、郡農會議員、郡全町村組合會議員等兼務又は歴任し

て一世を公共事業の爲に奮闘し赫々たる名聲を得し、生神の如く村民に崇拜せられしも今や逝きて唯事績の傳ふるあるのみ氏は其長子にして安政四年十二月二十日生、資性温厚の君子にして、人に接する篤實圓満、争を好まず謙讓にして敢て作らや八方美人の才子たり、然して氣品高尚頗る常識に富み、何事にも隔意なく親切を旨とす爲に其名聲は先代に譲らず擧げられて村會議員となり、助役となり、名譽職村長となり再三其職を贈與して村政の爲に貢献せられたる事績は頗る大なるものあり、されど年齒既に還暦たるの故を以て一切の名譽職を辭し閑地に風月花鳥を友とせんと再三辭退せらるも衆望は全く阻退を許さずセメては比較的閑職たる郡會議員だけ

なりと勤績の程望ましかれど村民一致大多數を以て當選し去らしめざれば今は衆望悖し難く現に其職にありて郡政に參與せるが郡會中の最古參にして郡の元老たるなり、氏が村内に於ける徳望は實に斯の如くにして高田家の系譜は氏に依りて亦一段の光彩を放つに至れり、斯かる手腕家の氏にして一子



舞鶴消防組頭

勳七等 木下 仁藏 君

加佐郡舞鶴町字平野屋

木下家は木下若狹の助の裔にて牧野家の客分たり、祖先相繼ぐこと二百有余年代々油を業とせり、氏は明治四年七月十七日生、幼時は却々の腕白者にて人に負けること幾ひにて兎角已れより年上とか力増れる者を相手となし強きを挫き弱きを助けると云ふ風にて一種變りたる氣質を有せり、年十三歳明倫小學校を卒業するや教師の寓所に就て自修せり、明治二十四年徴兵にて大坂歩兵第二十聯隊に入隊したるが現役中二十七八年の役あり、直に從軍して各地に轉戦中兵卒より漸次累進して歩兵軍曹となり、二十八年十二月平和克復凱旋するや戦功に依り勳八等に叙せられ從軍記章を授與せられたり、歸郷後家兄源右衛門氏の逝去に依り氏は木下家を相續するに

至れり然るに明治三十七八年戦役は再び氏を召集し福知山俘虜收容所附となり歩兵曹長として事務に従事したるが平和後收容所の閉鎖せらるゝ迄勤務せり、其功に依り勳七等に叙せられ從軍記章を授與せられたり、爾來専ら公職の爲に盡瘁し町會議員たりしこと二回、平野屋町總代となり、實業協會評議員となり、土木委員となり四十五年舞鶴町消防組の組織に當りて東奔西走其任に當り完成するや組頭に擧げられ現に今も其職に在り、大正元年築港紀念博覽會に當りては審査員を囑托せられたる等成績の見るべきもの多からず、氏は性剛勝にして勇氣を有し氣骨稜々として權門に媚びず富者に諛ふることなく思ふ處は之れを言ひ、決して人を憚ら

ず淺白にしてよく世事に通せり、然して其義侠心に富めるは幼時の徳を存するものにて所積は双葉にして香しとの言に洩れず血あり涙あり、其氣象は實に胸すべきものあり、之れ洩れず頭として多数の消防夫を統率し舞鶴町民保護の大任を全せる所以にして幾度か其任を辞せんとせざるも衆望は之れを許

さす之れ名聲の高きを語るものあり、殊に氏は電氣機械類の發明に興味を有し研究怠らず現に特許出願中の物ありと云へり頭腦の明晰を知るべきあり、今や先輩多く殊に多士濟々たる舞鶴町に於て頭角を顯はし將來を矚目せらるゝの氏、非凡ならずや、須らく自重以て益々其大なるを期せ。



丸八江村長

小谷 甚藏 君

加佐郡丸八江村字丸田

氏は明治四年七月八日現住地に呱呱の聲を擧ぐ、小谷家は地方に於ける素封家にして代々農を業とせり、氏は幼時却々の腕白者にて負ける事難は實に群衆中の一鶴たりしなり、されば其小學校時代の如きも成績常に優等にして麒麟兒とさへ稱せられたるが、果せる哉年と共に其手腕は隆々向上して明治三十五年一月同村第二區長に擧げられ、四十年三月丸八江村勸業主任に就職せり、同年四月村會議員に擧げられ同年六月東雲丸八江兩村學校組合會議員並に丸八江岡田中兩村組合會議員に擧げられたり、翌四十一年七月丸八江村助役に擧げられ、四十四年三月再び第二區長に當選、同年丸八江村信用購買組合理事に擧げられ大正二年四月再び村會議員となり、

同三年一月丸八江村々長に當選爾來今日に至れり、同年二月信用購買組合理事兼組合長に擧げられ現に其職にあり、資性剛直果斷、稜々たる氣骨を有せり、氣品高尚にして明敏ある頭腦を有す、人に接する磊落淡泊よく談じ毫も人を憚らず、手腕亦卓絶にして三ッ兒の心六十迄の譽へに洩れず口八丁、手八丁、如何ある事業も已れの是とせるものは成功せしめざれば止まざるの概あり、眞に直言直行の人にて郷内而村長中の利ものたるあり、同村役場の新築を始め教育に勸業に事業は枚擧するに遑あらず、是れ村民が其敏腕を欽慕せる所以にて、氏亦献身的村政の爲に盡瘁して措かざる所あり、飲めば頭も乱に至らず、浮れ節は最も其得意とせる處にて

何れの宴席にも十八番として其聲を聞かざるはなく園藝亦暗好の一たり、氏尚春秋に富む愈々其特色を發揮し有終濟美の

人となれ。



青年畫家

西垣天民君

加佐郡舞鶴町南田邊

西垣家は代々福知山藩主に仕へ圖書として重く用ひられたり、嚴父堯民氏は明治初年藩學修明館長に任せられ、明治六年修明小學校の設立と共に其校長に轉じ教鞭を執ること十五年明治二十年十二月病の爲に辭任したるが此間既に中ノ町に私塾を設け明治十一年成美費と改稱し中學程度の教育を施せしかる其修明校を辭するや専ら成美費の爲に盡瘁し先年位版を福知山練兵場近くに移したるが、日に月に隆盛を極め今や二男完氏其後を継ぎ費長として百余名の學生を教育せり、氏は其令弟にて堯民氏の三男たり、明治二十年四月二十一日生、幼にして書を好み小學時代より學校開館の展覽會に大欄の畫を出品して好評を博したること屢あり、而して亦氏は劍道を好み十三四歳の頃より嚴父堯民先生の教を受け年と共に上達せり、尙小學卒業後は嚴格なる精神教育を嚴父の膝下を受くること年余、常に寢食を忘れて勉勵せり年十六歳、東

部に留學を欲するも令兄二名既に東京に學べるありて其責を許さず、僅に母堂より旅費を得て漸く東京に發を負ひ、先ず川合玉堂先生の門を叩き教を受くる事となりたれど先生に師事し、傍ら橋本雅邦先生に教書を受け寸暇あれば好める劍を學びて一年半を過せり、時に大に感ずる所ありて京都に移り竹田栖鳳先生の門に入り懇厚なる教訓を受け熱誠奮勵し亦繪畫專門學校の初りて設立するや、新道上に於ける學術の研究必要を感じ入學三年に及び其間劍の愈々必要あるを覺得し、武藝會に入り或は夜間道場に通ひ又は學校、警察署に到りて専ら武術を練勵し劍と畫の一致すべきを主張して止まず、年二十五歳の春繪畫研究上大に憤感する所あり研鑽五ヶ年の豫定を以て印度に渡航し、爾來苦辛酸澀有ゆる艱難と聞ひたる中にも劍を忘れず日本人會に入りては教刀を執り勝か日本現業成上に資益せるありしも、研究二ヶ年にして不幸

ツリヤ熱の習す所となり涙と呑んで中途歸朝を余儀なくするに至りたるは氏が終生の一代恨事たるなり、是れ大正二年にして歸朝暫く但馬城崎温泉に加養し稍全快を得て大阪なる長兄の許にあること年半、其性格の相容れざるに殊に令兄の扱ひ過酷なるに憤慨し兄ですら斯の通りまして他人の頼むべきものにあらす獨立獨歩身の立つるに勝るはなしと茲に初

中筋

勳八等

村長

吉田連太郎君

加佐郡中筋村

吉田家は地方に於ける素封家にして代々農を業とせり、先代九右衛門氏は頗る幸運漢にして奮勵努力勤儉産を爲したる成功者たり、氏は其長子にして業の上よりの坊ちゃん育ちにて幼時は却々の胸白者、近所の子供と喧嘩しては泣かず怪我をさすと云ふ有様にて両親の其斷りに殆ど閉口せられたる程なるが、氣象の勝れたる氏は何に掛けても抜目なく其學校に於ける成績も亦優等を占めて常に他に能を示せり、兎角人に負ける事嫌ひにて、如何ある人物になるかと將來を矚目せらる、甚大なりしあり、されど長ずるに隨ひ手腕の練磨と、人格の修養は相俟ちて年と共に圓滿を加へ擧げられて同村區長となり、村會議員となり、郡會議員とある等名聲は恰も旭日

の有様にて向上し遂には同村助役となり、明治三十七八年職役中は兵事を担当して克く村長と補佐し勳員事務は勿論、出征軍人の慰問、遺家族の救護に至るまで毫も遺憾あらしめず、爲に平和克復の後其の功に依り勳八等に叙せられたるなり、斯かる有様にして其敏腕は村民の齊しく認むる處とあり、明治四十五年擧げられて同村々長となり爾來滿期再選今日に至れるものにて村農會長、團系、畜産の各小組長を始め亦十字社分區委員其他各種團體役員等を兼務し中筋村の盛衰を一身に荷ひ我々として精勵せり、資性温厚態度沈着にして人格崇高、敏密なる頭腦を有す、思慮亦深淵にして一言半句も苟せず最も其責任を重ず、爲に一

の盛業に進退と懸んするなく石橋叩てと云ふ頑強なる風あれども發する一言は千金として重く用ひらる、之れ村民が堅い人間運ひなき人として崇敬し信願せる所以たるあり、真に氏

餘部町長

上野修吉君

加佐郡舞鶴町

誰が何と云ふても加佐郡の親分株、是は是、非は非として本史上に遺すべからざる人物を上野修吉君となす、彼れ餘部町長としては幾多の失敗を演じたりと云はれて一部人士に非難の聲へありとするも一得一失は世人の軌道にして免るべからざるあり、亦敢て意とするに足らず、されど舞鶴町に於ける氏と餘部町に於ける氏とは自から異ならざるべからざるなり、餘部町に於ける氏は入婿たるあり、其妻子たるの心持を何時までも失はざらんには如何で舅姑の心を害すべき殊に小姑多き餘部町一層留意すべき点あり、然るに氏は從來の敬院と成功に概し餘り大吞込みに餘部町を觀視し功を急ぎたるの結果一部に反感を招きたるものからん、町長就職以來の歴史を當らずと雖も亦遠からざらんや、さあからざらんには前半世に於ける氏の経歴未だ少壯にして舞鶴町長となり、郡會議員となり、府會議員となり、最後當選の際には郡會議長の椅子と慕ら得たるなど一時府政界の花形たりしなり、舞鶴町亦町の

先覺者として、將た元老として重きに任じ爲に一切の名譽職を辭し餘部町長に就職すると雖も今尚舞鶴信用組合長とし信願を博せり、今や地方に於ける政黨熱は冷却して昔日の觀あざされども二十年前の政黨は随分入簽敷きものにて加佐郡の多くは政友會(元自由黨)に屬せり、氏は加佐郡に於ける中心人物として政友會の牛耳を執り殆ど意の如くならざるはなく、往年尾崎保氏と府議を争ひ敗北せる外、事々に成功せりされば自ら加佐郡の大人物を以て任じ餘部町何事かあらんと餘りに辣腕を振ひし爲り、何か事あれがしと機を窺へる小姑等が其一失を捕へて兎角の批評を爲せるなりとは雖も、爲に氏の徳を傷くるものからず、須らく自重を要する点にて吾人は思ふなければ怨みもあき氏あり敢て中傷するものに非らず、要は氏が長を以て短を補ひ努めて國事を事とし、三十餘年來赫々たる名聲を一町長の爲に傷くることなく有終濟美を以て上野家の系譜に絶えぬことを望むものあり。



酒造家

正八位 村田彌惣兵衛君

加佐郡新舞鶴町字市場

世の大なる富業、若くは實業家と稱するものを見るに其多くは時勢の變遷に乗じて巨利を獲得し、或は官儲と結び又は政府庇護の下に事業を營み、暇中國家なく社會なく、唯自利に汲々として富を積みたる類ならざるは多く之等を指して世の真正なる實業家又は成功者として謳歌するを得べきや否や勿論世の實業家成功者の總てが斯くの如くと云ふ譯にはあらざるも、國家觀念乃至社會公共の見地よりして事業を創始し働進自力獨行奮闘苦戰と積みて其目的に達したる其の成功者其の實業家は甚だ多からず、此時に當り眞實にもあらず僥倖にもあらず、全く自己の能と智識と自自力闘具さに辛勞を嘗め巨萬の富を作り且つ地方に於ける名望家として讃々たる令名を得したる村田彌惣兵衛氏の如きあるは眞に立志奮中の成功せる人と稱すべきか

國寺侯山陰鎮撫使に從ひしも丹後宮津に於て解散されれば本意なくも京都に引返し爲す事もなく滯在中時の天龍寺管長由屋通水師に見出され客分として同寺に引取られたるは氏が十九歳の時にして、同寺は雲水三百余名を有し聖徳の譽れ高く、福知山出身たる前管長高水龍淵師當時其徒弟にして氏は寢食を共にしたる親しき友たりしなり此間年余なるも日に粥を啜り家中に雖も掃入一枚に夜は草蓆蒲團一枚と云ふ苦行を營めて學に従事し稍其成るに及び偶々現住地たる前代村田彌惣兵衛氏より養子の申込に接したれば元來氏は終生佛門に歸する希望に非ざる爲願を乞ふて歸省せり其別れに臨み何にか終身遵守すべき訓戒もあれば教示に預りたしと伺ひしに通水師は唯「一言天龍寺に居た事を忘れざる様」どのみ給ひしとか斯くて氏は村田家の嗣子なりしが固もなく養父中風症の爲めに遷去せられたるを以て家名を相續し彌惣兵衛と襲名せり當時の村田家は船持業なりしが氏が代となるや市場村の名家にて酒造を業とし三等郵便局(新舞鶴郵便局前身)長たる市場太

右衛門氏が家政衰退の結果同局長と免せられたると同時に其後任に擧げられたるが之れ年三十八歳にして、翌年大右衛門氏が酒造を廢業するに當り氏亦其事業を譲り受け酒造を開始するに至りしが、嘗て氏は幼時天龍寺管長の執調を肝に銘じ賢業を旨とし、出ては郵便事務を掌理し入りては酒造業に熱中す、爾來幾度屋敷樂務日に月に増進し、名聲亦加はり村會議員となり學務委員となり、村の先覺者として重きを爲したるが世の變遷と共に新舞鶴町制の實施せられ軍港所在地となり明治三十五年郵便局亦二等局に昇進して官警ともあり至りしかば氏は職を辭し字市場に於て郵便受取所を經營し導て三等郵便局と改稱せられ其局長たりしも明治四十四年家事都合に依り又も局長を辭せり、在職中の功に依り正八位に叙せられたり、爾來専心酒造業に従事中心なりしが、濡れば鉄くる



氏は安政元年十月十日志樂村字安岡四番戸に呱呱の聲を擧ぐ、同家は村内に於ける舊家にして代々庄屋と勤め資産亦有福にして村民の崇敬せる所なり、嚴父嘉左衛門氏は徳望の人

前志樂村長

森田嘉久治君

加佐郡志樂村字安岡

の夢に洩れず嗣子悦五郎氏と意見合はず爲に親子別居するの已むなきに至りたるのみか、夫人は早世せられ亦他の子女を喪ひ家庭の意に任せざりしは氏が一生の恨事とせし處たりしあり、されど今や愛孫數之亮氏に家督を譲與し氏は其後見として家事を督勵せるに、數之亮氏は目下宮津中學四年生にして、入學以來特待生の榮名を以て現に今も特待生たり、之れ氏が慰安の資にして將來を瞻望し愛孫の成功を見るは曠日する能はざり、既に古稀に達する身を以て尙天龍寺中學中の調成を忘れず汝々として家名の爲に奮闘せり、氏と其意見合致せず爲に別居せりと稱せらる、令息悦五郎氏が今や名聲決して氏に譲らず現に町會議員として花形を以て目せらる、氏亦求めて勞する勿れ、村田家は將來層一層光彩を放つべく信じて憂はざる所なり、君幸に健在以て愛孫の前途を期せ。

十八年田中村外七ヶ村組合會議員となり、其年田中村外七ヶ村用務に任せられ爾來二十二年町村制實施迄勤続同二十二年四月村會議員となり續て學務委員に擧げられ、二十七年倉橋村外三ヶ村組合高等小學校設立に際し組合會議員となり三十二年七月新舞鶴町町委員となり、三十年四月新舞鶴町外四ヶ村組合高等小學校組合會議員並に建築委員となり、組合學務委員とも兼務せり、四十一年組合解散に付て退職、尙明治二十二年町村制實施以來村會議員として村政の爲に盡瘁し再選に再選を重ねて中絶せしことなし、四十一年三月同村助役に擧げられ小學校總務事務を主担し同年十二月同村長に當選大正二年滿期退職したるが此間に於ける氏の事蹟として稱すべきは部落財産統一問題にして同問題は各町村とも至難の問題として躊躇せる所あり、然るに氏は卒先此問題を村會に提出し勵行を期すべく奮闘せしなり、されど村會は時機未だ熟せずとして可決するに至らず氏が深く以て遺憾とせし所あり然るに見よ山本現村長就職するや固も本問題は再び現はるゝに至りたるが爲、容易に決し金剛院所有の山林百

加佐郡酒造業組合

東部支部長 村田太郎左衛門君

加佐郡新舞鶴町字市場

村田家は明治維新當時より酒造業を營み現主太郎左衛門氏一に至り益々業務は擴張せられ酒造業の名は噴々として加は

五十余町歩を購入し造林を計劃するに至り、何等の紛擾なく統一行はれ百年の大計を圖成するに至れり之れ現村長山本氏の功績には相違なからんも、氏が先見の明ありて本問題を主唱し其基礎を造りたりと云ふに至りては亦氏の事蹟の一端と見て誤りあるべし、されば一時村民の反感を招きしも今や本問題も解決して氏が手腕亦旭日に匂ふ山嶽の威をらしむるに至れり、然り其名聲は一層大を爲すに至り大正四年九月町會議員改選に當り村内有志者は候補者に推薦して再選せしめられたれども、氏は村長満期を以て公世運の終りとあし將來願る農耕に趣味を持せる事とて固辭して田でざりき、

氏は資性温厚沈着の體に剛氣を有し云はんと欲する處は之れと云ひ磊落にして人に隔壁を設けず、篤實にして親類ある所に付合易し好紳士たり今や花鳥風月を友とし折には出て農園に耕するを以て老後に於ける唯一の樂とせり、嗣子嘉左久氏木挽技手として村役場に奉職し居る、氏に譲らざるものあり、氏亦多幸と期ふべし

り品評會共進會等に於て受賞せるもの多からせ年と共に發展して今日の隆盛を見るに至れり、殊に氏は實業熱心にして酒造の如きも杜氏を置かず自分自ら其術に當りて倦まざることに既に二十余年間、其手腕は銘酒博愛の好況と相俟ちて日に月に向して新舞鶴實業會長に擧げられ所得税調査委員となり、尙且つ町制實施以來町會議員となり、事務委員となり何れも再選數回を重ねて名譽を博し、明治四十年四月加佐郡酒造業組合東部支部長に擧げられ、同年相續稅務調査委員となり、大字市場區長となりしを之れまた何れも再選を重ねて現に其



西大浦村長

勳八等 和田勝治君

加佐郡西大浦村

和田家は地方に於ける門閥家にして、祖先は今より凡そ六百年以上現居地を遷入道と稱し同地に來り居を構へ中田氏と稱し名を左衛門と稱ししが、中途姓を和田と改め者彦九郎氏は清左衛門と稱せり爾來相傳ること十數代、相傳土地を領して農を専業とせり今より約二百余年前清左衛門の次男同地を分家して和田三右衛門と稱し之れ其家系を築きて代々三右衛門を襲せり、今より數代前の五右衛門氏と海西を連繋し新田を開拓したる功勞者にして夙に農村啓蒙を念とせし徳望

職にあり、氏は温厚篤實の君子にして毫も身邊を飾らざる質朴にして恭謙、人に接する和順克く愛敬の誠を致し深識遠慮にして最も責任を重んじ一時の盛衰に過慮を萌もせず、其數する一言は金剛として成し過げんば止まずと云ふの概あり、意志最も鞏固にして其多くは成功を期す、爲に町民の欽慕する所となり、今日の地位と名譽を獲得したる所以あり、されど夫人の早世等家庭の意に任せざるは氣の毒ありと稱する外あり、然れども年齒尚春秋に當り幸に健在以て公共の爲に貢獻を祈る

家たりしなり。

氏は明治十六年二月四日現住地に呱呱の聲を擧げ同三十一年三月大浦高等小學校卒業以來松尾寺懸瓦和尙に漢學を學び東京早稻田大學政治經濟科講義録を修め、同村役場書記として奉職中日露戰役起り、氏は明治三十七年九月補充召集に應じ歩兵第二十聯隊に入隊、同年十二月征途に上りたる以來各港に轉動、三十八年十一月平和克復に依り召集解除、三十九年四月戰功に依り勳八等瑞寶章並に従軍記章を下賜せられ

たり、三十九年七月西大浦村助役に擧げられ同四十一年一月辭職、同四十五年四月同村々長當選、大正五年四月滿期再選以來今日に至れり尙四十五年四月村長就職と同時に西大浦村農會長、繼糸小組長、畜産小組長及び加佐郡三團體議員に擧げられたるが本年四月三團體評議員に當選爾來現今に至れり

氏は資性温厚にして氣品高尚風彩優雅、態度沈着にして禮節自ら具り思慮周密にして毫も人をして慙厭たらしめ其人に接する篤實にして寛容、對者をして一種の滋味を感せしむ、明治四十五年山崎村長の滿期退職するや後任候補者選定難を訴へ随分入釜敷かりしが此時村會は三十歳に足らざる氏を抜いて其職に就かしめたるなり、從來難治を以て稱せられ殊に勇多き中に立ち巧みに村政を料理して毫も蹉跌あらしめず名聲は忽ち先輩を凌駕して獨大典記念事業の如き、其手腕

を適度に發揮せるの事蹟は村元老の等しく稱讃する所となり今や村民の尊敬を一身に集め將來を矚目せらるゝこと亦甚大なり、氏が嗜好として數ふれば喫煙、圍碁、酒食なれども酔ふて乱に至らず、圍碁亦寢食を忘れず、されど喫煙に至りては最も嗜む所にて嘗て戰役中負傷し後送せられたる際病人の故を以て禁煙せらるゝに同僚煙を吹かすを見て垂涎禁する能はざるを堪へたる程心苦しきはなかりしと云、後傷癒へて再び戦線に復せんとする時途上古支那靴四足を見付け之を二十錢にて支那人に賣却し煙草を購ひ喫したる時の味は一生忘れ得ないものであつたとは酒間中に於ける氏が逸話にして其如何に好めるかを知るべし、君年齒尚春秋高し實際の手腕を發揮するは將來に屬するなり君が名聲と君が手腕を以てせば府議候補者たるの日亦遠きにあらざ、兎に角加佐郡東部の人物として重視せられつゝあり、自重せよ。



酒造家

濱田彦治郎君

加佐郡東大浦村

濱田家は地方に於ける舊家にして代々村役を勤め公共事業

の爲に盡瘁せられたる事蹟紛からず、爲に同村に於ける勢力

家として村民の崇拜措かざる處たりしなり、現主志樂村氏は
文久三年十月颯々の聲を擧ぐ、幼にして伶俐、一と聞て十を
知るを天才を有せり其長ずるや家業たる酒造業に熱中して亦
他を顧みず、改良に改良を加へ銘酒尾の氷を醸出するに至り
たるが風味佳良にして忽ち名聲を博し日に月に發展して今日
の隆盛を見るに至れり、斯くて銘酒の名聲と共に氏の名聲も
亦年と共に加はり擧げられて總代となり、村會議員となり、
地方に起る各種事業の委員となり、郡會議員となり、郡參事
會員となりたる等本郡に於ける各種名譽職に歴任して克く公

其の爲に盡せりされど氏は家業繁忙の爲め全身を捧げて其職
に殉する能はず爲に其手腕も充分發揮の機會を與へざるの憾
あるは惜むべきなり、
氏は資性温厚篤實にして人と争を好まず、勤儉力行にして
最も其責任と重す、されば多言を弄せず若買を以て軌道とせ
り爲に其發せる一言は金鐵として着々成功し亦衆望の歸する
も之れが、爲めあり年齒尙春秋に富む幸に自重自愛以て益々
家運の隆盛を期せ

志樂村の元老

福西八左衛門君

加佐郡志樂村

氏は加佐郡餘部町字長濱の舊家江上甚兵衛氏の三男に生る
江上家は代々大庄屋と勤め村民の崇拜するた所りしあり、氏
は業の上よりの坊稚育ちにて榮耀榮華に人どあり、現住地た
る福西家に迎へられ嗣子となりたるものにて、福西家亦代々
大庄屋と勤め前代の如きは非常なる徳望家にして其一言は
金鐵として上下の信任を博し辭令克く行はれたりされど氏が
代とあるや世は改まりて明治となり、村政亦一大變化を生し
庄屋を廢して戸長役職を設かるゝ等事々物々新ならざるはあ
く、氏は擧げられて田中村外七ヶ村戸長兼學務委員となり村

政を執掌する事多年、二十二年五月町村制實施せられ志樂村
と改稱するや直に同村長となり村政の爲に貢獻したる事績少
からず滿期再選を重ね三十三年四月加佐郡福西系同業組合長と
あるに及び辭任以來斯業の爲に殆ど寢食を忘るゝ許りの熱心
を以て之れが指導の任に當り福西の改良桑園の設置等細密な
る注意を拂ひ郡内各村に巡視して獎勵に努力盡瘁せし事八ヶ
年其事蹟紛々たるものありしも四十年家事都合に依り辭任せ
り此時組合は氏の功勞に關ゆる爲金百五十圓に感謝狀を贈呈
せり、尙此間即ち明治三十三年十二月加佐郡會議員補欠に擧

げられ三十六年十月滿期とあるや朝來村より郡會議員に選出
せられ四十四年十月又も志樂村より選出せられたり、此間村
會議員とあり學務委員とあり絶へず公職に參與して其牛耳を
執り現に村會議員として村政を左右するの勢力を有せり今や
同村に於ける元老として亦多くを望まず、村民の崇敬を一身
に荷ひ家名の維持を以て足れりとせるもの、如し
氏は性剛直不撓一度志したる事は必ず之れを貫徹せしめず
ば止まずと云ふの勇氣を有せり、されど温厚沈着にして思慮
深淵、其一度接すれば寛容として語り毫も城壁を設けず親切
にて發快心に富み、即ち強きを制し弱きを助くるの概あり
て其爲すこと常に竹を割りたるが如き清廉なるを以て放縱な
る現時の村政とは相容れざるの感ありて氏は常に小姑を以て

目せらるれども同村の爲には柱石たるあり、然り斯かる名家
に斯かる敏腕家たる氏にして其長子が十數年來行衛不明にて
今も便りなきは痛恨措かざる所たるを信ずれども次男三郎
氏が春情熱るが如き十九歳の青年を以て大阪に丁稚奉公を爲
し荷車を手にして倦まず悲しまず、將來商業を以て大成を期
すべしと健氣ある活動振は是れが福西家の令息かと思はせさ
るはなし、然り氏は農家にありて一生筆と手にせずと云ふ長
者慕しの舊家の子息たるなり、されど我國實業界の金傑大倉
喜八郎男の愛孫彦一郎氏が大阪北安治川宗像石炭店に丁稚奉
公して彦さんで働いて居るのを思へば令息三郎氏忍ぶる、哉、
氏亦令息の意氣に感ひ多々の望みを囑せるもの、如し、氏聊
か慰するに足らん。

河守町長

勤七等

河田新藏君

加佐郡河守町字金屋

河田氏は地方に於ける舊家にして代々公職を勤め嚴父利兵
衛氏は勤儉産を爲したる人にて町民の等しく尊敬せる所たり
しなり、氏は其長子にして明治十五年一月廿五日生、幼はし
て穎悟強壯將來有爲の少年を以て目せられたり、明治二十八
年三月河守町外五ヶ村組合高等小學校卒業後は暫く農業に従
事したるが三十四年十二月徴兵として舞鶴要塞砲兵大隊に入

隊、翌年十二月上等兵に進級、三十六年七月臺灣澎湖嶋要塞
砲兵大隊に派遣三十八年三月伍長となり同年八月砲兵軍曹に
任せられ十一月舞鶴に歸隊せり此時三十七八年戦役の功に依
り勤七等瑞寶章を下賜せられたり翌三十九年三月退營爾來家
事に従事せり、然るに翌四十年四月河守町収入役に擧げられ
たり、されど家事都合上久しく在職を許さざ爲に四十二年三

月兼任、同年十二月令屋長に擧げられ四十二年四月町會議員に擧げられたる等、名聲は年と共に加はり手腕亦卓越を以て稱せられ、大正二年町會議員満期再選、同年九月河守町長に擧げられたり、爲に同年十月町會議員兼任、大正三年四月在郷軍人會河守町分會副會長當選、同年八月河守町農會會長に擧げられ、大正六年四月加佐郡農會副會長に擧げられ、同年五月加佐郡水産組合評議員に當選爾來今日に至れり、

氏は資性温厚の裡に抜くべからざる氣骨を有す、されど人に接する毫も城壁を設けき磊落克く語り克く談じ人が歌へば歌ふ舞へば舞ふ如何なる交際も避けしこと多く洵に付合ひ易き紳士にして、明晰なる頭腦を有す、議論正確にして清濁併呑の雅量を有し大勢を風靡せしむるものあり、折に口角泡



有路上村の功勞者

平野 忠治 君

加佐郡有路上村字北有路

氏は嘉永二年十二月十三日天田郡上六人部村字岩崎大槻部左衛門氏の三男に生る幼名を徳次郎、別名を廣信と稱す、長して現住所平野忠吾氏の養嗣子となり次女琴子と結婚せり、嗣家は三代前同村平野吉左衛門氏の次男分家せしものにて農

を飛ばして辯論するあれども大勢非ありと見れば毫も之れに執着せず其淡泊なる所は他に見るべからざるの美的なり、よく衆議を容れて可否を決す、之れ先輩多き河守町に於て其手腕を認められ郡内町村長中の若手を以て將來を矚目せらる殊に郡農會副會長の重任に推される、に至れる等其名聲の如何に隆々たるものあるかを知るべきなり、されど年齒尙壯、多くの未來を有せり、過去は成功の軌道にして實際の手腕を發揮するは尙將來に屬せり、今や漸く岸邊を離れて大海に航せんとせる小舟に似たり雨か風か前途は朦朧として辨せざれども、氏が才智と其手腕を以て遠大なる抱負に向ひ進航せんか如何なる怒濤狂瀾も意とするに足らず、其彼岸に達する難きにあらざるなり、其れ自重修養以て倍々其大を期せ。

兼商を業とせり氏は明治七年豐岡縣地券下調掛となり、同八年同村副戸長に擧げられ後て戸長となり、十二年更に同村總代となり學務委員衛生委員等を兼ね、十九年再び戸長に任せられ浦役人を兼す、同二十二年同村自治制の發布せらるゝや

有路上村長に當選以來滿期再選動續十ヶ年間に於て明治三十三年辭任したるが此間よく村政の爲に盡し其本分を全ふせり、元來政治家の目的は狭き意味に云へば立法府の議員なれども廣き意味にて云ふ時は國を改善することは總て政治家の任務なり、然るに人勳もすれば意見誤想に驅られ府會議員、代議士たるに非ざれば政治家として國家を經營する能はざるが如くに思惟し、甚しきに至りては抱負をく才能をく、虛榮の爲に政治家に列せんとするもの甚だ多し、然れども國家の根柢は自治體にあり、自治體にして健全なる發達を爲さんか國家は期せきして興隆なるべく、自治體の制裁盛なれば自ら社會は改善せらるべし往時土佐義民村は某人の徳望に依り自治制敷が行はれ、幕末に至るまで一人の罪人を出さず、偶々明治初年一人の罪人現はれ罰金刑を課せらる、此時裁判官より罰金と納り歸村せよと申渡すや其罪人は村の名譽を傷けて相濟まざれば歸宅する能はずと申立てたりと是を以て見るに自治體の制裁力が社會の改善に及ぼす力の如何に大あるかを知るべきなりされば經世濟民の事業と云ふは必ずしも代議士とあり或は大官たらずとも一町村の首腦者たりとも自治體の長所を發揮することに努めたらんには直に以て世の模範となり、滔々たる洪水大湖の如き風風朽俗を山中の一部落によりて堤防し其威化に依りては日本帝國の元氣を維持することが出来る、果して然らんに其人の功は國務大臣にも譲らざるべきなり、然るに近時政治家の風潮を見るに徒らに空理空論に流れ退いて實行を圖らんとするものあく甚しきは自己の一身

一家とも顧みず、自治體の改善發達とに厥心するものなきは慨嘆の至りあり、然るに氏は郡會議員或は府會議員候補者に幾度推される、も辭して出でや終始一貫村政に盡力して亦能を顧みず、村長の副職とも稱すべき村農會會長を始め徴兵參事員、町村聯合會議員、學校組合會長等を兼任し孜孜として精勵せし自治の發展を圖りたる其事蹟は實に顯著なるものありて他の模範と稱せられたり、爲に明治三十年十月十一日付を以て藍綬褒章を下賜せらる其表彰文左の如し、

資性廉直風に民務に従ひ衆望あり町村制施行以來再選して村長となり能く地方制度の旨を體認し専ら自治の發達を圖り盡力を教育勸業殖産財架橋等の事に致し秩年多年能く其職に稱ひ繼續一方に擧る洵に公同の事務に勤勉し勞効顯著なりとす、依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す、

尙明治三十三年村長を辭任するや同村會は在職中の功勞に酬ゆる爲金側懐中時計に感謝狀を贈呈せり、又三十四年農會會長を辭するや金一封に感謝狀を贈りたるなど其事蹟は實に赫々たるものありて後世の範となすに足れり、

氏は温厚廉直にして人と争を好まず非常の謙讓家にして亦多くを語らず、口の人と云はんより實行の人あり、されば一度發議せしことは毫も違算を見ず成功するを常とせり、村民の崇拜し村政よく行はれて今日の徳望を得たるも又是れが故あり、今や業成り名遂げて閑地に老を養ふ嫡子新藏氏は平野銀行本店支配人として名聲あり、氏多幸と謂ふべし。

加佐郡立蠶業學校

書記 一ノ瀬幾太郎君

加佐郡河西村字公庄



一ノ瀬家は地方屈指の舊家にして代々村役人を勤め重きを爲せり、氏は明治八年四月二十八日現住地に呱呱の聲を擧ぐ、明治十七年小學初等科卒業、二十年六月中等全科卒業、二十二年高等科卒業後間もなく加佐郡立養蠶傳習所に入り同所卒業、三十年二月同村役場書記奉職三十二年四月收入役に擧げられたるも同年十一月辭任再び書記就職三十五年六月家事都合に依り辭任したるが、三十六年十月同村學務委員に擧げられ三十七年四月村會議員に擧げられ同月河西町外五ヶ村組合會議員に擧げられたり、翌三十八年二月同村第三區長に擧げられたる等、新しくして氏の名聲は益々向上して明治四十年六月同村助役に當選するに至れり、爾來其職に孜孜として精勵し手腕の練磨と共に人望愈々加はり、四十一年四月同村農會長となり四十二年四月加佐郡實業三團體議員に當選、大正元年九月同村々長に擧げられ同年十月河西村青年會會長並に河西村農女會會長に擧げられたる等、眞に階級を登るが如く、各種名

譽職を兼任し村の重望を荷ひ村政の進展に努力盡瘁せられたる事績は實に顯著なるものあり、大正五年九月滿期に當り村議再選を強ひたれども偶々郡立蠶業學校より書記奉職の勸誘切なるものあり、殊に氏は村事務に熟識せること前後通じて十八年なるに依り後進者の爲にも處決するが當を得たるものなりとて固辭して出でず斯くて蠶業學校書記に就職し加佐郡事務員を兼任して爾來今日に至れり、村議深く其去るを惜み在職中の功勞に酬ゆる爲め宣徳火鉢二對に感謝狀を贈呈せり之れと同時に同村青年會會長を辭退せし爲め同會は五ヶ組木杯に感謝狀を贈りたるが此間職務勉勵に依り或は退職慰勞として、或は水害事務慰勞として賞與を受けたるもの紛からず、中にも明治四十一年四月には公務熱誠の廉に依り銀瓶一個を受領せるも多くの事務を語るものあり、されど書記奉職以來は一定不動の職務として別に特筆すべき事なしと雖も事務整頓して校長の命令よく行はれ教授上遺憾なきは氏の力大ありと

稱すべきなり、

氏は温厚謹嚴にして人に接する篤實、寛容、謙白にして毫も尊大振らず交際巧みにして飲酒を欲せざれども何れの宴會にも避けしことなく、席に列せば忽ち歌ひよく酒圓を轉旋して興を助くのみならず、今や加佐郡實業三團體議員を勤むる外一切の名譽職を辭退せりと雖も二六時中公共事業の爲には貢獻して惜まず、現に同字の道路は非常なる窪地にて殊に險

惡なりしかば交通頗る不便あるを遺憾とし、幸ひ由良川改修工事の土砂取捨場に窮しあるを聞き其筋に交渉して該土砂を請ひ受け之れが道路地上げを決定したるが如き數へ來れば收舉に違あらず、之れ村民の多とし崇拜措かざる所以たるあり、年齒尚春秋に富む家庭には饒饒たる七十余歳の嚴父あり、夫人との中に二男を擧げ其圓滿あるは他の羨む所たり、幸に自重を祈る。

有路上村元老

平野謙二郎君

加佐郡有路上村字北有路



氏は平野家九世吉左衛門氏の二男にて弘化三年五月十二日生、明治七年二月本家養護の目的を以て隣地に分家す、幼名を季蔵と云ひ後ち謙二郎と改め別名を廣直と稱す、爾來本家の營業たる生糸商に將た酒造業に貢獻し本分一致相共に今日の隆盛を見るに至れり、然り本家先代吉左衛門氏夫人と氏の夫人は姉妹にして本家には數名の子女ありしも分家たる氏に、一子なく爲に本家の次男政藏氏を養ふて嗣子と爲したるが、本家現代吉左衛門氏夫人は亦嗣子政藏氏夫人の實姉あり然るに此度は政藏氏には三男あるも本家には一子なし、爲に

政藏氏は長男憲藏氏を本家に送りて嗣子たらしむるもと本分の間柄は親密にして實に麗はしきものあり、氏は明治十四年十二月北有路村外聯合村戸長に擧げられ十九年三月病の爲め辭任後再び用掛となり同二十二年五月町村制實施の際有路上村助役となり、同三十二年六月村長當選三十六年六月滿期再選せられたるも家事繁忙の爲め同年八月辭任せり、尙明治二十二年六月所得稅調査委員となり爾來滿期毎に再選して大正二年滿期まで勤績す、同二十四年二月加佐郡徵兵參事會員に當選以來卅二年郡制實施迄就職せり、郡

制實施の際加佐郡會議員當選と同時に郡參事會員となり副議長となり、爾來滿期毎に再選して大正四年九月滿期の際後進者の進路を開く爲とて尙候補者に推薦せられたるも辭して出でず、明治十四年戸長に就職以來公務に盡瘁せること實に三十五年間、同村は勿論加佐郡に於ける元老として重きを爲したり、されば此間に於ける事績は枚舉に遑わらず明治三十六年十月同村代表者より多年の功勞に酬ゆる爲め木盃三ツ組、記念時計一個に左の感謝狀を贈りたり、之れ氏が功績を語るものあり、

感謝狀

某等茲ニ本村ヲ代表シ謹シテ感謝ノ意ヲ致ス
貴下明治十四年十二月北有路外壺ヶ村聯合戸長ニ任セラレ同十七年七月更ニ南有路北有路及ヒ三河村聯合戸長ヲ拜命十九年三月病ヲ以テ辭任セララル、モ其德ニルヤ直ニ同役協用掛ニ勤務セラレ二十二年五月村制施行ノ際本村助役ニ當選爾後再三選ニ當リ三十二年六月村長ニ膺選期滿ヲ本年再ヒ推テ今日ニ至ルマデ二十又三年ノ久シキ殆ル虚日ナク本村重要ノ職ニ任ラ能ク地方制度ノ主旨ヲ體認シ自治ノ發達ヲ計圖シ村政ヲ整理セラレシ功績ハ顯著ナリトス、貴下村制ノ初期ヨリ輔佐ノ職ニ在リ専ラ村規ノ制定ニ任シ自治ノ基礎ヲ確メ夙ニ本村ヲシテ村治上ノ模範ヲシメ且本村ノ大工事タル修道架橋ノ企圖又ハ日清ノ戰役洪水ノ災害等臨機ノ處置宜キヲ得モ速誠ナカラシメタルガ如キ參政ノ勞甚ク偉ナリトス
貴下村長ニ就職ナル、ヤ教育行政上最モ至難ナル就學費貴ノ勵行又最重大ナル校舍ノ設備ニ對シ各其處置當テ得就學ハ殆ル百中百ニ達スル住民ノ城ニ進メ校舍ハ一ハ大修繕ナ

加ヘテ完整シ一ツハ全部改築ヲ企テ成工セシメ就學ナク出席ナク孰モ他町村他校ニ比シ優等ナリトシテ校トシテ村トシテ共ニ賞狀ノ下附トナリ加フルニ特殊賞品ノ受領トナリ其他教育會ヨリ賞狀賞品モ他ニ先シテ贈惠セラレタル程ナリキ實ニ本村ノ聲名ヲ高ムル一再ニ止ラレム本村教育史上ノ効績ソレ如シ大ナリ永ク村民ノ頭腦ニ印スベキナリ、貴下内外ニ意ヲ致シ力ヲ盡サレハ朝暮村民ノ忘レシトシテ遺スル、能ハサルモノナリ以上ハ特ニ著キモノナラケレノモニシテ、貴下ガ村民ニ與ヘタル効績堂々レノモニ止マランヤ如斯事々物々遂行整頓皆其當ヲ得タルハ素ヨリ經驗ノ智ニ富ミ法規ノ明カナルヲ致ス所ナルモ抑又終始一日ノ如ク勵精拮据ノ結果ニ因ラズンバアラス村民ノ幸福何モノカ之レニ如クシヤ今ヤ家政上止ミ難キ事情ノ存スルアヲ以テ現職ヲ辭セテ賞状ヲ賜下自愛益健全ニシテ將來ハ可及的公共事業ニ盡力ヲ示シ本村ノ福利ヲ増殖スルノ案ハ借マス指導アラントシテ祈ル某等本村代表シ別紙目録ノ品ヲ贈呈シ聊カ積年ノ功勞ヲ慰メ併テ謝意ヲ表スト云爾
氏資性温厚謹直にして又明晰なる頭腦を有し商機を見ること敏にして、相協の變動極りあき生糸商に従事して毫も違算を招きたることなく殊に自邸に在りて質商を営むあど今日の基礎を造りたる成功者たるあり、嗣子政藏氏は大阪尋常中學校卒業後東京神田專修學校に入り法律英語科を修むること三ヶ年業なりて歸省、間もなく平野銀行河守支店開設支配人として現在に至れるが、名譽氏に譲らず將來を顧みせらるゝもの甚大なり、されば今や氏は一切の公職を辭し閑地において好める和歌俳句遠稿樂冊の編製中なりと、題字の一首は氏贈芝翁の和歌俳句遠稿樂冊の編製中なりと、題字の一首は氏の寄せられたるもの其風流稱すべしあり、幸に聽壽を祈る。



岩室稻荷神社

權大講義 森本太郎太夫君

加佐郡志樂村字吉阪

加佐郡志樂村字吉阪に有名なる岩室稻荷神社と稱するは舊田邊藩政時代藩主の參拜され休息せられたる歴史もあり、又江戸の大角力にて將軍家御上覽の際田邊の小男力士が勝を占めて藩主の面目を施し其化粧禪が此山上に掛り居たりより稻荷の化身ありとし藩主の儲依淺からざりしなどの傳説も残り居れるが、現に地方民尊信の府として松尾寺と併稱せらるゝ氏は其守護者にして最上講と稱する講社を組織せるが今や兩丹若越に誇り數千人の信徒を得て益々向上を示しつゝあり、氏が先代岩見氏の時家道顯る衰へ氏は此家庭に人となりしが幼にして穎悟夙に棟領の器あり、其小學校時代の如き各科優等卒業明治三十二年五月より三十七年迄井上文學博士並に從四位大貫眞浦兩氏に就て國學研究學識大に進み體格亦強健にして明治三十七年には騎兵として徵募せられ日露戰役に參加せり、後歸休兵として歸村爾來出征將軍の慰問に努めて、天佑ある軍人と稱する著書も發行し且つ價貳百餘圓の慰問袋を調達して之れを戰地に贈り尙戰病死者の遺族を訪ひ慰める

など百方救惠の爲に盡瘁せり、亦氏は地方實民を憐み救助米を施與し、有望の青年にして學資に窮するあれば資を與へて上級の學に入校せしむる等義侠に富みり現に福知山中學校に學べる學生もありと云、斯の次第にて専ら陰徳の爲に貢献し神に仕ふるの本分を期せるもの、如くあるが陰徳陽報は益々君が眞價を發揮し徳望次第に加はり、曾ては同村區長に擧げられたるあり、其名聲近郷を風靡し福井縣大飯郡青葉神社外十數社の社掌を兼務するに至れり、氏は教導職として權大講義の榮位にあり、先年戊申詔書の講演にて北陸地方を巡視し明治四十四年七月功勞に依り中村福井縣知事より銀盃一個を下賜せられたり、亦氏は親に仕へて至孝、一昨年嚴父岩見翁逝くや慟哭夜を徹した後岩尾谷の地を下して先考の墓を修し壯嚴なる墓碑を建設して一週年の如き地方官民の多數を招待し盛なる大祭典を執行せり、
氏は性剛膽不抜通取の氣象に富み滿々たる朝氣を有し人に接する磊落淡白にして克く語り克く談ず、其胸襟を披瀝せる

誠實は人をして深く感動せしむるものあり、氏が最も誇りとし且つ永世家門の名譽として肝銘せるは先年桃山御陵の被除式に伏見宮司以下四名と参加奉仕したる一事にて真に森本家の歴史を飾るに足れり、尙氏は先年桂公病氣平癒の爲に東上したるを始とし一昨年初大典の際にも元老の身上安泰を祈るべく三七日祈禱符を携へて東郷、山縣、大山諸公を歴訪せり其後波多野宮相並に入江福密院秘書官等の書信を得て珍蔵せるあり、著書には戊申詔書講義、軍人の精神、神道古典、天祐ある軍人等あり、尙最近に至りては新舞鶴町字濱六條大門角四



大阪電燈株式會社

舞鶴出張所主任

羽賀 治 君

現住「加佐郡倉村」

羽賀家、祖先は羽賀伊部と稱し羽賀谷の城主なりしが天正年間開闢して伊左衛門と稱し又治左衛門と改り爾來引續き農を業として現代に至れり、氏は文久元年八月一日加佐郡倉村村大字行永に生れ、池田彌太夫氏の男たり池田家は世々大庄屋を勤め地方の門閥家として重きを爲したり、氏は幼名を梅二郎と稱せしが羽賀家に入るに及び治と改名せり、號を弘と稱す、明治十三年四月加佐郡第六組役場筆生を命せられ、同

十五年二月加佐郡堂奥村戸長拜命、十七年制度改正に依り加佐郡行永村外十一ヶ村役場用掛を命せられ、二十年十一月加佐郡所得税調査委員に擧げられ、二十二年町村制實施に當り村會議員となり同年六月倉備村收入役當選、二十七年五月同村助役に擧げられ二十八年七月所得税調査委員再選同年四月村會議員再選、三十年六月又も所得税調査委員當選、同年四月加佐郡廳系業組合議員當選、三十一年六月倉備村助

百十二番地四百四坪を數千圓にて購入し其地上に百三十坪の建物を建設し地を稻荷園と稱し建物を稻荷園附屬館と稱し庭園を作り半公園となし、軍人亦是職工の國家に對する勞苦を慰するの娛樂場を提供する事とあし五月二十七日海軍記念日を以て之れが開園を爲したり、是れ氏が心事の如何に高潔にして公共の爲に貢献せるかを知るべきあり、氏は年齒尙三十四歳多くの未來を有せり、其手腕を發揮する亦將來にあり幸に自重を祈る。

役再選、三十二年六月及び三十四年六月所得税調査委員に當選したる等絶へず名譽職を兼任して専ら公務の爲に盡瘁したるが三十五年六月助役滿期に依り退職せり、同年十一月新舞鶴町と海兵團に於ける官民意思の疏通を圖る目的を以て設立したる一我俱樂部の管理者となり傍ら新聞賣捌業を開始し社會公益の爲に貢献したるが、明治四十年五月大阪電燈株式會社が新舞鶴町に支店を創設するに當り入社し、同四十四年七月舞鶴町出張所主任に轉じ爾來同社事業の爲に奮勵して現今に至れり、

て毫も城壁を設けず洒々落落々温情の掬すべきものありて海に付合易き好紳士あり、頭腦明晰にして頗る深慮に富りりされば責任重き電燈會社の主任として就職以來些の墜跌を見ること多く事業は益々進展して盡る所を知らず年と共に隆盛を見るに至れるもの、時勢の要求とは云へ氏の力又妙しとせず今や上下の信頼を博し益々重きを爲すに至れり、殊に氏は義侠心に富み部下を愛して人に厚く己れに薄きは從來の經歷に數して知るべく爲に祖先傳來の産を助か傷けたるの感あれども現在名望は之れを價ふに足れり君幸に自愛を事とし益々同社の爲りに努力せよ。

氏は温厚の中に剛氣と氣骨を有せり、人に接する談口に



株式 河守銀行頭取

勳八等 仲田 徳 太郎 君

加佐郡河守町字金屋

氏は明治四年六月八日現住地に生れ、明治二十一年同村小學校を卒業するや直に授業生就職勸導をすること四年、同二十九年河守町第五ヶ村組合高等小學校收入役兼書記就職せるも同三十七年家事都合に依り就任、同年加佐郡廳系同業組合支部長に擧げられ、翌三十八年一月河守町助役並に同町廳會長に擧げられたるが偶々日露戰役の爲め兵事々務を執筆し遺憾

なきを期せしめたる功に依り明治四十年勳八等に叙せられたり、尙同年京都府知事より農事獎勵の功により賞状及び木杯を下賜せられたり、同四十二年滿期再選此年加佐郡廳系同業組合副組長に擧げられたるも四十四年助役を始め一切の公職を辭せり、然るに其年九月加佐郡會議員に當選と同時に郡參事會員に擧げられ、同年株式會社河守銀行取締役擧げられ

四十五年京都府原種審査員を命ぜられ、同年河守銀行頭取に當選就任以來今日に至れるが大正四年九月郡會議員滿期退職後、専ら實業方面に傾注せしもの、如くに今や地方金融界を左右し政治界に實業界に各方面に重視されつゝあり、大正四年十月同村學務委員となり大正五年十二月株式會社大江水力電氣監査役に擧げられ本年四月町會議員に當選せり、氏は温厚篤實にして非凡ある頭腦を有す、思慮周密にして深識遠慮に富み志堅實にして一舉一動苟もせざれども淡泊にしてよく語り温情の拘すべきものあり、殊に風流を好み少年より謡曲に親しみ時には村内青年を集めて咽喉を叱らせる

南有路郵便局長

動七等 木村半四郎君

加佐郡有路上村字南有路

氏は明治六年六月二十六日現住地に孤々の聲を擧ぐ、幼少を淀太郎と稱し長ずるに及び農商業の監督をまじし金銭貸付肥料石油卸商を營り、斯くてある内村民の囑望に依り明治三十四年四月全村收入役に擧げられ三十六年十月助役に轉任、全時に村議會副會長とあり同業組合小組長並に委員とも兼勤するに至れり、三十七年一月全村會議員に擧げらる、三十九年四月三十七八年戦役の功に依り勳八等に叙せらるる全年

五月加佐郡同業組合評議員當選、全年七月家事都合に依り助役、農會副長、同業組合小組長を辭任したるが、更に四十年五月南有路郵便局長を奉職せり、四十一年三月南有路郵便局長とあるに及び加佐郡同業組合評議員を辭せり、四十一年三月學務委員當選、四十三年四月村會議員滿期再選以來滿期毎に再選して今日に至れり、四十五年三月學務委員當選、大正三年二月加佐郡三團體委員當選、四月京都府

同業組合聯合會創立委員に擧げられ、大正四年三月衆議院議員加佐郡開票立會人に撰任全年四月京都府同業組合聯合會議員に擧げらる、大正五年三月學務委員當選以來今日に至る、本年五月功勞に依り勳七等に昇叙せられたり、氏は温厚着實にして人に接する磊落によく語り隔壁を設けず、其事務に熱心なること類ひ稀れある處にて煙草を喫み難とするの暇あれば仕事を済して歸へると云ふ風にて二六時中空手を置かず、公務に精勵し局務の如きも自ら執務して倦まざ退屈すれば家業たる商に従事して奮闘意らず殊に商機を見

加佐郡會議員

東長太郎君

加佐郡志樂村字鹿原

傳ふる系圖のあらざれば其詳細を知る能はざれども、東家は地方に於ける舊家にして村内多數ある東家中の本家たるなり、代々農を業とし公職に參與して重きをあせり、氏は明治十二年九月四日現在地に産聲を擧げ、長ずるに従ひ聰明を開て十を知るの天才を有し、將來有爲の少年として編目せられたるが、其高等小學校を卒業するや東郡に笈を負ひ學ばんと大志を懷きしも不幸嚴父の病氣に依り意と果さず、年十八歳の時遂に嚴父の早世に遇ひ爲に已むる家業たる農に従事する事とありたるが、爾來孜々精勵し日當實業を旨とし勤儉

よく其業を營み今日の盛大を爲すに至れり、明治三十六年十一月年二十四歳年輪特免を以て區長に推薦せられ、卅七年九月全村書記拜命、三十九年八月全村收入役に當選任期中四十年一月全村助役に擧げられ在職三ヶ年明治四十二年一月家事都合を以て辭任せり、大正二年四月全村會議員となり本年五月滿期再選大正三年二月自ら發起人となり志樂村無責任信用組合を組織し其組合長に推され爾同組合の爲に盡瘁して現に其任にあり、大正四年十月加佐郡會議員となり村政は勿論郡政にも少壯議員として其手腕を發揮するに至れり

氏は温厚の中に覇氣を有し氣骨の稜々たるものあれども人に接する篤實にして肺腑を披き、陰險を常に正義を以て見地となし遠近の氣象に富り、今や尋常の古事

を悉く克く勤儉力行農事の改良に腐心し亦眼中他を以て如く我々として農事に精勵せり其に活動を以て生命とせざるなり年齒實に壯なり幸に自重以て公私其益々其隆盛ならん事と期せ



京都府會議員

岩田正雄君

加佐郷岡田上村字大俣

丹後砥石岳の南麓に連綿たる城山を擁し東方小川の清流に沿ひ開闢ある一掃へ、見るからに由緒ある舊家なるを偲ばしむ、之れ予府會議員岩田正雄氏の本邸にして岩田家遠祖は越後の人、姓は藤原氏、今より二十余代前曾祖なる城山に居城せしもの、即くなるも、此國の系圖なき爲り詳細を知る能はざるは遺憾あり現主より十三代前を岩田藏人と稱し城山城亡の隱居せられたるものにて、蓋を清涼院殿と稱す之れ岩田家の初代にして爾來十三代内一代分家より養子せし外、男血を以て相繼ぎ然かも其れが二週毎の卯辰にして四十九歳を以て隱居するが家憲となりて代々卯辰の男子出生するは奇と稱すべしなり、前代直太郎氏卯辰にて四十九歳を以て隱居し、現主卯辰にて長子義雄氏卯辰なり、然して俗名は元清兵衛を襲名し中興伊左衛門を襲名し現主祖父伊左衛門と稱せしも

明治維新後は襲名を廢止せしなり、此間盛衰はありたれども代々の遺訓として同家は家督襲與の自分一代に産せしものは之れを領主に賦納する例とせり、爲に領主よりも重用ひられ、苗字帶刀は勿論士分格として朝を爲したる家柄あり、殊に特記すべきは岡村に六壯士を稱するものありて毎年一月十五日岩田家に於て此六壯士を招待し甘酒、蕎麥切の馳走を爲すの例あり世運の進展に連れ近時馳走も稍衰を見るに至りしも此二品は堅く保守せり、之れ初代藏人壽長の際共に農に入りたる家臣にて其當時六戸なりしが分家等の理由にて今は十戸とあるなり、是れも岩田家の一家例として現存せり、代々大庄屋を勤め現主祖父伊左衛門翁は殊に英敏聰明の人にて農民を愛撫し上に曲た事あれば須臾も用捨せず強硬ある談判を爲し農村の爲に身を賭して争ひたる事さへあり

岡田莊の義民佐倉宗五郎とさへ稱せられたり、其に氣骨稜々して弱を助け強きを制する仁侠の氣象溢れければ藩士等も途上翁に逢はんか路傍に避け顔と外向けて通すと云ふ有様に如何に翁の勢力が藩士にまで徹底せしかを知るべし、翁は明治維新となるや加佐郷と二分せる第十四第十五大區の兩大區長を兼任し後ち三岡田村の組合役場となるや戸長に擧げられ一生を公職の爲に盡瘁せり、翁隱居後は長子直太郎氏出て戸長となり明治二十二年町制實施の際村長となり、村會議員となり、學務委員となり、郡會議員となり參事會員となり議長となり、森林會議員となり府會議員となる等地方名譽職は残らず歴任して名譽を府下に馳せ隱居は嗜ある詠曲に將た義太夫に咽喉を吃らせ緩々風月を友とせり、

現主正雄氏は伊左衛門翁の五男にて先代に子なく爲に准養子として相續せり、明治二十五年東京日本中學校に入り八ヶ年の程度なるも成績優良試験毎に學級を突破し、僅に四年にて卒業直に京都第三高等學校に入りたるが中途病の爲に歸省と餘義なくするに至れり明治廿二年十二月一年志願兵として近衛師團に入營し滿期歸郷と同時に歩兵少尉に任せられ、三十四年岡田上村在郷軍人分會長に擧げられたり、之れと相前後して岡田三ヶ村を一團とせる金穀爲替組合元締幹事に擧げられたるが、之れ氏が公事に踏出の第一歩にて此爲替組合は却々八益敷ものにて組合員千三百余名を有し、各字總代の目録を以て何百田何千田にても無難書にて取引を爲すものにて岡田三ヶ村内に於ては田畑家屋山林其他總ての賣買此爲替

法に依りて取組を爲し、總代は毎月元締岩田氏邸に於て總勘定を爲し居りたるものにて、現在の銀行業よりも範圍極めて廣く村民の利便多からざりしが或事情の爲に數年前廢止せられたる以來字大俣のみ現に百卅余戸組合を以て此美風を繼續せり、然るに氏は三十七年日露戰役に從軍し各地に轉戰中功に依り歩兵中尉に昇進し勳六等に叙せられたり、平和克復凱旋後即ち明治三十九年再び策を東都に負ひ早稻田大學に學ぶこと三年、歸省するや郡會議員に擧げられ續て副議長となり明治四十三年平野吉左衛門氏の後を襲ひ府會議員となり翌四十四年九月滿期再選と同時に參事會員に擧げられ、大正元年九月岡田々長に擧げられたり、然るに大正四年日獨宣戰の公布と共に身軍籍にあるの故を以て辭任せり、同年九月府會議員滿期再選爾來今日に至れり、

氏は道が名門に人となりたる丈に氣品高尚にして態度沈着禮節自ら具り思慮亦周到にして毫も人として嫌厭たらしめず其人に接するや篤實にして寛容肺腑を披きて陰險をらすされば其一言一句は至誠の結晶にて對者をして一種の温味を感せしむ、是れ加佐郷に於ける屈指の人物として名聲あり且つ郡民の等しく崇拜せる所以たるあり、氏は兄弟姉妹十名にして長男は即ち先代直太郎氏あり二男信氏は京都に住し明治四十年衆議院議員候補者に立ち大多數を以て當選の榮を荷ひしも四十四年病の爲に早世せらる、三男凡平氏は醫を業として福島縣にあり、七男實氏は鐵道院教習建築事務所主任たり其他の子女は或は嫁し或は分家せるも何れも相當の資産を

有し人の羨む家庭の主婦たり、之れ嚴父伊左衛門翁教育に熱心ありしと又一け兄弟十名が殘らず東京親好塾に學び修養されたる賜ものにして岩田家々名は年と共に益々大なるを加へ、嗣子義雄氏目下第四中學校二年生として宮津にあり、然か



加佐郡會議員

南部健次郎君

加佐郡岡田中村

古來醫は仁術と稱し人を救ふを以て天職とあし清貧自ら甘んじ俗界に超然として名利を欲するものあれば大に之れを賤んだものである、隨て宗教家と同じく長袖と稱して社會的尊敬せられたるものなるに晚近激烈なる生存競争は刀圭界をも風靡し今や全く古の美風は其地を拂ひ醫術は一個の營業となり、利を争ふこと商人も曾ならずと云ふ有様とあり、然れども這は獨り醫師のみを責る譯には行かず、患者の方でも昔は單に長袖と稱して尊敬するのみならず、年末年始の賀禮は元より患者の有無に拘らず相當の附け届をあたしたるものあり、然るに今は其れらの事が廢つたのみならず、随分喚逃げ患者も尠からずされば罪は患者の方にもあるべしと、吾人は醫を以て一種の營業人と見做す能はず相當の敬意を拂ふ様に

致したいと思ふけれども哀い俄敬意を拂ふに足るべき人物が甚だ少い加佐郡の如き指を屈すれば僅に數氏に過ぎず中に超然として高潔なる志操を持ち品位の高尙にして長袖者流の佛を存する南部健次郎氏の如き人物を見る誠に喜ばしきの至りなり
氏の家は地方に於ける名家にして代々醫を業とし、近時百姓の伴が百姓嫌ひの處より醫師は高尙にして藥九層倍と云ふ這座ホロイ營業はあいの虚榮心を根底に開業せるのとは全く其趣きを異にし其應接は何となく寛容として床かしきものあり、殊に氏は高等小學校卒業後直に岡山中學に入り續て岡山醫學校に入り業成りて歸省、現地に父祖の業を繼承したるものにて府縣立醫專中好評噴々たる岡山醫專と卒業したる

手腕は亦推知すべきなり、爲に近時新規開業醫の多き中に卓越して朝を爲し今日の隆盛を見る洵に故あるに非ざるなり
氏は温厚篤實、氣品高尚にして誠に善氣の多い善長なる好紳士にて、追従三昧で以て患者を吸引する體なこともなきは勿論、殷富貴賤に依て是加減を分つ體なることもなく、醫は仁術たる祖先の遺訓を固守して今も美風の鼓吹に汲々たるものあり、されば其德望村内に溢れ村醫に推され學校醫となりたるのみか、多士濟々たる中に殊に醫務多忙なる中に氏を推し

て村會會員となし、郡會議員とあす等強て其任に當らしむ之れ氏が徳を慕ひ氏に依りて村民其堵に安んせんとするものあり、將又義侠に當りる氏は其身の繁敷なるにも拘らず、努めて其任に當り村政に善政に貢獻して態ます異に刃主家中の一異彩たるなり、且つ氏は人に接する磊落にして隔壁を設けず飲りば眼ふを定りの義太夫が出る社交巧みにして愛すべきものあり、氏年齒實に春秋高し政界に於ける手腕を發揮するは尙將來の事に屬す、幸に自重以て大成を期せ。



加佐郡會議員

由里清左衛門君

加佐郡河守町字爾

由里家祖先は元河守町字仲町に住人、古來より油屋商業の所、正徳二年字爾に別家を爲し酒、醬油營業を開始し、本年迄二百有余年續其國風ありしも氏は其九代目にして嚴父清左衛門氏和氏は第十四代區長、府會議員を歴任し明治二十八年病の爲に逝去せらる、是れより弟清左衛門氏火災に罹り家産財産の全部爲有に焼し非ざる悲境に陥りしも堅忍不抜能く艱難を排し、殷實進去後専ら家業と勤め今日に至る、世

譽名清左衛門氏は篤忠、明治元年一月十四日生、明治十四年普通小學校上等下等全科卒業、明治十五年旅を京都に負ひ林雙橋邊に漢學を修り歸省するや十七年聯合戸長役補修生となり、明治二十二年町制實施の際河守町收入役に擧げらる、同二十四年河守町會議員となり、同二十八年加佐郡全町村聯合會議員當選、明治三十年株式會社河守銀行振替會議員、同三十二年河守町長に擧げられ、明治四十年衆議院議員選舉京師

府選奉命深泉立命人を命せられ同四十一年學務委員となり、大正二年無錫稅務署管内營業稅審査委員を命せられ、大正四年加佐郡會議員當選、同月加佐郡參事會議員に擧げられ、大正五年二月河守町郵便局長心得を命せられ、同年七月退職せり、併明公其事業に盡力し亦は寄附義捐等にて實業及び斷狀を受けたるもの數十回に及びたり。

氏は天資剛健敏捷事を處する熱心にして勇氣あり、而かも職を見ること速あり、且つ河守町の名門にして衆望一に集る明治三十二年選ばれて町長となるや、勤勵精銳意町政に盡瘁す、町治頓に擧り人望益々高まる、明治三十六年四月任滿ち再び擧げられ三たび推されて就任せり然れども家事の故を以て斷然其職を辭せられしも其職に在ること前後八年半始終不遑多一日の如く私事を忘れて公務に盡し、百事改良進歩を謀り殊に各體の建築に偉大の心力を傾注せり、實に堅忍不拔の精神と非常の敏腕に非ざれば能はざるあり、先ず其事業の大なるものを列擧すれば小學校令改正せらる、や親憲校舎の新築に熱中し校地を現地の所に卜し紛擾を拂して之を買収し且つ一時に多大の財を費すは民力の困窮を生ぜざらんことを懇へ教育資金を借入れ以て負担を軽減し遂に校舎を新築して普通教育の基礎を固め、尋常小學校に高等科を併置して夙に六學年の準備をなし女禮講習會を開き子女に禮節の一般を知らしめ、殖産の發達は實業教育機關の有無に關すること大なるを洞察して郡立實業學校の設立に奔走して其目的を遂行し町役場を新築して自治の礎を立て、遊樂會を建築して傳染

病に備へ俄國膺懲の師起るや意を軍國に致し國債募入に家族を救護し晝夜を忘れて盡瘁し、河守警察分署新築に當りては敷地獻納に努力し、福知山區裁判所河守出張所建築に際しては特に敷地買収に力を盡し、上野金剛兩字入命山の件にて紛擾を來たし多年結んで解けざりしを融和し、赤十字社郡總會を舞臺にのみ開催し來りしを河守町に分會を開設するの基を創め中央榮耀を打破し、戰病死軍人忠魂碑を建設して忠勇の士の英靈を慰むる等、洵に効績偉且つ大ありと謂ふべし、依て町會の決議により金百五十圓並に衡立に感謝狀を贈りたり、尙在職中福知山區裁判所新築並に敷地獻納に付き盡力の廉により河守町外四ヶ町代表者より感謝狀並に被服料を贈り、且又町行政に關し功勞偉大の廉に依り特に町長の資格を以て優遇を爲すことを町會の決議に依り表彰せられ、明治廿九年賞勳局よりは日露戰役の功に依り勳七等青色桐葉章及金五十圓を下賜せられたるお事蹟は赫々として由里家の系圖を飾るもの多し、今や銘酒百合正宗の醸造に熱中し勞働者伍して譲らず、醬油製造の年と共に多きものありて近時由里家の隆盛謳歌すべきなり、氏は叙上の如く活動と生命とせる繁忙の身なれども、欲めば頃ひ忽ち伊の國を演ずる處遊戯なるなかに無邪氣にして温情の抱すべきものあり、之れ今日の名望と地位を得、將亦手腕を遺憾なく發揮するに至りたるの所以たるあり、年餘五十歳政事界にも實業界にも氏の手腕と要求するもの多々あり、幸に自重以て其要求に吝からざらんことを。



河守郵便局長

仲田新太郎君

加佐郡河守町字金屋

仲田家は地方に於ける門閥家にして代々農を業とし太郎左衛門を襲名して公職に參與せり元庄屋の稱ある亦之れが爲りなり、現主太郎左衛門氏は少年にして嚴父の早世に遇ひ爾來自ら家政を司り、勤儉産を成したる苦勞人にして血あり涙ある熱血家にして克く他人の世話をなせり、爲に町民の崇拜せる所となり明治廿二年町制實施せらる、や擧げられて河守町助役となり同時に町會議員となりし以來滿期毎に再選して本年四月迄勤續せり、本年滿期の際尙衆望は再選を希望したれども既に古稀に達する身を以て尙後進者の進路を壓するは本意にあらずとて固辭して出で今や閑地に就き花鳥風月を友とし好める淨瑠璃に得意の辯を振ひ老後の慰安とせり、氏は其長子にして明治十四年五月二十日現住地に風々の聲を聳く其高等小學校を卒業するや關もなく即ち明治三十二年十一月河守町書記を命せられたるが三十六年四月家事都合に依り辭職、同三十八年一月河守町外五ヶ村組合高等小學校收入役兼書記に就職四十一年三月組合解散に上り解職となり、四十

三年三月河守町農會長、加佐郡同業組合河守小組長、同郡産牛組合河守町小組長に擧げられ河守町の盛衰を双肩に擔ふ晴れ舞臺に活躍するの大責任者となりたれ共翌四十四年十月加佐郡立實業學校書記に適任者物色中、氏其選に當り強て就職を促されたる爲め、折角其任に就きたれども其手腕を發揮するの機會に到達せざして實業學校書記に轉じたるは町民の等しく遺憾とする處たりしあり、大正五年四月加佐郡事務員並に加佐郡出納吏を命せられ就職中、大正五年七月河守郵便局長を命せられたり、されば從來の公職を辭し専心同務を執掌するに至りたるが本年四月河守町の中央に地を卜し宏大なる廳舎を新築し同町に異彩を放ちたるのみか人民の利便勝からず、同務亦向上の見るべきものあり、氏實性温厚着實、一見舊知の如く毫も隔壁を設けず諄々として語る然かも磊落と氣取らず寛容として一種の温味を感せしむる所當世得難き才子肌の紳士たり、されど年齒實に少壯前途は遼遠なるものありて、實際の手腕を發揮し國家の爲に

貢献するは將來の事に屬するなり、氏が才腦と其敏腕は他日必ず町政の要求する機あるを信じて疑はざるあり、町民亦氏

に觸目するもの甚大なり、幸に自重修養以て衆人の期待に背く勿れ。



加佐郡會議員

荒木 義美 君

加佐郡有路上村字南有路

荒木家、祖先は武臣たりしこと系圖に依りて明からあり、世々大庄屋を勤め威を近郷に振ひたる豪家たりしも時勢の變遷と共に不運打撲り産を失する事からざりしも、幸に中流以上を保持し亦り家名は燦として現在に至れり、氏は明治三年九月十一日現在地に生れ同村小學校を卒業せし外、他に何等見るべき學歴を有せざれども天與の才腕は忽ち衆人の認むる所となり、明治二十二年町村制實施の際舉げられて同村書記となり大に手腕を練磨したるが數年にして家事都合上辭任せり、されど村民の嚮望年と共に篤きものありて明治三十四年四月村會議員に舉げられ、翌三十五年三月南有路區長に舉げられたる等名聲は愈々大なるものありて三十九年三月區長満期再選、同年七月有路上村助役となり、四十一年四月同村々長に舉げられ四十五年四月満期再選したるも年余にして辭任せり、是れ氏の嚴父が二十余年間中風室の爲に床にありて

今尙治せき、されば孝心厚き氏は身公務の爲に其孝ならざらんことを憂慮せる爲にて、今や村長となり一期余幸ひ其責任を全ふし得て國家の義務も果したるを老先通れる父に對し満足ある孝養を盡さるべからずとの麗はしき心より辭任せられたるなり、村民何れも在職中の功績を稱揚し四十五年四月満期の際辭任したるも強て再選したるものにて二度目の辭任は已むべきこと、之れを承認したれども其衆望は氏が身邊を離れず大正四年九月更に加佐郡會議員に推薦せられたるなり、氏は資性温厚の裡に剛氣を有す、態度沈着にして余り多くを語らざれども其欲する所は之を云ひ正確なる議論を以て衆を肯首せしむるものあり、されば其行動常に石橋を叩て渡ると云ふ有様あれば一旦發案せしことに失敗を招くこと多く實に實踐窮行の人として村民の信頼する所たり、年齒尙春秋に富む希くば萬難を排して益々國家の爲に貢献を祈る。



東大浦村の功勞者

水島 義信 君

加佐郡東大浦村字成生

水島家は地方に於ける最も古き舊家にして、現主小兵衛氏にて二十四代を繼承し地方の有力者として社會の尊敬を受け來りしが、殊に義信翁は資性剛直にして漢書、諸禮式、生花、謡曲等高尚なる趣味に富み身を持する謹嚴にして常食を慎み運動を怠らず七十歳の老体尙健傑として壯者を凌ぐの概あり、而して理財に長じ能く産を整へ家を興す、地方の荒廢せしを啓發し殊に水産業熱心にして漁具の改良技術の進歩を圖り當業者を指導し誘掖せる其功徳實に顯著なり、近時好評を博せる落網網の發明及び現在成生漁業組合の擴大を實現せしめたる等全く翁の力に據るものあり、翁が公的勢力の第一歩は明治七年土地地券改正に際し名譽職として土地丈量整理に専心從事せり、同十二年村總代となり爾來四十年間同村地方山林評議員神社總代を兼職せしも十五年本及兼職辭任せり、然るに十八年再び村總代に舉げられ、明治二十二年町村制實施に當り村會議員當選爾來滿期再選三回、同二十三年同村助役に舉げられ二十七年滿期再選

二十五年八月加佐郡東部四ヶ村關係道路開鑿工事組合議員となり、廿七年東大浦二ヶ村組合高等小學校組合議員となり町村制實施以來區長及代理者等轉々勤続殆ど名譽職たらざるはなかりき、明治三十五年九年漁業法發布と同時に成生漁業組合を創設し同組合理事長として四十一年迄勤続したるが此間最も翁が技量を發揮したるは成生沿岸の漁場既得權の確定、整理、組合の基礎を強固たらしめたる事績にて其熱心に盡せる殊功は特筆大書するの價値あり亦翁は敬神の念篤く明治十四年神社法發布以來氏子總代たりし事八ヶ年に及び此間神社の整理修築等翁の手に成らざるはなく現在村社職生神社が郡内屈指の名社と稱せらる風致の優雅社殿壯麗の完備は翁が君實熱心の賜ものなり、されば同村の功勞者として大正三年一月表彰状と交付せられたり、尙此間自分發明に成る改良柔魚捕網或は巾着網掛圖、落網附柔魚網模形及設計書を水産品評會に出品すること三回、優等又は一等賞を受領して其聲譽を博せり

翁は明治四十二年六十一歳の還暦を以て一切の公職を辭し、家督を長子小兵衛氏に譲り隠居したるが以來篤々書畫並致を弄て風月を友とせり、嗚呼氏が四十年間公共的事業の爲に献



河西村長

勝井善助君

加佐郡河西村

勝井家は地方に於ける素封家にして家號を愛宕山と稱し代々庄屋を勤めたる舊家にて善助と號名せり、氏は明治七年十月天田郡金山村字長尾端野家に呱呱の聲を擧ぐ年十六歳出で勝井家養子とある實家端野家又地方に於ける舊家にして、代々庄屋を勤め公職に重きを爲せり、現主喜團太氏天田郡會議員勝井善助君其他各種名譽職を勤め今や天田郡に於ける元老として重んぜらる、之れ氏の長兄にして前代喜右衛門氏の長男なり、二男は室寺實高師は加佐郡野島町四座寺住職たり、三男は即氏にて四男は植村正治氏は天田郡鹿我村字油部門前家植村家を繼承保信館藏業講習所圖書製造所と福知山内記町に設置し圖書製造と兼とし植村家として名譽あり、五男糸井龍太氏は天田郡雲原郵便局長たり六男端野合三氏は京都府立醫學校を卒業し後府立病院醫學專門教授たりしが爵して目下

身約努力せる功績は赫々として擢業界に輝き水世没すべからざるものあり、實に氏の如きは當世人士の好模範者と稱すべしなり。

京都市車屋町に開業し長女八重子は金山村の豪農瀬川家に嫁し何れも子女を擧げ男女七人の兄弟が何れ劣らぬ富家を以て然かも頗る壯健にて悉く權要の地位を占り社會に貢獻して其名聲赫々たるものあるは地方稀有の事と稱すべきなり、氏は明治三十一年十月河西村収入役とあり、同三十三年事務委員に擧げられ爾來滿期再選せらる、こと五回にて現職にあり三十四年四月村會議員とあり滿期再選を重ぬること三回、同村區長となりしこと數回、明治三十六年九月村會議員となり四十年九月再選、四十一年河西村長に擧げられ四十五年滿期退職したるが大正五年九月再び擧げられて村長となり今日に至り、此間村治の爲に貢獻せる事績は實に顯著なるものにて枚擧するに遑あらず、學校の改築を爲し内外の設備を完成せしめたるを始とし部落有財産の統一を圖り、本春以來

は不俟會なるものを組織し一戸金三十錢以上の月掛郵便貯金をあらしむべく貯金を奨励せる等、身を挺して村政に盡瘁し農村の改善に努力せる功果は遺憾なく發揮せられつゝあり、氏は温厚にして正直、沈着にして度量あり、人に接する爲落にして付合易し好紳士たり、而かも其平民的にして上下の階て多く殊に下民に對しては一層親切にして如何なる多忙の際と雖も問ふあれと詳々と教へて五月蠲しとせず、眞に慈母の赤子に於けるが如く、緘密にして諷らず、何事にも人の意

志

樂村長

山本源一君

加佐郡志樂村



山本家は地方に於ける舊家にして農を業とし代々庄屋を勤めて重きを爲し村民の尊敬せる所たり、氏幼にして穎悟伶俐にして將來有爲の少年を以て目せられしが果せる歳、長ずるに従ひ才智縦横に溢れ、村會議員となり、事務委員となり、同村助役となりたる等各種名譽職を勤め村政の爲に孜孜として精勵したる事績は衆人の認むる所となり、大正三年一月擧げられて村長となり全村の盛衰を双肩に荷ふに至り、由來同村は多士濟々云ふには非ざれども中流の人物が奮を争

ひ恰も團栗の丈くらべと云ふ有様に村治の困難あること那中其比を見ざるなり、されば氏は助役として十數年の久しき克く村長を補佐し村政を統治したるの經驗あるを以て其敏腕に衆望一致し村長の職に就かしめたる次第あるが、就職以來衆望の期待に背かず教育に勲業に時勢の進退を伍して遠慮なく部落有財産の統一造林計劃等々成功して愈々衆望を滿むるに至り、

氏は温厚の中に覇氣を有し、人に接する篤實にして謙讓、

敵を求めず、磊落にして克く語り遠慮的氣象に富む殊に仁俠に長じ克く他人の世話を爲せり、爲に新事業を起して失敗せし歴史もあり、人の世話をなして身に禍を蒙りたる歴史もあり一朝一夕に語る能はざれども、之れら失敗の歴史は氏が今日の名聲を博するに至れるの因と見て可なるべく、古人云ふ失敗は成功の母にして大なる成功をなさんどせば先大なる失

加佐郡 會議員

橋垣 荒太郎 君

加佐郡岡田上村字桑向

同家は代々農を業とし年寄役又は庄屋を勤めたる名家にて橋垣家の徳本家たり、前代長四郎氏亦庄屋となり總代となり、町村制實施の際に推れて助役となり、村會議員となる等一生を公共の爲に盡瘁せられたる名望家たりしあり、氏は其長子にて明治五年一月生、小學校を卒業するや同村役場書記となり明治廿四年四月村會議員となりたる以來滿期毎に再選せられ現に其職にあり、三十六年五月學務委員となり、滿期再選今日に至る三十八年三月同村助役に擧げられ四十一年五月同村長就職に依り助役辭任、四十五年六月村長滿期退職したるが、大正四年九月擧げられて郡會議員となり、

氏は敵陣に突進して人稱れば人を斬り、馬觸れば馬を斬るの勇將軍にはあらざれども、責任剛毅にして細密なる頭腦とは今彼の事に屬するなり、幸に自重奮闘を祈る。

敗の經歷を嘗みざるべからざり、然り氏は失敗に由て意志の鞏固を加へ志操亦健實を加へたり、殊に氏は農事熱心にて米穀の改良は勿論植物昆虫の研究に最も深く趣味を有し餘暇あれば田圃に出で努めて倦まず、農村に於ける主宰者として眞に得易からざる人物たるあり、幸に健在を祈る

有し其態度沈着にして深慮遠慮に富む、然して多少の義氣を備へたるは陣中の將として適材と謂すべきなり、由來三岡田村の地多士紳々たり、中に氏亦一頭角を顯はす、其手腕の敏なるを證するに足る、殊に氏は頗る腹業熱心家にて自ら大業を以て範と示し他を勸誘奨励せる爲り近時同地方の養蠶は著しく發達して年と共に旺盛を見るに至る、之れ氏が事蹟の一端にして、今や其徳を多とするに至れり、尙氏が居所桑向上は理屈家多くして統一行はれず、事故頗々として裁判沙汰の絶へ間あらざれば統治の部落として嫌に來る人さへなしと噂さる、にも拘らず、氏が出て米配を振れば二言なく何事も解決するを常とせり之れ氏が徳望の致す所にて其名聲亦曠々たるものあり、されど年齒尙春秋高く實際の手腕を發揮する



舞鶴町 會議員

辯護士 柴田 清吾 君

加佐郡舞鶴町字寺内

氏は明治十年十一月五日加佐郡四所村字上福井五十六番戸に呱呱の聲を擧ぐ、柴田家は地方に於ける舊家にして一族十數の多きに及び何れも農を業とせり、氏は幼にして伶俐博識強記にして其小學校を卒業するや草深き田舎に農を業よしとせず、大志を懷きて笈を京都に負ひ法政大學に學ぶこと多年明治三十八年七月成績優等にて卒業したるも尙研鑽の爲め引續き同大學研究部に在學すること一年半、明治四十年十二月判事檢事登用第一回試験に及第し其月司法官試験に任せられ同時に福井地方裁判所詰を命ぜられたるが、翌四十一年八月同裁判所檢事代理を命ぜられ、四十二年七月判事檢事登用第二回試験に及第し、同年八月判事に任せられ松山地方裁判所西支部詰を命ぜられたり、同四十四年一月同支部檢事判事となり大正二年二月岡山地方裁判所判事に轉じたるも同年十一月辭して歸省し理佳地を下し辯護士を開業以來今日に至れるに至りて大正四年八月京都地方裁判所管内破産管財人

を命ぜられたり、爾來名聲大に加はり本春町長慰勞金問題より町政波瀾を生じ町會議員の過半数辭任を見るに至り時態容易あらざるの時、氏は町政革新派として候補者に立ち多數の投票を得て町會議員となりたる勢力家たるなり、氏は頗る好男子にして殊に資性温厚なれども満々たる勇氣を有す、人に接する磊落豪泊にして一見無知之如く克く談じ克く語り毫も尊大振らず如何なる多忙の折柄とても來訪者あれば手を止め町事を盡して其問ふ所を答へ諄々と教へてやまき其隔意なき親切には何人も満足を表し且つ信頼の念を深からしめざるはなし、且亦頭腦明敏にして判断力に富み其是とせる事件は百發百中未だ曾て蹉跌を招き失敗に終りたるものなく成功を期せり、之れ同業者多き現時に於て先輩を凌駕し門戸常に隆盛、曠々たる好評を博す所以にて、今や辯護士として覇を爲すに至れるのみか町會亦氏が手腕に俟つもの多し、氏幸に年齒尙壯前途遼遠なるあり、決して現在に甘んぜず、

自寛書問答々其大を稱せ。



瑞光寺住職

楠 靈 瑞 師

加佐郡舞鶴町

瑞光寺開祖は楠正成の弟二男正儀の玄孫正重の第五男源吾にして楠家は入皇第卅一代敏達天皇第一の難波皇子天位と號まず別に一家を興す其孫は葛城王子あり、其後裔を楠正成とす、源吾は田邊城主細川藤孝(幽齋)公の子息與十郎忠興公の武衛指圖役として共に舞鶴に入城せり、其後公の末女於佐知の方を賜ひて妻となし同時に本願寺願上人の弟子となり、剃髮して明誓と稱す、天正十一年幽齋公瑞光寺を創立して不動如山と稱し之れに住持たらしめ寺號として寺内町百有余家と一万三千八百を割て法扉に附し特に細川氏九曜の故を以てす且つ伯父源吾の契盟を賜ふ、又願上人よりは一圓一宗一寺の位階を授く其古文書並に代々願王の黒印及び楠正成の書手三万八千餘の右旗又は楠本系圖、縁起書等は總て歴然として同寺に保存せられ爾來子々孫々繼續して現住に至れり師は慶應二年十月二十二日夏前國下毛郡駒居村黒川家に臨々の座を奉り、幼にして頭陀一を聞て十を知るの天才を有し

幼名と號と稱す明治十二年高等小學校卒業後中津町白石並に藤澤翁の私塾に於て四ヶ年開漢籍並に英學を修め、同十七年乘桂校に入り東陽、井上、恒藤諸師に就き宗余乘漢學を修すること約七年間、同二十三年九月京都本願寺佛敎大學に入り二十四年學階得業を授かり、二十六年助教拜命同年冬大學卒業二十七年教師に補せられ四等巡教使並に監獄敎諭師と命せらる、同年本願寺法主光尊親下の直命に依り瑞光寺住職となり續て香川縣讚岐の佛敎中學(白蓮敎校)の教授兼九龍軍隊布教使となり出張中、二十九年九月舞鶴大洪水々宮の爲り止むべく辭して歸山し寺門整理に従事せり、明治三十年福知山工兵隊設置に付き再び軍隊布教の任に當り、次で舞鶴要港及び舞鶴海軍々隊布教兼開教担任申付けられ在勤十ヶ年に及べり、就中明治三十三年加佐郡に未だ忠魂碑の設立なきを遺憾となし桂林寺住職楠本祖龍師と計り郡内寺院の贊成を得て神明山上に建碑を企て既に之れが工事中加佐郡尙武會の請に依

り同會に譲與するに至りたれども爾來招魂祭典には師と桂林寺住職と隔當にて導師を勤むるを條例とせり、亦師は其年余郡町に眞宗説敎所を自營し専ら布教の爲に盡瘁し、且つ海軍鎮守府開闢に際しては祝意を表する爲め數百圓の費を故し西門より山上三百圓に亘り道路兩側に百臺の高旗を樹て無数の國旗を連ねたる其光景は見るもの感ぜざるはあかりき、亦四十年都立高等女學校創設に際しては寄宿舎の設けあきを遺憾とし同寺境内に寄宿舎用の建物をなし提供して同校の便利を與へ且亦公園内に古今傳授の建碑發起者の一人となり、尙大正元年各寺院と協議して佛敎團を組織し専ら免因保護事業に盡力せしが其後佛敎會と改稱し現に其會長たり、

師は天資仁厚にして頗る卓識あり、且つ意志勇敢にして其高壇に上りて法を説くや、言議肅然として一絲乱れず聽者自然に恭と正すと知らず、然かも其住境に入るや威憤無慮歡雅辨風を生じ瑞氣堂に溢るの概わらしむ、是れ師の聖徳の致す所にて郡内各宗寺院が其手腕を欽慕し會長として崇敬せる其に之れが故たるあり、師内に在りては克く廢退せる同寺を挽回して其維持を鞏固たらしめ壇家より中興と仰がるに至り外に在りては精神修養講話を以て軍隊と民間を問はず社會各方面の改善に努力して倦まず、郡内各寺院の牛耳を執て重きを爲す、方今宗敎界の墮落甚しき此時に當り師の如き博識多才の名僧を見る海に加佐郡宗敎界の爲めに慶すべきなり



加佐郡の長者

質 商 土 井 市 兵 衛 君

加佐郡舞鶴町

昨年十一月東京、大阪兩時事新報社が合共調査に成る全國五拾万圓以上の資産家表に掲載せるを見るに丹後では土井市兵衛氏と峯山の吉村伊助氏の兩氏あるのみ以て土井家が如何に有福あるを知るべし土井家祖先は高嶺領主遠見駿河守家臣土井澤安氏にて同氏は主君廢落の際遷れて同郡四所村に來り

歸農す之れ天正年間あり、爾來農を業とし子孫繁榮して土井一族二十余戸の多きに達し澤安氏の墓所現に同地に存せり土井市兵衛氏現主より七代前舞鶴に分家し金貨業を營み市兵衛を號石せり、爾來代々繁榮ある相續者相次ぎ恰も旭日の勢を以て向上し資産の大なるに隨ひ名聲亦加はり、今より三代前

市兵衛氏は非常な
人望家にして明
治維新以來各種名
譽職を勤め、徴兵
参事員となり、學
務委員となり、加
佐郡各町村聯合會
議員となり町村制
實施に當りては直
に町會議員に擧げられ、府縣制實施せらるゝや府會議員に擧
げられたる等殆ど一生を公共事業の爲に盡瘁し晩年清安と稱
し有終濟美を以て明治三十九年一月逝去せられたり



前代市兵衛清安君

先代市兵衛氏は其嗣子にして之れ又嚴父に譲らざる敏腕家
にして幼名を英之亮と稱し元治元年四月生、同町小學校を卒
業せる外能に見るべき學歴を有せざれども天與の才能は自か
ら發揮せられ、性剛毅にして如何なる難關に相對するも毫も
意とせず、元氣實に旺盛にして決斷力に富む爲に事件の何あ
るを問はず遂に躊躇することなく己の是とする處は之れを
容れ、非とする處は一言の下に排けて再び來り何人が説くと
も應ぜず其に竹を割りたるが如き性質にて一旦是とし賛同し
且つ發起したることは亦徹頭徹尾其成功を想せざれば止ま
ず人に接する磊落にして克く語りよく談じ何人にも隔壁を設け
ず親密にして仁俠に富みしかば大に町民の信望を博し嚴父退
隱後は市兵衛を襲名し號を清容と稱す擧げられて町會議員と



前代市兵衛清容君

滿期退職するや其後を襲ひ町長となり、榎峠の道路改修と始
先町政の爲に貢獻せられたる事績は決して絶しとせず、尙機
を見ること敏にして自宅に於ては質屋業を開始し、農工銀行
の創立せらるゝや大株主として重役に擧げられ、百三十銀行
重役たる等政事界にも實業界にも噴々たる名聲を博したり、
尙亦氏は謠曲、漢詩、俳句等の道に長じ、書畫骨董に趣味を
有せるも此類の風流の嗜みありたり然かる惜しむべし前途多
望なる身を以て明治四十四年四十八歳を以て早世せられたり
現市兵衛氏は前代の長子にて明治十六年生、幼名を博
夫と稱す京都第一中學校を卒業するや東京早稻田大學經濟科
に入り翌年卒業師省したるが四十四年嚴父の早世に依り家督
相續爾來家政の爲に孜々として奮闘せられたり、あり頭腦明晰
にして進取の氣象に富み氏が早稻田に於て經濟學を修めたる
新智識年と共に遠征を發行せられた土井家の基礎は益々鞏固
となり彌が上にも近時向上の著しきものあり、殊に氏は人に

接する磊落にして城壁を設けざる先考の遺志を繼承せるもの
にて其行動は總て平民的にして日常自から帳場にありて營業
に従事せる所之れが百万長者の且那標とは受け取れざるなり
手腕又卓越にして大に成すあらんとせるも同輩は多士濟々
として先輩殊に多ければ未だ實際の腕を振ふの機會に到着せ
、僅に町會議員の職にありしも本町町長問題より總辭職の止
むべきに至り爾來同志の士と翼を收めて傍觀の位置に立てり
、夫人は丹波篠山町の舊家現百三十七銀行頭取西阪熊太郎氏

軍艦生駒軍醫長

海軍々醫中監 功五級 坂寄義雄君

横須賀市中里一〇三

寄坂家は牧野家舊藩士にして、氏は明治十年九月九日加佐
郡舞鶴町に呱呱の聲を擧ぐ幼にして聰明穎悟遊戯動作又群童
を抜き其小學校の如き成績亦優等にして郷黨呼んで神童と稱
せり、長ずるに及び刀圭家を志し京都醫學專門學校に入り致
々奮勵明治三十二年之れ又成績優等を以て卒業、同年海軍少
軍醫候補生となり海軍に出身、爾來累進して海軍々醫中監と
なり、生駒軍醫長として目下其任にあり、此間明治卅七八年
戰役の功に依り功五級金鷄勳章、勳五等雙光旭日章を下賜せ

られ、大正元年勳四等に叙せられ瑞寶章を賜ひ、大正四年日
獨戰役の功に依り旭日小綬章を賜ひたる等名聲赫々たるあり
資性温厚にして氣品高雅、明晰なる頭腦を有し而かも態度
悠揚として胃すべからず權威を備へよく部下を愛し頗る同情
心に富む、之れ幼時より艱難と闘ひたる修養の賜ものと稱す
べく、されば今や高位高官を勝ち得ればとて毫も驕り高振
る様なる事なく、常に質素を重じ、殊に和漢の書を繕きて倦
まざり進歩の醫術を伍して研鑽怠らず以て範を部下に示せ

り、然り過去を軌道として尙將來に奮進せられんか其大成原一期する能はず、年齒實に春秋に富む幸に自重を祈る。

七四



舞鶴町會議員

陸軍砲兵中尉 從七位 勳六等 岩坪猶藏君

加佐郡舞鶴町字松陰

岩坪家は細川公以來藩士として代々舞鶴藩主に仕ふ、氏は明治三年二月一日生、幼にして両親を亡ひ伯父に鞠育せられ小學校卒業後は授業生として森三郎氏公莊幸藏氏の部下にありて教育に従事するの傍ら學業を修り明治二十年舊志を立て、陸軍教導團入學を志願せしに學業体格共に合格し同年十二月入團、同二十二年十月卒業、爾來軍務に従事し二十七八年戰役に當りては第四師團司令部書記として出征中二十八十二月士官適任證書を附與せられ、尙二十七八年戰役の功に依り勳八等に叙し瑞寶章を授けらる、三十二年二月豫備役に編入、同年三月砲兵少尉に任せらる、同年十月京都府師範學校助教授兼會監に任せられ、三十三年十二月依願退職、三十四年八月加佐郡岡田高等小學校教員となり勳中三十七年四月日露戰役の爲り充員召集に應じ重砲兵第四聯隊に入隊爾來各地に轉戦し、三十八年二月砲兵中尉に昇進三十九年三月平和克復復員により解隊歸郷したるが同年四月卅七八年戰役の

功に依り勳六等に叙し單光旭日章を授けらる、同年六月一日舞鶴高等小學校に奉職以來教鞭を執ること滿五ヶ年、明治四十四年三月辭任同年四月町會議員に擧げられ、翌月舞鶴漁業株式會社事務員となり大正四年八月三十日會社解散に付き解職、同年十一月加佐郡東大浦村なる田井漁業組合事務員に招聘せられ以來今日に至れり本年二月再び最高点を以て町會議員に擧げられたり、氏は資性剛毅不撓、其所信を貫徹して敢て權威に屈せず、されば陽に甲を唱へ陰に乙を稱し巧に責任をのがれ其跡を嘲侮するが如き卑怯漢にあらず、其意志は最も鞏固にして且つ肺腑を披きて陰險をみせず、善く人の意見を採て可否を決するの果斷と腦力を有す、而して其論議は常に正確にして辯論を以て生命とせる柴田、原岡議員とも凌駕するの雅量と有し大勢を左右するの概あり、今や舞鶴町會に於ける花方役者として町民の願望を荷ふ所甚大たるあり殊に氏は舞鶴町在郷軍人

分會副長として會長佐谷省一氏を補佐し平時在郷に於ける軍人志操の涵養に努力し二六時中國家の爲に盡瘁せる其効績は

決して妙しとせざれども、年齒尙春秋に富む益々奮勵自重以て貢獻を祈る。



岡田上村長

儀間 治太郎君

加佐郡岡田上村字大俣

儀間家は代々農を業とし先代助右衛門氏は勤儉力行の人にて夜から夜に働き餘からざる産と構成したる成功者にして、氏は其長男たり、明治三年五月十二日現住地に呱呱の聲を擧ぐ、其長ずるに従ひよく家事を助けて農業に従事せしが余暇あれば書を繕じて倦まず、されば小學校を卒業せる外他に何等見るべき學歷を有せざれども手腕は年と共に向上して名聲又加はり、明治三十四年六月擧げられて大俣區長となり三十六年十月岡田學務委員となり、三十七年二月岡田收入役となり等恰も權を登るが如く重用せられて四十年四月村會議員となり岡田上村外二ヶ村組合會議員となり四十三年三月岡田助役に就職、四十五年六月遂に全村々長に就職するに至れり此間勤業に、衛生、教育に各方面に留意し、村政よく行はれ事績の見るもの夥からず、爲に功成り名遂げて退くべしと大正元年九月滿期を幸ひ衆望再選を希望して已まざるも家事都

合を楯に固辭して出でず、然るに村民は尙氏の手腕に待つもの多なりとし欽慕指かず大正三年二月再び村會議員と爲し、同年八月強て村長の椅子に就かしめたり、されば氏は今は辭するに由なく衆望を容れ其職に孜孜として精勵しつゝあり、氏は性温厚質朴にして毫も身邊を飾らず、農は國家の根元あり一日も忽せにすべからず自ら肥桶を荷ひ朝は未明より登壇時刻まで、退廳すれば二たび農園に出で鋏を持ちて止まらず星を頂きて歸へるを常とす實に勞動は神聖なるものにて其行爲たる模範的なり斯かる有儀あれば最も理財の途に長じ今や巨萬の財を成すに至れり、資産の向上と共に名望愈々重きを加へ今日の大を爲す之れ偶然にあらず、活動は實に君が生命たるなり、幸に健在以て公私共に益々盛大ならんことを冀ふものあり。

七五



浄土寺住職 中島隆善師

加佐郡舞鶴町字新

中島家は上州小幡藩士にして代々江戸詰たり、廣藩後殿父政信氏は外務省に奉職せり、師は其二男にして明治七年三月二十日東京市麻布區飯倉町二丁目二十二番地に呱呱の聲を擧ぐ、幼にして穎悟聰明一を開て十を知るの天才を有し將來有爲の少年を以て目せられたり、其伶俐なるを稱し師の叔父たる越前三國町西光寺住職中島性善師が養ふて嗣子とせり、諱は功阿、紹蓮社徳譽顯道と稱す、年十一歳越前三國町松ヶ下西光寺二十九世澄譽上人に就て得度す、十七歳にして浄土宗京都支校に入り翌年轉じて東京支校に學ぶ明治二十八年七月總本山智恩院門主鳳譽大僧正に就て宗戒兩脈を相承す、廿九年六月年二十三にして東京牛込區早稲田町宗源寺を董す、三十一年浄土宗學本校に入りしも寺門經營の業急を要するを以て退き爾來専ら其業に従ひ、功成りて後ら再び宗教大學に入三十八年六月傳道部の業を平へて京都に錫留す、遇々丹後宮津悟真寺より特請を受け之れに轉住し布教傳道は勿論、寺門經營に意を注ぎ信徒の歸向を博せり、斯くて其卓越せる手腕

は遺憾なく發揮せられ、名聲亦大なるを加へ大正二年十月福井縣今立郡長泉寺村西福寺住職に任せられたり、就任以來孜孜として寺門の爲に盡し寺觀の面目を更むるものありて檀家の崇拜する所たりしに大正四年五月現住地浄土寺住職に任せられ轉寺を余儀なくするに至れり、されど師の敏腕は至る處に噴々たる好評と博し其眞目は年と共に重きを加へ、今や名僧を以て目せらるゝに至れり、此間師の職務としては明治四十一年九月三級巡教師に補せられ四十五年二月教階輔教に任せられ、大正二年十二月學則に依り學階疑詩を授けられたり、亦大正元年十月免因保護機關の必要を主張し現存の丹州惠濟會の設立を告ぐるや常務幹事並に評議員となり其發展に盡瘁せり、尙且つ宗門の公職としては丹後小教區布教獎勵員、參務、教務支所長、小教區々會議長、第五大教區々會議員、紀念傳道京都支部理事、報恩傳道隊長、福井教區布教師、京都教區布教團丹後分隊長加佐郡佛教會布教師等歷任又は兼任して宗教界の爲に努力せる事績は顯著あるものあり茲に管見よ

り授賞せられたること屢なり、

師は温厚篤實の裡に骨すべからざる權威と勇氣を有し、氣品高尚、志操堅實にして且つ清廉あり、玲瓏玉の如く一椀の苦茗を啜りても後進者を愛撫教養するを樂とせり、當今の青年は何れも名利に戀々として宗教の家に生れて宗教を擔つ者

舞鶴町の元老

今安直藏君

加佐郡舞鶴町

今安家は屋號を(一)屋と稱し丹後に於ける唯一の實業家として其名を知られたる舊家にして、令兄増藏氏の早世に依り氏が家名相續せられたるものにて令兄の未亡人八重子は別居して吳服商を營み、自宅は金物、肥料、石油商を營業とし兩家とも氏が采配の下に誠に一家の如く麗はしく營業は益々隆盛を見るに至れり、

氏は温厚篤實の君子にして態度沈着、氣品高尚にして優雅、人に接する謙讓にして争を好まず、頭腦明晰にして深識遠慮に富み、輕率妄動を戒む、されば實際に伴はざる虚名を厭ふこと蛇蝎の如く洞窟と相容れざるの風あり、然れども町民に接する態度を極め恰も慈母の赤子に於けるが如く其平民的にして円満あるは名聲の大を爲したる所以にて、町會議員に擧げられ、町長となり府會議員に擧げられたる等各種名譽職と

勤め舞鶴町の爲に貢献せられたる事績は決して誇しとせず、舞鶴商業會頭として商業の發展に將た舞鶴町の振興に努力せられたること多年、殊に昨年度員獎勵會なるものを組織し毎年一回店員を招待し慰勞會開催の規程を設けられたる等如何に勞働者を勞はる心の厚さかを知るべく、代々今安家に仕へたる奉公人幾人なるかを知らず之れらは皆主人の徳に懷きて精神的努力を惜まず、爲に別家して今や成功の人と稱せられたるもの紛からず、亦氏は世の成金と違ひ貸與せる金銭物品等に對しては厳しく催促することなく出來た時に拂へど云ふ風にて其慈悲の寛大あるは町民の齊しく且那樣として崇拜して措けらざる所以にて、殊に特筆すべき美点は氏の令兄未亡人八重子に一女あり千代子と稱す、亦自分長男に辰藏と稱するありて共に年頃の青年にて兩立せしめらるべからず、

るなく國家の爲め益々奮闘を祈る



氏は明治五年七月信州松本に生る、原姓は富田氏、家世々松本藩に仕へ神影流の一派自辨流の師範たり、後出で、諏訪神社祠官増澤氏を嗣ぐ、生家業より貧ありしを以て氏は小學校と卒業するや印刷職工となり苦辛酸澁中にも學を好み他の朋輩と共に遊惰に馳ることなく余暇あれば書を繕き夜は徹宵に及ぶを知らず、真に積雪螢火の勞を嘗めたるのみか、勤儉を事とし一厘一錢をも妄費することなく貯蓄を爲し自ら資を致して東都に上り英語を修む、後ち東京府、長野縣に於て初等教育に従事すること七年、此間日夜研學を怠らず孜孜として奮闘大に學の進歩を覺ゆ、之れが爲め向上心に富む氏は初等教育に甘んずる能はず出て、高等師範學校に入りしが之れまで成績優等を以て明治廿二年卒業、直に新潟縣高田中學校に奉職教鞭を執ること年余、聘せられて京都に來り師範學校教諭として在職八年、女子師範學校の設けらるゝに當り轉じて首席教諭となり學校長を助けて企畫經營に任じ又第一代の主事として附屬小學校經營の任に當り在職八ヶ年にして病の

加佐郡立高等女學校長

増澤 淑君

加佐郡舞鶴町

八〇

爲に辭任、大正五年四月更に加佐郡立高等女學校長に任せられ爾來今日に至れり、

氏は資性温厚の中に覇氣を有す、姿勢常に嚴格ある中に寛容として温情の掬すべきものあり、頭腦殊に明晰にして數學に長ず、人に接する篤實にして敢て功を貪るの念なく、權門に阿り名利に拘泥するを潔よしとせず、責任を重ずる所は父祖が武術指南者として藩主に重く用ひられたる其嚴格なる訓陶の然らしむ所にて、今や教育者として慈愛に富めるは幼時より有ゆる辛酸を嘗めたる苦勞の徳あるべし、されば其温厚にして親切なるは女子教育に適し、至る所生徒が慈母の如く嚴父の如く欽慕する亦故なきにあらざるなり、大正二年三月京都男女師範學校卒業生等相謀り謝恩會を開き金時計に附屬品全部を添へ且つ薄端一個を贈られたるは之れを証するものあり、真に氏の如き教腕家を得たるは加佐郡女子教育界の慶事たるあり、然り女子教育界の任や重し、幸に自重を祈る。



高木銀行舞鶴支店長

從七位勳六等 武内 勇太郎君

加佐郡舞鶴町

武内家は同地に於ける舊家にして酒造業を營み、牧野藩の御用達として苗字帯刀を許され代々孫八郎を襲名せり、明治維新前は出石の仙石家並に柏原の織田家にも出入して御用を勤め藩主よりの拜領品鈔あからず、今は同家の寶物として秘藏せらる、されど明治二十九年大水害の爲に其多くを流失し、家譜並に重要書類又其厄に會ひたる爲め其詳細を知る能はざるは同家の遺憾とせる處あり、されど先々代の世は最も盛にして兵糧早炊釜を發明して藩主に差出し褒美を頂き、京都薩摩屋敷より御用を命せられ上京の途次上杉橋を架設し永世其修理費を負担すべく受合ひ明治維新までも勵行せしが如き、亦由良川と保津川の合併案を起したるが如き隨分大膽ある且つ突飛なる行動を採られたるが如くかれども其多くは成功せしが如く、現に存する但馬街道筋なる指道石の如き當代の手に成れるものなり、斯くの如く公共の爲には財も惜まらず身も顧みず、東奔西走以て町人の龜鑑、男の中の男と謳はれたる偉人たりしなり、文久二年、年八十五歳にて逝去せらる、

先代孫八郎氏亦各種名譽職に歴任し一世を公共の爲に盡瘁し、明治三十二年、年八十六歳にて逝去せらる長壽は同家の遺傳にて洵に目出度大なり、
現主勇太郎氏は明治十一年同町宇新町酒造業林田家に孤々の聲を擧げ幼にして武内家に入り嗣子となれり、同地高等小學校を卒業するや直に京都府立商業學校に入り明治二十九年卒業歸省するや一年志願兵となり歩兵第二十聯隊に入營、滿期後直に豫備三等主計に任せられ、三十七八年戰役に召集せられ歩兵第四十聯隊附として出征各地に轉戦中二等主計となり、戦後功に依り從七位勳六等に叙せられ一時賜金の恩賞に浴せり、是れより先き明治三十一年氏は倉庫業を起し從來の酒造業を廢して其酒倉米倉を悉く倉庫とあしたるが舞鶴鎮守府開闢當時は却々隆盛を極めたり、尙明治三十九年日露の役平和克復に依り凱旋するや福知山高木銀行支店を設置し明治四十五年よりは從來合名會社たりし煙草元寶捌業を一手に引受け自邸に於て單獨營業を爲す等、漸時業務を擴張し今日の盛

大を見るに至れり。

氏は明晰なる頭腦を有し頗る義侠心に富む、真に血あり涙ある熱血男子にして人より頼まれたる事は水火も辭せず云ふの概あり、されば人に接する親切にして清白、毫も高振らず平民的にして其公共心に富めるは先代の美風を繼承せるものあらん斯の如く篤實篤行なる行爲は常に衆の賞讃する所に



加佐郡會副議長

動七等

辻本猪之助君

加佐郡東雲村字下東

辻本家は地味に於けるが、代々農を業とす、氏は万延元年十月生、幼にして博識強記將來有爲の少年を以て目せられたるが、果せる哉、誘稱する程の學歴を有せざれども天與の材腕は着々向上して明治十八年擧げられて同村用掛となり、明治二十二年町制實施の際擧げられて村會議員となり同村收入役となりたる等其名聲は噴々として大を加へ二十三年九月一躍して同村々長に擧げられたる以來滿期毎に再選すること五回此間加佐郡各町村聯合會議員となり、郡會議員となり、郡參事會議員となり、三團體組合副長となり赤十字社分區委員となり、海員救濟會其他各種團體の役員となりたる等村政のみか郡の爲にも貢獻せる事績は顯著なるものあり、殊に村教育の普及校舎の改築、道路の改修を始め勸業に衛生に

擧げて町會議員となし營業稅調査委員となし、事あれば必ず推して委員となす等、衆望は實に拔くべからざるものあり、先輩多き舞鶴町に於て一頭角を顯はす亦之れが故ならんか今や實業界にも政事界にも重視せらる、されど前途は尙遠遠なり、幸に自重奮闘を祈る。

頭腦を有せり思慮周到にして一旦熟考し發案したる事は何處までも成功せしめざれば止まざるの概ありされど發表までには幾度か研究に研究を重ねて大丈夫と認めざれば決して擧げず、爲に其發表せしことは百發百中毫無懸念を生じたることあり、其人に接する篤實にして寛容、城壁を設けず諄々として其一言一句は至誠の結晶にて對者に一種の風味を感せしむ



由良村信用組合長

小室文吉君

加佐郡由良村

氏は明治八年二月現住地に颯々の聲を擧ぐ、祖父文助氏は酒造を業とし嚴父文助氏は船業を業とし共に隆々産を爲したるものにて小室家今日あるは全く兩氏の賜ものたるなり、氏は其守産者にして幼時學を好み穎悟博識を以て稱せられしも同村には中西六右衛門、中西孫兵衛兩氏の如き大人物あり、従ふて先輩多くして多士濟々たれば容易に頭角を現はす能はず、されど今や漸く中西兩氏の隱退したれば時を待ちわびたる爾後の筈に等しく、我も我も其位地を争ふに至れり、氏亦其中に伍して村會議員となり、同村區長となり、明治四十一年四月擧げられて同村助役となり、村に於ける階級的順序

のみならず、最も後進者を愛撫し親切と同情を以て誘掖に努む、亦其事に當るや一時の虛榮の爲に進退を苟せず石橋叩てと云ふ頑強なる風ありて稍消極的の嫌ひあれども其發する一言は千金として重く用ひられたり、今や加佐郡の元老として郡民の崇拜する處あり、幸に自愛を事とし國家の爲に貢獻を祈る。

を経て明治四十五年四月同村々長に就職せり、之れと同時に村農會長となり、由良村漁業組合長となり、信用組合長に擧げられたる等、全村の盛衰を双肩に荷ふ晴れ舞臺に活躍する立役者とはありしあり、されど其職に長く留まるを許さず村長一期にして大正五年四月現村長山本文藏氏に譲りて隱退したるも四圍の事情は氏の去るを惜み、信用組合長並に漁業組合長は尙氏の手腕に俟つもの多しとし留任を勸告し再選せる爲今も其任にありて組合の爲に盡瘁せり尙四十年以來村會議員として現在に至れる等名聲は先輩をも凌駕するものあり資性剛毅にして壯年時代は稍短慮の嫌ひありしも年と共に

修養せられて漸次円熟し其村長時代の如きは積極的方針の下に教育に衛生、勸業に改善せられ任期は僅に四ヶ年なれども其業績の顯著なること歴代村長中其比を見ざる處あり、人に接する磊落にして毫も隔壁を設けず貴賤貧富を論せず問ふものには親切に教へて倦まず、如何なる多忙の折と雖も敢て之れを厭ふの風なくされど明瞭簡短を以て見地とせり、殊に交

京都高等農業學校教授

正六位勳六等

荒木武雄君

京都高等農業學校官舎

祖先荒木山城守は波多野の一族と共に丹波の一隅に據りしも明智光秀の爲に滅亡し其陷落と同時に遁れて加佐郡河守上村宇天田内に來り遂に土民となりたるものにて以後代々の石礫は同地に現存せり、氏は明治四年一月十一日其現籍地たる河守上村宇天田内十八番戸に生る、其の小學校を卒業するや時勢の進運に鑑み殊に農系業は地方農家の副業として最も適切にして將來有望なる事業あり身を立つるは斯業にしかずと、大志を懷きて現東京高等農系學校の前身たる農商務省試験場農系部に入り研學多年明治二十四年七月卒業、翌年二月京都府農系巡回教師を命せられ同二十九年二月京都府農系検査員主幹となり農系検査所長を命せらる、三十二年九月農商務

際巧みにして飲めば嘔ひ踊る、生花、謠曲、圍碁何一つ、暗きものなく頗る風流に富り、眞に八方抜け目あき才子にして口八丁手八丁とは氏の如きを稱すべきか、其敏腕をして充分發揮せしむるの機會を與へざるは深く憾みとする處あれども、年齒尙春秋の高けれど、幸に自重以て倦土來重の期を待ち國家の爲に貢獻を祈る。

み極めて嚴格にして博識強記、眞に麒麟兒とは彼れの事かど將來を矚目せられたるが果せる哉、草深き大江山の麓より飛び出して一頭角を現はす、其非凡あるを知るべきあり、而

舞鶴

町長

奥田

純君

加佐郡舞鶴町

氏は文久三年京都府相樂郡加茂村宇高田の里に呱呱と聲を擧ぐ、嚴父幹三郎氏の長男なるも農を好まざるに獨立自營すべく決心して嗣を令弟信吉氏に譲れり、されば現に實家は信吉氏の繼承する所たるあり、氏は同村小學校を卒業するや現府立中學校の前身たる南山義塾に學び漢籍を修む、同塾卒業と共に警察事務の愉快あるを志望し明治十八年京都府巡査を奉職せり、然るに氏の手腕は忽ち上官の信任を博し明治二十五年十一月警部に任せられ舞鶴署次席を命せられたり、在ること年余にして川端署に轉じたるが明治三十年宇治署長に昇進し三十三年東京警察監獄學校に入り四十三年卒業と同時に七條警察署長に任せられ、三十七年堀川署長に轉じ、四十三年一月警視に昇進福知山署長に任せられ大正二年舞鶴署長に轉じ本年一月十九日依願本官を免せられたるものにて、二月前町長木戸貞一氏の後を襲ひ舞鶴町長に就任せり、氏は明晰なる頭腦を有し果斷に富む、氣品高尚にして態度

かも氏は態度悠揚として冒すべからざる權威を備へ嘖々たる名聲を博す、幸に自重以て其益々大なるを期せ。

沈著、禮節自ら具り亦思慮周到にして毫も人を嫌厭たらしめず、其人に接するや篤實にして寛容、警察出身の地方官は兎角權に流れ易く府縣出身に比すれば甚しき遠隔あり、是れ年來習慣性の然らしむ處にして止むを得ざれども郷に入れば郷に従へど、郡長然り、町長亦然り、殊に自治制を根柢とせる町長に於ては一層圓滿を要するを得ず、吾人氏を知ること既に久し、其性行率る警察界よりも地方行政官たるの適任たるを偲ひしなり、然るに今や其適材を發揮すべく好機に入れるあり、町長就任以來殊に圓滿なるものありて町民一般其推薦當時如何にあらんかと杞憂せしも今や全く氷解して良町長を得たるを謳歌するに至る、されど就職以來日尙淺き爲り事績の語るものあらざれども努めりて圓滿を維持し行政的手腕の修養を怠らざらんには其成功期待して誤らざるべし、氏に一男一女あり長男實氏府立第三中學校を卒へ今は明治大學法科の三年生たり長女カスエ嬢は京都女學校を卒へ下京區役所

兵事課長松岡善吉氏に嫁し昨年既に一子を挙げ圓滿なる家庭に主婦たり、氏亦多幸と謂ふべし、年齒尙春秋高し幸に自重

修養以て町民の期待に背く勿れ。

南洋瓜哇に大成と期せし

藤野貞藏君

攝津武庫郡住吉

氏は加佐郡舞鶴町字新藤野仁兵衛氏の次男にして明治十九年十月廿九日生、令兄淺藏氏は明治二十九年より舞鶴郵便局に奉職し累進今や書記長として局長を補佐し頗る敏腕家として名聲あり、氏も亦舞鶴高等小學校を卒業するや舞鶴郵便局に奉職し在ること二年されど氏は令兄と其性情趣きを異にし郵便局事務員にて如何は立身出世せばと到底一家の大をみず能はず給料販は嫌ひありとて終に其職を辞せり、斯る有様にて大志を懷き勇心勃々たる氏は甚しく渡米を志望し郵便局に奉職中京都府廳に出願せしこと三回に及べるも其都度却下せられて意を果さず、されど其希望は尙斷念する能はず如何にもして其素志を貫徹せしめんと、郵便局を辭するや直に釜を神戸に負ひ移民問屋に奉公して只管時機の到るを待ちしも之れまた目的を達する能はず遂に止むべく意を轉じて支那に渡航上海、漢口に於て貿易店に勤務すること二年有半稍商

機を會得するに至りしも不幸同店は閉店の厄に會ひし爲一時歸國したるが、翌四年更に南洋瓜哇に渡航せり、以來同地小川利八郎氏經營にある小川洋行に入り一意専心商業に従事し遂には擧げられてパタゴニア支店主任となり、大に活動する處ありしが本春所用の爲に歸朝自邸たる攝津武庫郡住吉村に滞在在中あるも資産漸く豊となりたれば不日再び同地に渡航し今回は店舗を新設して獨立自營に大成を期待せるもの、如し、氏は性温厚の中に頗る朝氣を有し氣骨の稜々たるものあり然して進取の氣象に富む、一昨年加佐郡餘内村飯出豊藏氏の長女せつ子嬢と娶り既に一子を擧げて圓滿なる家庭に主たりされど年齒尙少壯前途は洋々として大海の如し、今や岸邊を離れて沖に漂ふ小舟に似たり雨か風か朦朧として辭せられども君が過去の經歷を目標とし其遠大なる抱負を楫に奮進せんには如何たる怒濤狂瀾意とするに足らず、其彼岸に達す

る亦難きにあらざるなり、其れ自重修養以て成功を期せ。



由良村の元老

中西孫兵衛君

加佐郡由良村

中西家は代々庄屋を勤め孫兵衛を襲名せる舊家に於て今も由良港第一の財産家たり、氏は安政二年一月生にて町村制實施前は戸長を勤め實施後村長たりしこと二期、明治二十五年以來學務委員たりしこと四回大正五年四月又々推薦せられて今も其職にあり、尙明治二十五年四月村會議員となりし以來満期毎に再選せられて是れ又今日に至れり、且又郡制實施以前は各町村組合會議員たりしが實施後は郡會議員として大正四年九月まで勤続せり、此間信用組合を組織しては組合長となり、郡參事會員となり、村の爲にも郡の爲にも力を盡して貢獻せられたる事績は顯著なるものあり、

の如き程度か其候補者に擬せられたれども其器にあらざると出でず、他人の爲には殆ど寢食を忘れて運動し、府會議員の選舉は勿論、代議士選舉の如き常に一方に於ける旗頭として將た參謀として克く活動せしものなり、上野彌一郎氏と共に加佐郡西部に於ける重鎮として赫赫たる名聲を博せり、されば郡内何れの町村を問はず重大なる紛擾事件を惹起せんか必ず出て、關係に努む人亦氏の徳を欽慕して其言を容れざるはなし、今や家事は嗣子隆三氏に譲りて好める讀書に耽り、亦中西家の古記録を蒐集し或は由良港の由來村内の神社佛閣等の古蹟を樂りて之れに自分一代に於て執り來りたる事績を加味し由良港と中西家の歴史を編纂し以て之を後世に傳へんと余暇あれば机に依りて硯筆と親り、嗣子隆三氏は府立農林學校を卒業し一年志願兵として歩兵第二十聯隊に入隊せるも満期後は自邸にありて農業に従事し質朴勤儉と旨とし現に由良村在郷軍人分會長として郷黨の爲に努力奮闘せり、資性温

厚謹直にして將來を顧みせらる。氏尙饒饒壯者を凌ぎ村會議員として村政に參與し事務委員として教育の爲に盡瘁せらる



四所村の成功者

梅垣常藏君

加佐郡四所村字白杉

氏は元治元年九月十日加佐郡西大浦村字佐波賀梅垣太夏右衛門氏の三男に生る、明治十四年十月十七歳にして中絶し居りたる現住地梅垣嘉左衛門氏の後継者となり空家同様となりありたるを再興すべく四ヶ年開闢身生活を以て奮闘せり、年二十歳同字土井仁八氏の次女を娶り二十三歳にして一女を娶り、明治十八年同字藥師堂を新築し、二十二年宇宮拜殿の新築に従事し、二十三年宇宮本堂の修繕に従事せり、明治二十九年擧げられて同村區長代理者となり勤績すること二年にして三十二年區長に擧げられたる等年と共に名聲加はり舞鶴要塞御用商人となり、明治三十四年には村會議員に擧げられ満期再選六ヶ年に及び、三十九年再び區長に擧げられ在勤十ヶ年昨年辞任したるが此間公共事業の爲に盡力したる事績は決して少しとせず、中にも特筆すべきは明治三十三年八月同字に大火あり類焼四十五戸の多きに及び慘憺たる光景を呈せり、此時氏は家事を抛棄して連日罹災者の救護に努め貧民には衣類雜品數十点を惠與して之れを慰め、且つ現金數百圓を

眞に氏は由良村に於ける大久保彦左衛門たるあり、幸に自愛を事とし鶴壽を祈る。

て萬事萬端注意周到なるは、これを村民其篤行を稱し崇拜措かず如何なる紛擾事件を起すも氏が顧みへ出せば悉ら



東雲村長

岸田大治郎君

加佐郡東雲村字上東

氏は明治三年九月同村岸田金次郎氏の次男に生る、同家は地方の舊家にして維新前まで大庄屋を勤め維新となるや殿父金次郎氏は同村戸長を勤め村會議員となり事務委員となりたる等及職の爲に參與せられたる名望家たりしあり、氏は出で、岸田六右衛門氏の養嗣子と爲る、實性温厚着實にして頗る奮闘心に富み、博識強記あるは末へ頗る數青年ありと將來を矚目せられたれども農業繁盛の故を以て上級の學府に入らしめざりしは遺憾なり、されど府種は双葉より香しくの譽へに洩れず獨學自修の功果は忽ち衆人の認むる處とあり、明治二十九年四月擧げられて同村區長となり、續て村會議員となり明治三十四年三月同村助役に擧げられたる等手腕は著々發揮せられ、名聲亦年と共に加はりて三十七年三月助役満期の際再選を擬せられたれども家事都合を稱に固辭して出でず専ら

さる事なく円満の裡に完成を告ぐるを常とせり、洵に氏の如きは事務家として他の模範とするに足れり、幸に鶴壽を祈る。

農業に従事するに至りたるが、明治四十四年四月辻本猪之助氏の後を襲ひ同村々長に就職せり、氏は常に質素を旨とし實踐窮行を以て軌道とせり、然して其常職の円熟せる處は眞に得易からざる人物にて、資産富豪と稱せらる、身を以て今も尙役場に出勤する迄には一人前の仕事を爲し退職せば亦再び農に復して日役に及ぶを例とせり、されど時間是最も正確にして他吏員に先立ちて登壇し悉も遅刻せず、夜々として事務に従事し公私とも熱心努力、然して勤儉を重んぢ塵榮を厭ふこと蛇蝎の如く何年経ちても心の變らざるは氏の美点にて誠實なる人、行末問違ひなき人として村民の崇拜せるも之れが爲りなり、村長就職以來既に七ヶ年此間に於ける事績は決して少しとせず、中にも部落有財産の統一を斷行し千余町歩の植林を企劃し既に本春之れが完了

を成さしめたるが如き、村内各字の耕地整理履行の如きは最も特筆すべきものあり、されど氏は尙春秋に富む、實際の手腕を發揮する輩を將來にあり、辻本前村長に次ぐに名望手腕

卓越せる君を迎へたるは海に同村の爲め慶すべきあり、幸に自重修養以て村民の希望に背むく勿れ。

九〇



神戸市水道擴張部
第二出張所事務主幹

高山勇藏君

神戸市平野神田町

氏は明治七年四月四日加佐郡東雲村字中山村に呱呱の聲を擧ぐ、高山家は同地に於ける舊家にして屋敷の背後に愛宕山あり其山上には一色氏の城趾ありて天正年間細川氏の爲に落城せり當時其家臣高山氏戦死し、遺子連れて歸農爾來傳へて同地に住し傍ら商業を營みたり、之れ高山家の祖にして代々庄屋を勤め村民に崇敬せられて重きを爲せり、厥父亦弱冠にして庄屋を勤め後ち戸長となりたる等公務の爲に盡瘁したるも明治十三年早世せられたり、令兄は官津中學校を卒業し明治二十年陸軍教導團に入り滿期後京阪地方にて商業に従事し、今は福岡縣八幡市に於て運輸、信託業を營み成功者の一人たり。

氏は明治二十年三月中山小學校を卒業し、獨立高等小學校に入らんと志望したるも嚴父早世に續く商業の不振、實母の

手一つにて養育せられたつ、ある氏は其意に任せず、止むなく同村役所雇となり勤勉力行余暇あれと行政、政治、經濟等の講義録を獨習して智識の向上に努め、進んで同村書記に任用せられ居ること殆ど十年、明治二十九年冬加佐郡役所雇員に採用せられ翌三十年三月京都府土木課員に轉じ、三十一年四月滋賀縣に於ける普通文官試験に合格し京都府員に任せられ九級俸と給せられたり、三十三年四月早稻田校外行政科卒業證書受領尙三十年以來京都法政大學に學びて手腕は愈々發揮せられ、三十三年十二月長崎縣員に轉じ土木、地理係たりしが三十八年四月治水を以て有名なる岐阜縣員土木課に轉じ土木行政事務を執掌すること數年大に名聲を博す、四十三年八月聘せられて神戸市吏員となり、爾來水道擴張事業に従事し現に水道擴張部第二出張所の事務主幹として月俸七十餘圓

を受くる身とはなれるなり、氏は資性温厚の中に福氣を有し人に接する淡泊にしてよく語り毫も隔壁を設けず、殊に幼時辛酸を嘗み雪の苦學を以て今日の位置を獲り得たる苦勞人だけありて部下を愛すること慈母の赤兒に於けるが如く稀有の熱血男子にて殊に其熱心

にして勞を惜まざるの特長は上下の信任を博する所以たるあり、現在擴張中の工事費は實に一千二百萬圓の巨額にて大正八年迄の繼續事業たり、此大事業に氏を抜いて事務主幹の重任に就かしむ其名聲知るべきなり、されど氏年輪尙春秋高し、自重以て現在に甘んずるなく益々奮闘以て大成を期せ。



由良郵便局長

中西一雄君

加佐郡由良村

中西家は同地に於ける素封家にして代々酒造を業とし六右衛門を襲名す、前代六右衛門氏は非常なる博識英敏ある人にて頗る理財の道に長せり、年漸く丁年に達するや擧げられて同村戸長となり、明治八年全國各地に郵便局の置かる、や氏亦由良郵便局長の椅子に就き同十年郵便局と改稱せられたる以來二十余年郵便局長の職にあり、町村制實施せらるゝや村會議員として將た由良村の小姑として内政に參與し中西孫兵衛氏と兩人協力せば同村の寢し起しも自由にする云ふ大勢力家にして、外交は多く孫兵衛氏を出して當らしめ、自分は陣中にありて謀議を凝らす、されば氏は戰時の猛將にあらず平時に於ける財政官たるに適せり緻密なる頭腦を有し深識遠慮

に富り、今は一切の家事を嗣子一雄氏即ち現主に譲りて新舞鶴町字八島通五條に別邸を構へ清酒類販賣を業とし樂しき後半世を送れるは人の羨む處あり、現主一雄氏は六右衛門氏の長子にて京都中學校卒業後は自邸にありて酒造業に従事し嚴父新舞鶴に隱居と同時に由良郵便局長となり、爾來今日に至れるものにて、資性温厚勇氣を有し手腕決して前代に譲らざれども、氏は眞摯たる實業家に於て余り政事的趣味を有せず、爲に村會議員たる外他に何等特筆すべき經歷あらざれども酒造家としては郡内に於ける重鎮と稱するも過言にあらず造石高年々千石を下らず殊に氏は灘地方の酒造家を視察して釀酒の向上に努め二六時中研究を

怠らず、近時醸造方法は全無濼式に改善せられて進展の著しきものあり、銘酒千代白鳳の如きは濼の銘酒をも凌駕するもの名聲を博し各種品評會、其進會に於て優等賞を受領せるもの勝からず、氏は人に接する淡白にして快活、毫も城壁を設けずよく語りよく談ず、洵に心易き特徴を有せり、然して日常勤勞を厭はず雇人等と共に終日業に服して倦まず、是れが千石酒屋の旦那様かと訪ふものをして呆然たらしむることあり



滿鐵埠頭事務所 汽船さかき丸運轉士

杉本義藏君

國東州大連

氏は明治二十年十月十七日加佐郡舞鶴町宇新杉本忠兵衛氏の二男に生る、杉本家は杉本新左衛門の後裔杉本久齊十世の孫たり、幼にして穎悟學を好み其小學校時代の如きも他の兒童と懸絶をなすこと多く暇さへあれば書畫に遣りて復習を爲せり、殊に又氏は書を好みて學藝品展覽會等に出品して命名を博せり、明治三十一年三月明倫小學校卒業四月舞鶴町外五ヶ村組合高等小學校に入り、三十五年三月卒業、明治三十九年一月筑波東都に負ひ私立攻玉社中學校第三學年に入學四十二年三月卒業同年十月官立商船學校航海科に入學大正三年四月

月卒業、此在學中海軍砲術學校に派遣を命ぜられ砲術を練習し、亦練習船大成丸に乗組み北米サンペドロ及び世界週航の二練習航海を爲せり、大正三年四月同校卒業と同時に海軍豫備少尉候補生を命ぜられ甲種二等運轉士免狀を授與せられたり、翌月南滿鐵道會社に入社埠頭事務所勤務を命ぜられ、大正四年十月汽船さかき丸に二等運轉士として乗組み爾來今日に至れるが昨年一月御大禮記念章を下附せられ同年十二月甲種一等運轉士免狀を授與せられたり、氏は資性濃厚篤實にして多くを語らざれども人に接する誠

實を以てし敢て虚譽を好まず常に勤儉質素を事とす、頭腦明晰にして事に當りて其熱心努力を惜まざるは幼時の佛を存するものにて所履は深遠にして善しと之れ君に望する至言なり



前舞鶴町長

木戸貞一君

加佐郡舞鶴町

誰が何んを云ふても舞鶴町今日の發展を成さしめたるものは前町長木戸貞一氏とす、氏は一小學校教員より身を起し後轉じて加佐郡書記となり以來累進して首席となり、克く高長を輔佐して郡政の向上に努力せり、其事蹟實に誇しとせや郡民の齊しく崇敬する所たり殊に舞鶴町は氏が敏腕を欽慕して止まらず、明治三十四年七月町會は滿場一致を以て氏を町長に推し其就任を強請せり、爲に氏は將來最も有望なる首席書記を捨て舞鶴町の爲に身を犠牲として就職せられたるなり爾來氏の手腕に依りて各種の施設は實行せられ小學校の新築、女學校の創立、港灣の改良、衛生に勤業に土木に教育に日進月歩の時運と伍して遺憾なく著々進展し築港記念博覽會の如きは最も時機に適したるものにして舞鶴町今日の隆盛を見るに至らしめたるなり、斯くして氏の名聲と其手腕は洵に

新しくして中西家は彌が上にも隆盛を極めつ、あり、氏の規模としては生花、謡曲、園藝等あれども晩酌に臨み夫人と對して蓄音機の諧音を聴くを以て無上の快樂とせり、蓄音機は我國輸入の初より購ひて時々には變はる珍らしき諧音を取寄せて今尙唯一の樂とせり、斯かる樂しき家庭にも未だ一子のあらざるは氏か苦勞の種たり、されど年齒尙春秋に富む、幸に自愛を事とし其敏腕は各方面に發揮せられんことを、

遺憾なく發揮せられ大正四年九月舉げられて府會議員となり、同時に府參事會員に舉げられたる等、如何に氏が加佐郡のみか、府下に於ける人物として重視せられつ、ありしかを知るべきあり、選挙の爲に大正四年八月二十三日一時町長辭任したるも十月七日再び就任せり、然るに大正五年六月吉原入江浚工事不正事件の暴露するに至り、町長の監督不行届が通帳となりて類を築港問題に及ぼし全責任を一身に荷ふ事となりたれば其月十四日辭任の止むなきに至れるあり、尋て府會議員をも辭退し全く政界より隱遁するに至れり、

氏は資性濃厚篤實の君子にして、風采態度質朴にして人に接する實に圓満、上下の隔を置かず殊に下民に對しては一層親切にして問あれを詳々と教へ毫も威張らず、されば親切なる人、堅い人、心易い人として町民の信頼は勿論、各方面よ

り重く用ひられ名望赫々たるものありしに、惜むべし、屋毫私せしにあらず、舞鶴町の爲に努力し、舞鶴町の爲に散したる金、即ち舞鶴町発展の資に供したる無形の金が因を爲し、氏が政事的生命を擧り去るに至りたるは實に同情に堪へざるものあり、町民亦齊しく氣の毒に堪へずとし懸念の方法を



四所村の元老

神田 慶治 君

加佐郡四所村

氏は安政二年十二月現住地に呱呱の聲を擧ぐ、神田家は同村に於ける舊家にして農を業とし代々庄屋を勤めたる家柄たり、前代市右衛門氏亦公職に參與し名望家たりしも其隱退後は氏代りて村政のみか郡政にも參與して重きをなせり、明治二十二年四月町村制實施以來開闢なく村會議員の椅子にあり、又郡制實施後は加佐郡全町村組合會議員として郡政に參與し明治三十二年九月郡制實施に依り擧げられて郡會議員となり同三十六年九月滿期再選四十年九月退職せり、此間即ち明治二十九年七月同村々長に當選三十一年十月辭任、三十九年十月再び村長に當選四十一年七月辭任したるが此兩度村長に擧げられたるは深き意味の籠れるものにて村民が如何に氏の

九四
講究中なりと聞く、之れ然かあるべき事にて、氏も舞鶴町に於ける偉大なる功績に對し及を以て酬ゆるに至りたるは心あるもの、忍び得ざる所たらすんをあらす、然りと雖も此故郷家を政界より遠ざけたるは舞鶴町の爲に憾むべきなり。

敏腕と欽慕せしかを知るべきなり、廿七八年には日清戰役あり、廿七八年には日露の大戦あり共に我國の大難にして朝野擧げて之に殉じ内政を顧みざる暇あらざりしあり、されど平和克復に至れば暴風雨の後に興らず内政整理の一段とあるなり、敢するは易く貯蓄るは難し之れ特に氏を擧げて財政整理の難局に當らしめたるなり、されば二回とも滿期を待たず整理の完了を以て任務終れりとさてこそ病氣を口實に辭任せし次第なるが村民亦之れを諒とせしなり、明治三十四年五月學務委員となり三十八年五月滿期再選四十年三月辭任したるが大正二年四月村會議員滿期を以て公職の終りとあし且つ後進者の路を開く爲めとて爾來 強ひらるゝも一切固辭して出

です、

氏は秩序的見るべき學歴を有せずと雖も、其頭腦明晰、氣品高尚にして態度沈着、思慮周到にして毫も人として嫌厭たらしめず、其人に接するや篤實にして寛容、城壁を設けず諄々と語る、其一言一句は至誠の結晶にて對者に一種の温味を感せしむのみならず、最も後進者を愛撫し親切と同情を以て誘掖に努め、亦一面には胃すべからざるの權威を備へ當代稀

醫

師

勢家直幹君

加佐郡舞鶴町



勢家祖先是幕府右衛門にして後ち分家して醫を業とあし藩王に仕ふるに五代、嚴父潔氏は廢藩後地方醫を開業して令名を博し昨年氏が籍名家督相續に至まで鏗鏘として斯業に従事せられたり、氏は明治十六年五月現住地に呱呱の聲を擧ぐ、其小學校を卒業するや父祖の名跡を襲ひ大成せざるべからずと直に京都に出で獨逸學校に學び、明治三十一年東都に上り更に東京獨逸學協會學校中學校に入り三十五年卒業したるも時世は顧々として進み中學校卒業と以て氏に満足せしむる能はず同年又もや千葉醫學專門學校に入りしが成績優良を以

に見るの人材たるあり、殊に氏は深識遠慮にして最も責任を重んぢ其事に當るや一時の虛榮の爲に進退を荷せず、石橋叩てと云ふ風あれども發する一言は千金として各方面に重く用ひられて名聲を博したるが今や全く閑地にありて風月を友とするに至りたれども、村の元老として尙氏が手腕に俟つものなしとせずされば幸に自愛を事として健在たれ。

て三十九年十二月卒業、直に北海道根室町立病院の招聘に應ぢ赴任、以來大に研鑽以て名聲を博し手腕亦衆人の認むるに至りたるを好機に四十二年二月同町に私立病院を起し經營の任に當りしが忽ち其名遠近に轟きて隆盛を見るに至りたり、然るに昨年歸省父祖の業を繼承せざるべからざる事となり止むべく病院は人手に譲りて歸郷し現住所に開業するに至れり、氏は温厚篤實の中に剛氣を有す、氣品高尚にして現時醫界の風潮は一般卑倫陋劣を事とし我利に汲々たる商人も唯ならず、實に醫界の体面を没却して憚るべきを憤慨せり、されは

道従三味で患者を吸收する機あることなく又人に阿ることなきは勿論にて唯其手腕を賣るを目標となり、爲りに現地に開業以來日尙淺きにも拘らず隆々たる名聲を馳せ患者種を接するに至る、之れ氏が徳の致す所にて稱揚すべきに足る、氏年



四所村の豪農

柴田熊藏君

加佐郡四所村字上福井

柴田家、姓は藤原氏、十三代前三州柴田郷より現地に贅居す代々庄屋を勤め分家するもの十數戸に及ぶ、氏は明治十二年四月現住地に呱呱の聲を擧ぐ幼にして穎悟博識強記にして學を好み將來有爲の少年たりしが果せる哉、氏は幼時両親を喪ひたれども、自ら采配を執りて奮闘努力、具に辛酸と戦ひて屈せず、之れが爲り毫も家政の頓挫を招かず財産は年と共に向上して益々多きを加へ今や四所村に於ける大地主將た富豪家として其令名を顯せるに至り、

氏は温厚篤實の中に抜くべからざる氣骨を有せり、されど人に接する謙讓にして機智世才に長じ勤儉力行、處世に巧みあるは近時青年に見るべからざる特長にして今尙資産は隆々

齒尙少壯前途は遼遠なり幸に此美的軌道として進せんか其素志を全ふする亦難きにあらざるあり、須らく自重奮闘を祈る。

として進展し其停止する處を知らざるも亦氏の敏腕の然らしむ處たるあり、資産の大あると共に名聲亦重きを加へ擧げられて區長とあり村會議員とあり、村政に參與するに至りたり、されど年齒少壯にして多く語るべき經歷を有せず、過去は實に修養時代にして其蘊蓄せる手腕を發揮するは將來の事に属するあり、今や漸く岸邊を離れて大海に浮ばんとせる小舟に似たり風か雨か朦朧として前途を辨せされども氏が財産と其手腕を目標として航せんか如何なる怒濤狂瀾も意とするに足らず其彼岸に達する決して難きにあらざるなり、然り人各々一長あれを一短あり、君亦努めて其長を以て短を補ひ徐に機を到るを待つべし大成期待して疑はず、其れ自重せよ。



由良村長

山本文藏君

加佐郡由良村

山本家は同村に於ける舊家にして代々七右衛門を襲名し村役人を勤めて農を業とせり、氏は慶應三年二月生にて先代七右衛門氏の長子たり、幼時小學校を卒業せる外他に何等見るべき學歴を有せざれども天賦の才剛は忽ち衆人の認むる處となり、擧げられて同村區長となり、村會議員とあり明治四十五年五月同村助役となりたる等多士濟々たる由良村に於て逐次頭角を現はして大正五年四月同村々長に就職せり、是れ同村に於ける階級的昇進の如き感あれども村政を執掌し幾多の先聲を操縦して村民の囑望を双肩に荷ふ亦偉ならずや

實性温厚風采態度沈着にして余り多くを語らざれども事に臨めば徐々に論じて毫も遺憾あらしめず、其職に熱心なること歴代の村長中其比を見ざる處にて、殊に人に接する圓滿にして恭謙、名刺の爲に一事一物決して荷もせず、一言一句は肺腑を衝て出で誠實の結晶たらざるはし、資産、地位、學力氏の上に出ずるもの跡あからざれども其心正直にして一点の疑ひある人物は甚だ訝なし、之れ小姑多き由良村に於て村長の重任に就きたる所以たるあり、年齒尙春秋に富む須らく自重修養以て益々其美的を發揮し村政の爲に貢献を祈る。

郷社大川神社々司

高田誠雄君

加佐郡岡田下村

高田家は地方に於ける門閥家にして、代々郷社大川神社々司を奉職し村民の崇拜せる所あり、氏は京都中學校を卒業し後皇典講究所の學科を修得したる等、地方神職としては實に其新進の學を修り明敏なる頭腦を有すれども現職に在りては其手腕を發揮するの機會を徒らに埋木の感あらしむるは惜むべきあり、

氏は温厚篤實にして身を持すること謹嚴、人に接する謙讓にして、風采態度の崇高あるとは自然其職の然らしむ處ならんか、現今神職は閑職として老朽者を以て網羅し、若し老朽者ならざれば傍ら小學校に教鞭を執る等多くはパンを他に需

四所村の功勞者

内 藤 菊 藏 君

加佐郡四所村字下福井



氏は慶應三年一月十八日現住地に呱呱の聲を擧ぐ、家は代々庄屋を勤めたる名家なり、氏幼にして聰明一を聞て十を知るの天才を有せり、旣に双葉にして香しく此は寸にして人を呑むの氣ありと、實に然らん、氏の名聲は忽ち衆人の認むる處となり、明治廿七年三月同村第二區長となり、卅一年四月同村會議員に擧げられ卅七年三月滿期再選、四十三年三月

滿期同卅二年三月再び區長となり三十四年三月退職、同五月同村助役に擧げられ卅六年八月辭任、三十五年五月加佐郡農系同業組合委員に擧げられ三十八年四月滿期、三十七年七月四ヶ村學務委員となり四十一月滿期、同年二月再び同系同業組合委員に當選四十四年一月滿期四十四年七月四所村長に擧げられ四十五年七月滿期退職、此間僅に四ヶ年にし

て事績の語るもの多からざれども就中氏が功績として誇稱するに足るべきものは部落有財産の統一と統一後に於ける造林事業にして明治四十三年其筋より財産統一の指示あるや他に率先して示したる者にて、四所村は西北一帯山脈に依りて圍繞し町村制實施の際上福井、下福井、喜多、大君、吉田、青井、白杉の七ヶ村を合併したるものにて上、下福井を除くの外山岳其間を遮斷して部落は其露谷に点在し地形狹長にして東西七八町南北四里に涉り、従つて風俗人情も其趣を異にし従來村治の發展を妨ぐる例少しとせざりしなり、爲に氏が村長に就職以來夙に自治發展策に腐心せし處たり、されば部落有財産統一の如き容易の業にあらざりしや必せり、されば意志鞏固なる氏は一身を賭して成功せしむべしと大なる決心を以て學草志之が議案を村會に提出せしあり、此反則左の如し
上福井宅地六十坪、山林十町歩、下福井宅地四十坪、山林十一町八反四畝歩、喜多宅地六十坪、山林十五町六反三畝三步、大君宅地七十八坪、山林十四町七步、吉田畑四町四反一畝 十八步、山林二十六町二反四畝十二步、青井宅地百坪、畑五町六反八畝二十四步、山林三十二町一畝十步、白杉宅地百八十二坪、山林十九町八反九畝六步、合計宅地五百二十坪、畑十町一反十二步、山林百二十九町八反二畝八步
爾來十幾回各字代表者の交渉會を開き協議に協議を重ね亦府より農務技師を聘し財産統一必要の講話會を開く等、種々なる手段を弄して村民に統一必要の感念を喚起せしむるに努めたるも東奔西走殆ど寢食を忘るゝ迄の熱心も各字の財産に

懸隔ある爲り容易に纏らざりし委員會に區長會、村會と交々も召集して之れが同意を促し結局畑十町一反十二步と山林十三町六畝二步は他人に譲與し、宅地五百二十坪と山林百十六町七反六畝六步は村有財産と爲すに決し同年十一月全く統一を完成するに至り、されば直に技術員を派し實地測量を爲したるに山林の總面積二百二十一町六反六畝歩となりたるを以て内百二十八町九反五畝十歩に對し造林を施すに決し、四十四年三月度及び四十四年度に於て造林せしもの二十一町一反歩にして之れに栽植せる杉苗二万六千五百七本楡六万八千四百四十四本を算せり、尙爾來引續き植林中あれども四十五年七月氏は村長滿期の爲り氏が事績は此處に打ち切りとなりたり、然りと雖も此百二十八町余の造林計畫を爲したるものは氏にして年と共に森林の榮ゆるを見れば氏が事績の顯著あることを何人も想到すべし、爲に明治四十五年二月村の有功者に擧げられ、同年六月京都府に於て第一回地方改良講演會席上に於て四所村を表彰せらるゝに至りしなり、同會に出席し其表彰状を受領せし氏は亦名譽たりしなり、尙氏は明治四十四年三月加佐郡農會議員同産牛組合委員、同評議員等に當選、大正三年三月滿期退職せり、
氏資性温厚沈着なれども志操堅實にして抜くべからざる氣骨を有せり、言多からざれども其殺する所は悉く誠實の結晶にて一旦是とせる事は徹頭徹尾成功を期せされば止まざりされど克く人の言を容れて事を圓滿なる裡に解決するを見地とせり、之れ何人も至難とせる部落有財産統一を他に率先して成功せしめたる所以あり、功成り名遂げて退くは此時ありと大

正三年以來一切の公職を辭し閑地に花鳥風月を友とせり、氏一實に多幸と謂ふべきなり



加佐郡會議員

大森清四郎君

加佐郡由良村

大森家は由良村に於ける名家なりしも一時中絶せざるを遺憾とし同村の豪農中西孫兵衛、中西六右衛門兩氏が相談の上へ孫兵衛氏の男と六右衛門氏の女と娶合して大森清四郎を再興せしものにて、現主清四郎氏は其嗣子あり、幼名を芳太郎と稱し明治五年十一月生、前代の逝去に依り清四郎を襲名せるものにて、前代清四郎氏は實に模範的人物にして農業の傍ら英販小園物商を營み、朝は鶏鴨に關て夜は星を觀て歸へるの勞働を敢て厭はず、勤儉力行今日の産を成したる成功者あり、殊に英販なる頭腦と智し決斷力に富み、村總代たりしこと多年明治二十二年前村制の實施に當りては同村々長に擧げられて自治政の基礎を造りたるが如き其名望は村内に普き村民何れも子弟に教ゆるに「清四郎さんを見よ」と其行狀を語れり、此一事以て如何に村民が崇拜し如何に清四郎氏の徳の高かりしかを知るに足るべきあり、
現主清四郎氏亦聰明にして明治三十一年四月擧げられて前

村會議員となり、四十一年三月同村區長となり、大正二年四月再び村會議員となり大正四年九月擧げられて郡會議員となり大正五年五月同村助役となり何れも愛勤して今日に至れり實に堅忍自勵潔白にして人に隔壁を設けず、酒々落々貧富の別を作らず、權貴に阿せず、己れの欲する處は辟々論して屈せず、されど非を是ありと稱するにあらず克く他人の意見を容れて可否を決す、實に清濁併呑の雅量と有せり、手腕亦卓越にして將來を遠目せらるゝもの甚大なり殊に氏は生花、藍曲に趣味を有す、兄弟三人あり弟ヲ子は同村義田惣入氏に嫁し、殊する子是小室文吉氏に嫁し、令弟熊藏氏は宮津町なる現信用組合長田中喜一郎氏の養子となり、兄弟四人が何れも相當の地位にありて人も羨む家庭に主たるは氏が一世其名を轟かしたる前代清四郎氏の教育振と徳をしのむるに足れり、大森家の隆盛謳歌すべし、氏益々奮闘以て現在に甘んずる勿れ。



模範人物

荒木信次郎君

加佐郡朝來村

荒木家は朝來村の柴原と稱して地方有名なる門閥家たりしも先代の世は不幸にして祖先傳來の産を窮か流逸するの止むなきに至れり、其の跡を繼ぎたる氏は先代の失敗を挽回せしめざるべからずと、一意専心農業に従事し敢て他を顧みず、年二十一歳徴兵の爲め舞鶴要塞砲兵大隊に入營したるが在營中も日曜祭日は勿論休暇あれば必ず歸宅して農事を手傳ふとす時も空しく経過する事なく、斯くの如くあれば營内に在りても最も品行方正にして他の模範とさへ稱せられたり、累進して下士となり歸郷後は益々農事に精勵し、近時は夫人の實家たる同郡東大浦村嵯峨根孫兵衛氏と共に編數網に従事するなど眞に目覺しき活動を繼續して今日に至れる人にて僅か十數年間に於て獲得せる資産は頗る大なるものありて、今や先代の失産を償ふに尙餘りあるに至れり、斯くの如く氏の行動は常に模範的なるを以て其令名亦村内に普き村會議員となし、加佐郡東部傳染病院組合議員となし、在郷軍人會役員とす等常に樞要の地位に擧げられ、氏亦公共の爲には努力

を惜まず政々として貢獻せり、愈々名聲は大なるに及びたるを以て衆望は同村々長たらんことを熱望するに至りたれども、之れ許りは勘忍して呉れ未だ其器にあらず殊に今少し家政整理を要すればとて固辭して出でされども早晚其任に當らしめざれば止まざるに至るべし、
氏は幼時は却々の醜白者ありしも長するに隨ひ其性格は殆ど一變して今は實に温厚者實常識の四熟したる好紳士たり、其在營中は角力の親分として知られ殊に一人前の飲酒家なりしが今は其れさへ禁酒して努めて修養を事とせり、態度沈着なる裡に覇氣を有し面と向へは如何なる強敵とも挫かざれば止まざるの氣骨あり、議論は正確にして衆人を首肯せしめ且つ清濁併呑の雅量と有せり、されど人に接する極めて謙讓にして徒らに大を欲せず、着々として其敏腕を發揮しつ、あり眞に農村に於ける模範的人物として稱揚するに足れり、君年齒尚春秋高し幸に自重自愛以て衆望に答ならざらん事を。

東大浦村消防組頭

志樂幸太郎君

加佐郡東大浦村字西屋



同家祖先は天明八年正月本家志樂原の二男分家したるものにて、累代の家名を仙左衛門と稱し隱居すれば仙右衛門と改名すると家憲とあせり、本家志樂原の系譜は火災の際烏有に歸し今は口灸に傳ふるのみなれども祖先は延慶より天弘迄加佐郡志樂庄市場城主設樂五郎左衛門尉が若狭國高濱城主遊見八郎に討亡せられたる際其一族が落ち來りて一家を創し歸農せるものありと云へり、氏は安政四年五月二十六日現住地に呱呱の聲を擧ぐ、祖先分家以來農を業として代々庄屋役を勤む先代仙左衛門氏は明治維新まで庄屋たりしも維新の當時登岡縣より小區長を命せられ京都府となるや戸長に任せられたり、氏は明治十三年六月加佐郡赤野村外二十ヶ村組合戸長より原校學務委員拜命十五年七月退職と同時に加佐郡長より加佐郡六番學區學務委員拜命、十六年十二月學區制の改正により更に京都府より加佐郡六番學區學務委員拜命せり、明治十七年四月西屋村會議員に擧げられ、十八年九月又も學區制改正により赤野村外二十ヶ村組合戸長より六番學區學務

委員拜命せり、明治二十二年四月町村制實施の際東大浦村會議員に當選翌月同村名譽助役となり、二十三年五月同村名譽村長に就任せり、二十六年三月同村農會長に擧げられ二十七年三月同村顯系農會長に擧げられ同年五月村長滿期再選、二十八年四月東大浦村外一ヶ村組合長に擧げられ、同月同村々會議員再選二十九年五月村農會長再選、同年十二月家事都合に依り村長辭任したるが、此間二十七八年戰役あり其勞により賞勳局より木杯一組を下賜せられたり、三十年三月東大浦村外一ヶ村組合會議員に擧げられ同年九月同村常設土木委員當選、三十一年一月再び同村名譽村長に擧げられ其月東大浦外一ヶ村組合長となり、三十一年二月加佐郡全町村組合會議員當選、三十三年三月村長再選三十五年四月辭任三十六年十月加佐郡會議員に擧げられ、三十九年五月五度同村名譽村長となり四十年八月辭任大正二年二月六度村長に擧げられたるが大正四年十二月辭任、大正五年一月京都府警察部長より東大浦消防組頭を命せられ本年五月村會議員に擧げ

られ共に今日に至れり、此間事績の見るべきもの訪からず、學校の新築を始め産業に衛生に改善せられたるもの實に枚擧に遑あらず、爲に明治三十年一月同村會議長より多年職務に盡瘁したる功により感謝狀に宣德火鉢一對を贈與し卅五年六月東大浦村外一ヶ村組合長より大浦高等小學校設立の功勞に依り金若干に感謝狀を又同年七月同村會議長より公務精勵の功に依り感謝狀を、大正三年一月同職長より公務精勵二十五年以上精勵したる功により表彰狀並に銀盃一個と贈呈せり、大正四年十一月賞勳局より大禮記念章下賜せられ五年二月又も同村會議長より公務精勵の功により宣德火鉢一對に感謝狀を贈りたる等何れも氏の功績を證するに足れり、

氏は秩序酌見るべき學歴を有せずと雖も其頭腦明敏にして氣品高雅、態度沈着にして思慮周到若も人をして嫌厭たらしめず、其人に接するや篤實にして寛容、城壁を設けず諍々ど

語る一言一句は至誠の結晶にして對者に一種の温味を感せしむのみならず最も後進を愛撫し親切と同情を以て誘掖に努め亦一面には賢すべからず威權を存する所は當代稀有に見るの人材たるなり、殊に氏は深慮遠慮にして最も責任を重じ其事に當るや一時の盛衰の爲に進退を苟せず石橋も叩て云ふ頑強なる風あれども其發する一言は千金にして政治界にも實業界にも重く用ひられ、今や漸く開地に就きたれども村民其袖に縋り乞ふに消防組頭を以てす、其任や輕からざれども晩年の思出にと喜んで之れを諾したり、されば今尙村會議員として村政に參與せるのみか消防組頭として人民保護の大任にあたり、然れども宅は嗣子正雄氏王として農業に従事し家運益々隆盛たり、氏亦何をか顧慮する物なく幸福なる身の上たり、益々健在鶴壽を以て國家の爲り貢獻を祈る。

京都府立醫學專門學校教諭

醫學士 佐谷有吉君

氏は加佐郡舞鶴町開業醫兼備陸軍一等軍醫佐谷省一氏の令弟にて佐谷家系譜に就ては別項省一氏と同じけれと之れを記さず、氏は幼にして聰明、次兄真吉氏は陸軍士官學校に其次兄正吉氏は海軍士官學校に入學せるも氏は長兄に習ひ刀圭家

を以て大を爲すべしと、互に其成功を誓ひ、舞鶴高等小學校を卒業するや直に京都中學校に入り操行方正學力優等を以て卒業し京都高等學校に轉じ更に帝國大學醫科大學に入り、是亦成績優良を以て卒業し直に京都府立醫學專門學校教諭と

ありしが爾來累進して教諭に任せられ現今に至れり、氏は資性温厚着實にして氣品高尚、明敏ある頭腦を有せり幼時父母に仕へて柔順、毫も邊幅を飾らず破れたる服、破れたる帽をも致して意とせず、眼中唯勉強の外あり日曜祭日の休暇と雖も寸時も外閑したる事なく書齋に籠りて他意なく孜孜として自修せり、されば長兄省一氏も甚く其志に感服し嚴父を助けて學資の調達に努め、氏をして遺憾なく其學を修めしめたり、氏今日あるは實に令兄省一氏の賜ものたるなり、されば氏も亦其恩を薄しとせず、父母なき後は令兄を眞の父母



加佐郡會議員
勳八等 瀨野磯藏君

加佐郡餘部町

氏は慶應二年三月十五日加佐郡與保呂村字木の下なる保里家に孤々の聲を擧ぐ、保里家は地方屈指の舊家にて代々庄屋を勤め村民の崇拜せる家柄あり、氏は年七歳にして親戚たる現住地瀨野家の養嗣子とされり、當時は未だ今日の如く軍港もあらず未開の一農村にて餘部上村と稱せしが、氏は幼にして頓悟伶俐にして一を聞て十を知るの天才を有せしかば長ずる

に隨ひ智識縱横、明治十六年弱冠の身を以て同村戸長に任せられたり、同時に管内學務委員を命ぜられ全村の盛衰を双肩に荷ふに至りたるが、明治廿二年町村制實施に當り餘内村と改稱するに至るや大字餘部上の區長に擧げられ、三十五年六月軍港設置と共に餘内村の一部を割きて餘部町を新設するや直に町會議員に擧げられ、同時に學務委員に擧げられたるが

爾來滿期再選二期に及べり、此間明治三十七八年戰役中同町助役として兵事事務に従事し其功により平和克復の後勳八等に叙せられたり、同家は元來農を専業とせしも氏は地方の趨勢に鑑み明治四十年二月質屋業を開業したるが爾來旺盛と極めて今日に至れり明治四十三年七月餘部町信用組合を創立し理事の互選にて其組合長に擧げられ自宅の一部を割いて事務所とし自ら之れを管理せり、明治四十四年九月擧げられて同町會議員となり大正四年九月滿期再選爾來現今に至れり、尙此間新舞鶴町外五ヶ村組合會議員となり、三舞鶴屠場組合會議員となり、餘部町に事業を起さば必ず擧げられて委員となる等同町に於ける名譽職には洩れたる事なく累任又は歴任し

て重きをなせり、氏は性剛直にして不撓一度志したる事は必ず之れを貫徹せしめされば止まずと云ふの霸氣を有せり、されば態度沈着にして一見付合ひ悪しく見ゆれ共其一度接すれば寛容として語り毫も城壁を設けず、諄々と語の進むに隨ひ至誠は披瀝せられて温情の翔すべきものあるを覺へしむ、殊に氏は義侠心に富み長者を敬し幼者を愛撫して獨り功を貪らず、力の及ぶ限りは出で、世話を爲し公共事業に貢献する等活動と以て生命とせり、されば町民何れも信頼して人望厚く今や餘部町に於ける先輩として牛耳を執るの勢力を有せり、君幸に自愛を事とし益々國家の爲に貢献あらんことを希望する次第なり。



加佐郡會議員
團野久吉君

加佐郡與保呂村字與保呂

團野家は地方に於ける舊家にして代々農を業とす、氏は慶應元年六月廿四日生、幼時小學校を卒業せる外他に何等見るべき學歴を有せざれども天與の秀才は年と共に遺憾なく發揮せられ、明治卅四年二月同村字與保呂村區長に擧げられ卅五年三月辭任同年七月同村收入役に擧げられしも三十七年七月

家事都合を楯に辭任せり、三十九年二月村農會評議員に擧げられ以來滿期再選を重ねて今日に至れり明治四十年四月再び區長となり四十一年三月辭任四十三年九月同村會議員に擧げられたる以來滿期毎に再選して現今に至れり、明治四十四年四月三度區長に當選したるも四十五年三月辭任せり、大正四

年九月郡會議員に當選せり。

資性温厚質朴の如くもれども裡に滿々たる勇氣を有せり、
頗る明敏にして、適取の氣象に富む、人に接する謙讓篤實に
して寛容、強て磊落を氣取らず、淡白にして兩々相向へば一
種の温味を感せしむ、真に一見舊知の如し、親切にして同情
に厚く且其之れを口を下ぐれば見捨る事の出来ざる義侠心
ありて克く他人の世話を爲す、氏は時岡同村長の事務家たる
に反し職時に於ける獲勝に適せり、實に與保呂村に於ける外

加佐郡會議員

西村 安治 君

加佐郡舞鶴町

氏は加佐郡朝來村の名家荒木家に生る、地方高等小學校卒
業後農業講習所に入り養蠶教師となりて暫く新業に従事せし
が、現住地西村家に一子なき爲先代舊左衛門氏に養はれて嗣
子と爲る、西村家は新舞鶴町に於ける素封家にして大地主と
り、然るに先代舊左衛門氏は不幸にも早世せられたる爲一家
一門の悲嘆は暫ふるに物なき有様ありしも、夫人安子は頗る
賢母にして亡夫に代りて自ら一家を治り、嗣子たる氏を督勵
して農業に従事し且つ營業たる素養製造を爲す等運算もき爲
り、家運は益も減みなく益々隆盛を極むるに至れり、在るこ
と數年にして氏其家督を相續するに至りしが、社會は年々其

に變遷して同地の如きも倉橋村の一部たる農村なりしも醫學
軍事諸設置と共に人口俄に増加して廿九年には町制を布くに
至れるも全く舊体を失ひ一新して一小都會を爲すに至りし
かば、氏も亦舊來の營業に甘んずる能はず製蠶業は勿論農を
も廢して海軍御用商人となり大に家運の發展を計り、醬油、
酒、酢等の販賣を開始し、生命、火災等の保險代理店五、六
程も引受け亦一方には風呂屋業を營む等時機に適する各種の
營業を開始し自ら陣頭に立ちて活動せり、のみならず新舞鶴
町より若狹に趨ゆる交通機關もきは新舞鶴町の商業に多大の
影響あれば町發展策の一として何か相當の設備をなさ

るべからずと同町の元老飯根一治氏と謀り西阪自動車合資會
社を創立して自備車營業を開始し現に其業務相當社員たるが
如き、總て營利事業には相違なきも其半面には公共的義務の
含めるあるを稱せざるべからず、斯くの如く營業は日に月に
進展して氏の名聲亦大を加ふるに至りしかば明治四十年舉げ
られて町會議員となり四十二年與保呂川水警隊防組合議員
となり新舞鶴町實業會役員となり、借家組合長となり、昨年
九月加佐郡會議員となる各方面に用ひらる、に至れり、
氏は明晰なる頭腦を有し氣骨稜々果斷に富む、人に接する
磊落落白く談し毫も人を憚らず、活發にして進取の氣象に
富み交際亦巧みなり、眞に口入丁手入丁の才子にして殊に政
事上に趣味を有し郡の元老上野彌一郎、林田彌壽夫兩氏と親戚
の關係より及ばず彈力も渺なからされども今や東部に於ける
政友會系の重鎮たり、本春代議士總選舉には長田桃藏氏の參
謀として其名を博せり今や東部に於ける政界の元老は全然懸

醫師

柳 田 厚 二 君

加佐郡新舞鶴町

氏は岡山醫學專門學校出身の秀才にして他府縣醫學專門學
校出身者に比すれば誇りとするに足れり、殊に同校初期の卒
業生にして當時未だ何れの地方にも専門の智識を得し新進敏

腕家の開業醫は、極めて稀有の事に屬し草根木皮の竹庵に甘
せり、されば氏が郷里加佐郡倉橋村に歸省し開業したるは暗
夜に燈火の譬へに洩れず、新進の先生として頗る好評を博し、

三里五里を遠しとせず来り診を乞ふもの引も切らず、名聲は噴々として揚り手腕は愈々發揮せられて倉橋村醫となり同村學校醫を兼務するに至りたるが、明治三十九年倉橋村を割いて新舞鶴町を新設するに當り居を現在の地に移し同時に新舞鶴町醫となり、新舞鶴警察醫を囑托せらるゝに至り爾來何れも勤慎して今日に至れり、殊に氏は多方面に趣味を有し現に新舞鶴町中濱區長たるが、明治三十九年置町の際擧げられて加佐郡會議員となり、四十四年満期の際再び擧げられて郡會議員となりたるのみか郡參事會員に擧げられ、郡會の牛耳を執るに至れるなど頗る政事方面に活躍せる爲め郡民は其敏腕を欽慕するに至り遂には府會議員候補者に擬するに至りたるが、斯くなれば勢は本業たる醫業には欠陥を生ずるに至り榮榮する患者時には先生の顔を見ずして空しく病室を提げ



加佐郡會議員

勳七等 荒木彌太郎君

加佐郡河内村

荒木家は地方に於ける最も古き舊家にして、先代藩兵衛氏は資性温厚謹直にして頗る村内に名望あり、久美園藩に屬して任屋を勤り應藩置懸たるや選ばれて同村戸長となり、其後

更に河内村外九ヶ村聯合戸長となり、明治廿二年同村制實施迄勤慎せり、氏は其長子にして元治元年十二月現任地に應々の聲を擧ぐ長するに及び博識頭悟、明治十三年小學校全科を

卒業し爾來夜學會に入り普通教育を修む、十九年より前後三ヶ年間行政學を修め廿年同村總代に擧げられ、京都より官津に達する車道開鑿に際し頗る功ありて名聲を博せり、爲に明治二十二年同村制實施に當りては大多數を以て村會議員に當選せられたり同時に同村區長に擧げられ二十五年學務委員となり、河守町外五ヶ村組合會議員となり、二十七年同村收入役に擧げられ二十九年同村々長となり三十二年退職製糸進榮社を興して其社長となりしが三十五年辭任同年更に同村助役となり、氏は一身以て克く内外複雑なる事務を處理して戰國に於ける村長たるの任務を全ふせり、爲に一般行賞の御沙汰あるや氏は勳七等旭日桐葉章並に金五十圓を下賜せられたり、尙其筋より褒賞を下賜せられたるもの十數回の多きに及び此間村役場の新築を始め事務を擧ぐれを枚舉に遑あらず、村長としては大の成功者たるを四十年十月満期となるや再び候

醬油醸造家

山中長左衛門君

加佐郡舞鶴町字魚屋町

山中家は舞鶴屈指の舊家にして代々長左衛門を襲名し醬油醸造を業とせり、氏は前代長左衛門氏の長子にして其人とあ

補者に推れたれとも新進の途を開く爲りて辭して出でず、されと衆望は全く其閑地に入るを許さず大正四年九月郡會議員に擧げ強て其任に就かしめたり、されは現に村會議員、郡會議員等の職に在りて今や同村に於ける元老同村に於ける功勞者として村民の欽慕する處たるを、氏は資性温順にして淡泊、其欲する處は諄々として論じて俾らす、至誠以て事に當り確實を以て見地とせり、されを人に接する信義を重んじ實際と相伴なはざる虛名を厭ふこと蛇蠍の如し、されは清濁併呑の雅量をも有し洵に常識の圓熟したる君子なり、殊に氏は近時養蠶に熱中し且つ農事の改良を唱導し種子の選擇、肥料施用等に留意するなど老いて益々盛なるの概あり、されは娛樂としては特筆すべき程のものなく、唯聊か飲めば必ず一口淨瑠璃をやる、天心爛漫として愛すべき特長を有せり、君年齒尙春秋あり幸に自愛と事とし益々農村の爲に貢献を祈る。

げらる、等次から次へど名譽職に異任して令名を博せり、氏は資性温厚沈着にして言多からざれども、氣品高尚にして態度寛容、自然に備はる實日は道が名家に生れ嚴格なる家庭に人となりたる佛なるを傳ばしむるものあり、頭腦明敏にして深識遠慮に富み、勤儉力行頗る理財の途に長せり、されば家督相続後は一意専心醬油醸造業に従事し自ら店員と伍し

高野村長

坪内泰吉君

加佐郡高野村字城屋

明治八年チエノ管轄時代より戸長となり區長となり村會議員となり、村長となり郡會議員となり學務委員となり今日迄實に四十三年間と云ふ長月日を殆ど間斷なく公職に參與し輪廻層を通ぐるも尚健筆として壯者を凌ぎ、加佐郡町村長中の最古参として噴々たる名聲を博する徳望家を坪内泰吉君とす、氏は實に高野村に於ける柱石として町村制實施以來今日迄町村自治の進展せるもの言語に盡し難く具に日進月歩の有様にして教育に産業に衛生に交通に風紀に改善せられて事々物々隔世の感なきはあらざるなり、高野村の地亦然り、學校の新築を始め其有財産の整理、道路改修、産業の發展農村の事業たる事は悉く進歩改良せられ郡内各町村と伍して頭角を顯はすに至れり、之れ何の爲や云ふ迄もかく理事者たる村長將

て終日孜孜として働まず、主人窮くの如くあれば主人を見習ふ店員何れも勤勞怠らず主家大事と奉公せる爲り同家醸造の醬油は年と共に益々好評を博し、商况頗る激振を來せり、氏は實に幸運漢にして町民には且那櫻且那櫻と崇拜せられて重きを爲せり、されど年齒尚春秋に富む、決して現在に甘んずることなく益々奮勵努力以て子孫の隆盛を期せ。

た農會長等の指導畫策其宜敷を得たるが爲りあり、其大責任を荷ひ献身的努力しつゝ、あるは即ち氏あり、氏は資性温厚沈着の裡に抜くべからざる氣骨を有せり、されば人に接するも容易に口を開かず先ず人に千萬言を費させたる後其欠陥を拾ふて徐ろに口を開き、チエノく進ると云ふ風にて名論卓説にはあらざれども最後に勝利を博するを常とせり、斯かる有様あれば稍消極的に失するの感あれども、質朴を好む農村としては却て歓迎せらるもの、如し、之れ同村民が無二の手腕家として信頼し幾度辞意を洩らせとも肯せざる以所たるあり、然り氏の生命は村政にあり、幸に自愛を事とし總論の辭を以て益々國家の爲りに貢献を祈る。



舞鶴稅務署長

長久保得平君

京都府加佐郡餘内村

長久保家系譜は戊辰の役に於て兵變に罹りて烏有に歸し爾來記録の存するものあらざれば、其詳細を知る能はざれども口傳の傳ふる所に依れば、祖先は遠く足利時代に始まり、世々伊豆國伊東に住居せり、日蓮宗の開祖にして傑僧たる日蓮上人が伊東に配流せられたる際當時の祖先は上人の國家主義なる事を看取し弱に衣食の料を贈りつゝありたることを時の政府の知る所とあり、厭迫甚しく爲に郷國を退去するの止むなきに至り子孫數代駿河其他の諸國に轉住し、徳川氏の時代に至り水戸家に出仕し次て同家の附家老たる中山家に仕へ、四代前に至り彼の天狗書生の争ひに武田方に屬し利運拙かく敗走し、姪に當れる福島縣石城郡湯本村温泉神社の社掌佐波古和泉に頼り歸農して藩に歸へらず遂に同地に永住する事となり今日に至れり、

身体の鍛鍊のみに留意し悠々自適、蠶漁等を樂みとせたり然るに明治二十五年福島縣に於て收稅属二人を採用するが爲め、文官普通試験を執行する旨の公示ありたれば、之れに應じて登第し、同年三月十八日舞鶴縣收稅属に任せられ月俸十圓を給せられたる以來其職に在りて明治二十六年十一月十級俸、二十八年十月九級俸、卅年四月八級俸、三十一年六月七級俸、卅二年三月俸給令改正に依り更に七級俸、三十三年六月六級俸、卅五年四月五級俸、卅八年三月四級俸、四十一年三月三級俸、同年稅務官となり七級俸、四十二年六月六級俸、四十三年十二月五級俸、大正三年七月四級俸、大正五年十一月三級俸と恰も梯子を登るが如くに累進して今日に至れり氏は道が名門に人となりたる文に氣品高尚優雅にして態度沈着體面自ら備り、人に接するや篤實にして寛容毫も隔壁を設けず諄々克く語る、亦如何なる交際にも避けし事なく、長者を敬し幼者を受撫し以て其圓滿を圖れり爲に部下の氏に仕ふることに眞に親子も嘗みざる融和を保てり、殊に發する

一言一句は至誠の結晶にして對者に一種の温味を感せしむ、其温情の掬すべき裡に何處となく責任の籠れるを覺へしむるものあるは、其職の厳正にして犯すべからざる信念の然からしむるを感ぜしむ、稅務の任や實に至難中の難事にて所得稅、營業稅等に至りては怨恨の衝点と云ふも過言にあらず、其難局に立ち最も公平確實にして職責を全ふし亦一面に於て



札 稅務監督局在勤

農學士 井口重次君

北海道札幌區北一條西七丁目

近時我國運の推移發展と共に商工業は著しく盛大となり、世には商工立國説を唱ふるもの紛からざれども、我國の現在はまだ商工業を以て國を立つること能はず、國産物の上より見るも亦其人口割合より觀るも依然として農業國と云はざるを得ず、即ち我國家は農業に依て支持せられつゝあると共に農民は實に國家の柱石たるあり、故に農村の改良を圖り農民を向上せし農業をして益々進歩開發せしむることは實に我國現代の最も緊要問題なりと謂はざるべからず、然るに近時有ゆる潮流は滔々として漲り、國家の柱石たるべき農民を屬つて或は一攫千金的の浮薄なる思想に沈溺せしり、自ら其業の

は人民間に曠々たる信望を得ず、其幼時秩序的學歴の誇るものなしと雖も、今日の地位と名聲を贏ち得たるは其凡人ならざるを窺知するに足れり、殊に嚴格にして心事の清廉潔白なる到底他の官吏に見るべからざる所にて、地方官吏の典型たるあり、年齒尙春秋あり折角自愛を以て益々其美的を發揮し範を後世に示されんことを。

學んべきを忘れ、祖先傳來の家業を捨て他に轉ずるもの日に多きを加ふるの趨向あるは之れ實に國家の爲り由々敷の大事にして職者の講究すべき問題なり、然るに此時身を挺して農藝科の爲に貢獻しつゝある井口重次君の如き崇高なる人物を加佐郡より出したるは農村の誇りとするに足れり、氏は明治二十一年七月二十三日加佐郡舞鶴町字松陰十九番地に呱呱の聲を擧ぐ、家は世々牧野家に仕へたる藩士なり、氏は明治二十八年四月舞鶴町外五ヶ村明倫小學校に入學三十二年三月尋常科卒業、同年十月高等小學一年生より北海道札幌區創成尋常高等小學校に轉じ明治三十六年三月高等科卒業

同年四月札幌區北海中學校に入學四十一年三月同校卒業以來東北帝國大學農科大學の履を拜命し、在ること二ヶ年、明治四十三年九月進んで東北帝國大學農科大學、大學農科に入學大正二年七月同科卒業同年九月更に東北帝國大學農科大學農藝化學科に入り大正五年七月十日卒業、全年七月十八日稅務監督局技手を命せられ六級俸を給與せらる同時に札幌稅務監督局鑑定部在勤を命せられ以來今日に及べり、氏は資性温厚にして氣品高雅、明晰なる頭腦を有し舞鶴小

倉梯村長

高橋彌市郎君

加佐郡倉梯村

氏は加佐郡東部に於ける村長中の最年少者にして新進有爲の人材たるあり祖先代々農を業とし先代數太郎氏は頗る勤儉力行の人にて同家今日の産を爲したる成功者たり、氏亦先代に譲らざる極めて緻密なる頭腦を有せり、長ずるに及び博識聰明、同村區長となり、村會議員となり、一躍村長となる等先輩多き倉梯村に於て忽ち一頭角を現はし村民に崇拜せらるゝに至る、現に村長の職にあり、赤十字社分區委員其他各種團體の役員を兼ね全村の盛衰を一身に荷ひ致々として其職に精勵せり

氏は洵に當世肌の好紳士にして資性温厚君實謙讓にして、

學校時代の如き極めて嚴格にして博識強記、眞に麒麟兒とは彼れの事ありと稱讃せられたるが、果せる哉、中學校は勿論大學校の如き各學年とも成績優等にして大學校卒業するや直に技手として六級俸を給せらる之れ其手腕の凡ならざるを知るべきなり、されど年齒尙弱冠にして多く語るべき事績を有せずと雖も其蓄蓄せる學力に今一段の修養を加へんか、大成期待すべきなり、須らく自重以て有終濟美の人となれ。

人と争を好まず長者を敬し細民を愛撫し極めて圓滿を事とせり、されば言多からざれども熱心にして努力を惜まず、頭腦明晰にして細微の点にも注意を拂ひ堅忍不拔、實踐躬行の人あり、されば何事にも慎重なる研究を加へされば着手せず故に一旦事を起さば必ず成功を期せざれば止まざると云ふの自信力を有せり然れども就職尙日淺くして特筆すべき事蹟あらざるは遺憾あれども年齒未だ四十歳に達せず今や漸く岸邊を離れて大海に航せんとせる小舟に似たり、前途實に遠遠にして其彼岸に達する容易の業にあらざるなり、されど氏が腦力、氏が抱負、氏が手腕と楫となし先輩池田堀五郎、池田彌三藏

両氏の長所を採て以て目標とせんか如何なる怒濤狂瀾も慮と
するに足らず、慥かに両氏を凌駕するの機会に到達すべきは

信じて疑はざるあり、宜敷自重修養以て其大成を期せ。



中筋村の功勞者

故 堀江忠兵衛君

加佐郡中筋村

堀江家は地方に於ける門閥家にして代々忠兵衛を襲名せり
農事の傍ら質屋と金貸業を爲せり、加佐郡屈指の大地主にし
て先々代忠兵衛氏は頗る元氣旺盛なる人にて、人一層の働き
を爲し常に勤儉を重じ隆々産を成し今日の基礎を造りたる偉
人にて堀江家中興とも稱すべき成功者なり、先代忠兵衛氏亦
父の意を承けて殖産興業熱心にして且つ努力を惜まらず一意専
念家運の發展に留意せり、爲に資産は愈々益々向上して郡内
に卓越し多額納税者たるに至れり、斯くの如くして堀江家の
財産は一頭地を抜き噴々たる名聲を博するに至れり、財産斯
の如くあれば氏の令名亦年と共に大なるものあり、區長とあ
り村會議員とあり、學務委員となり、漸次其手腕は發揮せられ
て同村々長とあり、農會長とあり各種團體の長となり或は其
委員とあり全村の盛衰を一身に引受くるの重大責任者とある
に至れり、斯くして村民の信頼は益々厚く加へ、村政の事た

る大小の別はあれども一家の經濟を敢て異らず、堀江の且那
が過去家政に於ける手腕を以て村長の任に當られんか自治の
發展期待せらるべし、増して我々村民一團となるも尙及ばざ
るの、財産あれば失敗を招きたらんには忽ち我身に降り掛る
難義となるあり、されば村政は我々村民の口にする處にあ
らず且那に任せてざる置けば別條なしと云ふ風にて氏が村長と
ありてよりは誰一人村政を云々するものもなく、恰も村民は
父母の膝下に在るが如く安心して家業に服するに至りたり、
村民斯くの如くあれば、氏も亦之れに鑑み出來得る限り節約
して溢費を矯正して村民の負担を軽減ならしめ、眞に赤兒に
對する慈母の如く二六時中村政の進展に努力し孜孜として精
勵倍々學校の新築、耕地整理事業を始め教育に勸業に交通
に衛生に改善せられたる事績は實に枚擧するに遑あらざるあ
り其徳望は村内に昔き村民其堵に安んぢ中筋村の功勞者とし

て崇拜措く處を知らざるの有様なりしに惜むべし、明治四十
五年病の爲に職を辭せらる、爾來自邸に加藤中なりしも養生
叶はずして、昨年滋養漸去せられたるは堀江家の爲のみあら
ず、中筋村の爲め齊しく憾とする處たりしなり、
嗣子亨氏家督を相續し父祖の業たる質屋、金貸を繼承せり

と雖も、年齒尙二十有餘歳、京都中學校を卒業せる外、他に
何等語るべき經歷を有せず、されど博識明敏にして頗る田圃
あるあれば耳は聊か遠しと雖も先代の如く用ひらる、の日
、來るべきは信じて疑はざる處あり、幸に自重奮闘あれ。

加佐郡會議員

加佐郡農會長
加佐郡蠶糸同業組合長
加佐郡畜産組合長
有本辰藏君

加佐郡高野村

氏は明治維新の波風立ち騒々元年を以て現住地に孤々の聲
を擧ぐ、幼時穎悟博識強記俊才を以て稱せられたるが、府檀
は二業より香しどの響へに洩れず、其の學校時代の如きも成
績優等と占め、長するに従ひ漸次其本領は發揮せられて田舎
の百姓に甘んずる能はず、出て加佐郡役所に奉職し爾來累進
して首席郡書記となり、加佐郡行政に於ける事務を双肩に荷
ひ上下の信頼厚く噴々たる名聲を博するに至れり、爾來其敏
腕は遺憾なく發揮せられ郡農會の組織せらるゝや轉じて農會
長とあり、尋て加佐郡蠶糸同業組合長となり、加佐郡畜産組
合長とあり郡産業界を左右するの責任者たるに至れり、のみ
ならず高野村會議員に擧げられ、加佐郡會議員に擧げらるゝ
等其名望は頗る大なるものあり、三團體長の任務たるや、郡

長の職に比し何等遜色なし、寧ろ郡長の任務よりも至難ある
ものあり、郡長の任務たるや上意を承けて町村長に傳へ之れ
を監督して勵行せしむれば是る町村長は學力あり識見あり、
町村に於ける一流の人物たるあり、殊に自治體の王腦者たれ
ば他の強制なくとも自ら之れとなし終らしむるの腦力あり、
三團體の内郡農會は多く町村長を以て村農會長たらしむれば
郡長の町村長に於けると異らざれども蠶糸業組合に於ては小
組長よりも直接技術員に督勵する事項多くして何れの郡組合
に於ても何百人と云ふ技術員を有せり、而して是等技術員の
多くは蠶業講習所を漸く卒業せし位なる壯年のみにて其人格
に於ては技術員又は教師として仰ぐ程の價値なし、然れども
甚だ生意氣にして何れも蠶の理より生れたるが如く天狗たら

ざるはあし、斯かる物騒なる技術員を然かも多数統率して新業の發展を圖る容易の業にあらざるあり、關系業斯の如し増して畜産組合に於てをと思ひ半に過ぐるものあり、元來畜産の業に従事せる者の品性たる伯樂と稱し又は馬喰勞と稱し牛馬市に臨めば牛馬の賣買よりも賭博に重きを置き、法律を犯して盛んに勝負を争ひたるものなり、されば世運進歩せりと雖も彼れらの腦裡には尙陋劣なるものあり、彼れら此惡習慣は直接、間接、組合の發達を阻害すること尠少あらざりしあり、殊に組合の事業として開設する牛馬市の如きは全く彼れらの本陣を奪取せるものにて、今は彼れらも時勢に餘義あくせられたりと覺悟し何等反抗するものあらざれども、最初は随分反對論八釜敷かりしものあり、畜産の獎勵一に飼養者に

ありと雖も賣買亦之れに伴ひ宜敷を得ざれば其目的を達する能はざるあり、されば彼等無頼漢に等しき人間を操りて融和を保ち日進月歩の斯業をして克く今日の隆盛をなさしめたり氏は資性温厚着實の裡に剛氣を有し、氣骨稜々果斷に富み然も大膽不拔進取の氣象を有し自信力に強し、されば思慮深淵にして輕舉妄動することなく最も責任を重せり、機を見ること亦敏にして實踐窮行未だ曾て失敗を演じたる事なく、殊に相場の變動限りなき關系業を獎勵して郡民に満足せしめつゝあるが如きは特筆すべき事にて、三團體何れ劣らき發展せるもの氏の功績と云はざるべからず、郡民の崇拜する實に故なきにあらざるなり、年齒尙尙春秋あり折角自愛を事と一益々奮勵以て郡產業界の爲に貢獻せられんことを。



朝來村長

梅原米藏君

加佐郡朝來村字大波下

同家先代は代々同村字朝來中に住し農事の傍ら酒造を業とせり、氏は明治五年一月二十日同地に呱呱の聲を擧ぐ、年十二歳同村小學校下等科を卒業するや現今京都市に辯護士を開業せる尾崎保氏が當時京都市小學校に教授を執りありしかを親

戚の關係より同氏に引取られ其小學校に入學し後ち京都師範學校附屬小學校に轉じ同校卒業後更に京都中學校に入學したるも家事都合に依り明治二十三年春年十九歳第三年生にて退學歸郷以來嚴父庄右衛門氏を助けて家事に従事せしも明治二

十七年嚴父は家督を長兄に譲り氏を連れて現住地たる同村字大波下四十三番戸に分家せられたり、爾來父子は専ら農業に従事せるが嚴父庄右衛門氏は頗る勤儉力行家にして朝は雞鳴起き夜は深更に臥し夜から夜に働くこと云ふ有難にして僅か十餘年間にして父子の手に造り擧げたる資産は非常なものにて今日同家の隆盛を見る全く先代の賜ものたるあり、殊に當時地方の教育は幼稚なものにて未だ中學程度の學を成りたるものあらざれば、氏の手腕は忽ち村民の稱讃する處となり、資産の大あると相俟ちて益々名聲を高むるに至れり、されば擧げられて區長となり、村會議員となり、明治三十九年九月一應同村々長の椅子を譲り得るに至れり之れと同時に村農會長となり、關系業小組長となり、畜産組合小組長となり、日本赤十字社分區委員其他各種團體役員とある等同村名譽職

の全部と双肩に荷ひ教育に衛生に勸業に將た交通に日進月歩の向上と伍して遺憾あらしめず、爾來其手腕は益々發揮せられ滿期再選と重ぬること二回以て今日に至れるが、此間事蹟の見るべきもの尠からず、氏は性剛直不撓一度志したる事は必ず之れを貫徹せしめずば止まずと云ふの勇氣を有せり、されど人に接する極めて円満にして如何なる交際にも避けたることなく、何人にも隔壁を設けず其平民的なる半面には亦頗る謹嚴あるものありて議論正確なるは衆と首肯せしむるに足れり、之れ村民が其徳を欽慕し村の柱石として信頼せる所以たるあり、今や同村のみか加佐郡村長中の古參として將た利ものとして重視せらる、君の生命は即ち村政にあるあり、益々自重奮勵以て村民の期待に背く勿れ。

大阪市聯合區會議員

勳七等

梅垣品藏君

大阪市北區堂島中二丁目

氏は明治二年二月十五日加佐郡舞鶴町字平野屋町梅垣市兵衛次男に生る、年七歳同地明倫小學校に入り下等科卒業十二歳にして藥劑商兼會社に奉養し後ち關西商業會社に轉じて勤務中、明治十九年大阪なる親戚に遷居せられて上阪以本業將の手傳を爲しつゝ、ありしが明治二十三年徵兵令に依り入

營せり、二十六年十一月三十日滿期歸休、翌一日歩兵二營軍曹に任せられたり、資性剛毅、進取の氣象に富み機を見るに敏なる氏は大膽にも明治二十一年赤手空拳を振ふて洋服商を興業し商號を舞鶴屋と命名せり爾來世の進運に連れ洋服の需用は年と共に大なるを加へ意外なる然昌を見るに至れり、されど其

年日清の役あり氏は十一月第一充員として召集せらる、廿八年三月歩兵一等軍曹に昇進同年三月征清軍に従ひ渡清各地に轉戦、平和克復に依り除隊後職功に依り勳八等瑞寶章並に金五拾圓を下賜せられたり、爾來益々奮闘商業に従事したるが幸運なる氏は買へば上る、賣れを下ると事毎に成功して珍からざる純益を博したるが明治廿七年日露開戦に依り十二月一日再び召集せられたり、以來征露軍にありて轉戦平和克復廿九年其身に依り勳七等青色劍葉章及び金參百圓を下賜せられたり尙且つ爾後恩給年金の特典に浴するに至れり、一方商業



池

内村長

松尾義太郎君

加佐郡池内村字今田

池内家は地方に最も古き舊家にして代々農を業とせり、氏は明治十四年三月二日午、幼時は却々の腕白者にて飯活なる氣象を有し友達と喧嘩をしても負けたることなく、頗る偉者たりしが、果せる哉、氣象の過れたる氏は其小學校に於ける成績亦他の兒童を抜き何時も優等にて範を示せり、されば其人となりてよりも年と共に修養の功果顯はれ明治四十年四月舉げられて村會議員となり大正二年四月満期再選、本年四月

數を以て氏を當選せり、大正四年九月満期となるも再び多數を以て推薦せり同年十月郡會亦氏を推して參事會員に就職せしむ現に其任にあり、尙大正二年六月學務委員に舉げられ、本年三月池内村長に舉げられたり、之れと同時に赤十字社分區委員を始め各種團體の役員を囑托せられ池内村の盛衰を双肩に荷ふに至れり、氏は温厚の裡に霸氣を有し、明敏ある頭腦は幼時の佛を偲ぶものあり讀書は氏が最も嗜好とせる處にて二六時中暇あれば書籍を繕き時代の進歩に遅れざらんことに留意せり、尙且つ其言はんと欲する處は之れを云ひ所信を貫徹して敢て威權



倉梯村農會長

勳七等 高橋龍平君

加佐郡倉梯村

高橋家は地方に於ける素封家にして代々農を業とし先代平左衛門氏は庄屋と勤り明治維新となるや戸長を奉職し、加佐郡聯合組合議員となる等同村の先覺者として公共事業に盡瘁せること多年噴々たる名聲を博せり、氏は其長子にして明治四年生、同村小學校を卒業せる外他に見るべき學歷を有せざれども明治二十四年徵兵として陸軍に入隊以來頗る勉學を

に居せり、其議論正確にして秩序乱れや衆人を首肯せしむるの雅量と有せり、志慮亦深淵にして輕舉妄動せず、其手腕の卓越せるは村民が欽慕措かざる所以にて、今や新選の村長として將亦郡參事會員として郡の重きに任せらるゝに至る、交際亦巧にして如何なる事にも避けし事なく圓滿を見地とあせり、真に加佐郡に於ける賣出しの花形牧者たるあり、されど年齒尙三十六歳前途實に遼遠なるあれば、須らく自重以て過去の經歷に鑑みて短を捨て長に向ひ奮進せんか府政壇上の人とある亦難きにあらざるあり、其れ自奮自勵大成を期せ。

志し在營三ヶ年間に磨き揚げたる手腕は實に他を驚かすものあり、日清、日露の兩戰役にも従軍して大に其特長を發揮したるが其功に依り勳七等に叙せられ士官適任證書を下賜せられたり、凱旋後は村會議員となり、學務委員となり、郡會議員となり同村々長に舉げられ村農會長とある等恰も階層を登るが如く信任の厚きを加へ村長満期退職すると雖も現に村農會

長、村會議員の任にありて重きを爲せり、

實性剛毅不撓、其所信を貫徹して敢て權威に屈せざるは其長所なり、されば一部の人士は氏を自して頑硬なり相尋なりと非難する者あらんも陽に甲を唱へ陰に乙を唱へて巧に責任を運かる、が如き身法者にあらず、されど人に接する篤實にして態度寛容、肺腑を披きて陰險からず克く人を見て可否を判断するの腦力あり、實に君の如きは敵としても愛すべきも

味方とすれば頼母しき男なり、真に其淡泊なる處は軍人肌好紳士にして園藝、書畫、骨董各種に趣味を有せり殊に田園生活は氏の最も好める所として日常婢僕と伍して倦まず之れ同家が年と共に榮へつゝ、ある所以にして家庭には子女八名あり嗣子龍雄氏は目下京都農林學校にありて俊才の聞へあり長女亦舞鶴高等女學校を卒へ補習科にあり才媛を以て稱せらる、氏の得意や思ふべきなり、益々自重修養以て其長所を發揮せよ。



帝國在郷軍人會
加佐郡中筋村分會長
後備陸軍二等軍醫 正八位 瀨野藤右衛門君

加佐郡中筋村字七日市

氏は明治十二年一月現住地に呱呱の聲を擧ぐ、幼にして聰明、伶俐を以て稱せられ一を開て十を知るの天才と有せりされば其小學校時代の如き何時も成績優等を以て他の模範と稱せられ有爲の少キとして將來を矚目せられたれども、家貧にして漸く高等小學校を卒業せるのみ、されば爾來立身の目的ありと雖も學資なき爲め已むなく中學程度の講義録に依りて獨學自習したるも郷里に在りては到底其目的の達し得ざるを慮り明治二十八年三月兩親にも告げず無一物にて奮然郷關

を出で旅を京都に負ひ身を儲せて食客となり、或は夜學に或は藥學校に通ふ等中學程度の學力を得んが爲には餘程の辛酸を嘗み眞に張雪の苦學を爲せり、其熱心に親戚も同情し明治三十年の春兩親に相談し且つ氏が希望を語り茲に初めて両親の許を得て醫學を修むる事となりたれば、氏は大に喜び奮んで成功を期すべしと勇んで東都に志し元東京醫學專門學校衛生學會に入りしが其の決心は從來の艱難苦學にて一層鞏固にあらしむるものありて、成績衆を凌ぎ優等を以て廿三年

同校卒業同年九月開業試験に合格し爾來順天堂、山龍堂病院に於て實地を見學し、濟生學會に於て衛生學、顯微鏡的實地演習を修得せること年餘業成りて歸省現地に開業せしものにて故郷に歸るとは實に氏の事を稱せるなり、されば開業以來忽ち名聲を博し患者踵を接するの隆盛を見るに至れり、明治三十七年日露戰役の爲に召集せられ陸軍三等軍醫として従軍、三十九年四月解除歸郷、其功に依り正八位勳六等瑞寶章を下賜せられたり、爾來引續き自邸に在りて診療に従事せり、氏は資性快活剛勝にして稜々たる氣骨を有し義侠心に富みり之れ幼時苦勞せるの徳にして血あり涙ある熱血男子たり、されば志操頗る高潔にして貧民を憐み醫藥の料も其意に任せて強請する事なければ村内に於ける名望は年と共に大なるを

加へ、同村醫、同村小學校醫は勿論、池内村醫、小學校醫をも囑托せらる、に至れり、帝國在郷軍人會の創立せらる、や擧げられて中筋村分會長となり現に其任にあり、のみならず中筋村消防組頭に擧げられて人民保護の重任を全ふせるが如きは特筆すべき事にて往古の火消しとは稍其趣の異なるものありと雖も舊幕時代の氣象は今も其跡を絶たず、殊に消防の職務たる柔弱男子の當り得ざるの激務たるなり此種職に在りて克く多數消防夫を統率す、其性質の一斑を知るべし、刀圭家にして消防組頭を兼務せるもの亦茂人かある殆ど皆無と謂ふも憚らざるなり、氏は斯くの如く國家の爲には身を賭して貢獻しつゝあり、洵に稱讃すべき行爲にて益々其美的を發揮し、有終濟美の人となれ。

有路下村長

時井森藏君

加佐郡有路下村

時井家は地方に於ける素封家にして代々農を業とせり、先代孫兵衛氏は酒造を業とし陸々産を爲したる大成功者にして時井家今日の大をなせるも全く先代の賜ものたるなり、氏は其嗣子にして幼時高等小學校を卒業せる外他に何等見るべき學歴を有せざれども、向學心旺盛にして暇さへあれば書齋に籠りて讀書或は算術に獨學自修して夜の更けるを知らず、斯

くして手腕は年と共に練磨せられ、同村區長となり、村會議員となり公職に參與するに至りたるが一時福知山區裁判所河守出張所書記を奉職せしも僅に三年余にして之を辭し、終に村民の推薦に依り同村々長の椅子に就くに至れり爾來既に數年あるも克く村治を統轄して教育に衛生に勲業に風教に日進月歩の社會を伍して毫も遺憾あらしめず若々其事績を収めて

克く村内の融和を保持し村民をして其塔に安んせしむるに至れり。

氏は資性温厚沈着にして餘り多くを語らざれども人に接する篤實田滿にして毫も隔壁を設けず殊に謙讓にして敵を作らず、至誠以て事に當り確實を目標とせり、されは一時の虚榮の爲に進退を苟せず、石橋も叩て而して後ち渡ると云ふ風な



實業界の成功者

關根周吉君

大阪市東區船屋町二丁目

齋しく是れ成功者と稱するも、中に大小輕重の別あるは勿論にして加佐郡出身者中の最も大なる成功者として實業界に謳歌せられたる、ある關根周吉氏は舞鶴町宇松陰關根敬治氏の三男にして家は代々牧野藩主に仕へ格勤の士として信任厚りしが明治維新の政變に家祿を失ひし爲、氏も何か獨立の生計を講せざるべからずと其小學校を卒業するや笈を大阪に負ひ時計商店の見習生となり「拮据奮勵、幾多の艱難を闘ひ、商機の秘訣を極めたれば遂に一商店を開業して時計商を經營するに至りたるが、偶々日清の役あり如何なるヤヤパンも羽を生して飛ぶと云ふ有様にて出征兵士に供給せられたる懐中時

計は實に莫大ありしものにて氏は此機を逸せず東奔西走以て今日の基礎をなせり、爾來時計の需用は日に月に増進して何れの時計商も一時奇利を博するの盛況を呈せり、越へて明治三十七年又も日露戰役ありて時計商の當り年、と云ふ好機に遭遇せしかば氏は最も機敏に活動して人一層の利益を占め資産幾十萬と稱せらるゝに至りたる也、近時同業者の増加夥しく生存競争亦昔日の比にあらず、互に儲けざる主義を鼓吹するに至りしかば、先見の明ある氏は何時までも一事業に固定するの不利あると自覺し、時計商を廢業して其資本にて借家を買入れ一方金貨業を開業したるが、之れまた時機に適し年

々發展して殆ど停止する處を知らず、今や大阪市に於ける大借家主として其名を知られ財産百萬圓と稱せらるゝに至れり氏は温厚篤實の君子にして進取的氣象に富み、人に接する極めて田滿にして義侠心を有せり、凡そ世の中に赤手空拳を振ひ造り上げたる財産家たるを見るに、多くは奸譎貪戻居ることを知らず、出すは懷裡より手を出すも厭ひ、得るものは猫兎の死屍をも受くると云ふ吝ちん坊許りあるに氏は全く其選を異にし、衣食住起居進退悉く紳士的にて亦人を遇するに

酒造業

池田邦藏君

加佐郡東雲村字中山

池田家は地方に於ける門閥家にして代々七良兵衛を襲名し半商半農にて農の傍ら製糖製油を業とせり、初代七良兵衛氏は元和四年逝去せられたるが爾來茲に三百年の星霜を閱し本年三月親戚知己を招待して盛なる三百年祭祝典を舉行せり、以來代々村役人を勤めて公共事業に盡力せり、中にも九代七良兵衛氏は牧野藩王より功に依り御染筆軸物を拜領し十代七良兵衛氏は藩主より木杯一組を拜領せり、現王邦藏氏は文久二年八月生にて其十二代目を相續し明治十二年清酒釀造業を開始せり、當時は地方一般釀造界は微々として振はず、甚だ寂漠たるものにして唯舊來の方法に安んぢ進んで改良の實を

舉げ進歩の道を講ずるもの殆どあきを深く慨し、明治二十一年以來自ら杜氏となりて實地を研究し或は先進銘醸地の視察を爲し亦は斯業の講習講話會に出席して學理を研めたる等只管改良に努めて餘念なく孜々精勵せること三十余年間研鑽の勞空しからず、終に銘酒池雲を醸出するに至り品評會又は共進會に出品して毎回優等賞を受領せざるはなく、今や地方拔群の銘酒として噴々たる名聲を博せり、氏は斯くの如く實業熱心家にして勞働者と伍して活動し家事繁忙あるにも拘らず、其徳望は村民の欽慕する處とあり明治二十二年町村制實施に當りては舉げられて同村區長となり

村會議員に擧げられ、明治二十六年四月同村助役に擧げられたり、然るに其敏腕は愈々村民の稱讃する處となりて同二十七年三月同村々長に推薦せらる、時は偶日清戦役にして出征軍人の慰問、遺家族の救護を始め戦時に於ける村長として其職を全からしめたり、されど二十八年三月病の爲に辭任せられ村民の等しく遺憾とせし處たり、されば其病平癒するや再び明治三十一年四月村長に推薦せり、其名望は斯くの如く村内に普き此外學務委員とあり土木委員とあり村事あれば必ず出て委員となる等直接間接村政の爲に盡力せる功績は頗る顯著あるものあり、村會議員の如きは町村制實施以來間斷なく勤績して本年四月に及びたり、殊に明治二十八年には二十七



本行寺住職

林 觀 師

加佐郡舞鶴町

加佐郡舞鶴町妙光山本行寺は本妙法華宗京都總本山本隆寺の末派にして、人皇壹百四代後土御門御宇長享元年元姓は藤原淡州河邊河邊左大臣魚名公の末孫二十五代右近少輔寛繁江州坂本に於て將軍家義尚佐々木高頼合戦の時寛繁の父寛滿あるもの、佐々木氏と同心ある疑念を蒙り依て竊に一族を引

八年事件の勢に依り賞動局より木杯一組を下賜せられたり、氏は資性温厚篤實にして人と争ひを好まず、寡言の方あれども頭腦は頗る明晰にして發明なり、殊に家屋建築等の設計妙にして自宅の如きも氏自ら設計し屋根替の如きは人手を借らず自ら之れを爲すを例とす、尙酒造家に多數入用なる酒樽輪替の如きも自ら之をなして要を辨する等器量あること衆を稱讃せしむるものあり、銘酒油雲の成功せしも全く氏が熱心努力の賜ものにして其事績は後世に垂れ油雲醸造の祖として仰かるゝに到るべきなり、人は一代名は末代、氏の名聲や偲ふべきあり、年齒尙春秋あり折角自愛を祈る。

領し悉く山館を奪んとして數々兵を以て攻めんとす各々防戦する能はして遂に倒旗して幕下に属す、時親山館を下り逃世して佛門に入り麓に一庵を結び名を行遠翁と改む、嫡子寛義二男寛親三男時重各安久氏を三家に別つ、四男を時繁と云ふ隣村なる天台村天台寺に登り後ち同寺正學坊の住僧となる、五男松千代西京本隆寺に入り同寺六世の住僧日雄公の弟子とあり佛門を究む後修學増進し師弟山陰を化益せしめんと城北に連監す頃は天正十年あり、松千代實父を慕ひ行遠翁の庵室に入る師日雄公も此處に錫留三旬に及ぶ、行遠師の化益を受け法號を授く更に安樂院殿行遠時親日久居士と改む、已來庵號を庵し院と改む隨喜の後師の雄公を則ち開祖とす、已後行遠此處に居住すること九ヶ年にして遠逝す時天正十七年あり、二祖を子の松千代僧名南隆院日成と云ふ同院の二祖と定む一女は空く寂家に歸す已后二八の星霜を積み慶長四年の冬京極丹後守高知公の歸依にて城南引土村地中に引く、是に領主新に堂宇を建築す、爾來四十二年を経て寛永十八年の冬本山本隆寺より山寺號を遷賜し本末の則を定む、像門の正統山陰發軔の道場あり、勸請の鬼子母尊神四菩薩四大王等京極領主の寄進にして日々祈願參拜絶へず、領主の賢子御三男中興大檀那京極兵太郎殿究竟院殿清池蓮久日華居士右御法名奉禰御尊號は本行寺に納埋遊ばされたり、經王寺寶生院の山屋敷等領主より拜領后京極修理太夫殿より御黒印及櫻花前中納言定家卿古歌京極宮二品親王家仁御筆等同寺に遺はされたり之れ寛永三年五月同寺十三祖日進の代とす尙境智院殿は同寺英

權にして京極丹後守高知山の家臣前波九右衛門尉重正と遣はし骨と納埋せらる、世代繼て納む同人の妻法石圓了院と號す二代知弘公の子女、將軍大關秀吉公に奉仕し後ち九右衛門の妻となる、本行寺中興第二十五世中院日上人は京都市の産にして姓は秦氏後林氏を冒す、明治十年三月同山の請を受け同寺住職となる、爾來專心一意寺門の經營を計り、地方先覺者とあり名聲曠々、同十二年自坊に私塾を設け貫通堂と稱し師自ら教鞭を執り子弟を薰陶すること三十余年、其教を受くる幾百人或は官衙に奉職せるあり或は地方を師表せるあり其偉徳敬て没すべからず、同三十年春寒嚴烈の時に當り本宗管長日常祝下より北海道布教の天命を蒙り直に旅装を整へ單身稚内に赴く積雪皚々の裡、夙夜布教を旨とす出ては公益を勤め入りては信仰を鼓吹す、此間二星霜功漸く將に就らんとするに當り二豎の犯す處とあり遺憾息むなく歸國するに至れるも其壯舉堂に歎賞すべからざらんや今や其遺徳は永く宗門の先輩とあり範を後世に垂る、に至る、師資性淡泊名利を求めず晩年職を辭し悠々和歌を詠し風流雅事を樂み以て老を養ひしに圖らざりざり六十六歳を一期として溘焉遷化せられたり遺弟たる現住觀師は若州小濱の産にして七歳の秋得度式を受け十六歳始めて城州小栗栖學林に登り宗學研鑽に従事す、明治四十年十二月本行寺第廿六世の傳燈繼承し寺門の經營に任ずるに至れり、四十五年二月鎮守大古久天甲子講を再興し殿堂再築の旨を講員を組織し今や二百余名に及びり、尙大正八年は同寺開祖本山第六世の祖證威院日雄上人第百三平年遺

忌に相當するを以て大法會を執行する事となり寺檀力奔走既に之れが準備中ありと云ふ、同寺は境内に櫻樹多く西山遊園地の稱あり風光絶佳にして四時杖を曳くもの趣を絶たず師は温厚篤實にして博識幼時より易學に通ず、殊に先師の膝下

酒造業

金村仁兵衛君

加佐郡舞鶴町

舞鶴實業協會は時代の要求に依り本春創立せられたるものにて其目的や云ふまでもなく商工業を發展せしむる機關たるあり、之れに長とあり役員たる人の任務決して輕きに非らざるあり必ずや舞鶴町第一位の人物を以てせらるべからず、故にや會長には渡邊彌藏氏を以てし副會長には氏と武内勇太郎氏を以てせり、是れ今や賣出しの立役者渡邊氏に次ぐものは即ち氏と武内氏なり、本春町長問題行惱みとあり銚衛委員等其人選に苦みたる時、第一候補者に推れたるは渡邊氏にて次にお鉢が廻りたるも即ち氏あり、斯かる有様あれば何れより見るも將來舞鶴町に於ける柱石たるべきものは渡邊氏に續くに氏なり、兩者の手腕何れを勝れりとするも其年齒に於て渡邊氏兄たり金村氏弟たり、地方の習慣亦如何ともする能はざるあり、

金村家祖先は町人の筆頭にて代々酒造を業とし味噌屋を屋號として仁兵衛を襲名せり、庄屋又は年寄を勤む先代仁兵衛氏は町村制實施後町會議員其他の名譽職を勤め公共事業に盡瘁せられたる徳望家たり、氏は其嗣子にして中學校卒業後一年志願兵となり滿期後は自邸に在りて父祖の業を繼ぎ、町會議員となり土木委員となり、舞鶴信用組合理事となり店員獎勵會副會長となり、實業協會副會長となる等噴々たる名譽を博し政事界にも實業界にも將來を重視せらるゝに至れり、氏は資性温厚篤實の君子にして人に接する寛容謙讓家にして圓滿を以て見地とせり、氣品高尚にして、業者には有勝らざる衝動もあらざれば驕氣もあらず品行最端正にして青年者の範となすに足れり又事に當りて熱心言多からざれども面々相向へば洒々落落温情の掬すべきものありて何處となく對者をし

て黨風に恍惚たらしむるが如き感あらしむ、實に當代稀有の手腕を有せり、町民の信賴深きも故なきにあらざるなり、年

齒尚少壯、實際の手腕を發揮するは今後の事に屬するなり、幸に自重修養以て益々其重きを期せ。



松玉 矢野熊太郎君

加佐郡新舞鶴町字清尻

矢野家は往昔楠氏と稱し中世矢野備後守出で、地方の土豪たり爾來代々久兵衛を襲名せり、氏は其分家にて祖先代々久左衛門を襲名し農を業とせり、初代、二代は専農にして謹直創業、三代は俳諧を専らとして風月を友とせり、四代は漢籍に熱中して徳を修む、五代は杯を片手にして一方家紀を嚴肅せり、六代は報徳主義の努力家たり、されど代々農を本業として庄屋を勤め初代以來連綿として嫡男相續し七代目たる現主熊太郎氏に至れり、

氏は慶應元年六月八日生、幼にして書を好み小學校に家庭に常に書を描き友の誘ふるあるも他に遊戯を爲さず暇さへあれば書齋に籠りて硯筆と親む、展々周囲の人々に叱責せらるるも意を翻へす能はず、年長するに従ひ趣味愈加はり、家業の閉を偷み書筆を弄して止まず、年十九歳を以て京都に出奔し府立書學校に入學せり、尙傍ら鈴木松年畫伯に師事し

て拮据奮勵研鑽怠らず、業成り同校卒業と同時に歸郷して両親の意を安んせり、爾來其蘊蓄せる手腕は年と共に練磨せられて噴々たる好評を博するに至る、されば大正四年十月朝鮮聯合美術協會に出品して三等賞銀牌を受領し大正六年維新五十年紀念博覽會に出品して有功一等賞金牌を授與せられたり其他受賞甚しとせざれども有功一等賞に依り其手腕は評價するに足れり、斯かる有様あれば門弟も紛からず、日に多忙を極む、會に出品して賞狀賞牌を受くる事屢々あり、資性温厚篤實、謙讓にして圓滿克く語り克く談ず品性高潔にして常識の圓熟したる誠に好個の畫伯たり、三ッ兒の心六十迄、好きこそ物の上手なれと是れ氏の徑路を語るの金言にして、氏の名聲高き亦故なきにあらざるあり、殊に數年前よりは家事一切を長子に委し俗事の煩累を避け茲に多年の宿望を達し爾來專念技術の練習に丹青を凝らしつゝ、あり、畫家

は必ず學術を深く研究せざるべからず品行必き衆人の模範た
らざるべからず、天地自然の道理を辨へて清濁潔白ならざる
べからず、筆墨視の用法性質を知らざるべからず、之れ氏が
今も技藝の研究に専心せる所以にて當代書家の典型あれども

養蠶家

新宮健太郎君

加佐郡岡田上村字小原

新宮家は地方に於ける舊家にして、代々蠶を業として家傳
の妙業を發賣して地方に其名高し、されど先代は蠶を好ま
ず立國農本主義の人にて幼時より農業に従事し温厚篤實を以
て稱せられたり、氏亦農を業とせしが時世の進運は地方養蠶
を鼓吹するに至りしかを、大に見る處あり他に卒先して幾町
歩の桑園を開拓し、養蠶を爲すに至りたるが、年々發展して
隆盛を見るに至りたれば益々規模を擴張し數年前地方稀有の
一大養蠶場を新築し毎年蠶種百枚内外を播立つるに至りたり
されど其所有せる桑園は尙餘裕ありて桑葉の販賣せらるゝも
の餘からず、眞に桑園と云ひ蠶室と云ひ模範を以て稱するに
至れり、兎に角事業熱心家にして蠶々資産を造りつゝあり現
に昨年の如き千四五百圓の田地を購入したるが本年も養蠶の
純益だけ地所にするに候補地を餘索中なり、
氏は性剛膽にして満々たる福氣を有す、而して進取的氣象
に富み人に接する磊落にして其言はんと欲する所は之れを云

日進月歩の時運は時々刻々に變化して技藝の向上を促すもの
切なるあり、氏春秋に富む決して現在に甘んぜず益々奮闘以
て新界の爲に貢献を祈る。

圓隆寺住職 室 寺 寶 高 師

加佐郡舞鶴町

圓隆寺は奈良朝の律僧行基菩薩天正年中行脚して加佐郡舞
鶴町に來り弘法利生の道場として開創し慈惠山智恩院圓隆寺
と號し帝國四十八ヶ所靈廟の第三十番にして加佐郡第一の古
刹にて中本山の稱あり、山主には大徳多く一條院の御宇興
徳年中皇慶上入中興の祖とあり法塔を建立せり其後天明七年
良貞上人今の金堂を再築し給ふ諸人此堂と呼んで本堂と稱し
京都以西には稀なる建造物なり、其間田邊城主細川幽齋公京
極家の祈願所として屢々監護を加へられ特に牧野因幡守富成
公因主となり護摩堂を建立し又代々の城主は先規に依り屢々
參詣ありて歸依厚かりしと云ふ、
師は温健克く忍耐に富み篤實正確事理を處す、人格崇高嚴
肅の人あり明治元年九月天田郡金山村字長尾端野家に生る、
喜右衛門氏の二男にして幼名を隆之助と云ひ九歳の時加佐郡
河東村室尾谷山金剛院に入寺、年十一恩師信雄上人の膝下に
剃髮染衣し、十三歳の春初めて高野山に登り明屋院に於て師
の行法を助けつゝ勉學せり、明治十八年再び高野山に登り中
學林全科を卒業し教師試補拜命、爾來歸院して師の事業を補
佐奏功せしむ、二十五年律師拜命二十九年何鹿郡小畑村普門

院住職に任せられ二十八年三度高野山に登り大學林に入學三
十一年八月優等を以て全科卒業、二十九年九月權少僧都拜命
同年同年間もなく少僧都に補せらる卅年十二月權中僧都拜命
同月中學林寮長に任せられ就職大に校規を律し校風を振作し
生徒を矯正して自覺せしむ、三十一年八月中僧都に補せられ
たるが其間近世の大徳たる別所榮嚴大和尚、花嚴の蹟學たる
楠王師僧正、唯說論の學匠たる佐伯旭雅僧正に就き孜々研鑽
奧義を究む、明治三十二年十月より東京小石川區目白公園に
釋雲照律師の門を叩き師事して心僧練を積み該僧團生徒の爲
に教鞭を執り大に興學の道を開く然るに明治三十三年恩師危
篤の報に接し止むなく飯りて法燈を相續し住職に任せらる、
爾來專心寺門に盡し檀徒を督勵して數千圓の維持、教育基
金を蓄積せり、同四十年十二月權大僧都に補せられ四十一年
四月同山安養院を兼務し寺門維持の方法を講ず四十二年六月
同山中本寺觀音寺を兼務す同四十一年七月京都府第四區眞言
宗各派聯合法務支所副管理に補任、四十四年八月同支所正管
理に任せられ以來大正五年八月まで勤續せり、大正二年九月
大僧都に補せられ同五年七月兩丹支所副管理に補任、同三

年十一月舞鶴町円隆寺住職に轉任爾來寺價整理、寺門復興に全力を盡し若々其功を収めて今日に及べり、師は七人の兄弟あり其長兄は天田郡現部會議員端野喜間太氏にして其次男たり、三男は加佐郡河西村長勝井善助氏にして四男は福知山町に於て農務と業とせる植村正治氏あり、五男は天田郡雲原村郵便局長糸井誠太氏、六男は京都市に醫術開業名聲噴々たる端野令三氏にして長女は金山村瀬川勇吉氏に嫁して三男二女を孕ぐ、尙嚴父喜右衛門氏は一昨年御大禮に當り高齡者の故を以て宮内省より木杯並に酒肴料を下賜せられたり、のみならず母堂亦健在にして老夫婦とも鏗鏗たるあり、師等兄弟



遼陽戰の勇士
故歩兵一等卒 功八等 功七級 新宮義武君

加佐郡岡田上村字桑飼上

氏は明治十五年五月十二日加佐郡岡田上村桑飼上七十二番戸に呱呱の聲を擧ぐ家は代々農を業とし氏も小學校卒業後は家庭にありて農事に従事せしが明治三十五年十二月徴兵にて歩兵第二十聯隊に入營せり、然るに明治三十七年四月十六日日露開戦に依り勳員下令、同年五月五日氏は歩兵第二十聯隊第六中隊に屬し福知山衛戍地出發征途に就けり、同月十九日

大孤山上陸同年二十日午后七時王家屯附近に於て敵の騎兵と衝突、銃火を交換したると初陣とし六月三日は何家堡附近に於て、同月八日は岫巖に於て戰闘に従事し、六月二十五日より二十七日に至る三日間は分水嶺附近の戰闘に参加したるが敵の陣地は海城の第一防禦線として此地を占定し半永久的防禦工事を施し茲に我軍を拒止せんとせしものなれば敵の奮戦

激烈にして容易に抜く事能はず、されど二晝夜にして全く敵壘を奪取せり、七月一日第四軍戰闘序列に入り二十一日より四日間は遼陽路の戰闘に参加し、三十日より三日間柞木城附近の戰闘に参加せり、越へて八月二十五日より九月四日に至る十日間は歩兵第二十聯隊の最も記念として永久に傳ふべき名譽ある遼陽の大激戦あり、聯隊長は歩兵中佐桂真澄氏にて八月廿五日聯隊は前衛の第一線としてクウヒンヨウ附近の敵を攻撃し漸次進軍して目的地点を占領したるが翌三ヶ月前八時桂聯隊長は第一高地にありて森第一大隊長杉山副官と共に敵偵察中敵の砲弾に掛り聯隊長重傷を負ひ森大隊長は即死せり、爲に佐藤少佐聯隊長代理となり住田大尉大隊長代理せり、のみならず歩兵中尉本庄繁、同音田武治、少尉伊藤三郎以下下士卒の負傷三十八名に達せり、爾來日に激戦とあり二十九日の戰闘に於て戦死者三名負傷平野少尉以下十名と出せり、此日歩兵中佐八木下純氏聯隊長に大尉納尙友氏第一大隊長に補任せられて到着す、三十日遼陽總攻撃の命あり歩兵第廿旅團長丸井少將指揮の下に午前六時攻撃を開始す、戦况頗る劇烈にして死傷相懸ぎ第三大隊長佐藤少佐、第一大隊長納大尉以下將校四名下士卒二百十九名負傷し三十名戦死せり八月三日は兩軍雄雄の決する處とて我軍の士氣益々旺盛にて午前二時より行動を開始したるが敵又頑強に抗して劇戦、死傷頻々たり聯隊長八木下中佐終に負傷し、一大隊長今井少佐聯隊を指揮し矢橋大尉第二大隊長と指揮す、今井少佐亦負傷し第三大隊長代理たりし江上大尉聯隊を指揮し古賀大尉大隊を

指揮するに至る、此日午前五時より午前十一時迄の間に於ける聯隊の苦戦は名狀すべからず、氏が屬せし第二大隊の如きは境田、赤見阪の二少尉を除く外大隊長代理矢橋大尉以下將校特務曹長悉く斃れ下級幹部亦殆んど死傷し第七中隊の如きは上等兵中隊の指揮を執るに至り大隊長は他の大隊より中谷大尉來りて指揮を爲すに至るを其悲酸ある裡にありて氏は終始一貫克く戰闘に従事せり、午後六時歩兵第二十聯隊の來援に依り士氣大に振ひ七時三十分聯隊長代理江上大尉指揮の下に遼陽城に突撃し累々たる死体を踏 越へく克く戦ひ意氣衝天の勢を以て防禦線を突破し先頭第一に敵壘に突入し軍旗を堡壘の中央に捧持し丸井少將の發聲にて、天皇陛下の萬歳を三唱せり遼陽城は全く占領せられたれども突撃の際敵弾は軍旗に集中し、一弾は旗頭の御紋章に命中し一片面を毀ち、一弾は旗竿を擦過し其他十數發の弾丸は旗地に命中せり、戦死者阪口大尉以下二百七十五名、負傷八木下聯隊長以下將校二十名下士卒六百三十八名を算せり、されど其武勳は赫々たり爲に歩兵第二十聯隊は軍司令官野津大將より感狀を下附せられたり、以上の如き悲戦苦闘を極めたる第二大隊第六中隊に在りて一も敵弾に觸れず然かも遼陽奪取勇士の一員として終始一貫奮闘を續けたる氏の功績は實に拔群なるものにして、其功に依り勳八等功七級金鷄勳章を下賜せられたり、爾來尙軍に在りて三塊石山東臺等の戰闘に参加し常に機敏なる行動を以て他の模範と稱せられたる程なりしに同年十一月十八日東臺に於て滯陣中病魔の襲ふ處となり、遼陽野戰病院に

加藤中なりしも、藥石功を奏せし此勇士を齒界に擡へ去りたるは國家の爲めに憾む所たりしあり、されば村民其轍に接するや悼惜措く處を知らず其靈を慰むる爲には盛んなる葬儀を以てし且つ碑を建設し遺族救護に至るまで其志を盡せり、爲に遺母かつ子は早く夫に死別れ、又嗣子たる氏に先立たれたる



齒科醫 田中良平君

加佐郡餘部町上本町

氏は明治二十九年十一月二十日加佐郡倉梯村字行永十九番戸に呱呱の聲を擧ぐ、明治四十四年三月同村尋常高等小學校を卒業し、會社員たらんと志し笈を西都に負ひ京都簿記學校に入り業を終へ某會社に奉職したれども、感ずる處ありて目的を齒科醫學に變じ一旦歸郷して倉橋村有吉醫院に入り醫學を研究する事年余、大正三年上京して新業の名家たるドクトル、オプデントル、チャーセリー寺尾幸吉氏の門に入り傍ら齒科醫學校に通ひ研鑽中、不幸病の侵す處となり再び歸郷し専ら自宅に於て療養に従事せり、傍ら斯道に熱心勉學し大正四年九月京都府廳に於て施行せる文部省醫術開業齒科學說試験を受けて及第せり、之れ氏が年十九歳にして其後尚自宅に

と雖も二男春二氏の爲に介抱せられ、受くる扶助料は餘裕ありて意を安んずるに足れり、のみならず斯かる勇士を生したる生母かつ子こそ名譽と稱すべきなり、氏も亦死して餘榮ありと謂ふべし。

せよ、然り然らん氏が技術の優秀なるは忽ち軍港内の評判とあり將校夫人は勿論、下士夫人等の稱讃を博し門前腫を接するの盛況を見るに至れり、されど年齒僅に二十二歳の青年に



大阪商業會議所議員 前代議士 有本國藏君

大阪市高麗橋四丁目

氏は丹後國加佐郡舞鶴町有本嘉六氏の四男にして萬延元年全町字平野屋町に生る、明治元年八歳にして全町字廣小路ある寺子屋但馬屋安藏師に普通學を學び十二歳にして本町なる舊藩主牧野家經營になる審致會に奉仕し明治十一年大阪に出で家兄の許に於て商業に従事し明治十六年廿四歳の時獨立して現住地たる大阪市高麗橋四丁目洋服商を開業したるが現今こそ全業者も頗る多けれども當時は全業者至て少く然るに洋服の需用は日に月に激増して何れの洋服店も非常に繁昌せり、氏も其中に伍して奮闘努力大に手腕を發揮して年々共に盛大を極め僅か數年にして一頭角を現はせし大商店となりたるに全時に廣々たる名聲を博し全業者中に重視せらるゝに至れり、明治二十年八月大阪洋服商工業組合を設立して其取締役に擧げられ全二十九年大阪統販賣株式會社を創立して

て前途は實に遼遠あり、決して現在に甘んずることなく日進月歩の醫術と伍して遺憾なきを期せ。

其事務取締役に擧げられ、三十一年五二會大阪服裝部々長を囑托せらるゝ遂には斯業界の牛耳を執るに至れり、明治三十二年には大阪市會議員に當選せられ、全卅五年大阪東區聯合區會議員に當選、全年大阪洋服商工業組合の事業として職工徒弟店員を獎勵し且つ慰勞するの目的を以て職工徒弟店員獎勵會を組織するや擧げられて其會長となり、三十六年第五回内國勸業博覽會開催に當りては審査員を囑托せられ、全年大日本全國洋服業大會を開催するや其幹事長に推舉せられ、全年大日本服裝協會の設立成るや其會長に推舉せられ、明治卅七年再び擧げられて市會議員となり、卅八年大阪商業會議所議員に擧げられ、三十九年大阪洋服商工業組合を重要物産組合法に組織を變更と全時に其組長に推舉せられ四十一年五月衆議院議員總選舉に際し大阪選出代議士に當選、大正二

年大阪東區所得稅調查委員に當選、大正四年三月大阪商業會議所議員に當選以來今日に至り、

氏は資性剛膽、明敏なる頭腦を有し氣稜々果斷に富み機を見ること敏にして進取の氣象に富り、然して人に接する淡白克己談吐克己語り毫も隔壁を設けず親切にして長者を敬し幼者を愛撫し至誠以て事に當り努めて口滿を圖れり、之れ



何鹿郡首席郡書記

寺島忠藏君

加佐郡餘内村

氏は明治四年加佐郡四所村字下福井の福田家に呱呱の聲を擧ぐ福田家は地方に於ける舊家にして代々農を業とす氏は故孫右衛門の三男たり、高等小學校卒業後直に小學校教授となり在職二年余將來教育家たらんには師範學校に入らざるべからずと屢々兩親に入學を希望すれども許されざる爲め、志を變へて全役場書記となりしが偶々縁ありて全郡餘内村字上安久寺島澤吉氏の養嗣子となり、寺嶋家亦全地に於ける舊家に於て養父澤吉氏は全村區長並に村會議員等の職を勤めて一生公共事業に盡瘁したる篤行家たりしが頗る幸福の人にて年既に還暦を過ぐるも夫婦とも饒強壯者を凌ぎ風月を友とせり

氏は寺島家の人とあるや直に餘内村役場書記と命せられ奉職中、明治三十年十月郡制實施の際加佐郡吏員に採用せられ卅一年四月學務掛を命せられ十月郡書記に任せられ全時に庶務掛となり漸次累進して大正三年十月會計課主任を命せられ次席郡書記となり、大正六年三月何鹿郡首席郡書記阪本太郎氏の後を襲ひ現職に就任せり、
氏は資性温厚謹直の君子にして未だ嘗て人と争ひを爲したる事なく頗る円満、態度沈着なれども満々たる朝氣を有し進取の氣象に富り、されば加佐郡書記奉職中の如き部落有財產統一に腐心し何れの町村に於ても其最も難事とせる此財產

統一問題をして着々其歩を進り在任中統一を完了せしめたるもの十九ヶ村の多きに達せり、尙全郡に於ける府稅滯納者は頗る多くして府下各郡の最劣等たりしも氏が會計主任となりてより一意専心之れが整理に努力し二ヶ年にして滯納者の跡を絶つ的好成绩を示し今や府下に於ける右翼を以て目せらるゝに至り、之れ氏が手腕の賜たるなり、斯くの如く氏は何事にも熱心にして一旦事を起せば貫徹せしめざれば止まず明治三十年郡吏員となりし以來茲に二十年間、明治四十一年一月病の爲り一日欠勤せし外嘗て半日も休みたる事なし、此一事以て氏が平常の勤務振を推知すべく、二十ヶ年間に一日より欠勤せずとは何人も其精勤を稱讃せざれば能はざるあり、明治三十七八年戰役には兵事係次席として勤務し其勞に依り賞勳局より金七拾圓を下賜せられ、昨年一月赤十字社特別社員に列せられたり斯くの如くして氏の手腕は年と共に發揮せられ信任益々厚さを加へ他府縣より轉勤を懇望せられたること一再に止まずされど宅には老人あり遠く去るを許さざれば

一信製種株式會社長

福井高五郎君

加佐郡餘内村字福來

氏は明治五年九月二十五日加佐郡東雲村字水間谷田家に呱呱の聲を擧ぐ谷田角郎右衛門氏の三男にして、全郡中山小學

校に入り小學教育を了へ、明治二十二年京都府縣系聯合會立高等養蠶傳習所に入り蠶糸教育を受け爾來身を蠶糸業に委ぬ

其郡度固辭せしも本年三月何鹿郡に轉勤は恰も一郡内に在るが如き便あるを以て其命に服従せしものにて、何鹿郡は就任日向淺くして語るべき事績あらざれども全郡は實際財產統一せらるるは三上林村のみにて其他は何れも形式的の統一のみなれば、先ず氏が敏腕は其得意とせし財產統一問題に向ふて奮進する事となるべし、郡政の事、郡長其責に任ずるは勿論なれども克く之を補佐し部下を統一して其任務を全ふせしむるものは首席郡書記の力にて其任決して輕きにあらざるあり、されど氏が從來の經驗と其手腕を以てせんか成功期待して彈らざるあり殊に氏は子女教育に重きを致し長男祐一氏第四中學校を卒業し今や京都大學法科二年生たり、二男睦夫氏は府立農林學校二年生、長女初惠嬢は昨年加佐郡立高等女學校を卒業し才媛の聞へあり、三男四男は目下小學校に修學中なれども何れも高等の學を修めしめんとせり、之れら五子が相携へて社會に活動するの日も亦遠きにあらざるべし、君、年齒尚春秋高し幸に健在以て大成を祈る。

るに至り、明治二十五年より二十八年迄四ヶ年間各地農
 巡回教師及び製糸業技術員たりしが二十九年度は京都府より
 加佐郡養蠶教師を命ぜられたり、三十年二月現住地福井勝次
 郎氏の分家福井和左衛門氏の養子となり全家にありて蠶種製
 造業に従事したるが翌三十一年郡内有志と一信製種合資會社
 を組織し全社の業務担当社員として専心蠶種業を経営するに
 至り、三十四年福井家の家督を相続し全三十六年擧げられ
 て餘内村會議員となり、宇福來區長となり爾來滿期毎に再選
 して現今に至り、尙明治四十年加佐郡蠶種部會の組織あり
 之れと全時に選ばれて其會長とありしが爾來引續き今も尙其
 職に在りて全會を主宰せり、大正元年加佐郡蠶糸全業組合と
 協定し松尾雪園蠶種貯藏庫を創立し其理事長とありて本年三
 月迄で事務を掌握せしも大正六年度より全業組合の獨力經營
 に移りたる爲め退任せり、大正二年蠶糸業法發布に際し京都
 府地方種苗審査會委員を命ぜられ大正五年再任せられたり、



氏は文久元年九月生、龜井家は全地に於ける舊家にして農

岡田中村長

龜井市左衛門君

加佐郡岡田中村字富室

と業とし、代々市左衛門を襲名せり氏は先代市左衛門氏の長

全六年二月一信者の業務を擴張する爲め組織を變更して一信
 製種株式會社となしたるが會社の成立と共に取締役社長に擧
 げられ現在に至り、
 氏は資性剛膽にして頗る明敏なる頭腦を有せり、進取的氣
 象に富み機を見ること最も敏にして才智縦横に溢れ、口八丁
 手八丁、蠶種製造家として得難き適材たるあり、之れ明治三
 十一年僅の資本金にて創立せられたる一信合資會社が幾多の
 難況不振に相遇せりと雖も更に屈せず旭日昇天の勢を以て年
 と共に向上し多額の積立金を得て更に業務を擴張し株式會社
 となし何鹿師綾部町に出張所を設け二ヶ所に於て大々の製造
 を爲すに至れるもの一に氏が手腕の賜もにて會社員の齊し
 く多とする處尙全社製造の蠶種は佳良を以て好評を博し他に
 卓越せるものあるも又氏の力にて今や全業者中一頭地を抜く
 に至り、されど君、決して現在に甘んずるあく益々蠶種の
 改良を圖り斯業の爲に貢献の切あらんことを祈る。

男にして明治二十二年町村制實施の際擧げられて全村會議員
 とありし以來再三當選して殆ど圓断なく之れを勤めて本年四
 月滿期の際退任せり尙明治二十五年一月以來全村區長とあり
 たること三回此間十余年にして明治二十六年五月全村助役に
 擧げられたるが二十九年病の爲に辞任せり、然るに明治三十
 七年八月再び全村助役に擧げられ四十一年三月辞任、大正二
 年五月會計検査立會人に擧げられ、大正三年三月全村々長に
 擧げられ爾來今日に至り、
 氏は資性温厚篤實、人に接する親睦和順克く愛敬の誠と致
 し深識遠慮にして最も責任を重し一時虛榮の爲に進退を輕ん

與保呂村元老

勳七等

木下治平君

加佐郡與保呂村

木下家は地方に於ける素封家にして代々農を業とせり、氏
 は明治三年現住地に狐々の郷を擧ぐ、幼にして博識強記一と
 聞て十を知るの天才を有せり、されば全村小學校を卒業せる
 外何等秩序ある學歷を有せざれども天與の才腕は長ずるに隨
 ひ年と共に發揮せられて全村區長とあり、村會議員となり、
 郡會議員となり、全村々長となる等村民の崇拜は年に厚きを
 加へて今や全村の元老として重きを爲すに至り、
 氏は資性温厚の中に覇氣を有し快活にして淡泊、人に接す

る篤實にして毫も城壁を設けず克く語り克く談ず、されど別
 段上手を云ふにも非ざれば飾り氣もあく氣骨稜々果斷に富
 み仁侠の心厚し家庭は常に簡儉と旨とせりも公共事業に當り
 ては毫も吝ならず他に率先範を示すを例とせり亦克く細民を
 愛撫して何にくれとなく世話を爲し、眞に血あり涙ある俠骨
 漢として村民の信頼を博す明治三十七八年戦役當時は村長と
 して東奔西走出征軍人の慰問は勿論戦病死者遺族の救護、公
 債の募集献金等に至るまで毫も遺憾あらしめず、尙に戦國に

於ける村長として其任務を全ふしたる功績は赫々として村史に傳ふのみならず、其功により賞勳局より勳七等青色桐葉章金五十圓を下賜せられ、赤十字社總裁官殿下よりは慰勞として木杯を下賜せられたるなど木下家萬世の系譜を飾るの資となれり斯かる有様にて事に當れば熱心努力を惜まず身を挺して水火も辞せずと云ふ半面には亦清濁併呑の雅量ありて常に



大阪堂嶋米穀取引所仲買人

太田 正兵衛 君

大阪堂嶋濱通一丁目

氏は慶應元年加佐郡河守上村字二俣に呱呱の聲を擧ぐ然るに不幸にも年七歳にして嚴父に死別れ、母の手に養育せられたるが家兄放蕩にして意見合はず、爲に氏は家を興し名を揚んと欲せば幼年より凡ゆる困苦を嘗みざるべからずと健氣にも大志を懷きて年十二歳にして丹波福知山に出で某吳服店に奉公し爾後十年間孜々として店務に従事し明治十九年年二十二歳にして太田家の養嗣子となりたるが當時太田家は緝屋業を經營せしも時勢の變遷に伴ひ全業の將來有望ならざるを自覺し數年なほすして酒造業を兼營するに至れり、斯くして年一年と斯業は發展して隆盛を見るに至り名聲亦大を

加ふるに至りしかば、明治二十八年舉げられて全町會議員となり以來選舉せらるゝこと二回、全年全町外五ヶ村組合會議員に舉げられ以來再選せらるゝこと二回、全年全町區長に舉げられ以來再選三回に及べり、明治三十一年河守銀行を創立し自ら之れが取締役頭取となり經營すること七ヶ年、明治三十五年製糸業を兼營し、全年加佐郡製糸全業組合河守組長に舉げられ、全年全町九十製糸會社々長となり、明治三十六年河守町實業會顧問を囑托せられ廿八年九丹合資會社前系取扱店を開業するや其社長に舉げられ拮据奮勵會社の爲に努力怠りまかりしが、大正三年自宅は養嗣子に委ねて酒造業

に従事せしめ氏は大阪に出で米穀取引所仲買人を營業するところとなり全年七月一日農商務大臣の認可を経て大阪堂嶋に居を構へ仲買人を開業したるが日に月に發展して今日に至れり實性剛毅氣滿々として進取の氣象に富み豪白にして其欲する處は之を言ひ毫も人を憚らず、頭腦明敏にして一旦心に是とせし事は其素志を貫徹せしめざれば止まず、其の爲す事多くは積極的かれども明治維新以來の趨勢は悉く積極的にて成功せるものゝ如く、氏亦其方針の下に行動せる爲り着々と成功し郷里河守町に於ける事績は決して尠少あらざるもの

あり政治界に實業界に重んぜられ現に今も同町に在らんに河守町の先覺者河守町の元老たるのみか加佐郡に於ける中心人物として稱せらるゝに至るや必せり氏が去りたるは河守町の爲めに憾む所たりしなり、されど今や米穀相場の中心地たる大阪堂嶋の地に於て先輩と伍して頭角を現はさんとせる意氣や壯なり、田舎の一農家より身を起し此大成を贏ち得んとせるもの幾人かある皆無とするも然からんか、眞に氏の如き太膽なる抱負の下に着々成功しつつあるは稀有の事にて稱讚すべきなり、幸に自重奮闘以て大成の人とされ。



岡田中村の功勞者

勳七等 泉 秀次郎 君

加佐郡岡田中村字西方寺

祖先代々農を業とし村役人を勤めて國家の爲に盡瘁せる舊家たり氏は先代新五左衛門氏の長男にて嘉永三年十一月現住地に呱呱の聲を擧ぐ、幼時寺子屋に學びし外秩序ある學を修めたるにはあらずされども其手腕は年々向上して名聲を博し明治二十二年町制實施の際舉げられて岡田會議員となりし以來滿期毎に再選して現に今尙其任にあり、尙町制實施の際岡田助役を舉げられたるが明治二十六年五月岡田々長たるに

及び辭任以來村長たりしこと二期にして明治卅四年五月滿期退職したるも三十六年十一月再び村長に舉げられ其職に在りしこと三期大正三年三月後進者の途を開く爲とて村長辭任したるが村長の職にありしこと前後併して十三ヶ年、此間二十七八年戰役あり、三十七八年戰役あり、共に我國難として上下擧つて軍事の爲に貢献せり、村民斯くの如くなれば村長の任番は亦一段と重きものありて、出征兵士の慰問、家遺族の

救護、軍資の献金、公債の募集等事務は頗る繁雜あるものありて枚擧を要せざれども、氏は此二大戦役とも戦國の村長として任務を全ふし亦平和克復とあるや戦後の經營に任じ農村をして些の衰退をも招かしめず、却て其度毎に隆盛ある域に進ましめたるの手腕は凡ならざるを知るべきあり、爲に二十七八年役には賞勳局より木杯と下賜せられ、三十七八年戦役には勳七等に叙し金五拾圓を下賜せられたり尙赤十字社總裁宮殿より木杯を下賜せられたるなど氏の事績は眞に赫々として後世に傳ふるに足れり、尙大正三年五月會計検査立會人に擧げられて今日に至れり、

氏は温厚者實にして言多からざれども、事に臨めば意見を發表して遺憾あらしめず、されど萬事に謙遜して努めて圓滿を事とせり、是れ岡村には郷の元老、郷の先覺者として智腦

加佐郡會議員

勳七等

龜井藤太郎君

加佐郡餘内村

龜井家は地方に於ける門閥家にして代々庄屋を勤め治左衛門を襲名せり、氏は先代治左衛門氏の長子にして其人とあるや擧げられて區長となり、村會議員となり、學務委員となり、郷會議員となり、郷參事會員となり、岡村々長に擧げらるゝ等年と共に其手腕は尙上して名譽は益々大あるを加へ大正五

年九月又も擧げられて郷會議員となり現在に至れるが、此間明治三十七八年戦役あり、當時村長として軍務に盡瘁せられたる功勞により平和克復の後勳八等に叙せられたり、氏は温厚の裡に剛氣あり、快活にして人に接する磊落磊も隔壁を設けず諄々と克く語り克く談ず、明晰なる頭腦を有し

運財の途に長子子弟教育に重きを置き、思慮極めて鞏固にして禁酒禁煙を決定し亦身を養ふ運動の爲めて毎朝鶏鳴に起き出で、日踏みを爲すを例とせり、尙氏は近時頗る佛教を篤依して婦人觀音講あるものを組織せるが講會の都度名僧を聘して説教を請ひ又自ら演壇に立ちて精神修養談を爲す等地方開發の爲に努力し、一舉兩得と云ふ洵に麗はしき婦人會にしに其組織の完全なる爲め地方の信頼も日に厚きを加へ今は村内のみか他村内にも多數の議員を有するに至れり、斯くして觀音講は年一年と發展して隆盛を見るに至る、地方風教に及

ばす功果は決し鮮少なからざるものあり、實に氏は陰徳家たるなり積善の家は餘慶ありと、然り氏の長男信行氏は本年三月東京帝國大學を卒業し領事官補として歐州に在り、二男亦本春陸軍士官學校を卒業して歩兵少尉とされるあり尙其弟妹兩四中學校と高等女學校に學べるありて何れ亦才力あり、之れ氏が教育の結果と云へ亦一は祖先傳來陰徳の賜ものたるあり、龜井家の隆盛謳歌すべし、氏益々其美的を發揮して社會風教の爲に努力を祈る。

餘内村長

安久兵左衛門君

加佐郡餘内村字上安久



安久家は姓を以て岡村字とせるだけありて却々の舊家たるあり、代々農を本業として大庄屋を勤めたる家柄にして兵左衛門を襲名せり、氏は幼名を央次郎と稱し前代の二男たりしも長男早世の爲め嗣子となり久左衛門を襲名せり、其戸主とあるや擧げられて上安久區長となり、村會議員となり郷會議員に擧げられ大正二年春岡村々長に擧げられ村農會長となり、郷系同業組合小組長、畜産組合小組長となり亦十字社分區委

員とある等各種団体役員を兼務して全村の盛衰を双肩に荷ふに至りたるが爾來既に五ヶ年赫々たる偉績ありしとするも村役場の新築を始め細事に及べば枚擧するに遑あらざるあり、氏は資性温厚質朴にして人に接する萬實圓滿にして敵を求めず、謙讓にして頗る深識遠慮に富み、されば何事にも慎重を加へ、マア待て急ぎては事を仕損すと云ふ最も沈着なる態度にて其一言も輕々に發せず、石橋も叩て固して後に渡

ると云ふ風なれば未だ曾て氏が發案せる事件にて失敗を招きたる物なく、着々と成功せり、其に其發する一言は金鐵にして開運ひやく、志望堅實にして恩志鞏固其見地の的確せるは衆人を首肯せしむるものあり、之れ氏の名聲大なる所以にて

加佐郡會議員

森谷 徳太郎 君

加佐郡舞鶴町字引土

森谷家は同地方に於ける舊家にして代々酒造を業とし、町役人を勤めて威張りたる家柄たるなり、されば氏は業の上からの坊稚育ち却々の腕白者なりしが三ツ子の心六十迄の譬へに洩れず、長ずるに従ひ年と共に其手腕は發揮せられて同字區長となり、町會議員となり、舞鶴築港委員となり、郡會議員に擧げらるゝ等、舞鶴町に事業を起せば必ず其委員となり謀議に參するを名聲は噴々として加はり町會議員、郡會議員の如きは累選に累選して殆ど十數年間其職に在り舞鶴町一流の人物として重きをあせり、爲に町會議員は本春木戸町長報酬問題に連座して渡邊彌藏、武内勇太郎其他同志の士と連袂辭職したれども郡會議員に今尙其職に在り、氏は資性剛膽、人に接する磊落にして毫も隔壁と設けず、克く語り克く談ず、言語は極めて明晰にして氣骨稜々果斷に富む、又自信力に強くされば一旦自分の意を決したる事は何

本春村長滿期の際村會多數を以て再選せるが如き其手腕を語るものなり、年齒尙春秋に富む、幸に自重以て國家の爲に貢獻の切ならんことを祈るものあり。

人が諫止するとも其素志を貫徹せしめざれば止まず、爲に郡會又は町會に列せんか衆寡敵せざるまでも口角泡を飛ばして論議し其是とする處は主張して一步も譲らず極めて頑強なるが如くあれども大勢非なりとせば撤回するに躊躇せず、衆言を容れて可否を決する腦力あり、是れ氏の美点にて選舉民を代表せる其責任を重する所以たるなり、されば郡會議員中の花形として重視せらるゝ、斯くの如き積極主義の氏は一獲千金を夢想して一昨年丹後海に於て鰯網を企畫せるなり、是れ大なる失敗にして氏が大に修養すべき試金石たりしなり、爲に父祖傳來の資産も聊か失ふの止むなきに至りたれども氏須らく之れに鑑みて將來斯かる冒險的事業を考慮し、自分の長所に向ひ發展せんか名聲は愈々大を加へ今日の失策は償ふて餘りあるに至るべし、抑も世路曲折多く、航路波瀾を免れず、事成らんとして敗れ、志達せんとして折るゝは世態人事の常

あり、古人云ふ失敗は成功の母にして大なる成功を爲さんと思せば先ず大なる失敗の經驗を嘗みざるべからずと、此言當ら

すと雖も心膽を練磨するに足らん、君年齒尙春秋に富む、幸に自重奮闘以て、晩年の成功を期せ。



加佐郡出身の偉傑 故 澤井市造 翁

加佐郡出身者中成功者を數へ來れば決して勝しとせず、中に最も卓越せる大成功者も物色すれば翁の右に出ずるものもからん、翁の如きは立志博中特筆すべき美談にて實に加佐郡出身者中の偉傑たるなり、今翁が經歷を聞するに翁は嘉永三年正月三十日加佐郡由良村に風々の聲を擧げ九年不幸にも慈父を喪ひ母の手に育つる内年六歳となるや亦慈母を喪ひ孤兒の身となれり、爾來阿村小室末藏に嫁せる伯母の手に養育せられたるが非常なる腕白者にて醫師林壽伸先生の許に學びしも友達と苛め散して師の訓戒も耳に入れざる爲め遂に退學され伯母の手に合はぬと云ふので今度は本家なる伯父澤井長兵衛が引取て世話をしたれども、翁の愚直は堅固を加へる毎に勢力を増し十歳ともあるや天晴れ健兒大將の通り者となり、子と持てる親達から其尻が赤るので長兵衛夫婦も持餘したる程である、けれども翁は一向平氣で其態度奇習辯才を以て

之を制し却つて威嚇し込んで來た者と謝罪らすと云ふ風に、勝者何んか人間にあるのであるよかと一般に評し合ふて居たり、其位であるから昔中あせは殆ど半日を海で暮らし朋輩から河童の男名を取つて居た、斯くて十五歳となつた當時由良港は却々股風で小艇船數十、二百石積以上の船數十艘居て入船出船と繁昌せり、故に翁は小西平右衛門氏の見習船員となり、爾來數年北海道松前等に航海し遂には船長に擧げられて産業と營み一時巨利を得せしも、忽ちにして失敗し放浪して小樽より札幌に至り、工學博士松本莊一馬氏の知己を得て鐵道工夫とありしが、之れ身を立つるの端緒にして爾來幾變化ありしと雖も松本博士は翁の爲には大恩人たるなり爲に博士運去せし時有志者は鐵道界の恩人と稱して帝國鐵道協會内に松本文庫を設立した翁は其一期恩念は自分で朝影石の本場に行

石を立立て、東京に遷移し東京郊外大森の池上の莊、大門寺山内の老松巨杉鬱蒼たる地に守護ある邸を建てた之れは卅一年三月の事だれれも翁が世に出る時の恩人として茲に記せり、十二年十二月手宮内閣の鐵道工事に従事す之れ翁が工部請負の初舞臺にして其後東京に出で妻子を抱いて奮苦と戦ひ、明治十八年碓氷峠の鐵道測量に従事し、廿年三月靜岡に轉じ阿部川の橋梁を請負ひ漸く多少の實を得て、廿一年九月大阪鐵道會社の工事を請負ひ二十三年九月より北海道炭礦道室蘭線の工事に従事し聊か利する處ありしも、不幸にして奇禍に遭ひ大阪地方裁判所に拘引せられ居ること旬餘晴天白日の身とあり、二十六年有馬組に入り北陸鐵道工事に従事して成功し、尋て二十八年五月有馬組工部部長として渡臺す、爾來基隆臺北間其他の鐵道工事に従事し二十九年總督府の官舎五千坪の請負を爲す、時尙創始の際とて物資未だ整はず而かも翁は此工事を遂行して大に其名を成せり、然れども此工事に起因して疑獄起り未決に囚はるゝこと四百餘日、幸にして無罪放免とありたり、爾來臺灣と根據として各種の土木建築の諸工事を請負ひ、二十八年渡臺以來四十五年七月限目する迄に翁の請負ひたる工事は一廉一萬圓以上の工事件數百六十一、此請負金額一千二百萬六千餘圓尙一萬圓以下の工事に至りては枚舉に遑あらず其金額六百萬圓を計上せり此間内地に於ける主なる工事は舞鶴線の鐵道及朝鮮南滿州鐵道其他の工事に於て、殊に宇品川水電工事の如きは其病中にありて之を竣工せしめたり、翁は斯くの如く東奔西

走の間に於て明治三十五年臺北に消防組を起し自ら之れが組頭となりたるを始として其他の公共事業に盡瘁せること數知れず殊に郷里由良小學校に千五百圓の校舎一棟を寄附し由良神社、正源寺等に巨額の金品を寄附せり、斯くて終始一貫せる翁の義侠的精神は、實に一難に遭ふ毎に倍す硬きを加ふ、人呼んで之れを澤井式と稱せり、殊に臺北市區改正に要する低利資金の借下げ、臺北製水の創設等皆翁の裁断に依れば快刀亂麻を斷つの際あり、其事に當るや一括些事を問はず部下の紛争の如き老翁が来たると云へば直に和解するを常とす、其威嚴の行はるゝと共に亦部下を愛すること深く慈父も及ばざるものあり、諭耳順



現主澤井市良君

を越ゆると雖も氣慨壯者も及ばず、明治四十五年六月持疾を患ひ、臺北病院に入り急性大腸加答兒を併發し七月二十七日限目せり享年六十三歳
資性剛膽、氣満々氣骨稜々たる眞に大和男子にて基隆、竹仔寮隧道工事の際の如き大倉組は下の方から起工し有馬組は上の方より工事を進むと云ふ段取にて斯かる場合には兩者の衝突は免かれず鐵道部長長山根將軍も意の満ざりし事のありてか有馬組支配人澤井を呼んだ、剛直一步も譲らぬ翁は

益々我意を募るので將軍も持て余し一番威嚇してやらうと云ふ考へて帶劍に手をかけて忽ち袖を拂ふた、けれど翁は少しも驚かぬ、泰然自若としてマア侍て斬るなら、斬れだが着物の上からでは貴官の刀ぢや切れぬ稜になつて斬られようと丸裸になり首を延べた此度胸には流石の將軍も驚かされて予固より汝と恩怨なし、一に國家の爲り此事業を遂行せんと欲するのみ、今汝を斬るも工事の進程に害ありても益あり、今改めて汝の快骨に觸す汝子の意を諒し忍ぶ能はざるを忍んで國家の爲り初期に副へよと、翁亦頓首して之を謝し爾來工事は進捗して豫定通り開通式を擧ぐるに至れり、之れが爲り翁の名聲は一層大を爲すに至りたるが此一事以て翁の性行を知るに足れり、されば翁一代には随分澤山なる逸話あれども之れを省く事とせり、斯くして翁一代に造り揚げたる財産は何百万圓あれ共明治四十三年親友に向ひ自分の事業は永年自分と苦業を共にして来た店員の働きから生れたる發展に外ならず、ソレヤ相當の給料も渡す事になつては居れど役所や會社と違ひ懐ろ合の苦い時は二ヶ月も三ヶ月も支給せぬ許りであ

困た場合には部下の衣類は素より妻子まで裸として盡して呉れたのだから主従とは云へ全く其力一致の賜である、して見ると此澤井組は功勞ある店員や部下の共有物である、だから時機を見て組織を變更致度好い考案を立て呉れよと頼んだけれども其實行を見ず逝去せられたれば聞もあらず米國から歸朝した相續人市良氏が其遺志を繼ぎ大正二年資本金拾萬圓の合資會社に變更し爾來今日に至れり社長は澤井市良氏なれども氏は七八年以前より米國に一大農園を開拓して多く彼地にあれば大阪中の島ある同會社は支配人小室兼藏氏に依りて采配されつゝあり、
翁の本邸は郷里由良村にあり會社本店は大阪に、支店は臺北にあり何れも宏壯人目を驚かすものあり、翁の葬儀は臺北支店に於て執行せられたるものにて墓所は同地と郷里由良村の二ヶ所にあり尙翁の銅像は大正四年臺北と由良公園の二ヶ所に建設せられたるが、何れも翁の偉蹟を後世に語るものにて、眞に翁の如きは有終濟美の人と稱すべきあり。

和氣安次君

加佐郡岡田中村

和氣家は地方に於ける舊家にして代々農を業とし庄屋を勤

め村民の崇拜する處たりしなり、氏は嘉永三年十一月現住地

に孤々の聲を擧ぐ、幼にして穎悟伶俐、長ずるに隨ひ漸次其本領は發揮せられ、名聲亦加はりて明治二十二年五月町村制實施の際擧げられて同村助役となり村長を補佐して専ら事務に精勵したるが同村には上野彌一郎、泉秀次郎あとの先達ありて容易に頭角を現はす能はず、爲に廿六年五月滿期の際選職したるも衆望は遂に氏に集注して明治卅四年五月同村々長に推薦せらるゝに至れり、爾來手腕は各方面に歡迎せられて愈々其活躍時代に入りたる明治卅六年十一月偶々病の襲ふ處となり辭職を余義あくるに至れり爾來閑地に靜養を事とし村民の稱望する甚大なるものありしも健康に害ありとて固辭して再び出てず、暗耕雨讀の人として悠々自適老を養へり、

長子敬三氏は明治二十四年五月十六日生にて全村小學校卒業後直に桂農林學校に入りしが成績優秀等右翼を以て卒業し歸

加佐郡會議員

安原 宇太郎 君

加佐郡四所村字青井

安原家は地方に於ける舊家にて代々庄屋と勤り農を業とせり、氏は明治三十年青井區長に擧げられ三十二年六月辭任、三十四年三月再選、同年四月村會議員となり、三十五年三月區長辭任三十七年日露戰役の爲り看護士として歩兵第二十聯隊衛生隊に入隊三十九年平和克復に依り凱旋歸郷したるが再

省後一時全村小學校に教鞭を執りしも明治四十四年十二月一年志願兵となりて福知山歩兵第二十聯隊に入隊せり、翌年十一月滿期歸郷するや間もなく豫備歩兵少尉に任せられ、正八位に叙せられたり、爾來暫らく自邸に在しが大正四年加佐郡書記に任せられ勤業掛を命せられて今日に至れり、

資性温厚謹直嚴父に譲らず、人に接する極めて圓滿にして淡白何人にも隔壁を設けず手腕亦卓絶にして上下の信任厚く將來有爲の人材を以て矚目せらるる前途實に遠遠にして未だ多く語るべき事蹟ありと雖も、氏が頭腦と其手腕を以てせば前半世は那吏員の一人たれども後半世は必ず岡田中村の柱石として先輩を凌駕するに至れるや必せり、實に幸ある未來を有せり、和氣家の隆盛期待すべきあり、氏須らく自重修養以て其大を期せ。

氏は温厚着實の中に剛氣を有し明敏なる頭腦を有せり、人に接する淡白にして眞實、洵に常識の円熟したる好紳士にて人に阿り世に媚び又人を侮ると云ふ事なく、萬事注意周到に

して毫も敵を求めず、爲に名望隆々として村民の信賴する所たるなり、されど年齒尚春秋に富む、實際の手腕を發揮するは今後に屬せり、須く自重以て益々名聲の大を期せ。



京都に於ける成功者

有本 嘉兵衛 君

氏は丹後舞鶴町有本嘉六氏の男にして大阪高麗橋四丁目に於て洋服商を營み大阪商業會議所議員、前代議士たる有本國藏氏の令兄あり、氏は京都に於て國藏氏は大阪に於て共に同じき洋服商を以て大成功の人とある、然かも其経路も同じく單身空拳を提けて郷關を出で苦心酸贖僅か三十ヶ年にして何十萬の資産家と稱せらるゝに至る、其に以て郷黨青年を奮起せしむるの模範と爲すに足れり、國藏氏の成功は別項記す如くにて、氏が今日迄の經歷の主要を記さば實に驚くべきものあり、氏は三十歳と云ふ壯年に達し然かも令弟國藏氏よりは遅くる、ここ数年にして郷關を出で兄弟東西に分れて成功を争ひたるものにて、氏が京都に洋服商を開業したるは明治二十年頃にて洋服の需用は年と共に激増せる柄柄なれど日に増し繁昌を極り明治二十七八年戰役に際しては如何なる古服

も羽を生して飛ぶと云ふ好況ありしかば、盛に外國より古服を輸入して仕立替へ内地の需用に應じて抄からざる利益を得たるが基となり三十七八年戰役にも英國に特派して巨額の原料を輸入し内地の需用を充たしたるものにて此二大戰役に於て二十萬圓以上の純益を獲得したるが、尙日獨戰役に於ても抜目なく活動せられつゝある由にて今や其資産三十萬圓と稱せらるゝに至れり、斯くて氏は舞鶴町の素封家近藤久兵衛氏の令弟辰之亮氏を養嗣子とあして、商店の大半を委ね、老後は最も閑靜なる郷里舞鶴の地に於て悠々風月を友にせんと、昨年舞鶴町と海上相對せる四所村の海邊に地を下して宏壯なる別荘を新築し、本春還曆の祝賀を兼ね郡内在住の重なる官民百余名を招待して盛ある落成式を舉行し、其成功を披露したるが如きは地方稀有の事とて頗る令名を博せり、

氏は資性温厚着實にして態度沈着あれども大膽にして頗る進取の氣象に富み理財の途に長せり、然して其是とせる事業に向ふては如何なる障害をも突破して奮進し成功せしめざれば止まずと云ふの氣概を有せり、されど熱心にして努力を惜



成生蠶種合資會社

業務執行社員

後備歩兵伍長 功八等 上野尾助君

加佐郡東大浦村字成生

氏は明治十五年五月一日現住地に瓜々の聲を擧ぐ、幼にして穎悟伶俐を以て稱せられ將來有爲の少年たりしが、果せる哉、明治廿一年四月田井小學校に入り同校卒業後大浦高等小學校に入りしが各學年とも成績優等を以て卒業せり、明治三十五年徵兵として歩兵第二十聯隊に入隊三十六年歩兵上等兵を命せられ三十七年五月歩兵第二十旅團司令部附と命せられ日露戰役の爲り五日旅團出征に従軍、爾來旅團司令部の傳令として各地に轉戰三十九年二月五日平和克復に依り凱旋と同時に滿期退營を命せられたるが、同日善行證書及び下士適任證書を附與せられたり、同年四月一日戰役の功に依り勳八等白色勳章章及び功七級金鷄勳章並に年金壹百圓及び從軍記章を下賜せられ、同年五月歩兵第二十旅團司令部より勳績精

勳の廉に依り木杯一個を下賜せられたり、明治四十年六月第二種勳務演習に服し同年九月陸軍歩兵伍長に任せられ爾來後備役に編入せられて今日に至れり、
明治三十九年土佐の漁夫を聘し成生部落の事業として蠶大敷網を使用し蠶漁に従事し一網にて八万圓と云ふ巨額の收益を見たる以來最初は如何があらんと杞憂を抱き居りたる村民も此大漁に覺醒し、爾來成生蠶大敷組合を組織し大々的斯業に従事する事となりたるより明治四十一年四月氏は擢んでられて之れが監督となり大に斯業を鼓吹して四十四年に及びたるが、同年三月北海蠶漁業株式會社の創立せらるゝに當り辭して會社に入り常務取締役就任せり、四十五年四月擧げられて同社長となりしも大正四年三月廿日會社解散に付き退職

、同年四月成生漁業組合評議員となり五年四月同組合理事に擧げられ同時に成生第三號大敷組合管理長に推され爾來兼務して今日に至れり、尙大正六年一月福井縣大飯郡高濱町に成生蠶種合資會社を創立し専任業務執行社員となり、目下斯業の爲に盡瘁しつゝあり、

氏は温厚着實の君子にして兵役滿期後は夙に蠶業の有利を説き自ら卒業して桑園の改發、飼育の周到を究めて之れが普及に努め自家收購百圓以上と稱せられ成生蠶業として今日あるに至らしめたるもの氏の力大なりと稱すべし、又部落の調停圓滿を計り特に虚飾の弊風を打破し部落進展の基礎を固めたるも其事績の見るべきもの妙ならず、頭腦明晰にして頗る進取の氣象に富み、事に當りて熱心且つ努力を惜まず、

森寫眞館主

森 羊三郎君

加佐郡舞鶴町

加佐郡中高真を以て營業とせる人決して少しとせざれども其技術に於て一頭地を拔き噴々たる好評を博しつゝあるを森寫眞館とす、館主羊三郎氏は地方屈指の名望家にして青年時代は小學校教員たりしも、大志ある氏は薄給の教員に甘んずる能はず、遂に策を東京に負ひたるが當時は未だ各種事業とも頗る幼稚にして舞鶴町の如きも寫眞師なく寫眞と云へば

什麼は物かと稱せし位の時なりしかば、進取の氣象に富める氏は早くも此技術の優美にして將來有望あるを看取し、東郡に於て之れが研究に従事すること數年、明敏なる頭腦を有し人が一口云へば今度何を云ふと十口も先の事まで悟て居ると云ふが如き先天的天才を有する事とて、人が一年も掛る處を已れば一ヶ月にして研究すると云ふが如き實に恐ろしき真

も頭を持てり、爲に技術は忽ちにして先業を凌駕し田舎に歸へりて開業するのは惜しき者なりと津京を勤められたれども元より郷里に於て一族擧げんどの志望より茲に及びたるものなれば師と袖を分ちて歸省し現地に開業したるものあるが、技術の卓絶は忽ち地方の評判となり、本館者は頭を接して引も導らざるの盛況にして爾來年と共に發展して僅の間に頭角を現はし成功者として目せらるゝに至れり、

實性快活にして克く語り克く談じ、何人にも城壁を設けず營業柄とは云へ海に平民的にて一見舊知の如く胸襟を披瀝して語る處に一種云ふべからざる温情の掬すべきものあり、之れ氏が今日の名譽を博せる所以にて、同町區長となり、町會議員となり、實業協會評議員となり築港委員となりたる等町内に事業起らば必ず擧げられて委員となり公共の爲に盡瘁するを常とせり、真に口八丁、腕八丁の才子にして、殊に義俠

四所村の元老

動七等

龜井駒太郎君

加佐郡四所村

龜井家は地方に於ける素封家にして代々公職に參與せり、氏亦幼より伶俐にして言語明晰、七八歳にして大人も及ばざる青髯を弄し龜井の坊には時と何れも舌を巻く程にて將來を矚目せらるゝもの頗る盛大ありしあり、果せる哉、秩序

ある學歴を有せされども腕八丁、口八丁を以て衆を首肯せしむるに至れり、明治二十二年町制實施の際擧げられて同町會議員となりし以來滿期毎に再選して現に今も其任にあり、同廿五年十月學務委員となり廿八年八月辞任したるも四十年

八月再び擧げられて其任にありしが大正元年八月滿期退職せり、明治三十五年十月同村々長に擧げられたるが偶々三十七八年戦役ありて各町村何れも事務に忙殺せられ遊蕩を招く町村さへ跡からざりしに、氣骨稜々朝氣滿々として積極的志想を見地とせる氏は其手腕に於て東奔西走、日には幾度か出征兵士を舞臺に於て軍港に見送りて其行を感にし家族を慰めて後顧の憂ひをからしめ、戰病死者の遺族を救護し公債の募集款金の奨励等戦時の村長として毫も遺憾あらしめず、

町内町村長中の利ものを以て稱せられたり爲に平和克復とあるや其功に依り動七等に叙し金五十圓を下賜せられ同時に赤十字社總裁宮殿トよりは木杯と下賜せられたるなど名譽を博せり、明治四十年九月町會議員に擧げられたるが四十四年九月滿期再選せられたり、されど後進者の進路を開く爲とて大正四年九月滿期の際再選を強ひられたれども固辞して出でず

、爾來村會議員として村政に參與せるが大久保彦左衛門式にて矢張村會議員の牛耳と執りて重きを爲せり、氏は温厚の裡に抜くべからざる勇氣を有せり、真に三ツ子の心六十までの譬へに洩れず、老ひて益々旺盛氣骨稜々として恰も竹を割りたるが如しされば人に接するにも隔壁を設けず淡白にして克く語り、殊に仁俠に富み、且那什んか頼みますと頭をさぐれば見捨てる事の出来ざる美酌を有せり、されば何れか云へば性格熱烈ある爲り善にも強ければ惡にも強く薬にもなれば毒にもある、敵としても愛すべく、味方とすれば實に頼母しの特長を有せり、されど氏の一代は大なる波瀾なく順境に通過し有終濟美の人として龜井家の系譜を飾りたる成功者たり、氏年齒尚春秋あり折角自愛を事とし鶴壽あらんことを。

河守上村長

動七等

佐藤留太郎君

加佐郡河守上村字内宮



氏は明治九年六月五日現住地に孤々の際を擧ぐ、佐藤家は地方に於ける舊家にして代々農を業として公職を勤む、氏は

年七歳にして同村小學校に入り明治二十三年四月尋常小學校別科第一期卒業、同二十九年十二月徴兵として野戦砲兵第十

聯隊に入隊三十年十一月大阪衛戍病院に於て陸軍看護學卒業、同年十二月看護手を命ぜられ三十一年十二月第十師團より陸軍三等看護長に任せられ同時に野戰砲兵第十聯隊附を命ぜられ在勤中翌年四月一等給に昇進、三十二年十一月善行證書を授與せられ、同月三十日現役満期歸郷と同時に豫備役に編入せられたり、爾來家庭にありて農に従事せしが三十五年十一月擧げられて同村書記となり勤務中三十七年九月日露戰役の爲め充員召集に依り辭任直に應召、姫路豫備病院附を命ぜられたり同年十二月後備歩兵第五十八聯隊附に轉じ三十八年一月姫路出發清國柳樹屯上陸爾來各地に轉戰、同年三月二等看護長に任せられしが六月病を得て安東縣兵站病院に入院せり、爾來經過良好稍全快に至りしかば八月姫路豫備病院附として歸郷を命ぜられ以來同豫備病院に勤務せしが、九月一等看護長に昇進せり、然るに間もなく平和克復とありしかば三十九年四月戰役の功に依り勳七等青色桐葉章並に金百八十圓を下賜せられ五月召集解除に依り歸郷、同九月軍人恩給法に依り給助金九十圓を下賜せられたり、四十年四月擧げられて河守上村收入役となり同年二月辭任と同時に同村書記に轉じたるが四十四年十二月加佐郡書記に任せられ、四十五年七月赤十字社支部加佐郡委員を囑托せられ大正元年十二月職務勉勵に依り赤十字社より金七円、京都府より金二四五十錢賞與せられたり、大正二年四月京都府檢疫委員を命ぜられ、同年八月十級俸に昇進其月家事都合に依り郡書記辭任願出に依り俟願本官を免せられ之れと同時に京都府より在官五年以上に

付き慰勞として金九圓下賜せられたり、同月河守上村助役に擧げられたるが九月郡書記在職中本事業盡力の賞として赤十字社京都支部長より金三圓下賜せられたり、爾來村長を補佐して政務に精勵中村長眞下市松氏の後を襲ひ本年二月村長に就職せり、氏は資性温厚質朴にして言多からざれども明敏なる頭腦を有し博識強記、人に接する平民的にして毫も驕る侮る等の事なく虚名を厭ひ華奢に流れず、亦吝あるにもあらず至誠以て事に當り自ら執務して敢て勤勞を厭はず、殊に氏は公共心に富み其助役當時より何事にも率先して地方開發の任に當り、多く人手を俟たず先ず自分之れを爲して範を示し然して後ち衆に實行せしむと云ふ風にて其難きを強ゆるにあらざれを氏が發言し氏が計劃をしたる事は一として行はれざるなく、殊に郡書記として蘊蓄したる手腕をれを適度に發揮せられて名聲は大を加へ今日の地位に進みたるものにて、今や一村の主腦者として同村の盛衰を双肩に荷ふ大責任者とはなれるありされど村長としての就任日尙淺く事績の見るべきものなしとすれど、君が抱負は深淵にして淺からず其理想の發現を見るに至るべきを信じて疑はず、洵に氏の如き敏腕家を主腦者に得たるは同村の幸福と稱すべく、亦村民の期待決して鮮少あらざるべし、君年齒尙少壯前途は實に遠遠にて國家の爲に貢獻するは寧ろ將來の事に屬せり、過去の歴史を辱しめざる機益々奮闘以て村政の爲に其職の忠ならんことを望むものなり。



東大浦郵便局長

赤井千代太郎君

加佐郡東大浦村字田井

赤井家は同村に於ける舊家にして代々庄屋を勤め村民の崇拜せし家柄たり、先代忠左衛門氏は人格高尚にして温厚着實克く村民を愛撫して名聲を博し明治の初年郵便局の全国各地に設置せらるゝに當り東大浦郵便局長となり通信事務に従事したる以來東大浦郵便局長となり老年に至るまで執務して嗣子に譲れり、嗣子千代太郎氏其後を受けて郵便局長となり今日に至れるものにて、氏は頗る進取の氣象に富み、明治三十九年地方漁村の發展を圖るには目下九州に於て日高榮三郎なるもの頗る大敷網を發明して噴々たる好評を博せりと聞く、本村に於ても斯くの如き改良網を使用したらんには漁村の幸福なるべしと、之れが使用方を村民に勧誘するに雖も何分多大の經費を要する事とて容易に協賛難らず、されど屈せず熱心に村民を説き、一方には網主日高榮太郎氏に交渉して漸く網と指導者は日高氏持とあし人夫は田井部落民總出にて之れに當る事とありたる次第なるが、幸にも氏の先見遠はす最初の一網に於て十萬圓の收入を獲得するの大漁を爲し雜費を引き

て純益は村民平等の頭割となりたる事とて昨日まで僅か貝藻を拾ひ其日の暮を立て居りたる細民すら何百圓と云ふ割當を貰ひし事とて村民の喜びは一方ならず、されば最初赤井氏の勧誘に逢ひたる時其度冒險的の大事業を企て万一失敗に終りたる時は何なるかと杞憂を抱き居たる曖昧屋さへニコニコものにて進んで大敷網購入を建議すると云ふ俄の願ぎにて、村内は喜びの聲を以て満たされたり、されば翌四十年には田井漁業組合の事業として大敷網一個を購へせり、尙此外に赤井氏は田井大敷網株式會社あるものを組織して自ら専務取締役となり、亦一方漁業組合にては理事を勤めける爲め兩者の連絡を計りつゝ之れが發展に努力せしかば數年間は何事もあく順境に進みしものゝ組合の規模と違ひ會社は漸次資金を増加して大敷網二個とせざる爲め収益も組合の比に非ず資本金二萬二千圓に對し何十倍と云ふ配當をせざる爲め、勢ひ會社に關係ある組合員は理事赤井氏等に何か怪しき点あるかの如く推察し批難するものさへあるに至り遂には會社と組合間

に権限争ひの紛擾さへ惹起するに至りしかば、氏は其煩を避くる爲め組合理事を辞して今は専心會社の爲に盡瘁しつゝあり、尙氏は村會議員となり、田井區長とあり常に公共事業に貢献せるなど同村に於ける一大勢力家たるなり、氏は資性剛膽にして大悠なれば細微の事には意をも留めず、されば其爲す事常に冒險的あれども、機を見ることこの敏なる爲め未だ曾て一步も誤らず若々と成功して今や其財産何万



朝來村の功勞者

梅垣孫右衛門君

加佐郡朝來村字岡安

氏は弘化四年十一月十五日現住地に呱呱の聲を擧ぐ、梅垣家は同地に於ける舊家にして又素封家たり代々農を業とし公職を勤り村民の崇敬せる所たりしなり、氏は明治二十二年町村制實施の際擧げられて同村收入役となり二十六年六月滿期とあるや直に同村助役に擧げられ二十七年九月助役任期中選ばれて同村々長となり三十一年九月滿期再選して三十五年九月まで勤續せりされば收へ役とありし以來村務に従事したること實に滿三十三年此間には日清戰役あり北清事變あり役場事務は複雑を極めたれども着々整理して毫も遺憾あらしめず

爲に二十七八年戰役には其勇に依り賞勳局より木杯一組を下賜せられたり、のみならず教育に産業に衛生に此間に於ける事績は顯著なるものありて故擧するに遑あらずれども儘かに同村に於ける功勞者として表彰するに足れり、されど氏は極めて田滿にして已れ一人長く其職に留まるは後進者の進路を塞ぐものにて自治の進展にも面白からずと崇高ある見地の下に村長勤續二期を限として再び出でず、爾來自邸に籠りて悠々自適晴耕雨讀の人となれるが、爾來其名聲は一段と高きを加へ村民其徳を欽慕し、四十年二月岡安區長に推薦し又同

年七月同村學務委員に選舉したれ共何れも申譯的に一ヶ年其任に在りしのみにて自分は既に國家に對する義務を果したれば再び其任に復し新進者の進路を殺ぐは本意にあらざと固辭せり、されば村民其意を諒とし爾來再び口にせず、氏は資性温厚篤實の君子にして、人に接する謙讓寡言なれども肺腑を披きて陰險ならず、其發する一言一句は悉く至誠

の結晶にして對者をして一種の温味を感せしむ、事に當りて熱心努力を惜まず又一時の虚榮に進退を輕んぜず、最も責任を重んじ石橋も叩て後に渡ると云ふ風ありたれ共其一言は千金として重く用ひられ村民としては成功者の一人たり、今や齡七旬を越ゆれども尙鏗鏘として花鳥風月を友として子孫の繁榮を樂めり、多幸と云ふべし。

河守上村の功勞者

西垣權左衛門翁

加佐郡河守上村字二俣

西垣家は同村に於ける素封家にして代々農を業とせしが翁の世に至りて吳服商を兼業するに至りたるが洋反物新輸入の折柄とて頗る繁昌を極め隆々産をあすに至れり、翁は天保十三年五月生れにて、頗る明敏なる頭腦を有し進取の氣象に富み機を見る亦敏あり、されば其爲すこと悉く衆を抜き卒先的にして秩序的學を修めされども一度聞た事は生涯忘れぬと云ふ稀有の腦力家にして其記憶の憶かあるには何人も舌を巻かざるはあく、爲に明治七年七月選ばれて第十四大區第五小區二俣村用掛となり、翌八年三月同村學校學務掛となり、明治二十二年町村制實施に當り河守上村と改稱するや同村助役に擧げられ二十五年四月同村會議員となり、二十六年六月同村名譽職村長に擧げられ同時に助役辞任したるが翌二十七年

八月病の故を以て辞任せり、然るに村民は其手腕を欽慕して止まず爲に二十九年一月再び村長に推舉し強て其任に就かしめたれども翁は家事都合上何ふしても其任に堪へずとて卅年三月固辭して椅子を去れり、されど村民は惜みて尙其再任を迫りて卅一年四月又も村長に就職せしめたるが爲め爾來在ること滿三年、漸く後任者の適任を得、村民亦満足せる爲め三十四年一月其職を辞せり、翁は之を以て公生涯の終りとなし爾來孜孜として家業に従事し再び出でず、爲に財産は益々大きと爲すに至り西垣家今日の隆盛を見る全く翁の賜あり、今や家督は長子峰之助に譲りて隱居の身なるが、現主峰之助氏亦翁の血を受け繼ぎて聰明英敏同村區長となり、村會議員となり、同村助役となり公務の爲に盡瘁して將來を重視せらる

もの甚大あり、翁の世は家事に支へられ折角村民の熱望をも充分満足せしむる能はざりしは翁の爲にも村の爲にも齊しく憾とする所たりしかれども現主峯之助氏は振ふて村民の期待に答へ先代たる翁の欠陥を償ふに至るべし、之れ現主の任務たるあり、尙現主峯之助氏の長子即ち翁の愛孫義太郎氏は大正三年岡山醫學專門學校を卒業し爾來京都帝國大學に研鑽

加佐郡會議員

岡山八百藏君

加佐郡東大浦村字大山

氏は東大浦村に於ける千両役者にして將た大久保彦左衛門たるなり、其意義旺盛にして如何なる強敵をも一撃の下に挫き實に快刀乱麻を斷つ勇氣あり、朝氣満々として稜々たる氣骨を有す藥にもなれば毒にもある敵とすれば恐るべき味方とすれば頼母しき特長を有せり、されば其堂々たる議論は敵の肺腑をえぐり心膽を寒からしむるものあり實に郡東部に於ける飛將軍たり、されば政事方面にも實業方面にも爽快ある意氣は遺憾なく發揮せられて明治三十二年の頃同村収入役となりたる以來區長となり、村會議員となり、郡會議員となり、學務委員とある等村内に事業起らば必ず出て委員とあり公共事業には献身的奔走して克く世話を爲せり、現に一昨年九月郡會議員選舉に於けるが如き氏は還歴近き身を以て馬を陣

頭に立て血氣壯ある梅垣廣藏氏と鎗を削りて見事月桂冠を贏ち得たる如きは氏が手腕の凡ならざるを證するの一例にして亦氏の氣象を語るものあり、斯くの如く如何なる方面に向ふても負けること大嫌ひにて爲す事は何處までも進取のあり、明治三十九年以來編大敷網の使用に就ても赤井千代太郎氏と共に東奔西走して田井部落の爲に盡し、氏亦多くの配當を得て編成金の一人と稱せらるゝに至れり爾來進んで田井編大敷網株式會社と協定して全會社の大敷一個を借受け別に株式會社を創立して其専務とあり經營すること五ヶ年大正二年契約満期に依り解散したるが、尙氏は四國、九州地方に遠漁して大膽なる鱒漁となせるかと今尙活動を繼續しつゝあり、されど昨年土佐に於ける鱒漁は不結果に了りたる由もあれども、之

れしきの事毫も意とするに足らず、氏が一代を總算せば浮沈ありと雖も之れを概括せば成功の人たるなり、今や東大浦村に於ける元老として大久保式を發揮しつゝあるを老いて益々盛なるものあり、氏が生涯は實に花咲き實の樂しき一



家屋引揚の元祖 小和田藤兵衛君

加佐郡四所村字白杉

現今でこそ社會の進展と共に機械器具等應用せられて如何ある家屋も自由自在に動かす得ると雖も三百年以前に於て然かも機械などの力に據らずして大建造物を上下自由になし、三丹州に於て家引揚の元祖として代々其名を知られたる小和田藤兵衛氏の祖先是、正二位右大臣信長の舍弟從四位從從田源五郎有齊八代後胤二代の後故ありて白杉へ來り歸農し代々藤兵衛を襲名し農の傍ら土木業を營みしが四代藤兵衛清之氏は頗る英敏博識にして石工を業とせしが當時地方には名工なき爲め田邊藩王の如きも常に備前より石工を雇入れしものあり、遂には備前石工の立場を奪取し其名譽を三丹に轟かすに至りたるが、其後益々業務に精勵し年と共に研鑽して、妙

不可思議なる天才と得て家藏等總ての大建築物を上下自由に引き廻らす事を發明したれば這は珍らしき重寶の事ありとて大に世に用ひらるゝに至りたれば時の領主も御賞讃ありて、帶刀御免になり舞鶴崎に地所百坪並に長屋一棟を下賜せられ當時の作事奉行高取俊助氏に屬して、山川萬般の作事に従事したる中にも天保年間江戸屋敷に於て玄關の大石置替へを命せられ成功せしめたるが如きは著しき功績にして其賞として藩主より島目九貫匁酒肴一荷を下賜せられたり、是れ小和田家に傳ふる家屋引揚かしの祖にして、五代目藤兵衛清宜も創業を繼ぎ安政年間江戸大地震の際御屋敷の内外破損し復舊工事に勤め尙舞鶴崎海岸埋立石工事の監督として三ヶ年繼續事業を無事竣成せしめたるほどの功績あり、六代藤兵衛

亦商業を繼ぎ大川神社の本殿を引き拜殿其他附屬建物の石工
々事に従事し又宮津一の宮拜殿を夜中不思議なる術を以て高
所に曳揚げ、明治廿九年教賀金々崎の海中より大砲を引揚げ
て舞鶴に持ち歸へりたる等の働きは當時地方民を驚嘆せしめ
今や尙記憶に新ある所たるあり、七代孫兵衛氏は即ち現主に
して氏も亦商業を繼承せるが世の變遷と共に同業者も漸次多
きを加へ昔日の如くはあらざれども、氏が奮闘努力は祖先の
名聲をして愈々益々大あらしむるものあり、



東大浦村の豪家

嵯峨根孫兵衛君

加佐郡東大浦村字田井

嵯峨根家は地方に於ける最も古き舊家にして、同村には古
来より八軒屋と稱して舊家の一團あり、同家は其筆頭を以て
重きをなせり、代々孫兵衛と襲名して農を業とせり、先代孫
兵衛翁は弘化三年生にて幼名を實三と稱し家督相續に依り孫
兵衛と改めしも世を嗣子に譲りて隱居となるや幼名に復して
實三を稱するに至れり、翁は幼時寺子屋に學びて僅に普通學
を修めたる外他に何等の學歴を有せざれども資性濃厚篤實に
して資産豊なりと雖ども、之れが爲に決して村民を輕侮する

が如き事なく、請ふれば資金を與へて細民を愛撫し其態度
は頗る平民的にて質朴を旨とし、家庭にありて勤儉を事とせ
るも公共事業と聞かば他に卒先して之に應じ神社佛團の寄附
は勿論、大は戦役に於ける公債の應募、小は村内に於ける道
路の修繕、學校の新築寄附等枚舉するに遑あらず、爲に其筋
より木杯賞状等の下賜せられたるもの頗る多し、斯の如く山
澤なる性格あれば村民の崇拜する所となり名聲亦大なるもの
ありて、田井區長となり、東大浦村會議員となり、學務委員

氏は資性剛毅にして滿々たる霸氣を有し氣骨稜々果斷に富
めり、然して義侠心に富み部下を見ること慈母の赤兒に於け
るが如く一つの物と半分宛でも興へると云ふ風なれば、部下
亦氏を敬すること神の如く爲に如何なる工事にても祖語を生
ずる事なく豫定通りに成功して名聲を博するも一致協力賜
ものにて、亦氏が性格を證するものなり、氏年齒實に春秋に
富めり幸に其美的を益々發揮して成功の人となれ。



先代故實三翁

とあり、宮總代となり、寺總代となり、田中漁業組合理事と
なり、田井浦大敷網株式會社取締役とする等殆んど常に三五
役を担へ固く愛勤して地方啓蒙の爲に盡瘁せり、翁は五十
年以前に於て地方に豊富なる山林の經營に着眼し未だ他に稱
有なる時機に於て
多數の杉苗を栽培
して之れを山林に
移植して造林を圖
りたり、年と共に
其反別は増加して
今や何十町歩の多
きに及び中には五
十年を越ゆるものさへ紛からず滿山鬱蒼として爽麗を極む、
今之を現金に換算せば頗る莫大なるものあり、氏は斯の如く
一面には公共の事に貢献し亦一面には子孫の爲りを盡し有終
の人として大正二年年七十歳を以て逝去せられたり、
氏は翁の長子にして明治十七年一月生、業の上よりの坊稚

育ちあるにも拘らず、資性極て快活にして何事にも隔壁と設
けず淡白に、胸襟を披瀝して語る所は現代稀に見るの君子肌
なり、されば村民に接するにも恰も兄弟に物云ふ如き態度に
て毫も尊大振るが如き態ひあらざれば、村民も心易き付合易
き且那權として信賴せる爲め、其名聲は決して先代に譲らず
、されど數年前までも先代が鏗鏘として公共事業に盡瘁せら
れたる爲め、氏は其種下に暮し蘊蓄せる手腕をも未だ發揮す
るの時機なく僅に公職としては田井區長に就任せしに止され
ども、今は既に其障害もあらざれば氏が活躍すべき時代とは
ありしなり、殊に氏は頗る實業熱心家にして先代存命中より
土佐國ある某網大敷網王と共同して與那郡沿海なる新井、泊
の二ヶ所に於て年々鱈漁を爲せるが一期を五ヶ年として契約
せるに昨年其一期満了し續て亦一期契約をなしたるなど其活
動振を窺知すべなり、されど從來は成功の基礎工事にして多
く語るべきの資あり、氏が手腕をして愈々發揮せしむるは今
後の事に屬し實に前途遠達なるものあり、須らく自重修養以
て大成を期せ。

後備陸軍二等軍醫 岸本仙次君

加佐郡新舞鶴町

近時一般の職業醫を見るに、何れも職業當時は俗に所謂流

行と稱し新規を悦ぶ我國の性僻は若輩扁鵲が再來の如くに

請診患者は門前市を爲すと雖も、忽ちにして雀羅を襲るを避
例とせり、之れ強ち初物食ひの患者性僻に非らずして醫師其
人が學校卒業後又は海外留學歸朝當時の如きは何れも新なる
蘊蓄を實現すると共に熱心甚だ努むる處あれども、僅に生活
の基礎を造るに至れば、最早小成に安じて日進月歩なる醫術
の研究を怠る爲に多くは時勢に淘汰せらる、結果茲に至れる
ものゝ如し、然るに開業以來終始一貫して益々業務の發展を
來しつゝある岸本仙次君の如きは海に刀圭界の異數たり、
氏は同郡東雲村の出身にして明治三十四年醫學專門學校卒
業の後一年志願兵となり、滿期後陸軍三等軍醫に任せられ
三十七八年戦役には衛生隊附として出征中二等軍醫に昇進し
、平和克復歸郷の後現地を卜して醫術開業せしものにて、
舞鶴警察署の設置と共に擧げられて警察醫となりしが間もあ
く龍宮新地の開發により同地娼妓検査所醫を囑托せられ爾來

同家は志樂家の總本家にして地方に於て最も古き歴史を有
する舊家あれども往年火災の爲に配録の全部を失ひたれば今
は唯子孫の口碑に傳ふ處あるのみなれども、先祖は延慶年間
同郡志樂莊市場に築きたる城主設樂五郎左衛門尉が元弘年間

東大浦村の元老

志樂益太郎君

加佐郡東大浦村字西屋

若狭國高濱城主逸見八郎の爲に討ち亡されたる際其血族が落
ち延て同地に來り一家を起して志樂姓を名乗り志樂榮原と稱
し傳へて代々農を業とするに至りたるものゝ如し、氏は安政
二年同家に於て瓜々の聲を擧げ其人とあるや温厚淡白にして

何人にも城壁を設けず親切を旨として信義を重ち、交際巧み
にして頗る常識の圓熟したる紳士的人物あるを以て村民何
れも附合易き人、親切ある人、行末握手して別條なき人、堅い
人として信頼するに至り名聲亦年と共に加はり、擧げられて村
會議員となり加佐郡全町村組合會議員となり、同村助役とあ
り村政に參與するに至りたるが頭腦明晰事務家を以て稱せら
れ其助役に在ること實に八ヶ年、明治二十九年十二月村長志
樂幸太郎氏が家事都合に依り辞任するに當り其後を襲ひて村
長となりたる等手腕は噴々たるものありて村長退職後は加佐
郡會議員に擧げられ續て土木委員とあるを同村一流の人物
たるなり、亦村内に事あれを必ず出て世話をなし頗る仁俠に



故

新宮涼庭翁

富めり、されを氏は謙遜家にして岡山八百藏氏の如き飛將軍
に非らざれば事に臨みて七分の弱味あり、然れども又一面に
は岡山氏をも凌駕するの特長を有せり、一長一短、一得二失
は是れ皆人世の軌道にして天の配劑たるあり、氏は實に四滿
を以て見地とせる人にて決して多きを望まず何處までも一農
夫を以て子孫の爲を劃し家運の隆盛を圖れり、農は國家の根
底たり、然るに近時一攫千金と夢想し祖先傳來の農を捨て都
會に走るもの多きを加ふ是れ氏の採らざる處にて是れ氏が常
に子女を戒しむる資料たるなり、其思想の高潔にして思慮深
淵あるに洵に農村に於ける柱石として稱讚するに足れり君年
齒春秋あり悠々自適靜養以て益々其美的の大ならん事を

諱は碩、幼名織造、通稱涼亭後に涼庭と改む、鬼國山人と
稱し又驅豎齋と號せり、天明七年三月加佐郡由良村に生る、
父道菴君岸田氏を娶る君放浪自適家産蕩然岸田氏日夜手づか
ら紡績して家口を贍給し僅に乏からざるを得たり、初め一女
を擧ぐるも君尙家事を省みず、岸田氏大に之を愛ひ謂らく若

し男子を擧げれば良人の行或は改らんと村南に高山あり由良
嶽と云ふ山頂に虚空藏の祠あり、岸田氏男子を得んことを祈
り果して男子を産む之れ即ち翁あり、翁は産るゝや既に二門
齒を生せり衆驚き怪みて曰く是れ鬼子あり直に擧ぐ可からず
乃ち權りに諾を通衢に棄て以て不祥を被ふ、外祖母拾ひ收め

て歸へり遂に養育す、

翁幼にして岐山縣村内松原禪寺に就て諸經の句讀を受け且つ書を學ぶ僧侶の講經問答等の事ある毎に必ず之を參開す一たび聞かば必ず忘れず、群兒と遊戯するに躬之が長となり衆伎の優劣を査別し優者には菓子を賞し勸戒宜きを得たり、群兒皆服し唯命之に従ふ、翁常に由良濱の平沙上に群遊す一兒をして俯伏して馬の狀を爲さしめ已れ之に騎り、衆兒をして前後に排列せしめ氣揚々として國君の巡行に擬せり此一事以て其秀才を知るに足れり、年十一丹波福知山なる伯父有馬京兼翁の學僕となり薪水の勞を執りつゝ醫術を學ぶ年十六歲從兄有馬丹山氏の學僕となり江戸屋敷に至るや赤雨衣を着て長槍を持ち與に隨て發するに藥か母氏は銀五十錢を惠する邸中に在ること二年、日に邸中の小兒數十人を教授す其一人の謝額は半年に銀三分とす獲る所僅に筆墨の資に供すべきのみ故に剃髮梳髮に至ては必ず手すから之を辨じ唯麻痺病後一度理髮店に行き髮を梳り以て十八文を費す又入浴は必ず邸中に浴室ある家に就て之を乞ひ曾て一孔の浴槽を費さしりしと云ふ年十八江戸より歸へり郷里由良川に於て醫術を開業したるが名聲忽ち揚り思者は踵を接するに至れり、年二十一、一日丹波檜山近藤一之進宅に於て宇田川氏所譯の初版内科醫要黃痘篇を讀し其理を論ずること甚だ詳明確たるを感歎し是に於て始て和蘭醫學を志し、地願内海奎氏の盡力に依り藩主より修業料月俸二口を頂戴したるも其月俸は父母奉養の資に充て自分は方金五兩を懐中して文化七年八月郷を發し長崎に

赴き吉雄六郎氏に師事して學び、後ち蘭館の醫師となり始て蘭醫苛爾結氏に接し爾來同地に在り研鑽すること十余年、年三十二歳に及び東歸す途次廣島に於て惠美三白翁に謁し長崎に於て發明せる吐根吐酒石の功能は瓜蒂に比す可く且つ服用し易きを説く翁大に悦ぶ同地に留ること半歳弟子倍々進むも辭して郷に歸る、文政二年業を京都室町に開く爾來日に隆盛を極め日に來診するもの數百人、午後往診する者五十家を降らざりしと云ふ、斯くの有様にして其得る所も亦甚だ多く毎歳凡そ二千五百圓を下らざりしと現今の二千五百圓と違ひ當時に於ては實に莫大ありしあり、其貯蓄も頗る多く巨萬の財を累ぬるに至ると雖も質素を旨とし油塗の如き燈心二筋より多きと許さしりしと、

爾來翁の名聲は愈々高きを加へ遂には宮中のお召とも忝ふするに至れり、斯の如くして幸福なる一世を送り嘉永六年十一月偏頭痛を發し衰弱漸く加はり安政元年正月九日享年六十八歳を以て歿す、瑞龍山下南禪寺塔中天授庵に葬る證して順正院開涼庭居士と云ふ翁は實に我國蘭醫の元勳にして刀圭界をして今日あるに至らしめたる翁の功績決して誇しとせずされば、今上天皇其功勞を思召され御即位大典を奉けさせらるゝに當り翁に贈位の御沙汰ありたり、之れ刀圭界中與數とする所にて新宮家の名譽たるなり、此光榮に浴したる報告録に關み愛孫涼亭氏記念の爲めとて新宮涼庵先生言行録てふ小冊子を發行して順正醫會員其他に願てり、見るに載せて詳細を盡せり本史は唯其内二三を摘記して實と果たせり、

加佐郡會議員

村田千代藏君

加佐郡新舞鶴町字市場

加佐郡、立志傳中の人を數へ來れば決して少しとせざれども氏も亦其一人たり、家は地方に於ける舊家にして米穀商を業とせり、氏は幼時博識強記伶俐を以て稱せられたるが、果せる哉、長ずるに従ひ資性濃厚着實にして人と争ひを好まず八方美人的には非らざれども至極田滿にして眞面目に至誠以て事に當ると云ふ風にて餘り多くを語らざれども其一言一句は肺肝を衝て出で誠實の結晶として重く用ひられ、町村制實は以來志業村會議員として將た市場區長として農村の爲に貢獻したること多年、明治三十九年新舞鶴町設置に依り志業村の内字市場、泉源寺の同町に編入せらるゝ當時の如き分村に就ては幾多の障害ありしも氏等其間に立ちて田滿なる解決を案し、新舞鶴町となるや町會議員に舉げられ亦市場區長に舉げられたる等絶へず公職に參與して新舞鶴町一流の人物を以て稱せられ頗る名望あり、宅は米穀商の外質商を營業として家運の進展を計れるが偶々置町と共に龍宮新地指定せられたるに傍倅にも其敷地の大半は氏の所有する所にして、之れが賣却に當り意外の収益を得て飛鳥に翼、鬼に金棒と云ふ幸福を贏ち得たるものにて村田家今日の隆盛實に茲に因するなり

然して氏は明敏なる頭腦を有し理財の途に長ずれども世の富豪と全く其趣を異にして吝嗇ならず、人に頼まれた事は否と顔振りの振れない氣象にて克く人の世話をなし神社佛閣の寄附は勿論、公共的事業には進んで出金すると云ふ有様にて、爲すことも爲し云ふ事も云ひ、決して人後に落ちず、斯の如く一事が萬事擊實にして援目あく氣品高尚にして總ての態度が君子的あるを以て町民何れも氏を信頼し昨年七月郡會議員阪根一治氏が死亡に依り之れが補欠として大多數を以て氏を舉げたるが如く年と共に其名聲は愈々大を加へたり、昨年九月町會議員滿期となるや再び候補者に擬せられたれども新進有爲の人材は爾後の筈に等しき今日に於て身は郡會議員たるさへ過分なり、再び町會に立つの意志を固辭したるが其志の崇高にして田滿なるは今更らあがら町民一般の稱揚する所にて、眞に温情の掬すべきものありて其信任は一段と厚きを加ふるに至れり、爲に本年又も同町學務委員に推舉したるが、新舞鶴町の如き他國人の寄集りものを以て多數を占め氣質狡猾にして徳望なく節操なく眼中唯我利あるのみなる中に超然として高尚ある人格を持し頭角を現はして今日に至る

真に泥中の蓮花にて町民の信頼する故なきに非らざるあり、
君年尚尙春秋あり幸に其美約を益々發揮して新舞鶴町の爲に

貢賦する所。



加佐郡所得税調査委員

布川 徳藏 君

加佐郡餘部町

氏は府縣制實施の初に於て衆望を荷ひ然かも二期まで府會
議員の職に就きたる郡東端の大立物、政界の先覺者として赫
々たる名望を收め有終の人として幽界に入りたる功勞者布川
徳兵衛翁の養嗣子たり、布川家祖先は高田九郎左衛門と稱し
餘部村城主たり應安の頃信長の命に依り、一色左京大夫に討
つ（焼討）亡されしかば僅に身を以て遁かれ高田の姓を捨て母方
の姓（越後藩士の落人）を採りて布川と改姓せり、其間に於
ける幾代系譜は寛文十年の大突波に際會して流失せしかば今
は其詳細を知る能はず、中興元祿年間布川又之丞氏より相續
々六代を布川徳兵衛道寛と稱す即ち先代徳兵衛翁なり、翁は
天保六年六月餘部下村に生れ明治四年庄屋役を拜命以來區長
、村會議員、郡會議員、郡府農會議員、府會議員等の公職に有
ること數十回餘部町置町前より新市街計劃に對しては最善の
注意と拂ひ盡瘁怠りなかりしが明治三十三年九月病の爲に逝

去せらる、翁が斯の如く公共事業に熱心なると地方の名家た
るの故を以て高貴の台臨を忝ふせしこと屢にて、明治二十年
同地に軍港設置の内議あるや北垣京都府知事地方巡視の名の
下に來港し同邸に泊せしを始とし、二十一年八月五日參謀本
部長有栖川一品親王殿下海軍用地御巡視の際御台臨相成り、
同年十月一日西郷海軍大臣、仁禮中將、伊東少將以下十數名
の海軍武官休憩せられ、同年十月十四日有栖川若宮殿下の御
台臨を蒙りたるが如き數々の光榮に浴し布川家の系譜を飾れ
り然るに翁の嗣子壽平氏早世に依り其令妹文子の婿養子とし
て氏は明治四十二年入家せり、氏は明治十二年同郡中筋村に
颯々の聲を擧ぐ、幼にして聰明強記、人どあるや淡白快活に
して朝氣を有し頗る明晰なる頭腦を有せり、されば布川家に
入りし以來公共の爲に盡瘁して大正元年六月同町長島吉次氏
と謀り同町代表者百餘名と雲門寺に會合して町政の大刷新を

叫び遂に之を斷行せる如きは特筆すべき美談にて、尙昨年
新舞鶴町に於ける交通の便を圖る爲り開放せられたる軍港橋
内道路の如きは氏が其主動者として最も力を盡したる問題に
て全く氏等該當者の賜ものたるあり、
氏は現に餘部町會議員、同町事務委員、同用信用組合理事
三舞鶴屠場組合會員、餘部町實業會幹事、同町貸家組合幹
事、同町實商組合長、加佐郡所得税調査委員等の職に在りて

今や餘部町に於ける賣出の人氣者たるなり、氏に依りて赫
々たる布川家の名聲は亦一段と重きを加へ徳兵衛翁の養嗣子
として耻しからず、家運益々隆盛と極りつゝあり、されど氏は
年齒尚春秋高し實際の手腕を發揮するは早る將來の事に屬せ
り、過去は即ち其基礎を爲せるものにて現在の位地、現在の
名望を以て今一段の修養を積んか先代をも凌駕するの大成績
に非らざるべし、幸に自重を祈る。



帝國生命保險株式會社
徵兵保險株式會社
日本教育結婚保險株式會社
代理店

上 仲 茂 之 君

加佐郡新舞鶴町二條通八島南

氏は明治十年十一月加佐郡志樂村字吉阪の一農家に呱呱の
聲を擧ぐ、新舞鶴高等小學校卒業後は暫く家業に従事したれ
ども、農は着實にして一攫千金の進取の氣象を有する氏には
適合せず、殊に社會は日進月歩の趨勢を以て向上し變遷極り
あく軍港の設置と共に一市街を爲したる新舞鶴町の如きは真
に一新して隔世の感あらしむるに至れるを、目前に之を眺
めては勇心勃々たる氏の如何で農事に甘んずるを得んや、明
治廿二年出て海軍御用商人となり、大に其手腕を發揮したる
が同二十九年帝國生命保險株式會社が新舞鶴町に代理店を設

置するに當り其主任を囑托せられたるが現今と違ひ當時は未
だ保險事業も珍重せられたる時とて、地方に歡迎せられて忽
ち五萬餘圓と云ふ突飛ある成績を現はし將來有望の事業たる
を自覺し四十一年用途業を廢止して保險業務とあり、四十
一年更に徵兵保險株式會社と契約して其代理店を引受けたる
が之れまた軍港地の事とて海軍側に歡迎せられ既に契約高二
萬五千円を算するに至れり、のみならず昨年一月よりは日本
教育結婚保險株式會社代理店をも契約して教育方面にも活動
しつゝあり、

保険屋に新聞屋羽織を以て稱せられ其職に従事するもの多くはイカサマ連の寄合にて、一度酒姫の巻に遊ばんか朝來暮去を知らず斗酒尚辞せずと云ふ難物を以て網羅せるにも拘らず、氏は資性温厚にして着實安に大を欲するをく篤實寛容、全く其性質を異にし斯業不適當なるかの如く疑はしむれども一步馬を陣頭に進めんか一面識を以て十年親交の如く温情面に顯はれ其誠實對者をして惚然たらしめ、言多からざれ

醬油醸造業

土井 喜七 君

加佐郡舞鶴町

土井家は舞鶴町屈指の舊家にして代々喜七を襲名し醬油製造を業とし生醜、度量衡器を販賣せるが地方に於ける素封家として噂々名譽を、先代喜七氏は頗る聰明博識の人にして、幼時見ると學歴を有せざれども非常なる敏腕家にして、同町總代となり、町村制實施せらるゝや舉げられて町會議員となり爾來幾度か滿期再選せられ、其人望の大なると共に舉げられて同町助役となり、多年町政に參與して公共の爲に盡瘁せられたる功勞者にして尙將來を曠望せらるゝもの甚大なりしに助役在職中病の爲に早世せられたるは、町民の齊しく悼惜に堪へざりし所なり、氏は其長子にして年尙若くにして家督を襲ひたれども、何

分お家柄と云ひ先代の餘澤に依りて重く用ひられ區長となり町會議員となり、尋て同町助役に舉げられたる等名聲は忽ち先代をも凌駕するに至りたるが、資性温厚にして人と争ひを好まず、眞に田滿なる君子人にて幼時多くの下男下女に聞かれ何に不足なく人となりたる爲り稍々世事に疎く、自分の正直あるに引比らべ人も正直なものと誰彼れなしに信用し且那樣是れく斯様だから頼みますと云へば、ソウかよしと有るに任せて資金を貸與し或は受判をせせしが禍根となり、近時妙からず資産を逸したりと傳へらるゝは氏の爲に同情に堪へざるあり、されど氏年齒尙壯、過去の失敗に鑑みて家運の隆盛を圖らんには古川に水絶へず何をか憂ふるに足らん、

古人云ふ失敗は成功の母あり爲に大なる成功を爲さんと欲せば必ず大なる失敗の經歷を嘗りざるべからずと、果して然らば氏は之れに因りて成功の基礎を爲したるものにて、樂しむ

將來を有せり、一得一失は人世の軌道あり、君須らく自重修養以て晩年の成功を期せ。

與保呂村の功勞者

宇留間 盛藏 君

加佐郡與保呂村

宇留間家は地方に於ける素封家たり、代々農を業とし庄屋年寄等の公職を勤めて重きを爲せる家柄たり、氏は幼にして極めて伶俐、一度聞たれば生涯忘れぬと云ふ頗る明晰なる頭腦を有せり、爲に麒麟兒とさへ稱せられたるが、果せる哉、其人となるや幼時蓋せる手腕は年と共に發揮せられて名聲を博し、町村制實施せらるゝや舉げられて村會議員となり、同村助役となり尋て村長となり、村農會長、團系組合長、産牛組合長を始め赤十字社分區委員其他各種團體の委員を囑托せられ同村の盛衰を双肩に荷ひ村政の爲に盡瘁せられたること多年、村長の如きは幾度か滿期再選せられて殆ど一生を公職の爲に貢獻せられたる事蹟は小學校の新築を始め衛生に産業に將た交通に枚擧するに遑あらず、直に同村に於ける功勞者として村民の齊しく崇敬する處あり、今や一切の公職を辞して閑地に老を養ひ風月を友とせると雖も、同村の元老とし

て重大事件起らば必ず氏の教を請ふを常とせり、氏亦敢て勞を厭はず克く世話を爲せり、資性温厚謹直にして思慮深淵、妄に大を欲せず、人に接する極めて田滿にして問ふあれを如何なる多事の折柄と雖とも決して之を五月蠅しとせず、諄々と教へて納得せしめ満足せしむるを常とせり、之れ氏の徳の大なる所にて村民の亦崇拜する所以たるなり、嗣子隠起氏は近衛歩兵上等兵にして、今は後備役の軍籍に在るが三十七八年戦役に従軍し其功に依り勳八等に叙せられ亂旋後同村助役となり、在郷軍人分會長となる等其名聲は決して氏に譲らず、されど年齒尙少壯にして其手腕を發揮するは將來の事に屬せり、又二男啓藏氏は教育家として若州高濱小學校に教鞭を執りて令名あり、氏は両手に花を持てるが如く家運益々隆盛を極め他の羨む所たるなり、誠に多幸と謂ふべし、幸に自愛を事とし鶴壽を祈る。

加佐郡會議員

西村勝平君

加佐郡新舞鶴町

多士濟々たる加佐郡人物中に於て現に花形役者として目せられつゝある才子を西村勝平君とす、家は同地に於ける舊家にして新市街設置の際多くの田地を街地に買収せられて頗る僥倖を得たる、市街成金の一人たり、現に同町の大地主として勢力あり、氏は長兄の早世に依り家督を相續せし人にて肥料と石油を業とし副業として煙草を販賣せり、氏は置町以前即ち倉梯村時代より村役場書記とあり、新舞鶴町と成るも引續き勤務して其職に在ること前後八ヶ年非常なる敏腕家として時の町長にも重く用ひられ明治三十三年助役改選の際の如き町長より其候補者に推舉せられたり、此一事以て其事務家たりしを知るべきなり爾來名聲は年と共に加はりて町會議員となり、奥保呂川水害豫防委員とあり、三舞鶴屠場組合會議員とあり、加佐郡東部傳染病院組合會議員となり明治四十四年九月郡會議員となり同四十五年新舞鶴町消防組頭となり以上何れも満期毎に再選して今日に至れり、

氏は口八丁手八丁の秀才にて交際亦巧みあり、人に接する磊落にして毫も隔壁を設けず、資性剛膽にして一旦己れが是とせる事は徹頭徹尾貫徹せしめられを止まず、頗る熱烈あ

る氣象にして其議場に列するや自己一流の議を唱して衆寡敵せざるまでも口角泡を飛ばして辯駁するを常とせり、爲に往々同人間より疏外せらるることあれ共、一面亦洒々として語る可愛らしき處あり、斯くの如き直言直行の氏なれば消防組頭の如きは其最も適任を以て稱せらる、同町は現在戸數三千五百軍港を包擁して日に旺盛を極め消防組の如きは普通一般の町村とは同一視すべきにあらず、任務は實に重大なり爲に消防夫百四十名を四部に區別せるが諸國人集台の地として消防夫の氣質も温厚ならず随分江戸兒を以て任する男も妙からされども、氏は克く之れを操縦して嚴肅なる規律に服従せしめ、些の物議も見ず其任務を全ふせるは、全く氏が手腕の凡からざるを證するものにて、其統一の腕はしきは誇りとするに足れり、氏は實に卓越なる手腕を有し、強きを制し弱きを助くる澄測たる義侠心に富り、されば各方面より重視せられ噴々たる令名を博せり、されば月に村雲、花に風、家庭に餘義なくせらる、の罪とは云へ折に紅燈の下に沈没するを認むるは、氏の爲に遺憾とする處なるなり、希くは自重修養以て其短を去り長を發揮せんか人物の向上は勿論、地方政界の

副者とある亦難きにあらざるなり、其れ大成を期せ。

勳七等 故藤村伊兵衛君

加佐郡朝來村

藤村家は同地に於ける舊家にして代々農を以て業とせり、氏は幼にして僅に寺小屋に學びたる外、他に何等學歴を有せざれども博識強記、一を聞て十を知るの天才を有せしかば其獨學自修の功果は頗る偉大あるものにて忽ち衆人の稱揚する所となり、明治二十五年四月大多數を以て同村會議員に舉げられ同年六月學務委員に舉げられたるが天與の才腕は茲に發展の機運を得て爾來氏の名聲は忽ち先輩を凌駕し、二十九年七月學務委員再選以來満期毎に累選して明治四十二年六月まで勤續せり、明治三十一年四月村會議員再選、三十二年四月同村土木委員に舉げられ、三十五年八月同村々長に舉げられたるが時偶々東洋の風雲は日に險惡を傳へて三十七年遂に征露の止むあきに至りたるより氏が村長としての任務は一段の重さを加へたり、されど氏は日頃修養せる手腕を發揮するは此時ありと勇を鼓し殆ど寢食をも忘るゝ熱心にて東奔西走、朝に出征兵士を送り夕に傷病兵を迎へ出征軍人の慰問、國債の募集献金の奨励等注意周到を極め戰國の村長として噴々たる名聲を博せり、爲に三十九年平和克復とあるや其功に依り

勳七等青色桐葉章並に金五十圓を下賜せられ、又赤十字社總裁宮殿下よりは其慰勞として木杯一組を下賜せられたり、其任務に於て輕重の差はあれども前村長梅垣孫右衛門氏は其職に在ること八ヶ年なれども氏は僅に四ヶ年にして此名譽ある勳章を拜受す、實に僥倖と稱すべきあり、されば氏も亦功ありとして三十九年九月満期の際再任を強ひられたれども再び出でず、爾來郡會議員村會議員等の閑職に在ること數年、資性温厚質朴にして人に接する篤實円満、克く語り克く談じ何人にも隔壁を設けず、亦如何なる交際にも避けし事なく飲めば傾ひ酔へば一口淨瑠璃に得意の咽喉を鳴らすあき八方美人的、眞に快活なる君子人たりしあり、然るに惜しむべし今は唯其赫赫たる事績を系譜に留むるのみにて、呼べども答へず、見れども見へず黄泉の客となりたり、されど嗣子雅三氏の賢なるありて家督を續ぎ國業熱心を以て稱せられ、且つ將來有爲の人材を以て矚目せらる、甚大あるあり、家運益々隆盛氏亦瞑すべきなり。

西大浦村の柱石

眞下彌吉君

加佐郡西大浦村字平

氏は西大浦村の利ものにて同村の勇役たり、先代は養子たりし故を以て萬事に控へ目勝ちあると、資性温厚着實、眞面目一方あるとて村民より強ひらるれ共其器に非らずとして一切公職に參與せず、孜孜として農業に従事せられたるが、氏は嚴父に反して頗る朝氣を有し又氣骨の稜々たるものあり、資産亦豊かある爲め幼時より眞下の坊、眞下の若様と尊敬せられたるのみか眼より鼻へ抜けたるが如き伶俐の象にて殊に博識強記なりしかば將來有爲の少年ありと稱せられたり、三ツ子の心六十迄旂檀は二葉にして香しく蛇は寸にして人を呑ひの氣ありと實に果せる哉、小學校時代の如きも常に成績優等を以て卒業し、間もなく同村役場書記となりて、餘暇あれば復讀自修して智識の向上に力め、研鑽怠りおかりしかば手腕は年と共に上達し遂には擧げられて同村助役となり、村會議員となり、學務委員となり、東西大浦高等小學校組合會議員となり等、手腕は愈々發揮せられて遂には同村々長に擧げられ農會長となり、赤十字社分區委員を始め各種團體地方委員を屬托せらるゝ等一村の盛衰を双肩に荷ふに至れり、爾來

孜々精勵村治の爲に貢献し其事績の見るべきもの決して鮮少なからざりしが任期満了するや家事都合を楯に他に譲りて出でず郡會議員又は村會議員となりて村政に參與し今日に至れり、

氏は性磊落にして竹を割りたる如く直言直行、上手も云はねば飾り氣もなく眞に江戸兒肌の義侠を有し、負ける事大嫌ひ義の爲には水火も辞せずと云ふ潑刺たる胸情を有せり、之れ幼時の節を存するものにて、家庭は常に節儉を旨とせりも公共事業に當りては毫も吝まらず他に率先範を示すを例とせりされば神社佛閣、道路學校其他貧民救助等の爲に提供したる寄附金は枚舉に遑あらず、爲に其筋より木杯褒状を下賜せられたるもの跡からず、殊に人に頼まれたれば自分の業務も顧みず私費を投じて世話を爲し、世話をしたからとて決して其れを恩にさせるであく其崇高なる人格は村民の齊しく稱讚し信頼する所にて、氏の言動は村民に重視せられ今や同村に於ける勇役として扱くべからざる名聲あり、乞ふ幸に其美詞を益々發揮して公共の爲に盡瘁の吝あらざらんことを。

西大浦郵便局長

眞下兵次君

加佐郡西大浦村字平

眞下家は同地に於ける舊家にして農を業とせり、先代兵太夫氏は頗る温厚質朴の君子人にて人に接する篤實を旨として細民を憐み、克く人の世話して却々の人望家たりしあり、されば村會議員に擧げられ、學務委員に擧げられ、高等小學校組合會議員となり同村收入役とあり區長とあり半世は殆ど公共事業の爲に貢献して村民の崇拜する處たりしなり、氏は其長子にして高等小學校を卒業せし外何等語るべき學歷を有せざれ共、頗る熱心家にして且つ學を好み和漢の書を集めて黙讀自習夜を徹するを知らず孜孜として研學せし功果は著しく向上して、亦名聲を加へ擧げられて同村助役となり、村會議員とある等先代の跡を受け繼ぎて公職に參與するに至りたるが

遂に擧げられて西大浦郵便局長となり爾來今日に至れり

資性温厚篤實にして極めて事務に精通せり、殊に秘密ある頭腦を有せるを以て郵便事務の如きも人手を俟たず自ら之れに従事して終日倦まず、人格崇高にして同村に於ける一流の人物たり、年齒實に少壯にして多くの未來を有せり、されば其手腕を發提して愈々其眞價を社會に認めらるゝも亦將來の事に屬せり前途は實に洋々として大海に臨める小舟に似たり、雨か風か呎尺を辨せざれども君が敏腕と其遠大なる抱負を楯にし過去の經歷を目標として進航せんか如何なる怒濤狂瀾をも意とするに足らず其彼岸に達する亦易々たるなり、幸に自重修養を事として大成を期せ。

四所村長

河波龜吉君

加佐郡四所村字喜多

河波家は同地に於ける舊家にして代々農を業とせり、然るに先代は氏が四歳の時早世せられしかば、氏は母の手に依

りて人となりしが慈母は極めて賢婦人にて夫の早世後は自ら農事に精勵して家事を修め、子女を教養して毫も家運の衰退

を招かず日に月に向上して發展の見るべきものありたり、氏は其人とあるや深く母の恩に感じ河波家今日あるは勿論、身をして今日の位地と名望を得せしめたるも全く母の賜ものありと二六時中母の恩を忘却せざる孝養を盡して他に範を示せり、斯くの如き情誼に富める氏は家庭のみに限らず、外部に向ふても人一層の慈愛心あり、資性温厚にして寡言あれども其至誠は一言一句の間に張り、對者をして惻情に恍惚たらしむるものあり、爲に村民其誠實を欽慕して村會議員とあし學務委員となし、同村収入役に推選するなど年と共に其手胸は發揮して明治三十七八年戰役中は同村助役として兵事々務を担当し遺憾きを期せしめたるが如きは氏が經歷を語るもの

神崎村の富豪

森本嘉右衛門君

加佐郡神崎村

森下家は同村に於ける素封家にして代々嘉右衛門を襲名して金貨を業とせり、現主嘉右衛門氏は頗る謙遜家にして寡言なれども事に當りて熱心努力を惜まず、堅忍不拔眞に實踐窮行の人なれば何事にも慎重なる研究を加へざれば容易に之れを發表せず、故に一旦發表せし事は必ず成功せしめざるを止まずと云ふ自信力を有せり、されば氏が考案にして成功せざるものなく眞に百發百中にして殊に頗る明敏なる頭腦を有し理財の途に長せり、爲に氏が一代にして造り揚げたる資産は

にて平和克復の後、其功に依り勳八等に叙せられたり、爾來其任に在ること年あり、大正五年八月龜井泰藏氏の後を襲ひて同村々長となり爾來今日に至れり、されば就職日尙淺くして其事績の見るべきものあらざれども思慮深淵にして態度沈着、一時の虛榮の爲に進退を輕んずるが如きことなく、マア待て急ぎては物を仕損んずる石橋も叩て然る後に渡れと云ふが如き極めて落ち付きたる處は積極的志操を歓迎する今日には聊か時世遇れの感あれども質朴なるを好む同村としては名村長たるを謳歌する事あるべし、君須らく自重修養以て村民の期待に背かざらんことに留意を望みて止まざるあり。

決して少しとせず森本家今日の富豪を以て稱せらるゝに至りたるも全く氏が勤勉努力の賜たるあり、されど功成り名遂げたる氏は何時までも其暴利に執着するものにあらず、今や有金の多くは公債證書となし手堅き方法に依りて亦多くを望まず、子孫の爲めに將た森本家の爲に萬世の隆盛を企畫せる者、如くなるが、機械にして理財に巧みある氏の事とて各方面に用ひられて噴々たる名聲を博せり、氏亦抜目かく陰に陽に其手腕を發揮して村會議員となり、區長とあり學務委員とな

り村長とある等同村に於ける公職の全部に歴任し、村長の如きは其職に在る事十餘年の長きに及び産業に衛生に教育に事績の見るべきもの決して少しとせず村民亦其徳を欽慕して千年も萬年も其職に留まらんことを希望したれども三期満期と

なるや後進者の途を開く爲とて辞任して田でず爾來閑靜なる裏日本の海原に遠き歐州の風光を眺めて悠々自適老を養ひつゝあり、洵に氏の如きを有終の人と稱すべきあり、幸に編纂を祈る。



豫備工兵上等工長 池田藤藏君

正七位 勳六等

加佐郡舞鶴町字新町

氏は岡山縣出身にて明治元年二月一日生、家は地方に於ける門閥家にして農を業とし代々大庄屋を勤め令名を博せり氏は先代能太郎氏の二男たり、明治廿一年十二月徴兵として工兵第五大隊に入營、廿三年四月より九月まで電信通信備修業、廿四年四月二等軍曹に任せられ、二十六年四月一等軍曹に昇進二十七年六月戸山學校体操科修業同年三十日清戰役の爲め第一電信架設隊に編入せられ、翌七月より八月まで朝鮮釜山京城間電信架設に従事し八月より十月まで朝鮮幽谷稜谷大站京城に於て電信通信所長とあり、十一月三日工兵第五大隊に復員爾來清國竜頭峯奧陸勾其他の戰闘に参加し、二十八年七月平和克復の爲め凱旋、同年十一月戰功に依り勳八等に叙し年金三十六圓並從軍記章を下賜せらる、二十九年四月

陸軍砲台監守とあり工兵第二方面由良支署附を命せられたり、三十年八月工兵監護となり工兵第二方面舞鶴支署附を命せられ九月設計掛とあり、同年九月工兵方面條例廢止に依り築城部舞鶴支署と改稱せられ依然設計掛たり、三十二年十二月工兵曹長となり十一月、二両月吉坂堡壘及同交通路測量掛十二月より翌年一月まで演習砲臺測量及設計に従事し爾來築山堡壘及交通測量、土山堡壘測定地及交通測量、棋山砲臺建築等を経て三十二年五月同砲臺建築工事主任を命せられ、三十三年十一月工兵上等工長に昇進、三十四年一月庶務兼設計掛を命せられ、三十五年五月勳七等に叙せられ同年十一月本職を免じ設計掛を命せられ、金脚砲台咽喉後方斜面崩落修繕掛、浦入監視衛兵用炊事場建築主任とあり、金脚砲台交通

路一部改築工事主任となり、金脚砲兵左翼斜面改築工事主任となり三十六年五月舞鶴要塞司令部兼築城部舞鶴支部詰となり庶務設計修繕掛並に工兵事務に關する物品會計官吏、吉坂連絡交通路崩落部修繕工事主任を兼務せり、三十七年二月日露戦役の爲め警急配備下令同時に臨時構築物建築掛となり、三十八年四月第一手押式輕便鐵道班に編入せられ撫順營順城門鐵道敷設工事及測量に従事し、同年十一月以來昌圖軍政署に於て鐵道掛兼工兵材料掛たりしが三十九年三月復員の命下りて凱旋同年四月戦功に依り勳六等に叙し單光旭日章及金三百圓從軍記章を下賜せられたり、同年五月從七位に叙せられ、工兵科設計修繕掛、物品會計官吏たりしが四十年八月防禦營造物水害復舊工事設計掛とあり十月下安久繁船塢改築掛主任となり、四十一年三月建部山堡壘及嶺山砲臺砂防工事主任となり四十二年六月博奕脚電燈石油小發動機据付工事主任とあり四十四年六月一等給に昇進と同時に正七位に叙せられ、同年十月演習砲臺修繕委員兼修繕掛とあり、同月特別俸乙額下賜せられ四十五年三月白杉砲廠及剛園工事主任とあり、大正二年五月葦谷砲臺修繕掛主任となり、大正三年五月浦入兵舎掩蔽部及葦谷砲臺修繕掛主任となり、大正四年六月白杉砲具庫修繕工事主任とあり大正五年一月伎倆証明書授與せられたるが同年二月一日年輪満期に依り豫備役に編入せられ退營せり、爾來現住地を卜して家屋改築、地方

加佐郡人物史 完

一般の土木建築並に測量製圖等受負業を開業したるが前記の如く陸軍に於て其命令を博したる事とて該方面に於ける事業は今や氏が一手引受の感ありて依頼者引も切らず助手二名を置きて日に發展しつゝあり、資性温厚の中に潮氣あり、頭腦敏密にして愛敬の至誠に富めり、誠實嚴格にして長者を敬し後進者を愛撫し温情の掬すべきあり、爲に在隊中の如き頗る上下の信任を博せり、今や塵芥渦巻く在野の人とありたれ共、清濁併呑の雅量と有せば其手腕は傑として輝き名聲は日に大を加へ資産の向上と相俟ちて亦舞鶴町の一人物として頭角を現はすに至る、されど年齒尚春秋あり實際の手腕を地方の爲に發揮するは今後の事に屬せり、須らく自重修養を以て大成の人たらんことを期せ。終りに臨み吾人は氏に對して一言謝辭を述べざるべからず吾人氏と同じく岡山縣出身あり、太平樂新聞記念として本史編纂の事を告ぐるや氏は双手を舉げて贊助すべく厚き同情を以て迎へられたり、吾人は其一言實に肺肝に徹し百萬の援兵を得たる心地せり、爾來氏は多忙ある本務をも顧みず本史發刊の爲に東奔西走以て援助せらる、今や漸く上梓を告ぐ全く氏の賜ものたるなり、氏は唯同縣人と稱するのみに斯くも多大の誠意を拂はる、吾人は滿腔の熱誠を以て其厚意に對し謹んで感謝の意を表すると共に池田家の益々隆盛を祈るもあり。

大正六年九月十三日印刷
大正六年九月十八日發行

非賣品

京都府天田郡福知山町字岡ノ九番地ノ拾五

編輯兼發行人

藤本

薫

京都府天田郡福知山町字吳服六拾番地

印刷人

桑原

辰藏

全所

印刷所

桑原

活版所

京都府天田郡福知山町字岡ノ九番地ノ拾五

發行所

太平樂

新聞社

505
187

終

